三重県埋蔵文化財調査報告227－1

近畿自動車道名古屋神戸線（愛知県境～四日市JCT）建設事業に伴う

金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡
発掘調査報告

―三重県四日市市山村町―

２００２年３月

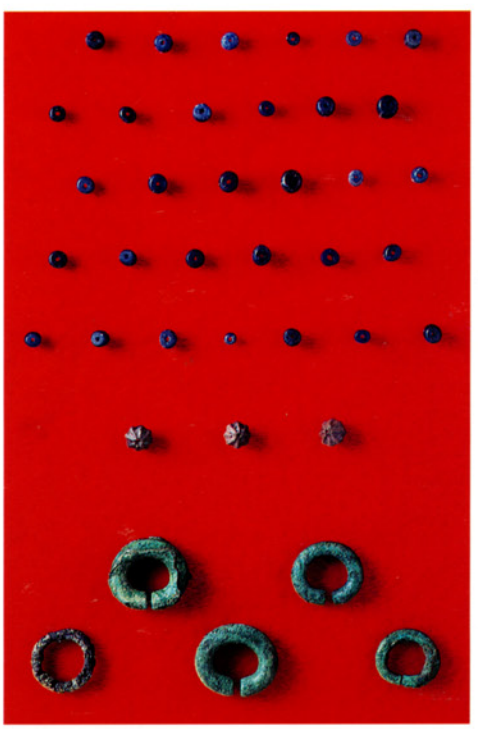
三重県埋蔵文化財センター

金塚遺跡・金塚横穴墓群（南上空から）

金塚遺跡　ＳＨ19出土　銅鐸片（両面・原寸）

金塚横穴墓群　２号墓全景（北西から）

金塚横穴墓群２号墓出土人骨・ガラス玉



金塚横穴墓群出土ガラス玉・空玉・耳環

序

三重県は日本のほぼ中央に位置し、山海の豊かな恵みを受けて古くから文化が栄えてきました。なかでも北勢地域は、東西・南北の交通の結節点として重要な役割を果たしてきた地域です。人や物の往来は、肥沃な伊勢平野を背景に当地域に豊かな文化をもたらし、多くの遺跡を残しました。

さて、三重県埋蔵文化財センターでは、平成９年度から、第二名神高速道路の建設に伴う発掘調査において、都道府県レベルで初めて民間の発掘調査機関を導入し、現地調査の迅速化を行ってまいりました。当初、どのような形態で導入するかなど試行錯誤ではありましたが、早いもので５年の月日が経ち、ようやくその体制も年々改善され、整いつつあることと認識しております。

同時に、いくつかの問題点も明らかになってきました。あくまでも委託する側の私達は公の立場として発掘現場にどう立ち向かうか、調査に携わる者の資質はどうあるべきか、民間発掘調査機関の評価基準をどうすべきかなど、まだまだ課題は多いものです。

しかしながら、開発に伴ってやむなく現時点で発掘調査されてしまう、地域の歴史の生き証人である遺跡を、いかに後世に語り伝えていくか、これはどんな体制であろうが変わらぬものといってよいでしょう。

本書は、伊勢湾を一望できる高所に築かれた、弥生時代後期の環壕を伴う高地性集落である金塚遺跡、また本県では初の本格的な横穴墓の調査となった金塚横穴墓群、さらにその西側に広がる山村遺跡の調査成果を収録してあります。私どもといたしましては、この成果報告書が文化財保護の一助としてご活用頂ければ、幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたりましては、日本道路公団中部支社、同四日市工事事務所、三重県県土整備部高速道推進室、同四日市駐在、三重県企業庁、関係市町村教育委員会、関係機関および地元自治会をはじめとする多くの方々に温かいご理解とご協力を頂きました。末筆になりましたが、厚くお礼申し上げます。

平成14年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　桂　川　　哲

例　　言

1　本書は、平成９年度より三重県が日本道路公団中部支社（平成13年２月、日本道路公団名古屋建設局より改称）から委託を受けた、近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市ＪＣＴ建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査のうち、平成９年度と10年度に現地調査を実施した金塚遺跡・金塚横穴墓群と、平成11年度に現地調査を実施した山村遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査にかかる費用は、日本道路公団中部支社の負担による。

3　現地での発掘調査の体制は、下記の通りである。

［平成９年度　金塚遺跡・金塚横穴墓群　範囲確認調査］
・調査主体　三重県教育委員会
・調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査第二課
・現場担当　　主　　事　　服部芳人
　　主　　事　　倉田文美（朝日町教育委員会から派遣）
・調査協力　　朝日町教育委員会・四日市市教育委員会
・調査作業受託　株式会社　四門

［平成10年度　金塚遺跡・金塚横穴墓群］
・調査主体　三重県教育委員会
・調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査第二課
・現場担当　　主　　事　　服部芳人
　　技　　師　　水橋公恵
　　臨時技術補助員　　田中美穂
・調査協力　　朝日町教育委員会・四日市市教育委員会
・調査作業受託　株式会社　四門

［平成11年度　山村遺跡］
・調査主体　三重県教育委員会
・調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査第二課
・現場担当　　主　　事　　城　吉基
　　技　　師　　角正芳浩
・調査協力　　朝日町教育委員会・四日市市教育委員会
・調査作業受託　国際航業株式会社

4　調査期間中には下記の方々・機関にご指導・ご協力を頂いた。記して感謝の意を表します（順不同・敬称略）。池端清行（津市教育委員会）・稲垣寿一（山村町在住）・稲垣義一（山村町在住）・石黒立人（愛知県埋蔵文化財センター）・石田成年（柏原市教育委員会）・池上悟（立正大学）・岩田文章（淀江町教育委員会）・岩野見司（東

海学園女子短期大学）・江坂輝彌（慶応義塾大学）・岡田登（皇学館大学）・尾野善裕（京都国立博物館）・落合昭久（松江市文化振興事業団）・笠井賢治（上野市教育委員会）・葛山拓也（四日市市教育委員会）・黒坪一樹（京都府埋蔵文化財調査研究センター）・小林昭彦（大分県教育庁）・小玉道明・後藤哲男（松江市文化振興事業団）・下村登良男・城戸康利（太宰府市教育委員会）・鈴木一有（浜松市博物館）・高山純（帝塚山大学）・竹内英昭（三重県教育委員会スポーツ・生涯学習課）・田村悟（直方市教育委員会）・田村隆太郎（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所）・津村善博（三重県立博物館）・寺澤薫（奈良県立橿原考古学研究所）・難波洋三（京都国立博物館）・西山要一（奈良大学）・長谷川達（京都府立丹後郷土資料館）・平野芳英（島根県立八雲立つ風土記の丘資料館）・古後憲治（鞍手町教育委員会）・松井一明（袋井市教育委員会）・松下宏（山村町在住）・松下孝幸（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）・丸山竜平（名古屋女子大学）・水野正好（奈良大学）・村木誠（兄晴台考古資料館）・村上久和（大分県教育庁）・森逸郎・森泰通（豊田市教育委員会）・森岡秀人（芦屋市教育委員会）・山岸良二（東邦大学中高等学校）・山村信榮（太宰府市教育委員会）・渡辺誠（名古屋大学）・渡辺智恵美（元興寺文化財研究所）・日本道路公団中部支社・同四日市工事事務所・三重県県土整備部高速道推進室・同四日市駐在・三重県北勢県民局四日市建設部・三重県企業庁・同北勢水道事務所・四日市市教育委員会・朝日町教育委員会・川越町教育委員会・四日市市八郷地区市民センター・八郷地区連合自治会・広永町自治会・北永台自治会・山村町自治会・千代田町自治会・伊坂町自治会・伊坂台自治会・埋縄地区自治会・地元地権者各位

5　本書の執筆分担は、目次と文末に示したとおりである。また、松下幸孝氏（土井ケ浜・人類学ミュージアム）には横穴墓出土人骨の分析についての御報文をいただき、（財）元興寺文化財研究所による銅鐸片・耳環・空玉の分析報告書も掲載した。

本書に掲載した写真の撮影、遺構･遺物図版の作成は、調査･報告担当者が行い、全体の編集は服部が行った。

6　本書で報告した遺跡の記録類及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

7　本書に用いた地図および遺構実測図は、国土調査法の第Ⅵ系座標を基準とし、方位の表示は座標北を示す。なお、当地域の磁北は６度50分西偏する（平成元年現在）。

8　本書で使用した土層および遺物ついては、小山・竹原編『新版標準色帖』（９版1989）を使用した。

9　２つの遺跡については、既刊『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市ＪＣＴ埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター 1999・３）と『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市ＪＣＴ埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』（三重県埋蔵文化財センター 2000･３）にその概要を公表しているが、本書をもって正式報告とする。

10　本書に用いた遺構表示略記号は、次のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：環壕・溝　　ＳＨ：竪穴住居　　ＳＫ：土坑　　ＳＸ：墓

11　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前言
1．調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（森川）・・・　1
2．調査の体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（森川）・・・　4
3．民間調査機関の導入・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（森川）・・・　6

Ⅱ　位置と環境
1．地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（倉田・水橋）・・・16
2．歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（倉田・水橋）・・・16

Ⅲ　金塚遺跡・金塚横穴墓群
1．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（服部）・・・19
（1）遺跡の立地と周辺の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（服部）・・・19
（2）発掘調査に至るまでの経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（服部）・・・19
（3）調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（服部）・・・23
2．調査の成果
（1）弥生時代後期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（服部）・・・29
（2）古墳時代後期(飛鳥時代)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（水橋）・・・63
（3）平安時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（水橋）・・・71
3．まとめ
（1）銅鐸片について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（服部）・・・72
（2）２号墳の盛土の方法について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（服部）・・・74
（3）環壕を伴う高地性集落について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（服部）・・・76
（4）横穴墓について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（水橋）・・・81

Ⅳ　山村遺跡
1．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（角正）・・・127
（1）位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（角正）・・・127
（2）調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（角正）・・・127
（3）調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（角正）・・・128
2．調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（角正）・・・130
（1）弥生時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（角正）・・・130
（2）奈良・平安時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（角正）・・・134
（3）その他の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（角正）・・・134
3．まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（角正）・・・136

Ⅴ　自然科学分析
1．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（服部）・・・145
（1）金塚遺跡・金塚横穴墓群出土遺物のケイ光Ｘ線分析
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（財団法人元興寺文化財研究所）・・・145
（2）金塚遺跡から出土した銅鐸片についての鉛同位体比（東京国立文化財研究所）・・・155
（3）三重県広永横穴墓群、金塚横穴墓群出土の古墳時代人骨・・・・（松下孝幸）・・・158

写　真　目　次

巻頭カラー　金塚遺跡・金塚横穴墓群（南上空から）
巻頭カラー　金塚遺跡ＳＨ19出土銅鐸片（両面・原寸）
巻頭カラー　金塚横穴墓２号墓全景（北西から）
巻頭カラー　金塚横穴墓２号墓出土人骨・ガラス玉
巻頭カラー　金塚横穴墓出土ガラス玉・空玉・耳環
写真図版　遺跡全景（朝明川対岸、垂坂丘陵より望遠で望む。南から）

Ⅲ　金塚遺跡・金塚横穴墓群

写真１　極東米軍機による遺跡周辺の垂直写真（1947年撮影）・・・・・・・・・・・・・94
写真２　遺跡遠景（朝明川を挟んで、手前南岸が垂坂丘陵、北岸が朝日丘陵。南西上空から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95
写真３　遺跡遠景（中央に山村貯水池、手前右前方が当遺跡。南上空から）・・・・・・・95
写真４　遺跡近景（東上空から）・・・・・・・・96
写真５　遺跡全景（上空垂直・上が北）・・・・・96
写真６　ＳＤ２全景（西から）・・・・・・・・・97
写真７　ＳＤ２遺物出土状況（北東から）・・・・97
写真８　ＳＤ２遺物出土状況（南から）・・・・・97
写真９　ＳＤ23遺物出土状況（東から）・・・・・97
写真10　ＳＤ23遺物出土状況（東から）・・・・・97
写真11　ＳＤ23東壁土層断面（西から）・・・・・97
写真12　ＳＤ29遺物出土状況（東から）・・・・・97
写真13　ＳＤ29全景（東から）・・・・・・・・・97
写真14　ＳＨ６全景（東から）・・・・・・・・・98
写真15　ＳＨ６炉半裁状況（東から）・・・・・・98
写真16　ＳＨ７全景（北から）・・・・・・・・・98
写真17　ＳＨ７遺物出土状況（西から）・・・・・98
写真18　ＳＨ７全景（西から）・・・・・・・・・98
写真19　ＳＨ18全景（南から）・・・・・・・・・99
写真20　ＳＨ18遺物出土状況（南から）・・・・・99
写真21　ＳＨ18・19周辺から伊勢湾方面望む（北から）・・・・・・・・・・・・・・・99
写真22　ＳＨ19全景（南から）・・・・・・・・・99
写真23　ＳＨ19全景（東から）・・・・・・・・・99
写真24　ＳＨ19遺物出土状況（東から）・・・・100
写真25　ＳＨ19遺物出土状況（東から）・・・・100
写真26　ＳＨ19炉検出状況（東から）・・・・・100
写真27　ＳＨ19炉完掘状況（南から）・・・・・100
写真28　ＳＨ19北西壁炭化物出土状況（南から）・100
写真29　ＳＨ19銅鐸片出土状況（東から）・・・100
写真30　ＳＨ19銅鐸片出土状況（北から）・・・100
写真31　ＳＨ22・30掘削途中（南から）・・・・101
写真32　ＳＨ22・30全景（西から）・・・・・・101
写真33　ＳＨ24掘削途中（東から）・・・・・・101
写真34　ＳＨ24全景（北から）・・・・・・・・101
写真35　ＳＨ24炉半裁状況（東から）・・・・・101
写真36　ＳＨ33全景（北から）・・・・・・・・101
写真37　ＳＨ34全景（東から）・・・・・・・・101
写真38　ＳＨ35全景（西から）・・・・・・・・101
写真39　１・２号墳調査前全景（西から）・・・102
写真40　１・２号墳調査後全景（西から）・・・102
写真41　ＳＫ５全景（北から）・・・・・・・・103
写真42　ＳＫ５全景（東から）・・・・・・・・103
写真43　ＳＫ５北壁（南から）・・・・・・・・103
写真44　２号墳主体部全景（南から）・・・・・103
写真45　２号墳盛土状況その１（西から）・・・104
写真46　２号墳盛土状況その２（西から）・・・104
写真47　２号墳盛土状況その３（西から）・・・104
写真48　２号墳盛土状況その１（東から）・・・104
写真49　２号墳盛土状況その２（東から）・・・104
写真50　２号墳盛土状況その３（東から）・・・104
写真51　ＳＤ４東壁土層断面（西から）・・・・105
写真52　ＳＤ26・ＳＤ28全景（南から）・・・・105
写真53　集石遺構（中央尾根のＰ－35地区・西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・105
写真54　中央尾根頂部から伊勢平野を望む（北から）・・・・・・・・・・・・・・・105
写真55　柱穴群全景（南から）・・・・・・・・105
写真56　西尾根調査前（南西から）・・・・・・106
写真57　土取り崖面での１・２号墓検出状況（西から）・・・・・・・・・・・・・・・106

写真58　1号墓土層（西から）・・・・・・・・・106
写真59　1号墓金環出土状況（西壁）・・・・・106
写真60　2号墓検出状況（西から）・・・・・・107
写真61　2号墓土層断面（西から）・・・・・・107
写真62　2号墓遺物出土状況（東上から）・・・107
写真63　人骨A・B（南上から）・・・・・・・107
写真64　人骨Aと耳環（南上から）・・・・・・107
写真65　人骨Bと銀製空玉・ガラス玉
（南上から）・・・・・・・・・・・・・・107
写真66　人骨Cと耳環（南上から）・・・・・・107
写真67　人骨C（下顎骨）と耳環　・・・・・・107
写真68　3号墓地点土坑（西から）・・・・・・108
写真69　3号墓地点土坑土層（西から）・・・・108
写真70　西尾根南崖面での4号墓検出状況
（南から）・・・・・・・・・・・・・・・108
写真71　4号墓平瓶（東から）・・・・・・・・108
写真72　4号墓（南から）・・・・・・・・・・108
写真73　4号墓土層（南から）・・・・・・・・109
写真74　4号墓土層（南東から）・・・・・・・109
写真75　SK37検出（北東から）・・・・・・・109
写真76　SK37検出（南から）・・・・・・・・109
写真77　西尾根調査後（南西から）・・・・・・109
写真78　SX1付近調査前（北から）・・・・・110
写真79　SX1検出（南から）・・・・・・・・110
写真80　SX1土層（東から）・・・・・・・・110
写真81　SX1須恵器（南上から）・・・・・・110
写真82　SK25検出状況（東から）・・・・・・110
写真83　SK25土層（東から）・・・・・・・・110
写真84　SD21土層（東から）・・・・・・・・110
写真85　SD21・SK25完掘（北から）・・・・110
写真86　SD2出土遺物　・・・・・・・・・・111
写真87　SD23出土遺物　・・・・・・・・・・112
写真88　SD23出土遺物・・・・・・・・・・・113
写真89　SD23・29出土遺物・・・・・・・・・114
写真90　SD29出土遺物・・・・・・・・・・・115
写真91　SD29出土遺物・・・・・・・・・・・116
写真92　SD29・SH6・SH7出土遺物・・・117
写真93　SH7出土遺物・・・・・・・・・・・118
写真94　SH19出土遺物・・・・・・・・・・・119
写真95　SH19出土遺物・・・・・・・・・・・120
写真96　SH19・SH24出土遺物・・・・・・・120
写真97　SH22・SH30・SD4・2号墳主体部・
2号墳流出土出土遺物・・・・・・・・122
写真98　1号墳流出土・2号墳流出土・SD17・
東尾根検出中出土遺物・・・・・・・・123
写真99　SX1出土遺物・・・・・・・・・・・124
写真100　1号墓・2号墓・3号墓地点土坑・
4号墓出土遺物・・・・・・・・・・・125
写真101　SX10・SD21出土遺物・・・・・・・126
写真102　稲垣義一氏所蔵遺物・稲垣寿一氏
所蔵遺物・・・・・・・・・・・・・・・126

Ⅳ　山村遺跡

写真103　調査区全景（北西から）・・・・・・・139
写真104　調査区全景（垂直）　・・・・・・・・139
写真105　SD2斜面部分（南から）・・・・・・140
写真106　SD2平坦部分（北西から）・・・・・140
写真107　SD2土層断面（南から）・・・・・・141
写真108　SD2土層断面（南から）・・・・・・141
写真109　SX6全景（東から）・・・・・・・・142
写真110　SX6全景（南から）・・・・・・・・142
写真111　SX6遺物出土状況（東から）・・・・143
写真112　SX4全景（北東から）・・・・・・・143
写真113　SD2・SX6・SK7出土遺物・・・144
写真114　SX3出土遺物・・・・・・・・・・・144

挿　図　目　次

Ⅱ　位置と環境

第1図　遺跡位置図(1：50,000)・・・・・・・・18

Ⅲ　金塚遺跡・金塚横穴墓群

第2図　遺跡周辺地形図及び調査区位置図
(1：10,000)・・・・・・・・・・・・・・19
第3図　調査区地区割り図(1：1,000)・・・・・22
第4図　調査範囲及び保存範囲（1：500)・・・・24

第５図　調査前測量図（1：500）・・・・・・25～26
第６図　調査後測量図（1：500）・・・・・・27～28
第７図　調査区位置図（1：2,000）・・・・・・・29
第８図　遺構配置図（1：1,000）・・・・・・・・30
第９図　ＳＤ２平面図・土層断面図（1：100）・・31
第10図　ＳＤ２遺物出土状況図（1：20）・・・・31
第11図　Ｄ２出土遺物（1：4）・・・・・・・・・32
第12図　ＳＤ23平面図・土層断面図（1：100）・・33
第13図　ＳＤ23遺物出土状況図（1：20）・・・・33
第14図　ＳＤ23出土遺物（1：4）・・・・・・・・34
第15図　ＳＤ23出土遺物（1：4）・・・・・・・・35
第16図　ＳＤ29平面図・土層断面図（1：100）・・35
第17図　ＳＤ29遺物出土状況図（1：20）・・・・36
第18図　ＳＤ29出土遺物（1：4）・・・・・・・・37
第19図　ＳＨ６平面図・土層断面図（1：50）・・38
第20図　ＳＨ６炉平面図・土層断面図(1：20)・・38
第21図　ＳＤ29出土遺物（1：4）・・・・・・・・38
第22図　ＳＨ７平面図・土層断面図（１：50）・・40
第23図　ＳＨ７断面図（1：50）・・・・・・・・41
第24図　ＳＨ７遺物出土状況図（1：20）・・・・41
第25図　ＳＨ６・ＳＨ７出土遺物（1：4）・・・・42
第26図　ＳＨ９平面図・土層断面図（1：50）・・42
第27図　ＳＨ16平面図・土層断面図（1：50）・・42
第28図　ＳＨ18平面図・土層断面図及び断面図
（1：50）・・・・・・・・・・・・・・・・43
第29図　ＳＨ19平面図・土層断面図（1：50）・・44
第30図　ＳＨ18遺物出土状況図（1：20）・・・・44
第31図　ＳＨ19完掘平面図・断面図（1：50）・・45
第32図　ＳＨ19炉平面図・土層断面図（1：20）・・46
第33図　銅鐸片出土状況図（1：4）・・・・・・・46
第34図　ＳＨ19貯蔵穴平面図・土層断面図
（1：20）・・・・・・・・・・・・・・・・46
第35図　ＳＨ19遺物出土状況図（1：20）・・・・47
第36図　ＳＨ18・ＳＨ19出土遺物（1：4）・・・・48
第37図　ＳＨ19出土遺物（1：1・1：2）・・・・・49
第38図　ＳＨ22・ＳＨ30平面図・土層断面図
（1：50）・・・・・・・・・・・・・・・・50
第39図　ＳＨ22・ＳＨ30断面図（1：50）・・・・51
第40図　ＳＨ24平面図・土層断面図及び断面図
（1：50）・・・・・・・・・・・・・・・・52
第41図　ＳＨ24炉平面図・土層断面図（1：20）・・53
第42図　ＳＨ22・ＳＨ24・ＳＨ30・ＳＤ４・
ＳＤ17出土遺物（1：4）・・・・・・・・・53
第43図　ＳＨ27・ＳＨ33・ＳＨ34・ＳＨ35
平面図・断面図（1：50）・・・・・・・・54
第44図　１号墳・２号墳土層断面図（1：200）
・・・・・・・・・・・・・・・・・55～56
第45図　１号墳・２号墳平面図（1：400）・・・・57
第46図　ＳＫ５平面図・土層断面図（1：40）・・57
第47図　２号墳主体部平面図・土層断面図及び
断面図（1：80）・・・・・・・・・・・・58
第48図　１号墳流出土・２号墳主体部・盛土・
流出土出土遺物（1：2・1：4）・・・・・59
第49図　柱穴群平面図（1：100）・・・・・・・・60
第50図　東尾根包含層・遺構検出中出土遺物
（1：1・1：4）・・・・・・・・・・・・・61
第51図　西尾根横穴墓測量図（1：250）・・・・・63
第52図　１号墓実測図（1：40）・
出土遺物実測図（1：2）・・・・・・・・・63
第53図　２号墓実測図（1：40）・・・・・・・・65
第54図　２号墓遺物出土状況図（1：20）・・・・66
第55図　２号墓人骨出土状況図（1：5）・・・・・67
第56図　２号墓出土遺物実測図
（1：2・1：3）・・・・・・・・・・・・・67
第57図　３号墓地点土坑実測図（1：40）・
出土遺物実測図（1：4）・・・・・・・・・68
第58図　４号墓実測図（1：40）・
出土遺物実測図（1：4）・・・・・・・・・69
第59図　ＳＫ37実測図（1：40）・・・・・・・・69
第60図　ＳＸ１・10実測図（1：20）・
出土遺物実測図（1：4）・・・・・・・・・70
第61図　ＳＫ８・11実測図（1：40）・・・・・・70
第62図　ＳＤ21・ＳＫ25実測図
（平面図1：100・土層図1：40）・
出土遺物実測図（1：4）・・・・・・・・・71
第63図　２号墳盛土模式図（1：100）・・・・・・75
第64図　金塚遺跡周辺地形図（1：12,000）・・・78
第65図　金塚遺跡周辺弥生時代遺跡図
（1：30,000）・・・・・・・・・・・・・80
第66図　金塚横穴墓群３号墳地点採集遺物
（1：4）　・・・・・・・・・・・・・・82
第67図　西ヶ広遺跡出土遺物（1：4）・・・・・・82

第68図　和田ヶ平１号墳出土遺物（1：4）・・・・82
第69図　金塚横穴墓群・広永横穴墓群と北勢地域の横穴式石室の平面形態（1：120）・・・84

Ⅳ　山村遺跡
第70図　調査区位置図（1：2,500）・・・・・・・127
第71図　調査区地区割り図（1：500）・・・・・129
第72図　全体遺構図（1：300）・・・・・・・・131
第73図　ＳＤ１・２平面図（1：200）および土層断面実測図（1：50）・・・・・・・132
第74図　ＳＸ６実測図（1：80）・・・・・・・・133
第75図　ＳＸ６遺物出土状況図（1：20）および出土遺物実測図（1：4）・・・・・・・133
第76図　ＳＸ３遺物出土状況図（1：10）および出土遺物実測図（1：4）・・・・・・・134
第77図　ＳＢ４・５実測図（1：40）・・・・・・135
第78図　ＳＫ７遺物出土状況図（1：10）および出土遺物実測図（1：4）・・・・・・・136

表　目　次

Ⅰ　前言
第１表　第二名神（愛知県境～四日市ＪＣＴ）埋蔵文化財発掘調査経過表・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第２表　普及公開活動一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第３表　民間調査機関の導入実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

Ⅲ　金塚遺跡・金塚横穴墓群
第４表　竪穴住居一覧表・・・62
第５表　三重県内出土磨製石鏃一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
第６表　主な綾杉文を重ねる銅鐸一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
第７表　破片銅鐸出土地一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
第８表　基本層分類の基準・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
第９表　朝明川流域の弥生時代遺跡一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
第10表　遺物一覧表（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
第11表　遺物一覧表（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
第12表　遺物一覧表（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88
第13表　遺物一覧表（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
第14表　遺物一覧表（５）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
第15表　玉類一覧表・・91
第16表　耳環一覧表・・92
第17表　その他遺物一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92

Ⅳ　山村遺跡
第18表　掘立柱建物一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・137
第19表　環壕一覧・・・137
第20表　方形周溝墓一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・137
第21表　遺物観察表・・・137

Ⅰ 前 言

1．経 過

① 近畿自動車道名古屋神戸線の概要

東名・名神高速道路は、我が国の基幹交通を担う大動脈として産業・文化・経済活動に大きな貢献を果たしてきた。しかし、供用開始後30年余を経過した現在、ほぼ全線にわたり混雑が著しく、本来の高速性・定時性が低下しつつある。このままでは、量的増大に加え、多様化する将来の交通需要に対応することが困難であると予想されている。

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神高速道路）は、第二東名高速道路と共に、これらの問題に対応し、先発路線である東名・名神高速道路と一体となって、四全総で提唱されている交流ネットワーク構想を推進するための高規格道路網の根幹となるものである。

三重県内では、愛知県境から四日市市伊坂町の近畿自動車道名古屋関線（東名阪自動車道）との交差箇所である四日市JCTまでの約14kmについて、平成14年度供用を目途に急速な工事が行われている。その経路は、愛知県境から長島町・桑名市と伊勢湾岸を南下し、川越町で方向を大きく西に転じて、朝明川北岸の沖積低地から朝日丘陵南縁の朝日町・四日市市を通るものである。なお、この経路は第二東名高速道路の一部を含めて伊勢湾岸道路とも呼称される。

② 調査に至る経緯

第二名神高速道路については、昭和62年６月四全総の高規格幹線道路として位置づけられ、９月には名古屋市～神戸市170kmが予定路線に編入された。

昭和63年１月、建設省（現　国土交通省）から三重県教育委員会に埋蔵文化財についての照会があり、その取扱いに係る協議が開始された。県教育委員会では関係市町村教育委員会と協議を行うと共に、伊勢湾岸道路（第二名神・東名の一部分）路線内の埋蔵文化財の有無・現況を同年３月『伊勢湾岸道路･北勢バイパス建設予定地内埋蔵文化財一覧Ⅰ』で報告した。

平成元年２月、愛知県海部郡飛島村～神戸市165kmについて基本計画が決定され、平成２年12月には長島IC～四日市JCTが都市計画決定された。

この間、平成元年４月に県教育委員会内に三重県埋蔵文化財センターが設置され、埋蔵文化財保護行政を主体的に担当することとなる。同年10月には「東海環状自動車道・伊勢湾岸道路・北勢バイパスに係る埋蔵文化財保護連絡会議」を開催し、関係市町村と事業計画の概要･埋蔵文化財の所在状況と確認･その保護取り扱いについて協議した。平成２年には伊勢湾岸道路と接続する東海環状自動車道の分布調査を行い、５月に『東海環状自動車道建設予定地内埋蔵文化財分布調査報告』で建設省に報告したが、伊勢湾岸道路に該当する四日市JCT～四日市北JCTでは７遺跡が報告されている。伊勢湾岸道路については、平成元･２年度に路線内の分布調査を実施し、平成３年３月に『伊勢湾岸道路・北勢バイパス建設予定地内埋蔵文化財一覧Ⅱ』として集成した。６月には愛知県境～四日市JCTの分布調査結果として路線内10遺跡111,000㎡の所在を通知した。平成３年12月第二名神高速道路の飛島村～四日市市19km、亀山市～城陽市68kmについて整備計画が決定され、同月に日本道路公団に調査指示が出された。その後、平成５年11月には、上記区間について、近畿自動車道飛島神戸線(第二名神)として建設大臣から道路公団に施工命令が出された。なお、平成４年１月には、四日市JCT～四日市北JCTが都市計画決定されている。

この間、分布調査結果をもとに路線内の遺跡の取扱いについて、道路公団・県土木部高速道推進室・県教育委員会・県埋蔵文化財センターで協議を実施し、県教育委員会側から四日市JCT予定地に所在する伊坂城跡について路線変更による現状保存を要望した。協議を重ねたが、路線は都市計画決定後のために変更困難との結論に達し、伊坂城跡は記録保存の取扱いに決した。但し、今後は都市計画決定前に協議をするよう申し入れた。なお、四日市北JCT～亀山JCTの分布調査依頼を受け、平成５年12月に

『第二名神自動車道埋蔵文化財分布調査結果報告(四日市北JCT～亀山JCT)』で報告した。

平成6年度末には、道路公団から飛島村～四日市市について平成14年度供用の工事計画が提示され、この区間についての埋蔵文化財調査に関する協議が上記四者間で開始さた。平成8年度には、翌9年度からの発掘調査着手にむけて、調査体制・年次計画など具体的な調整・協議を重ねた。また、路線内の遺跡範囲の確定については同年度冬季に現地の幅杭打設後に1/1,000平面図をもとに行うこととした。

調査体制については後述するが、県埋蔵文化財センターの調査体制に組み込む形で、民間調査機関の活用をはかることとなった。

なお、路線名は平成8年8月に近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）と改称され、調査対象となる愛知県境～四日市JCTの1/1,000平面図による再分布調査の結果を平成9年4月に『近畿自動車道名古屋神戸線(第二名神)愛知県境～四日市JCT建設予定地内埋蔵文化財一覧Ⅱ』として、12遺跡を報告した。

該当遺跡については、その後、工事用道路建設に伴い新たに1遺跡（山村遺跡）を追加したほか、遺跡名称の見直しを行った結果、平成13年度現在では、第1表に掲げる13箇所16遺跡となっている。

以上のような経過を経て、平成9年度には当埋蔵文化財センター調査第二課に近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT担当職員を配置し、事業地内の発掘調査を開始するに至った。

③　発掘調査業務の概要

調査開始にあたり、日本道路公団名古屋建設局(現　中部支社)と三重県の間で、平成9年4月1日付けで「近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査委託に関する協定書」を締結した。その内容は、昭和42年9月30日付けで日本道路公団と文化庁との間で交わされた「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」を基本とする。現地調査期間については、平成11年度末までを目途とし整理報告作業は、現地発掘調査完了後3年以内までを目途とするとした。また、同時に平成9年度の委託契約も締結した。

なお、年度毎に締結する委託契約については、平成10年度は、当該事業に加え日本道路公団事業として新たに第二名神亀山東JCT～滋賀県境、および近畿自動車道名古屋関線亀山～亀山、同自動車道尾鷲勢和線紀勢～勢和に係る埋蔵文化財の発掘調査も実施することとなったため、これら3路線4区間について締結した。翌11年度からは、第二名神亀山東JCT～滋賀県境については亀山市教育委員会が担当することになり、これを除く3路線3区間の発掘調査にかかる委託契約を締結している。

さて、調査は現地調査（1次整理を含む）を優先としたが、用地状況の理由から平成9年度が範囲確認調査のみに留まったことなどもあり、当初予定からはやや遅れ気味となった。しかし、平成12年度には現地調査をほぼ終了し（現地調査の経過については第1表参照)、平成13年度からは2次整理及び報告書作成にも着手することとなった。

この間、本書で報告する金塚遺跡および金塚横穴墓群は平成9年度に範囲確認調査を実施し、翌10年度に本調査を実施した。また、山村遺跡は、11年度に範囲確認調査および本調査を実施している。

平成13年度は、伊坂遺跡および東海道想定地で約1,500㎡ほどの現地調査を実施したが、調査業務の中心は整理・報告書作成であった。その対象は伊坂城跡、菟上遺跡、金塚遺跡、金塚横穴墓群、辻子遺跡、山村遺跡であるが、これらのうち3遺跡について報告書を刊行する運びとなった。

ところで、三重県埋蔵文化財当センターでは平成8年10月1日付け及び平成10年9月29日付けの文化庁次長通知を受け、平成10年3月と平成11年3月に埋蔵文化財の取り扱い基準を改訂している。その発掘調査基準では、道路の橋梁については橋脚間を除く工事影響範囲のみを調査対象としており、当該業務においても橋脚間は路線内での保存地区としている。また、菟上遺跡と辻子遺跡に関しては、第二名神と交差する県道工事にかかる発掘調査が一体的な調査となるため、三重県県土整備部の経費負担により道路公団事業と同時に同様の体制で実施した。整理・報告書作成業務についても同様である。

日常の調査業務は、平成9年12月に四日市市伊坂町126－1に開設した「近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）発掘調査整理所」を拠点としている。

その他、普及公開事業としては、調査成果を速報する発掘調査ニュース「あさけのいにしへ」の刊行

No.	遺跡名	所在地	種別	面積（㎡） 分布面積	面積（㎡） 調査面積	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	概要
1	伊坂城跡	四日市市伊坂町	城館跡	22,600	13,312 範 674	測量	範 674	7,172	6,140		城の東端から尾根を縦貫して主郭に至る道を確認。その両側には屋敷地が配置されている。
2	丸内遺跡	四日市市伊坂町	遺物散布地	2,600	0 範 120		範 120				弥生～室町時代の遺物散布がみられたが、遺構・遺物なし
3	西ヶ広遺跡	四日市市伊坂町	集落跡 官衙跡	6,670	5,710 範 442		範 328	2,970 範 44	2,740 範 70		朝明郡衙の候補地。奈良時代の竪穴住居と掘立柱建物を確認。掘立柱建物は台地の平坦部に、竪穴住居はその北の斜面を削りだして建てられている。
4	伊坂遺跡 銅鐸出土地	四日市市伊坂町	集落跡	26,100	12,364 範 260			8,320	3,250	794 範 260	江戸時代に扁平紐式袈裟襷文銅鐸が出土。古墳時代前期の竪穴住居を検出したほか、瓦窯の灰原を確認。
5	東海道想定地	四日市市伊坂町	道路跡	12,100	778 保存 6,300 範 950		範 256	778	範 275	範 419	古代東海道の想定地。本調査700㎡残りあり。平成13年度の範囲確認調査では、道路に関連する可能性の考えられる溝1条が確認されている。調整池部分保存。
6	苑上遺跡	四日市市伊坂町	集落跡	33,300	29,118 範 2,239		範 2,239	13,598	15,520		弥生～奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物、弥生時代の方形周溝墓を確認。交差する県道路線予定地内述べ7,600㎡も調査。
7	東平古遺跡	四日市市山村町	遺物散布地	1,100	0 範 54	範 54					古墳時代以降の遺物散布がみられたが、遺構・遺物なし。
8	金塚遺跡・同横穴墓群 (旧 金塚古墳群)	四日市市山村町	集落跡 横穴墓	5,390	3,976 保存 340 範 419	範 149	3,976 範 270				丘陵頂部で弥生時代後期の高地性集落と墳丘墓2基、西尾根で横穴墓4基を確認。銅鐸片が出土。一部法面保存。
9	城ノ谷遺跡	四日市市広永町	集落跡	7,700	2,102 範 523	範 348	1,939	163 範 175			弥生時代後期の竪穴住居、古墳時代の掘立柱建物を確認。
10	広永城跡・同古墳群・横穴墓群 (旧 広永城跡)	三重郡朝日町 四日市市広永町	城館跡 古墳 横穴墓	2,600	970 範 316	範 316	970				方形周溝墓1基、横穴式石室1基、横穴墓6基(痕跡含む)を確認。城跡の堀・土塁を確認。
11	辻子遺跡	三重郡朝日町 四日市市広永町	集落跡 荘園関連	27,600	□13,533 保存 8,410 範 937	範 937	□ 8,818	□ 4,715			上層で中世の掘立柱建物群・条里溝等を確認。下層で弥生～古墳時代の竪穴住居・水田等を確認。橋脚間保存。県道事業で、□9,331㎡を本調査。
12	古川遺跡	三重郡川越町 三重郡朝日町	遺物散布地	18,800	0 範 1,035	範 833	範 202				範囲確認の結果、遺構なし。微量の遺物が出土したのみ(第二名神・北勢バイパスとも)。
13	山村遺跡	四日市市山村町	墓 集落跡	1,420	1,071 範 110			1,071 範 110			弥生時代の環壕2条・方形周溝墓1基等を確認
	合計 13ヶ所16遺跡			167,980	82,934 保存15,050 範 8,079	範 2,637	15,703 範 4,089	38,787 範 329	27,650 範 345	794 範 679	

第1表　第二名神（愛知県境～四日市JCT）埋蔵文化財発掘調査経過表

（分布面積（㎡）は平成12年12月段階、□印は複数層の累計面積）

や現地説明会、調査報告会、展示会、遺跡見学、体験発掘などを実施した。その詳細は第２表にまとめたとおりである。

また、この間、発掘調査をはじめとする業務の実施にあたり多くの方々・機関のお世話を頂いた。改めて感謝いたします。

2　調査の体制

調査は三重県教育委員会が主体となり、三重県埋蔵文化財センターが担当している。

平成９年度から12年度の間には「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」に基づいて、朝日町・川越町・四日市市の各教育委員会から職員の派遣を受け、調査体制の強化、充実をはかった。また、現地調査については民間調査機関を導入した。その詳細は事項にまとめる。

年度	内容	実施場所	実施日	参加者数	備考
平成10年度	親子体験発掘	辻子遺跡	10年８月21日	30人	四日市市八郷地区市民センター
	室内作業体験	整理所	10年10月１日	27人	朝日町立歴史博物館
	現地説明会	広永城跡・同古墳群・同横穴墓群	10年11月１日	150人	
	体験発掘	辻子遺跡	10年11月20日	70人	朝日町立朝日小学校（６年生）
	遺跡見学	金塚遺跡・同横穴墓群	10年11月25日	32人	員弁郡教育研究会地域の歴史研究部
	現地説明会	金塚遺跡・同横穴墓群	11年１月17日	350人	
	遺跡見学	金塚遺跡	11年１月22日	110人	四日市市立八郷小学校（４年生）
	現地説明会	城ノ谷遺跡	11年２月６日	150人	
	調査報告会	朝日町立歴史博物館	11年２月27日	80人	辻子遺跡
平成11年度	子ども体験発掘	辻子遺跡	11年８月10日	14人	朝日町立歴史博物館
	親子体験発掘	菟上遺跡	11年８月22日	31人	四日市市八郷地区市民センター
	遺跡見学	菟上遺跡	11年10月13日	35人	員弁郡教育研究会員弁の歴史部会
	調査報告会	四日市市八郷地区市民センター	11年10月31日	90人	伊坂遺跡
	体験発掘	辻子遺跡	11年11月11日	68人	朝日町立朝日小学校（６年生）
	現地説明会	辻子遺跡	11年11月21日	120人	県道四日市朝日線辻子遺跡と同時開催
	現地説明会	菟上遺跡	12年１月16日	350人	
	現地説明会	西ケ広遺跡	12年１月16日	250人	
	現地説明会	伊坂城跡	12年１月29日	370人	
	遺跡見学	菟上遺跡	12年２月17日	12人	東員町教育委員会、同文化財調査委員
平成12年度	歴史学習	四日市市立大谷台小学校	12年５月16日	108人	６年生対象、講師派遣
	体験発掘	菟上遺跡	12年８月23日	32人	四日市市八郷地区市民センター
	体験発掘	菟上遺跡	12年８月24日	18人	北勢町立治田小学校（６年生）
	体験発掘	菟上遺跡	12年８月24日	12人	四日市市立大谷台小学校歴史クラブ
	現地説明会	伊坂城跡	12年10月１日	220人	
	遺跡見学	西ケ広遺跡	12年10月30日	190人	四日市市立桜小学校
	遺跡・整理所見学	菟上遺跡、整理所	12年11月10日	21人	静岡大学人文学部考古学研究室
	現地説明会	菟上遺跡	12年11月26日	160人	
	現地説明会	伊坂城跡	12年12月10日	90人	
	現地説明会	西ケ広遺跡	13年１月14日	130人	
	展示会・講演会	四日市市八郷地区市民センター	13年３月15日～３月20日	150人	四日市市八郷地区市民センター主催に協力
平成13年度	整理所見学	整理所	13年４月３日	40人	四日市市民大学歩こう会
	整理所見学	整理所	13年５月１日	58人	川越町立川越北小学校６年生
	整理所見学	整理所	13年６月４・５日	9人	県立四日市商業高等学校地歴同好会
	整理所見学	整理所	13年７月４日	25人	員弁郡教育研究会社会科部会
発掘調査ニュース「あさけのいにしへ」の刊行 平成９年度：第１号、10年度：第２～５号・号外、11年度：第６～10号・号外、12年度：第11～13号・号外					

第２表　普及公開活動一覧表

以下は、平成９年度から13年度の調査体制である。先述の経緯から、第二名神関連県土整備部事業担当者についても記載する。

【平成９年度】

三重県埋蔵文化財センター調査第二課

主幹兼課長　山田　猛

係　　長　杉谷政樹

主　　事　服部芳人

主　　事　倉田文美（朝日町教育委員会から派遣）

発掘調査作業受託機関

㈱パスコ（古川遺跡、辻子遺跡）

㈱四門（古川遺跡、辻子遺跡、広永城跡、城ノ谷遺跡、金塚古墳群、東平古遺跡）

【平成10年度】

三重県埋蔵文化財センター調査第二課

主幹兼課長　吉水康夫

主査兼係長　杉谷政樹

主　　事　山本義浩

主　　事　田中久生

主　　事　服部芳人

主　　事　倉田文美（朝日町教育委員会から派遣）

主　　事　川瀬　聡（第二名神関連県土整備部事業担当）

技　　師　水橋公恵

臨時技術補助員　田中美穂

調査補助員　伊藤宏恵（名古屋女子大学学生）

調査補助員　岩城有紀（名古屋女子大学学生）

調査補助員　胡子清子（皇學館大學学生）

調査補助員　坂下真弓（奈良大学学生）

発掘調査作業受託機関

㈱パスコ（辻子遺跡）

㈱四門（金塚遺跡・同横穴墓群、菟上遺跡、伊坂城跡）

リメックス㈱（広永城跡・同古墳群・同横穴墓群、城ノ谷遺跡、丸内遺跡、東海道想定地、西ケ広遺跡）

【平成11年度】

三重県埋蔵文化財センター調査第二課

主幹兼課長　吉水康夫

主　　査　杉谷政樹

係　　長　森川幸雄

主　　事　城　吉基

主　　事　片岡　博

主　　事　木野本和之

主　　事　服部芳人

主　　事　倉田文美（朝日町教育委員会から派遣）

主　　事　田中久生（第二名神関連県土整備部事業担当）

技　　師　穂積裕昌

技　　師　原田恵理子

技　　師　尾野公恵

技　　師　角正芳浩

臨時技術補助員　田中美穂

調査補助員　坂下真弓（奈良大学学生）

調査補助員　西岡智子（愛知県立大学学生）

発掘調査作業受託機関

アジア航測㈱（伊坂城跡、伊坂遺跡）

㈱発掘建設リンク（西ケ広遺跡、東海道想定地、伊坂遺跡）

㈱パスコ（辻子遺跡、城ノ谷遺跡）

国際航業㈱（菟上遺跡、山村遺跡）

【平成12年度】

三重県埋蔵文化財センター調査第二課

主幹兼課長　吉水康夫

主　　査　本堂弘之

主査兼係長　森川幸雄

主　　事　木野本和之

主　　事　田中久生

主　　事　服部芳人

主　　事　竹田憲治

主　　事　船越重伸

主　　事　水谷裕康（川越町教育委員会から派遣）

主　　事　赤松一秀（四日市市教育委員会から派遣）

技　　師　金子智子

技　　師　水橋公恵

技　　師　穂積裕昌（第二名神関連県土整備部事業担当）

技　　師　新名　強（第二名神関連県土整備部事業担当）

臨時技術補助員　田中美穂

調査補助員　西岡智子（愛知県立大学学生）

発掘調査作業受託機関

岡三リビック㈱（伊坂城跡）

㈱四門（伊坂遺跡、伊坂城跡、西ケ広遺跡）

㈱シン技術コンサル（菟上遺跡、伊坂遺跡）

国際航業㈱（菟上遺跡、東海道想定地）

【平成13年度】

三重県埋蔵文化財センター調査第二課

主幹兼課長　新田　洋

主査兼係長　森川幸雄

主　　事　松田珠美
主　　事　服部芳人
主　　事　竹田憲治
技　　師　角正芳浩
技　　師　穂積裕昌（第二名神関連県土整備部事業担当）
臨時技術補助員　田中美穂
発掘作業受託機関
㈱鴻池組三重営業所（伊坂遺跡、東海道想定地）

以上の他、室内整理に関しては、以下の方々の補助を得た。

有満俊江　加藤里美　才木　薫　斎藤里枝
新貝里美　長野恵子　福森雅子　山中陽子
吉田恵子

3　民間調査機関の活用

①　三重県の調査体制

本題に入る前に、これまで三重県で採られてきた調査体制について簡単に触れておく。

直営　作業員や資機材を県教育委員会が直接準備・管理する調査体制。この体制は、安全管理や労務管理上問題も多く、調査担当者の周辺業務負担が大きく、調査効率が悪い。このため、調査規模の拡大とともに直営スタイルは減少し、平成12年度以降は採られていない。

土工委託（発掘作業委託）　作業員や資機材の提供・管理を委託する調査体制。この体制は調査担当者の業務負担が軽減される。原因者から県教育委員会が発掘調査を受託する時点で、土工部門は別機関が受託するケースも含め、以下のような経緯がある。

昭和50年代以降、一部に民間の土木建築業者を活用した例もあるがが、利潤追求から生じる問題もあり、文化財調査にはなじまないとして一般化はしなかった。

昭和60年に建設省事業の調査体制が検討され、翌61年から建設省の外郭団体である㈳中部建設協会（以下、協会）を活用する体制が採られた。県は建設省と調査に関する協定および委託契約を結ぶ一方、建設省は協会と現場作業に係る土工部門に関して委託契約を結ぶ。そして、国・県・協会の三者間に三者協定を結び、県は協会に「作業要領」を提示する方式である。この体制は三者体制と呼ばれ、調査担当者が調査に専念できるほか、公益法人のため信頼度が高く有効であり、現在も国土交通省事業に限り継続中である。問題点としては、県調査員が協会雇用の作業員に直接指示する場面が必然的にあり、契約の二重構造に伴う理論上の課題がある。

なお、この三者体制については、【『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1994】に詳しいので、それを参照されたい。

県公共事業に係る埋蔵文化財調査に関しては、直営方式が採られてきたが、上記三者体制を参考として、平成元年度から県の外郭団体である㈶農業開発公社（平成13年度から㈶農林支援センター）に県教育委員会が土工部門を委託する体制が採用された。この体制は公社委託と呼ばれる。

さて、公社委託は現在も継続中であるが、契約体系上の問題から、平成13年度は農業基盤整備事業にかかる発掘調査にのみ採用している。その他の県公共事業にかかる土工委託については、先行して導入した発掘調査作業の民間調査機関の活用を参考に、平成13年度から民活を行っている。委託先は、発掘調査機関のほか、特に発掘調査にかかる土工を県出納登録に明記している土木建築業者を対象とする。

なお、三重県では土工委託を発掘調査作業委託に対して発掘作業委託と呼称している。

発掘調査作業委託　平成９年度から採用している。その概略は以下のとおりである。

②　発掘調査作業委託

導入の契機　既に述べたとおり日本道路公団事業により緊急性の高い発掘調査が必要となった。一方で、行政改革の深化にともなう職員定数の抑制があり、民間活力の有効利用が求められた。

文化財保護サイドの対応　過去の民間土木建築業者活用時の評価等から、一時は民活反対の立場から調査体制を検討した。具体的には、国土交通省事業と同様の三重県・道路公団・㈳中部建設協会による三者体制を提示したが、道路公団の契約体系上の問題からこの体制は困難であった。また、道路公団や県公共事業関連業務が急増するなかで県教育委員会の定数問題から事業量に対応する職員の配置も困難な状況であった。様々な方策を協議検討した結果、次の理由により能動的に民活を導入した。

行政改革や民間の競争原理導入は、行政の「親方日の丸」的非効率の改善という点で聞くべきものがある。しかし、この動向は、緊急発掘調査に迅速化だけを求め、調査水準の維持向上を二の次とする危惧がある。このことは保護行政の責任において回避しなければならない。これらの両立を模索した結果、調査の主体性は行政が保持し、現業的部分は民活する体制を選択した。具体的には、主調査員を行政、副調査員以下と作業員や資機材提供等を民間とする体制である。この体制は、県調査員１名で２名分の事業量対応が可能で、当面は緊急発掘調査増加への対応として有効で、将来的には一定程度の民活は文化財保護行政の強化･充実に繋がると判断した。

なお、県側が主調査員、民間側を副調査員とする位置づけは、派遣法の問題や委託業務一般からする不自然さから改正され、平成13年度現在では、県側の担当者は監督員に位置づけ、調査作業は民間側がより能動的に実施するように位置づけている。ただし、改正後も県担当者（監督員）は現場に常駐することや行政が調査主体であるという基本的な部分は変わらない。

導入の基本要件　民間調査機関を県教育委員会の発掘調査体制に組み込む形態とする。すなわち、県教育委員会が調査主体となり、調査計画、調査経費、業者の選定指名、発掘調査の基本的部分について判断・指示を行い、民間調査機関を支援機関として活用する体制である。

導入の基準　明文化した基準はなく、事前に調査作業受託意思のある民間調査機関から「調査機関概要書」を徴収し、会社の資質や調査員等の実績および対応可能人数等を確認・判断し、教育委員会独自の指名審査会を経て指名業者を決定している。民間調査機関の調査担当者の資格については、契約にかかる『特記仕様書』に規定している。参考資料２特記仕様書を参照されたい。

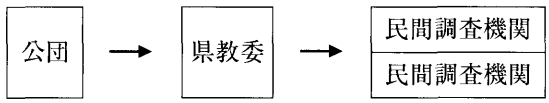
導入対象事業　日本道路公団事業および関連県道事業を対象に導入してきたが、平成13年度は直接的には公団事業関連ではない県道事業にも一部活用中である。

委託範囲　現場調査作業（測量、遺構実測、写真撮影等を含む）および１次整理（遺物の洗浄・注記・簡易な接合や図面・写真の整理等）を基本的な委託範囲としている。

遺物実測の一部を委託するケースもあるが、これはあくまでも試行的なものであり、２次整理および報告書の作成は県側の業務としている。

契約形態　以下の流れである。

《調査全般を委託》《調査作業業務委託》



指名競争入札

現場調査体制

県・・・監督員（専門担当者）：現場に常駐し、調査の基本的事項を判断指示（現場代理人へ）するとともに業務実績を把握する。

民間・・主任技師（限定常駐）：特に考古学的な精度監理をする。

調査員（常駐）：考古学的な調査の実務を担当し、現場代理人を兼ねる。

調査補助員（常駐）：調査員の補助業務を担当する。

監理技師（常駐）：土木的な管理をし、簡易な測量も行う。

作業員・資機材等：必要員数を配置する。

その他：必要に応じて監理技師を補佐する技術員（常駐）や測量技師・測量助手・応援補助員（非常駐）を配置する。

経費積算の基準　経費は範囲確認調査結果等から導き出された対象遺跡の土量をもとに算出した必要人員・資機材員数等により積算している。員数の算出にあったては「東海ブロック発掘調査基準」および実績歩掛を使用している。各単価は、基本的に県土整備部等の公共単価や建設物価等の市場単価により設定している。

なお、遺跡の状況により文化財保護上必要と判断した経費や期間の変更は行い、契約変更の発議は官民両者からできる。

調査の方法　委託業務全般については契約書や特記仕様書（参考資料１・２参照）に規定している。実際の調査にあたっては、三重県がこれまでに実施し

てきた調査方法を民間調査機関に具体的に提示し、民間側からも提案を受け協議により調査方法を決定している。

過去の導入実績　平成９年度から12年度までに三重県が発掘調査作業において民間委託した件数および受託機関数、面積は第３表のとおりである。

なお、近畿自動車道名古屋神戸線愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査に関して発掘調査作業および発掘作業を委託した機関および対象遺跡は前項調査体制に明記した。

今後の課題　民間調査機関の導入は平成13年度で５年目をむかえた。その成果に対する評価は種種様々である。

三重県では、昭和42年に教育委員会にはじめて専門職員が配置された。以来、文化財保護行政の体制整備が進められたが、これは緊急発掘調査体制の整備という側面が強く、実状は緊急発掘調査に追われ本来的な保護業務が手薄となっている。また、調査員の急増から緊急発掘調査の質の停滞は否めず、加えて近年は行政改革による定数減もある。

一定程度の民活は、こうした行政調査の質の停滞打破や効率化をはかるひとつの方策と考える。また、「親方日の丸」的な部分が残る行政への民間活力の導入は、その競争原理により行政担当者の自己研鑽の刺激となり、行政がより専門集団化し、調査の質の向上や非効率の排除に繋がるものと考える。

一方、この５年間の民間調査機関の動向をみると、調査機関は依然増加傾向にある。しかし、一部の調査機関を除き、その歴史は浅く、個々の機関の調査能力に格差が認められる。県内部の民活の評価が各委託業務ごとに分かれる所以である。

今後、埋蔵文化財のもつ公益性の保護、緊急発掘調査の場合はその質の保証が行政の責務であることを改めて認識し、事業対応に終始せず、文化財保護の観点から、より有益・有効な民活を可能にする導入システムの整備を進めなければならない。

最後に、今後の課題をあげておく。

①設計の確立　積算基準や市場原理対応可能な仕様の確立。現時点では、埋蔵文化財調査の特性から員数による経費の積算・精算を行っているが、この設計では業者の努力・工夫といったものが評価しにくい。

②施行監理体制の整備・充実　日々の指示や精度管理および業務確認、検査などにおける指針・標準の策定が必要である。

③評価システムの確立　より客観的な評価方法により業者の資質・能力を評価し、受託可能な業務の内容や規模を判定していく。

④公共側専門担当者の資質の向上　民活のケースではより重要な要素となる。考古学的な能力にあわせ業務の監理能力の向上も要求される。

⑤民間調査機関の社会的責務の明確化　文化財保護の観点から現在は、行政主導のもと民間調査機関を厳しく監理しているが、このことが民間調査機関の社会的責務を不明瞭にしている側面もある。

以下に、発掘調査作業業務委託の際の「委託契約書」および「特記仕様書」を参考資料として掲載する。

なお、その内容は平成13年度現在での基本的なものである。　（森川幸雄）

	発注件数	受注機関数	実績面積（㎡）
平成９年度	３件	２機関	3,059
平成10年度	３件	３機関	29,841
平成11年度	８件	８機関	49,570
平成12年度	９件	７機関	36,309

第３表　民間調査機関の導入実績

参考資料１

「委　託　契　約　書」

１　業務名

平成＊＊年度近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）にかかる＊＊遺跡発掘調査作業業務

２　委託金額　　¥　　，　　，　　－

（内消費税額及び地方消費税額　¥　　，　　－含む）

３　委託期間　　平成　　年　　月　　日から

平成　　年　　月　　日まで

４　遺跡名・場所

＊＊遺跡　＊＊＊市＊＊＊町＊＊

５　発掘作業面積　　，　　㎡

頭書業務の委託について、委託者三重県教育委員会教育長　　を「甲」、受託者　　を「乙」として次の条項により委託契約を締結し、信義に従い、誠実にこれを履行するものとする。

（総　則）

第１条　乙は、別冊の図面及び仕様書、特記仕様書、発掘調査計画書、現場説明書（以下「設計図書」という。）に基づき、頭書の委託期間までに、頭書の委託業務（以下、「業務」という。）を完了しなければならない。

２　乙は、甲による設計図書に基づき、発掘作業工程表を作成し、甲に提出するものとする。

３　乙は、甲と連絡を密にとり、業務の計画的執行と文化財の特殊性から予測できない事項にも対処するよう努めるものとする。

４　乙は、発掘作業予定地の確認、地元等への協力依頼、発掘作業終了後の安全確認等にあたるものとする。

（契約保証人）

第２条　乙は、業務を完了することができない場合に、自己に代わって自ら業務を完了することを保証する他の業者を完成保証人として立てなければならない。

２　前項の保証人は、甲の定める基準の範囲内において選定しなければならない。

（契約等の変更）

第３条　甲又は乙の都合により契約及び計画を変更し、又は、中止しようとするときは、あらかじめ甲、乙が協議して定めるものとする。

（権利義務の譲渡等の禁止）

第４条　乙は、この契約によって生じる権利、又は義務を第三者に譲渡し、又は継承させてはならないものとする。

（再委託の禁止）

第５条　乙は、業務の処理を他に委託し、又は請負わせてはならない。ただし、あらかじめ甲の承諾を得た場合は、この限りではない。

（業務の調査等）

第６条　甲は、必要がある場合には、乙に業務の処理状況について調査をし、又は報告を求めることができる。

（主任技術者及び調査員等）

第７条　乙は、次の各号に揚げる者を定め、書面によりその氏名等を甲に通知しなければならない。これらの者を変更したときも同様とする。

・主任技師
・調査員
・監理技師
・現場代理人
・その他必要な受託職員

（調査区の範囲）

第８条　調査区の範囲は、別添図面に図示したとおりとする。

（安全管理）

第９条　乙は、発掘作業にあたっては安全管理に充分注意し業務を施行するものとする。

２　乙は、災害防止のため必要があると認めたときは、臨機の措置をとらなければならない。

（第三者に及ぼした損害）

第10条　業務の遂行につき乙が管理者の注意義務を怠ったことにより第三者に損害を及ぼしたときは、乙がその損害を賠償しなければならない。

（業務完成報告書等の提出）

第11条　乙は、業務が完成したときは、甲の指示する書式に基づき、遅滞なく業務完成報告書に業務実績報告書及び甲からの指示書（以下「報告書等」という。）を添えて、甲に提出するものとする。

２　甲は、前項の報告書等を受理したときは、すみやかにこれらの確認を行い、契約の内容に適合すると認められたときは、額の確定をし、乙に通知するものとする。

（委託金額の支払い）

第12条　甲は、前条第２項の確認後、乙から適正な請求書を受理したときは、その日から起算して30日以内に精算払いをするものとする。

（前払金）

第13条　乙は、甲に対して三重県会計規則（昭和39年三重県規則第15号以下「会計規則」という。）第47条第２号に定めるところにより業務委託料の３／10以内の前払金の支払を請求することができる。

２　甲は、第１項の規定による請求があったときは、その日から14日以内に、前払金を支払わなければならない。

（出土品の処置）

第14条　乙は、発掘され、又は発見された埋蔵文化財に関する権利は放棄するものとする。

（契約外の事項）

第15条　この契約に定めのない事項、又はこの契約について疑義を生じた事項については、甲、乙協議して定めるものとする。

この契約の締結の証として、本書３通を作成し甲、乙、及び完成保証人記名押印のうえ、各自１通を保存するものとする。

平成　　年　　月　　日

津市広明町13番地

甲　　三重県教育委員会教育長

教育長　　○　○　○　○

乙

乙が、この契約による債務を履行しない場合において、その責を負う。

完成保証人

参考資料２

「特　記　仕　様　書」

１　業務名

平成＊＊年度＊＊＊＊遺跡発掘調査作業業務

２　業務内容

＊＊＊に伴い、三重県教育委員会が事前に発掘調査を実施するにあたり、調査と関連作業を補佐するものである。この業務内容は、考古学的な調査・記録作業と作業員の雇用・管理や機材の提供等の土工的作業、及び整理報告作業をいう。

３　用語の定義

この仕様書で用いる用語の定義は、次のとおりとする。

〔　　甲　　〕　委託者（三重県教育委員会）。

〔　　乙　　〕　受託者（発掘調査機関）。

〔監　督　員〕　甲の任命を受け、乙に対して発掘調査に関する監理（「指示書及び口頭による指示」以下同じ）を行う県教育委員会の職員。

〔受託調査員〕　乙の発掘調査作業を担当する者であり、主任技師や調査員、調査補助員、監理技師、技術員、測量技師、測量助手等。

〔主任技師〕　乙の発掘調査作業を担当する受託調査員の内、特に考古学的な精度管理をする者。

〔調　査　員〕　乙の発掘調査作業を担当する受託調査員の内、現場に常駐し、主に考古学的な発掘調査を担当する者。

〔監理技師〕　乙の発掘調査作業を担当する受託調査員の内、現場に常駐し、主に土木的な管理をし、簡易な測量も行う者。

〔調査技術員〕　乙の発掘調査作業を担当する受託調査員の内、調査員・監理技師を補佐する者であり、原則として現場に常駐し、主に考古学的な作業を担当する調査補助員並びに主に土木的な管理や簡易な測量を担当する技術員、及び必要に応じて配置する測量技師や測量助手。

〔現場代理人〕　乙の発掘調査作業を担当する受託調査員の内、この契約の履行に関し、現場に常駐し、その運営、取り締まりを行う。調査員がこれを兼ねる。

〔作業班長〕　乙の雇用する発掘作業に実際に従事する現場作業員の内、受託調査員を補佐して他の作業員をまとめる者。

〔現場作業員〕　乙の雇用する、現場作業に実際に従事する者。

〔整理作業員〕　乙の雇用する、整理作業に実際に従事する者。

〔発掘作業員〕　甲の実施する当該埋蔵文化財の考古学的な調査であり、計画案及び現場の調査・記録作業並びに整理報告作業等を含む。

〔発掘調査作業〕　甲の実施する発掘調査に関して、甲の監理のもとに乙が行う作業。

〔調査基地〕　乙が設置・管理し、受託調査員等の常駐・使用する建物及び付属施設。

〔現場詰所〕　乙が作業現地に設置・管理し、受託調査員や作業員等の常駐・使用する建物及び付属施設。

〔資　機　材〕　乙の準備する、発掘調査作業に使用する各種の機械及び材料。

〔発掘調査用具〕　発掘調査作業に使用する各種の道具。

４　基本事項

(1)　発掘調査作業工程表の提出

乙は、業務の実施に先立って、甲の発掘調査

計画書に基づき発掘調査作業全体に関する発掘調査作業工程表を作成し、甲に提出するものとする。

(2) 発掘調査作業実施計画書の提出

乙は、発掘調査作業工程表に基づいて工程、施行方法、施行機械設備及び安全管理対策について発掘調査作業実施計画書を作成し、監督員に提出して承認を得るものとする。

乙は、これに基づいて全体的な発掘調査作業を実施する。

(3) 詳細工程計画及び日報・月報の提出

イ 乙は、発掘調査作業の実施にあたり、上記の発掘調査作業工程表ならびに実施計画書及び調査現場の状況を勘案して、使用人員・機械及び作業内容を明示した短期の詳細工程計画を作成し、監督員の確認を受けるものとする。

ロ 乙は、これに基づいて日々の発掘調査作業を実施するものとし、その実績を業務日報・業務月報により監督員の確認を受けるものとする。

(4) 受託調査員選任通知書

乙は、業務の実施に先立って、受託調査員の内の主任技師と調査員並びに監理技師、調査補助員（常駐）、技術員の選任通知書及び経歴書を甲に提出し、甲の承認を得るものとする。

(5) 主任技師、調査員の資格

乙の主任技師及び調査員は、大学で考古学その他これに類する学科目を専門に修める課程を修了した者又はこれと同等以上の知識があると認められる者で、主任技師は通算２年間以上、調査員は１年間以上の主体的な発掘調査現場経験があり、発掘調査報告書又は考古学関係論文の執筆歴がある者とする。

(6) 受託調査員の交代

発掘調査の連続性や水準を保つため、乙は、受託調査員を原則として交代することのないように努めなくてはならない。やむをえずその必要が生じた場合は、協議の上、乙は甲の承認を得るものとする。

(7) 現場作業員

現場作業員の員数については、業務が円滑に実施されるよう発掘調査作業工程表等に基づいてあらかじめ甲、乙充分協議して定めるものとする。

なお、作業員１班の内に１名の作業班長を配置することを原則とし、各班の人員構成は作業内容に適正なものとする。

また、業務施行中、甲または乙の都合により、員数の増減の必要が生じた場合には、すみやかに甲、乙協議するものとする。

(8) 発掘調査用具

発掘調査用具は、乙が準備するものとする。ただし、作業日誌や遺構カード・遺物ラベル・遺構実測用紙等、甲が特に用意、あるいは指定したものについては、これを使用するものとする。

5 現場作業

(1) 作業指示の遵守

イ 遺物包含層や遺構の掘削及び掘削によって出土する遺物の収納管理は、発掘調査の最も重要な作業の一つであるので、乙は、監督員の指示を充分に理解するとともに、乙が雇用する作業員に対してもその主旨の徹底を図り、現場作業を実施することとする。

ロ 乙は、毎日の現場作業によって出土した遺物について、監督員の指定した場所に運び入れるものとする。

(2) 現場作業員の交替

現場作業は、経験を要する作業を含むため、乙は、その雇用する現場作業員を交替する必要が生じた場合は、これに十分配慮して行うものとする。

(3) 作業日時

イ 発掘作業の日時については、甲乙協議の上これを決定する。

ロ 雨天時等天候の都合により休業とする場合は、乙が決定し、監督員へ連絡するものとする。

(4) 発掘調査用地

イ　用地確認

発掘調査にかかる用地については、関係機関との協議及び甲の指示によるものとする。

ロ　用地補償未処理箇所の取り扱い

乙は、発掘調査作業及び関連作業により用地補償未処理箇所に影響が及ばないよう、万全の注意を払うものとする。

(5)　準備工

イ　発掘作業に用いる資機材、発掘用具等は、原則としてあらかじめ乙によって準備するものとする。

ロ　業務施行に際して道路中心杭、基準点等は、乙において充分照査するものとし、業務施行に際して失われる杭及びその恐れのある杭については、後に復元可能な状態を維持するとともに、控え杭の配置図を作成し、甲に提出するものとする。

ハ　乙は、現場作業の実施に当たり必要な場合は、一般道路、農業用水路、電気、ガス、水道施設等の管理者と協議し、現場作業に支障をきたさないよう処理するものとする。

(6)　掘削作業等

イ　乙は、埋蔵文化財の発掘調査という特殊性・重要性等を充分理解し、現場作業員にも周知徹底を図るとともに、掘削に際しては、万全の注意をはらって行うものとする。

ロ　乙は、人力あるいは重機による表土除去を行うものとする。

また、表土除去後、必要な場合は、遺構面を保存するために養生マット、シート等をかけるなどして、その保存に努めるものとする。

ハ　乙は、掘削によって生じた排土を指示された箇所に随時仮置きするものとする。

ニ　乙は、重機の移動及び重機等によって排土の運搬等を行う場合、未調査部分に埋蔵される文化財の現状が損傷しないように充分配慮して作業を実施するものとする。

ホ　乙は、人力掘削開始に先立ち原則として調査区全面に第Ⅵ座標系にのっとった４ｍ方格に地区杭を設定するものとする。

ヘ　乙は、包含層の掘削は手掘り（スコップ等）で行い、その際出土する遺物は、定められた範囲等一定の基準に従って収納するものとする。

ト　乙は、包含層の掘削後は、鍬等で土質の相違が明らかになるように努め、遺構の検出を行うものとする。

チ　乙は、遺構検出作業の後、遺構カードを作成し、遺構の重複・新旧関係等を記録するものとする。

リ　乙は、検出された遺構の掘削は、これに適切な小道具（移植ゴテ等）で行うものとする。また、ここで出土する遺物の取り扱いは、遺構ごと等一定の基準に従って取り上げて収納するものとする。

ヌ　乙は、必要に応じ、土壌分析や樹種同定等の各種分析試料の採集を行うものとする。

ル　乙は、必要に応じ、微小遺物等の採集のために土のフルイ掛けや水洗等を行うものとする。

ヲ　乙は、重層遺構を調査する部分について、上層遺構の調査作業後に人力あるいは重機等による掘削を行うものとする。調査方法はホからルと同様とする。

(7)　記録作業

イ　乙は発掘調査日誌をつけ、あわせて作業工程上必要な写真撮影等を行うものとする。

ロ　乙は、あらかじめ第Ⅵ座標系における調査区の位置測量を実施するものとする。

ハ　乙は、現場作業の前後に遺跡の遠景写真を撮影するものとする。

ニ　乙は、遺構カードと全体略測図や調査区全体図と必要な個別遺構図や土層図等を、指示された縮尺で作成するものとする。

ホ　乙は、必要な個別遺構や遺物出土状況等の写真撮影を行うものとする。

ヘ　乙は、各種の記録類を、甲の基準に基づいて整理するものとする。

(8)　遺構の保護・清掃

イ　乙は、必要に応じて、遺構、遺物等が損なわれないよう養生マット、シート等をかけるなどして、その保存に努めるものとする。

ロ　乙は、湧水、溜水等のある場合は、排水を完全に行った後、掘削作業を実施するものとする。

ハ　乙は、業務の全部または一部が完了した場合、発掘作業地を清掃し、残材、廃棄物、木屑等を除去するものとする。

(9)　調査基地等

乙は、発掘作業に際して、調査基地や現場詰所を設置、管理するものとする。

その規模仕様については、各作業及び労働安全衛生上具備するに必要なものとし、乙は甲の承認を得るものとする。

(10)　近接施行等に関する注意

イ　乙は、業務施行に際し、近接する水路、路肩、電柱等の物件に対し損傷を与えないように充分注意し、万全の対策を講じるものとする。

ロ　乙は、排水作業に関して、第三者から苦情の出ないよう適切な方法で処理するものとする。

ハ　乙は、業務施行に際し、関係市町村や地域住民及び他の受託者との間において常に相互協力して円滑に業務を実施するものとする。

(11)　見学者の立ち入り

文化財保護精神を普及する観点から、甲は、見学者の立ち入りを許可する場合がある。この場合乙は、これに協力するものとする。

(12)　現地説明会

乙は、甲が実施する発掘調査現地説明会の開催に協力するものとし、発掘した遺構等を良好な状態で公開するため、必要に応じて排水及び清掃を事前に行うと共に見学者に対する安全確保の措置を行うものとする。

6　整理作業

(1)　乙は、遺物の整理において、各遺物ラベル毎に管理し、混同することのないように、十分な注意をもって実施しなくてはならない。

(2)　乙は、遺物の洗浄において、遺物を損傷しないように細心の注意をもって行わなければならない。

(3)　乙は、遺物に関して、当面の必要に応じて保護強化処置を講じるものとする。

(4)　乙は、洗浄・注記等を済ませた遺物の内から、監督員の指示した遺物を正確かつ汚すことなく復元するものとする。

(5)　乙は、監督員の指示した遺物を正確かつ汚すことなく実測するものとする。

(6)　乙は、整理作業中に、墨書やヘラ書・塗彩そのほか重要な点に気づいた場合、すみやかに監督員に連絡するものとする。

(7)　乙は、レイアウト、トレースするに際しては、甲の指示する仕様をもって行うものとする。

7　安全管理

(1)　発掘作業の安全確保

乙は、常に発掘調査の安全に留意して現場管理を行い、事故、災害等の防止を図らなくてはならない。万一事故、災害等が発生した場合、乙はすみやかに必要な処置を講じるとともに、監督員に報告しなければならない。

(2)　事故防止

イ　乙は、業務を施行するにあたり労働安全衛生法等の諸法令及び諸規則を遵守し、安全確保に努めなくてはならない。

ロ　乙は、現場作業期間中随時、少なくとも月に１日は安全日を設定し、保安に関する処置、予防効果の確認、安全施行の研修等を実施し、現場作業における安全意識の高揚を図らなくてはならない。また、新規雇用の作業員に対してすみやかに安全衛生並びに発掘調査に関する教育を行わなくてはならない。

ハ　乙は、バックホウ、ベルトコンベア等の機械を操作する場合は、作業前の点検を励行し、安全運行に努めなければならない。また、必要に応じて安全監視員を配置しなければならない。

(3)　調査区等の安全整備

イ　乙は、調査区の整理整頓、工事用道路の整備、毎日の作業中、終了時の後片づけ等調査区の安全整備に努めなければならない。

ロ　乙は、作業用通路の設定及び、遺構等について安全対策が必要な場合は、監督員と協議のうえ、必要な措置を講じなくてはならない。

ハ　乙は、調査現場への関係者以外の立ち入りを禁止するため、監督員と協議のうえ、必要と認められる箇所に立入禁止の標示板・防止柵等を設置しなければならない。

また、一般道路が接する箇所及び、その他必要と認められる箇所に警戒標示板、バリケード等の保安設備を設置し第三者へ注意を促すとともに、その協力を求めなくてはならない。

ニ　乙は、工事用運搬路として一般道路等を使用するときは、積載物の落下等による路面の損傷･汚損等の防止に努めなければならない。また、一般道路への出入に際しては必要に応じて整理員を配置しなくてはならない。

(4)　保安対策

乙は、交通安全、災害、公害防止及び防犯等について、必要により所轄警察署、消防署、道路管理者、労働基準監督署等の関係官公署、地元関係者ならびに監督員と緊密な連絡をとり、万全を期すものとする。

(5)　公害防止

乙は、業務の施行中、周辺の自然ならびに生活環境へ悪影響を及ぼさないように努めるものとする。

(6)　火災防止

乙は、業務の施行中の火災事故防止のため、油脂類、薪炭やその他易燃性の物品の周辺では火気使用厳禁の指示を行い、周辺の整理整頓を励行するものとする。

(7)　災害防止

乙は、大雨等の警報、注意報が発令された場合、及び必要と認められる場合は、調査現場及びその周辺の災害防止に万全を期さなくてはならない。

(8)　埋め戻し

乙は、現場作業に関する全ての作業終了後、監督員と協議のうえ必要な範囲内での埋め戻しを実施するものとする。

8　成果

(1)　成果品

乙は業務の完了にあたり成果品を、成果品一覧表を添えて提出するものとする。

当業務における成果品は、別表のとおりとする。ただし、監督員が特に指示した場合は、この内から省くことができる。

また、各図の下記の縮尺は原則であり、監督員が特に指示した場合はこれによるものとする。

なお、成果品の内、監督員が指示したものについては、原本に添えて写し等を提出するものとする。

(2)　成果の帰属

成果品は勿論、その他の記録や情報等、当該調査によって得られた成果は甲に帰属するものであり、乙が利用する場合はあらかじめ甲の許可を得なくてはならない。

9　その他

この特記仕様書に規定のないものは、三重県土木工事共通仕様書によるものとする。

Ⅱ　位置と環境

1．地理的環境

当遺跡は、行政的には三重県の北部にある四日市市に属し、桑名市との境である朝日丘陵から派生する小丘陵上に位置する。伊勢平野北部のいわゆる北勢地域の地勢は、西側に古生層・花崗岩類から成る鈴鹿山脈が南北に連なり、断層崖に起因する急峻な東斜面の麓には標高30～100mの第三紀・第四紀層で構成される低平な台地・丘陵が海岸近くにまで広がっている。鈴鹿山脈東麓から流れ出る員弁川・朝明川・海蔵川・三滝川・内部川などの各河川は、台地・丘陵の間を開折して略東流し、下流域で急速に沖積低地を広げて伊勢湾に注ぐ。各河川の沖積低地は南北に連続し、海岸沿いに細長い平野を形成している。

鈴鹿山脈釈迦ケ岳を源とする朝明川は、中流域で北岸の朝日丘陵と南岸の垂坂丘陵の間に約１km前後の谷底平野を形成し、下流域では一部天井化しつつも員弁川・海蔵川などにつながる沖積低地を形成している。この沖積低地には河川堆積物である花崗岩粗砂（所謂朝明砂）などによる自然堤防状の微高地が点在する。また、朝日・垂坂丘陵の東縁沿いに桑名断層が南北に通過しており、断層西側の丘陵内部では褶曲による地層の不整合がみられる。当遺跡は、桑名断層とその西の桑名背斜の間に位置する。

2．歴史的環境

北勢地域北部を眺めつつ、朝明川流域を中心とした歴史的環境を概観する（第１図）。

旧石器・縄文時代　鈴鹿山脈東麓沿いは、県内では旧石器・縄文時代の遺跡が比較的多い地域である。しかし、朝明川流域となると中流域の鶴沢遺跡・野呂田遺跡で石器類が表採され、西ケ広遺跡(3)で縄文時代後期の土坑が確認されている程度で、その様相は今一つ明らかではない。

弥生時代　沖積低地を望む丘陵上に数多くの遺跡が出現する。前期の遺跡として、海蔵川・三滝川に挟まれた生桑丘陵東端の大谷遺跡(14)・永井遺跡(15)があげられる。数条の環壕や竪穴住居・方形周溝墓が確認されており、後期まで続く拠点的集落と考えられている。中期になると、遺跡の分布は河川下流から中流域まで広がり、朝明川流域では丸岡遺跡・菟上遺跡(6)・山村遺跡(13)にその足跡が認められる。菟上遺跡では、棟持柱式掘立柱建物や80棟以上もの竪穴住居などが、山村遺跡では19基の方形周溝墓が確認されている。後期になると丘陵上の遺跡が更に増え、朝日丘陵南縁にある西ケ広遺跡では29棟の竪穴住居が、垂坂丘陵の山奥遺跡(16)では100棟を超える竪穴住居が確認されている。当遺跡でも、標高約75mの丘陵頂部の狭い平坦地に後期の竪穴住居・環壕が確認された。一方、間ノ田遺跡(17)や下之宮遺跡(18)のように沖積低地の微高地に立地する遺跡も認められる。

朝明川流域では、弥生時代の代表的祭器である銅鐸が発見されている。西ケ広遺跡北方の丘陵、重地山の伊坂遺跡(4)から出土した扁平鈕式袈裟襷文銅鐸(伊坂銅鐸)である。これは西ケ広遺跡との関連が指摘されているが、最近の調査により、谷を挟んだ向いにある菟上遺跡との関連も考えられる。また、朝明川南岸の大矢知町青木山でも宝鐸の出土が伝えられるが、銅鐸であるのか詳細は不明である。

古墳時代　この北勢地域北部は、鈴鹿流域以南に比べて前期古墳の分布が少ない地域といえる。その数少ない前期古墳として海蔵川下流に突出する低丘陵端に築造された志氏神社古墳(19)があげられる。前方後円墳もしくは後方墳で内行花文鏡・車輪石などが出土している。員弁川北岸の丘陵上には前方後円墳の高塚古墳(20)が存在する。

朝明川流域では、中期の方墳を主体とする広古墳群(21)がある。Ｂ１号墳は、一辺31mで墳丘の南辺の偏った位置に造り出しが付く特異なものである。その東に位置する浄ケ坊１号墳(22)は径36mの円墳とされているが、方墳の可能性もあり、広古墳群の周辺には比較的大形の方墳が集中している。その他、朝明川の谷底平野をのぞむ丘陵・台地縁辺部を

中心に単独もしくは数基から十数基程度の小規模な古墳群が存在する。これらは殆ど後期の築造と考えられる。内部主体が判明しているものは少ないが、南岸の八幡古墳(23)は複室形態の構造の横穴式石室として知られている。近年調査された公事出古墳群は、後期の小規模な古墳群であるが、墳丘が削平され埋没していた。朝明川北岸の城ノ広遺跡(24)でも、削平された前方後円墳が新たに発見された。現在確認されていないこのような古墳も多いと思われる。

朝明川南岸の死人谷横穴古墳群(25)は、金銅製環頭大刀柄頭が出土した横穴墓として知られている。北岸では、当遺跡のほか、同年同事業に伴い調査された広永横穴墓群(10)や翌年県道の改良事業に伴い調査された菟上遺跡の横穴墓1基など、近年になって横穴墓の新規発見が相次いだ。

古墳時代の集落跡としては、西ケ広遺跡・山奥遺跡に竪穴住居がみられ、弥生時代より継続して人々が生活を営んでいたことが窺い知れる。

古代　律令制下、北勢地域北部には員弁・桑名・朝明・三重郡の四郡が置かれ、朝明川流域のほぼ全域は朝明郡に属していた。流域各所には規模の大きな遺跡が存在するが、特に西ケ広遺跡では奈良時代の掘立柱建物が76棟も確認され、大型建物の計画的配置や円面硯の出土などから、朝明郡衙もしくは郡司居館の可能性が指摘されている。その東にある菟上遺跡でも、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物が多数確認され、計画的な配置や巨大な柱穴は注目される。公事出遺跡では、西ヶ広遺跡のものよりも大きな庇付掘立柱建物が確認されている。

朝明郡の条里は、海岸沿いを除く沖積低地から中流域までの間に敷かれ、阡線はN45°Eで統一されている。長方形地割りが多くみられ、一部に坪名が残り千鳥式の坪並の可能性が指摘されている。

一方、古代伊勢国は東海道に所属し、その北部を壬申の乱の道、古代官道の東海道が通過していた。その経路は明確ではないが、西ケ広遺跡と菟上遺跡の間の南北方向の谷は、河曲駅家（鈴鹿市河曲付近に比定）から朝明郡家を経て榎撫駅家（多度町戸津・音取付近に比定）に向かう東海道の想定経路の一つ(5)であるが、調査では確実な道は確認されていない。東海道想定ルートの脇にある西ケ広遺跡・菟上遺跡は河曲・榎撫両駅家のほぼ中間に位置するため、朝明駅家の可能性も指摘されている。

北勢地域の白鳳寺院は一郡に一寺置かれたが、朝明郡では郡域の北東に偏した朝日丘陵北東端に縄生廃寺(26)が所在する。塔心礎舎利孔から唐三彩椀を蓋とする舎利容器の外容器が出土している。なお、隣接する桑名郡には、員弁川北岸に額田廃寺(27)が置かれた。

生産遺跡としては、垂坂丘陵に西ヶ谷古窯址群(28)と西ヶ谷遺跡(29)がある。7世紀代の須恵器窯跡とその工人の集落の可能性が考えられているが、西ヶ谷遺跡からは土師器焼成坑も確認されており、須恵器・土師器生産の観点でも注目される。また、遺跡内や周辺の字名に寺院に関る地名があり、寺院の存在が伝えられていたが、平成12年度四日市市教育委員会の調査では、8世紀中葉の瓦溝が検出され、瓦の消費遺跡（寺院など）または生産遺跡（瓦窯など）の存在が想定されるようになった。

中世　朝明郡内には、伊勢神宮の御厨・御薗が数多くみられる。朝明川流域全般にわたって中世遺物が散布する遺跡は多いが、調査例は少なく、その様相は明らかではない。辻子遺跡(11)は、平安時代末から鎌倉時代の集落遺跡で、条里の方向に合致する建物や溝が確認されている。

中世後期、伊勢北部は北勢十ケ所人数・北方一揆等と呼ばれる国人・地侍が群在した。このため中世城館も数多く、概ね大字に1ケ所から2ケ所程度存在する。朝明川沿いには、桑名・富田一色等と近江国八日市を繋ぎ、近江商人等が往来した主要な交通路である八風街道が通っており、中下流域の中世城館はこの街道が通過する谷底平野に面する台地・丘陵端に立地する。代表的なものに、保々西城跡・市場城跡・萱生城跡(30)・伊坂城跡(1)・広永城跡(10)がある。伊坂城跡では、計画的に配置された屋敷地と城道が確認されている。　（倉田・水橋）

(主な参考文献)
・小玉道明他1970「西ケ広遺跡」『日本道路公団東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会
・小玉道明他1973『四日市の後期古墳』四日市市教育委員会
・鈴木敏雄1938『三重県三重郡八郷村考古誌考』
・竹内英昭1996「員弁川流域と三滝川流域」『日本の古代遺跡52三重』保育社
・八賀晋他1993『四日市市史　第三巻資料編　考古Ⅱ』四日市市
・服部貞蔵他1988『四日市市史　第二巻資料編　考古Ⅰ』四日市市
・早川裕己1988『縄生廃寺跡発掘調査報告』朝日町教育委員会
・弥永貞三・谷岡武雄1979『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版
・四日市市教育委員会2001『四日市市文化財保護年報12―平成12年度―』

1：伊坂城跡　2：丸内遺跡　3：西ヶ広遺跡　4：伊坂遺跡　5：東海道想定地　6：菟上遺跡　7：東平古遺跡　8：金塚遺跡・横穴墓群　9：城ノ谷遺跡　10：広永城跡・古墳群・横穴墓群
11：辻子遺跡　12：古川遺跡　13：山村遺跡　14：大谷遺跡　15：永井遺跡　16：山奥遺跡　17：間ノ田遺跡　18：下之宮遺跡　19：志氏神社古墳　20：高塚古墳　21：広古墳群　22：浄ケ坊１号墳
23：八幡古墳　24：城ノ広遺跡　25：死人谷横穴古墳群　26：縄生廃寺　27：額田廃寺　28：西ケ谷古窯跡群　29：西ケ谷遺跡　30：萱生城跡

第１図　遺跡位置図（１：50,000）［国土地理院１：25,000　桑名・菰野・四日市東部・四日市西部］

Ⅲ　金塚遺跡・金塚横穴墓群

（旧称　金塚古墳群）

１．はじめに

（１）　遺跡の立地と周辺の状況

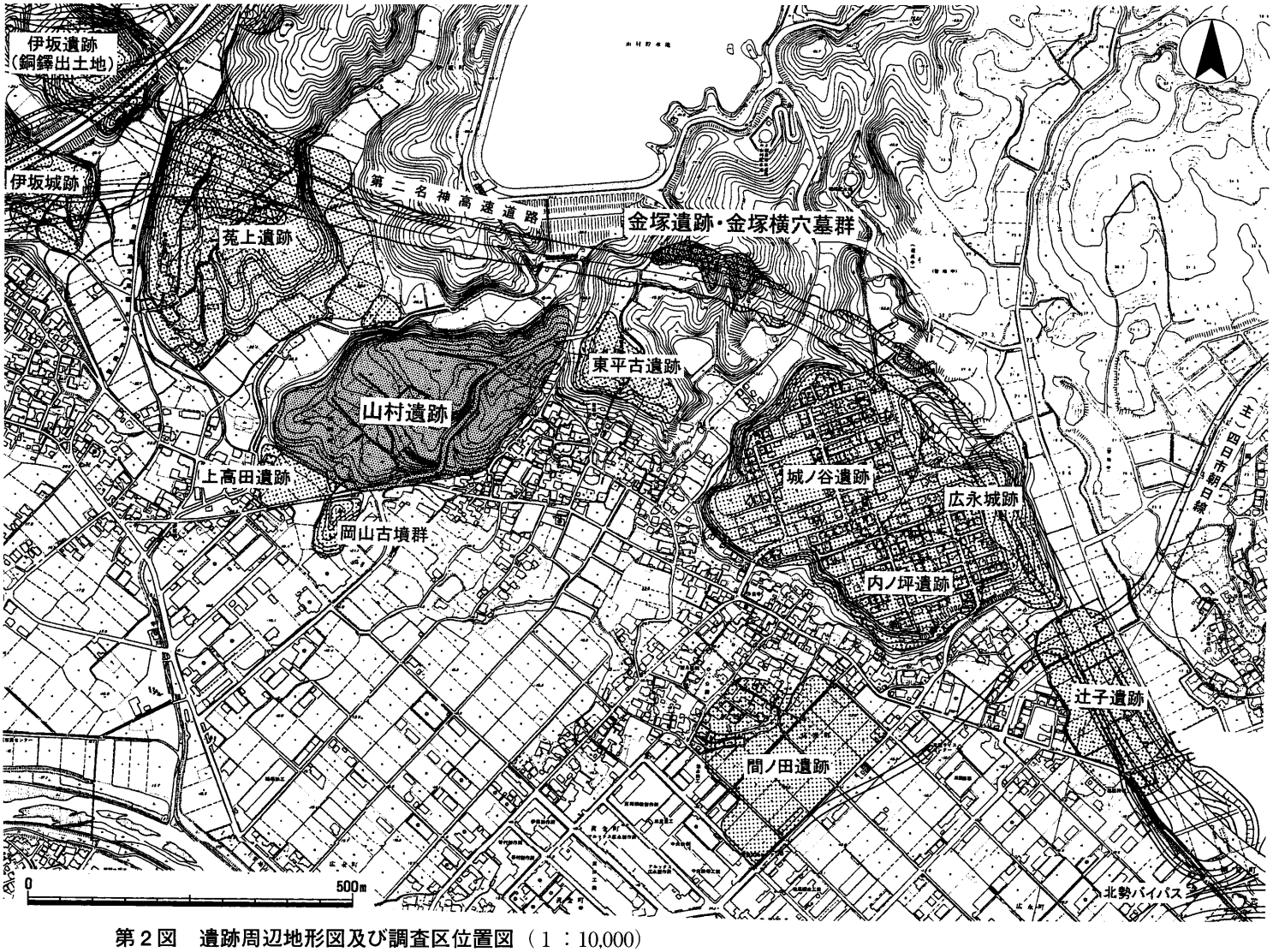
金塚遺跡・金塚横穴墓群は、行政上、四日市市山村町字池ノ谷に所在する。地形的には、朝明川下流の北岸、朝日丘陵南縁の標高約75mの丘陵頂部およびその頂部から派生する尾根上に位置する。尾根は３つに分かれるが、便宜上西尾根・中央尾根・東尾根と呼称した。西尾根と中央尾根との間は、10数年前の土取りによって大きく削り取られている[1]。なお、東尾根には幅約20m前後の平坦面が存在する。また、現況は竹林や雑木林である。

尾根を形成している基盤は、地質上、東海層群に属する暮明累層で、丘陵頂部と尾根ではその上面に赤褐色粘質土（礫を含む）の中位段丘堆積物が存在する。暮明累層の層序は、シルト・礫・砂・シルトの互層であるが、朝日丘陵東端に位置する桑名断層と桑名背斜の間に位置するため、これらの層は南東方向に緩やかに傾斜する[2]。遺構は、尾根上では中位段丘堆積物で検出したが、標高約70m以下では、暮明層群の互層のため一様でなく困難を極めた。

（２）　発掘調査に至るまでの経緯

明治30年に山村町字池ノ谷地内で、金環２個が表採されていることが、鈴木敏雄氏の調査[3]によって判っていた。その記述は以下の通りである。

［大字山村ノ北方高地、字池ノ谷ニテ里人明治三



第２図　遺跡周辺地形図及び調査区位置図（１：10,000）

十年ノ頃、金環二個ヲ拾得セリ。蓋シ古墳ノ自然崩壊ニヨリテ露出セシモノト推セラル。村誌ニ云フ。「金塚　字東平古ニ在テ塚ノ中央ニ数百年ヲ経過セシ松ノ大木アリ。村民ノ口説ニ大古貴人ヲ埋葬セシモトモ云ヒ、又ハ布自神社ノ神霊ノ休憩所トモ云フ。然レトモ其意詳ナラズ。若シ此塚ニ妨害ヲナス者アレバ布自神社ヨリ白羽ノ矢飛来リテ謀セラルトイヒテ村民一同恐怖ス。

文化年中、塚ノ北端ヲ開墾セシ者アリ。其時土中ヨリ古代刀剣掘リ出セシコトアリ。其后、明治三十年村童稲垣善六、其北方高地ノ峻山南面ニ於テ金環二個拾ヒシ事アレド屑物買ニウリテ現存セズ。」コレニヨリテ見レバ少ナクトモ二墳ヲ在セシニ似タリ。]

この記述によると、金塚という塚（古墳？）は、字東平古地内に存在し、この塚から刀剣が出土したらしい。またその存在は、布自神社の裏手当たりと想定されるが、詳細は不明である。さらにその金塚が存在した北方で、金環が出土したことで、古墳の想定がなされ、四日市市の遺跡地図[1]には金塚古墳（市番号65・形式や規模は不明）として当丘陵上に比定されていた。

こうした中、さらに詳細な分布調査を実施した結果、丘陵の頂部に２基、中央尾根上に５基程度の古墳状の高まりが存在することが確認された。そのため、平成９年度は、遺跡名を金塚古墳群として、その範囲確認調査を実施した。

具体的には幅１ｍのトレンチをＡ～Ｅまで５本設定して、人力掘削で行った。Ａトレンチは、２基の古墳状の高まりが想定された丘陵頂部で、東西方向に約45m、また、Ｂ・Ｃトレンチはこのトレンチに直交する形で、それぞれ２基の中央部分に15mと８ｍを南北方向に設定した。Ｄトレンチは、中央尾根上に南北方向で約60m設定した。また、このＤトレンチのほぼ中央に、直交する東西方向にＥトレンチを15m設定した。調査の結果、丘陵頂部と中央尾根部分で合計1,460㎡の本調査と、東尾根の平坦部分と、中央尾根裾部分に幾つか存在する古墳状の高まりとで、合計3,250㎡の範囲確認調査の必要があると判断された。

翌年の平成10年度の調査は、年度当初からの予定である、丘陵の頂部（1,060㎡）と、中央尾根（400㎡）について本調査を実施するとともに、範囲確認調査として、西尾根にＦ、中央尾根西側の古墳状の高まりにＧ～Ｋ・Ｏ、東尾根周辺にＬ～Ｎの合計10本のトレンチを設定した。Ｇ～Ｋ・Ｏトレンチ古墳状の高まりは、いずれも自然地形と判断され、また谷地形に設定したＬトレンチについては遺構・遺物は確認できなかったため、本調査範囲から除外したが、結果的に丘陵頂部および派生する尾根全体の3,976㎡を本調査対象とした（第７図）。

遺跡名については、平成10年度の本調査で、弥生時代後期の高地性集落と古墳時代後期の横穴墓などが確認されたことにより、遺跡名を金塚遺跡・金塚横穴墓群と改称することとした。

調査日誌（抄）

［平成９年度範囲確認調査］

平成９年

12月17日	トレンチ設定・人力掘削作業開始
12月19日	Ａトレンチより土師器片出土
12月22日	２号墳墳頂付近で主体部らしき炭化物検出
12月25日	１号墳と２号墳の間の部分掘り下げ
12月26日	２つの墳丘ともに盛土を行っていることが判明

平成10年

１月７日	Ａトレンチ東側（２号墳裾部分）の状況確認
１月９日	Ｅトレンチ西側でＶ字状の溝確認
１月13日	Ａ・Ｂ・Ｃトレンチ埋め戻し開始
１月16日	Ｄ・Ｅトレンチ埋め戻し終了

調査風景

［平成10年度本調査］

平成10年

6月15日　基準点設置

6月16日　基準点設定・調査前測量

6月29日　調査前写真撮影

7月2日　安全大会

7月3日　作業員開始（安全対策中心作業）

7月8日　ベルコン搬入・1号墳周辺に設置

7月9日　中央尾根下部トレンチ（古墳状の高まり部分）調査開始

7月10日　2号墳表土除去開始・昨年度試掘溝再掘

7月23日　東尾根（弥生時代遺跡想定平坦部分）トレンチ調査開始

7月30日　2号墳主体部らしき痕跡平面検出

8月4日　2号墳主体部周辺の精査（墓坑？・主体部？の輪郭確定に苦慮）

8月6日　2号墳主体部写真撮影・ベルト設定後掘削開始

8月12日　中央尾根下部トレンチ（古墳状の高まり部分）調査終了・すべて古墳ではない事が判明

8月13日～16日　盆休み

8月17日　安全大会

8月18日　主体部と考えていた部分は、盛土の一部と判断・中央尾根のＳＸ１で、須恵器杯身・杯蓋４セット出土

8月21日　八郷地区市民センター主催「埋蔵文化財発掘調査現場　親子体験ツアー」で、小学生以上の子供とその保護者30名現場見学

親子体験ツアー見学

8月26日　中央尾根ＳＤ２遺構検出

8月27日　1号墳墳丘の検出終了

8月31日　1号墳主体部（ＳＫ５）検出

9月9日　2号墳主体部検出・検出中に土玉出土

9月14日　2号墳主体部サブトレンチ壁精査中磨製石鏃出土

9月17日　西尾根4号墳作業開始

9月24日　台風被害状況現場確認

9月25日　台風の災害復旧（階段・倒木除去・ベルコン再設置・安全柵復旧など）

9月29日　2号墳主体部写真撮影

9月30日　1号墳主体部（ＳＫ５）の南側に人頭大のレキ確認

10月6日　ＳＤ４完掘・写真撮影

10月9日　ＳＨ７（2つの竪穴住居の可能性を考え、ベルトを設定して）掘削開始

10月13日　東尾根表土重機による掘削

10月20日　西尾根4号墳と称してきた遺構が、横穴墓の可能性がでる。

10月21日　雨のため10時で作業中止・安全大会実施

10月22日　ＳＨ７から土玉出土・4号墳は横穴墓に（ＳＸ12）。他に2基の横穴墓検出（ＳＸ13・14）

10月26日　山岸良二先生現地指導

10月28日　ＳＸ12から耳環出土

10月29日　横穴墓もう1基確認（ＳＸ15）

11月4日　ＳＸ13から耳環2個・顎の骨出土

11月5日　Ｍトレンチ周辺から遺構検出開始

11月6日　ＳＸ15から須恵器平瓶出土

11月11日　ＳＨ７の周溝内から壺口縁出土

11月12日　ＳＸ13からガラス玉出土

11月13日　東尾根ＳＨ19から銅鐸片出土・ＳＸ13から銀製山梔子空玉・釘出土

11月18日　ＳＸ15から耳環出土

11月20日　ＳＤ23検出中銅鏃？出土

11月24日　ＳＤ21検出状況写真撮影

11月26日　ＳＸ13床面精査（歯・釘・ガラス玉出土）

11月27日　ＳＨ19北東隅床面で小型甕など遺物まとまって出土・壁柱穴の検出

12月１日　京都国立博物館考古学室長難波洋三氏現地視察

12月２日　ＳＤ21から須恵器片出土

12月３日　ＳＫ25遺構検出

12月９日　ＳＫ25半裁土層断面観察

12月10日　中央尾根中心に全景写真撮影

12月14日　兵庫県芦屋市教育委員会　森岡秀人氏現地指導

12月22日　Ｐ－35地区でこぶし大の集石検出

12月26日～１月４日　作業中止

平成11年

１月５日　作業再開

１月17日　現地説明会を開催。県内はもとより県外からも参加。約350名。

１月18日　高所作業者による全景写真撮影

１月20日　西尾根部分の調査区拡張のため重機による伐採

１月21日　西尾根部分の拡張調査区遺構検出

１月22日　四日市市立八郷小学校４年生109名見学

１月26日　西尾根部分の拡張調査区遺構なし

１月27日　名古屋女子大学教授　丸山竜平氏現地指導

１月28日　２号墳周辺掘削法面の範囲確認設定終了・断ち割り開始

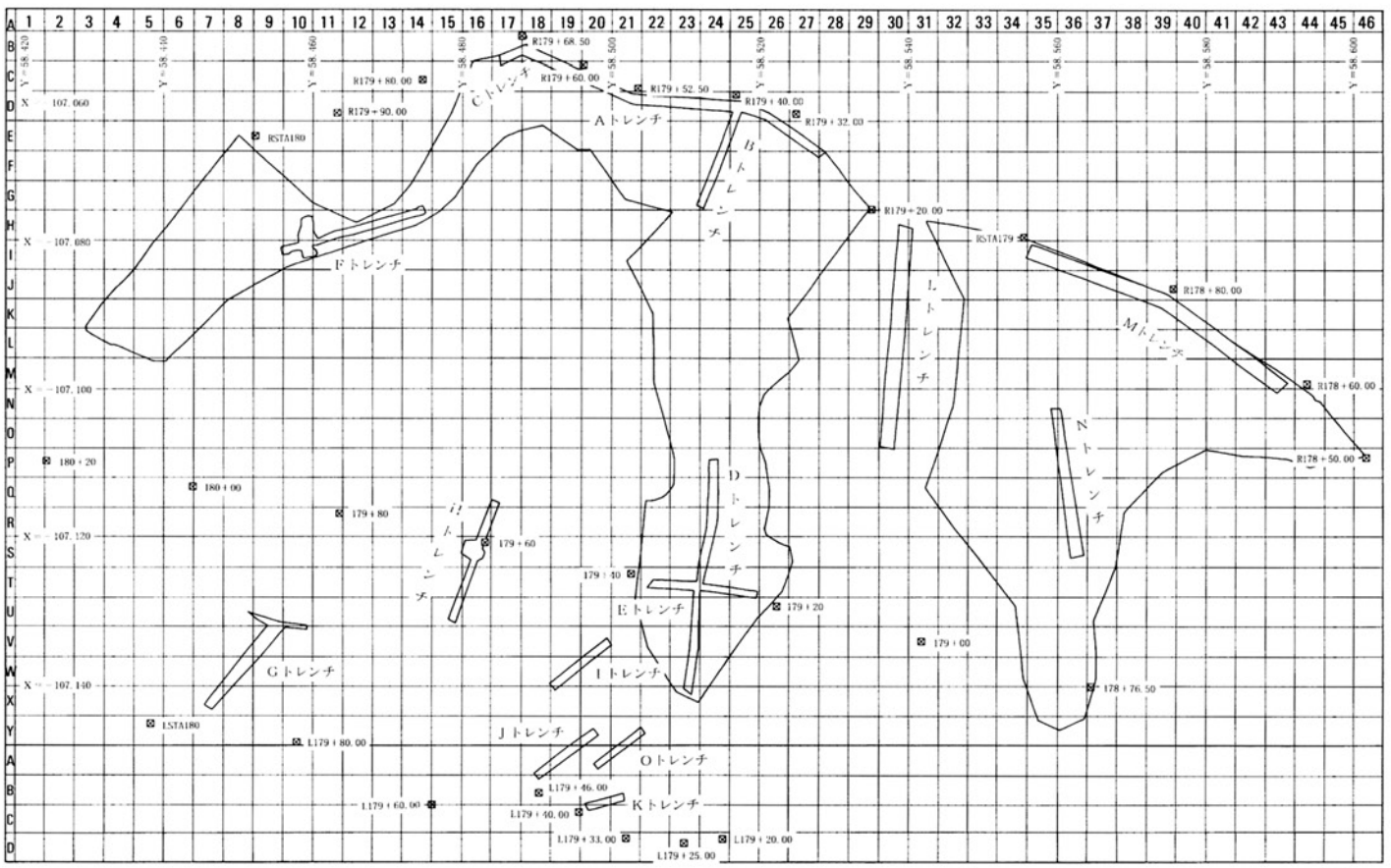
１月29日　Ａトレンチ内弥生土器包含層掘削・その下層検出ＳＨ33掘削

２月２日　ＳＨ19ようやく完掘

２月５日　測量以外の現地作業終了

２月24日　現地引渡し調査終了

現地説明会



第３図　調査区地区割り図（１：1,000）

（3） 調査の方法

a　地区杭の設定（第３図）　第二名神高速道路の発掘調査では、それぞれの遺跡毎に独自に地区杭設定を行っている。金塚遺跡・金塚横穴墓の発掘調査にあたっては、調査区全体に国土座標による縦・横各４ｍ単位のメッシュをかけ、南北方向にアルファベット、東西方向に算用数字を用いて、個別のグリッドを表す「地区設定方法」を採用した。

具体的には、調査区の最北に当たると判断した所（１号墳の存在する部分）を、第Ⅵ系座標の原点から南へ107km52mに当たるが、Ｂラインとして南へＹまでの100ｍを設定した。この方法ですべての調査区（範囲確認調査トレンチ）をカバーできると調査前には判断していたが、結果的にはＪ・Ｋ・Ｏトレンチについては、範囲外になってしまった。今後の調査区設定での反省としたい。

また、東西方向の算用数字の付与については、西尾根を十分カバーできるところ、第Ⅵ系座標の原点から東へ58km40mを、１ラインとして設定した。南北方向での判断ミスから100ｍ毎の大地区設定をしていないため、東へ最大46ラインまで使用した。この方法で、出土遺物の取り上げや遺構略測などを行った。

b　遺構の名称　ピットのみ４ｍの小地区毎の通し番号を付けたが、他の遺構については、調査区全体の中で通し番号を与えた。この金塚遺跡については、２班体制で望み、大まかに中央尾根の高所から東尾根にかけての班と、中央尾根の下部から西尾根にかけての班である。この遺構番号は、２班の調査での検出順であり、まとまりには欠けるが、新たに付け直すことをしていない。遺物ラベル・写真・図版などの再整理の煩雑さと、それに伴う間違いを防ぐためでもある。

c　図面作業　平成９年度の図化作業は設定した５つのトレンチの土層断面図が中心となった。方法としては、機械による図化ではなく、水糸・巻尺などを使用してのいわゆる「手書き実測」で行った。

平成10年度の現地での実測図は、土層断面図や遺物出土状況図などを必要に応じてS=１／10やS＝１／20または、S＝１／50などの縮尺で作成した。作図の方法としては、遺構カード（S＝１／40）の作成や遺物出土状況図に関しては手書きによる作図を用いたが、トレンチなどの土層断面図や各遺構の平面図に関しては、トランシットによる現地での機械測量とＣＡＤによる図化作業を行った。

この機械測量については、特に土層断面図において現地でより細かい測点作業を行うと共に、略図の作成とその比較、または場合によってデジタルカメラを用いた。なお、測点を結線するに当たっては、滑らかな手書き実測図により近づける工夫をパソコンソフトで駆使した。この機械測量の導入に当たっては、手書き実測図との仕上がりの比較、時間的・人的な検討などを協議の上、採用した。

d　写真撮影　平成９年度は範囲確認調査ということもあり、35ｍｍカメラでモノクロネガとカラーリバーサルの２種類の撮影を行った。原則、タイトルの写し込みをした後、モノクロ・カラーともに同一カットの撮影に努めた。

平成10年度は、一部範囲確認調査もあったが、面的な本調査が中心ということもあり、各種遺構検出状況・遺物出土状況・完掘状況・調査区全景などは、４×５版カメラでの撮影を原則とし、モノクロネガとカラーリバーサルの２種類を正副２カットづつ行った。その他、35ｍｍカメラではモノクロネガとカラーリバーサルの２種類を４×５版カメラと同一カットの他、作業風景･遺構掘削途中状況などの撮影に努めた。この撮影については、データー駒１つに対して２つの撮影駒で１カットとするよう心掛けた。

e　調査範囲と保存範囲　１号墳・２号墳は、丘陵の頂部に位置する。工事計画でこの周辺部分は、南北方向に斜めに、法面を数段造り、掘削を行う予定であった。平成９年度・平成10年度と、この法面に直交する形（東西方法）でＡトレンチの掘削を行い、盛土の確認調査を行った。その規模などは前述のとおりであるが、その結果、特に２号墳に関しては、約２.５ｍの盛土を行い緩やかな傾斜を持って円形状に構築されていることが判明した。そこで、Ａトレンチに関しては、工事によっても掘削範囲が垂直に及ばないため、調査の一貫として埋め戻しを行った。 また、工事計画での角度と長さなどで、法面の上から２段目に当たる範囲で２号墳の墳丘部分については、掘削が伴うため東西方向に断ち

割り調査を行った。結果的には、第４図に示した範囲（１号墳から２号墳の南裾部分）で、工事のよる法面角度の及ばない下層部分340㎡は、遺構が保存されることとなった。

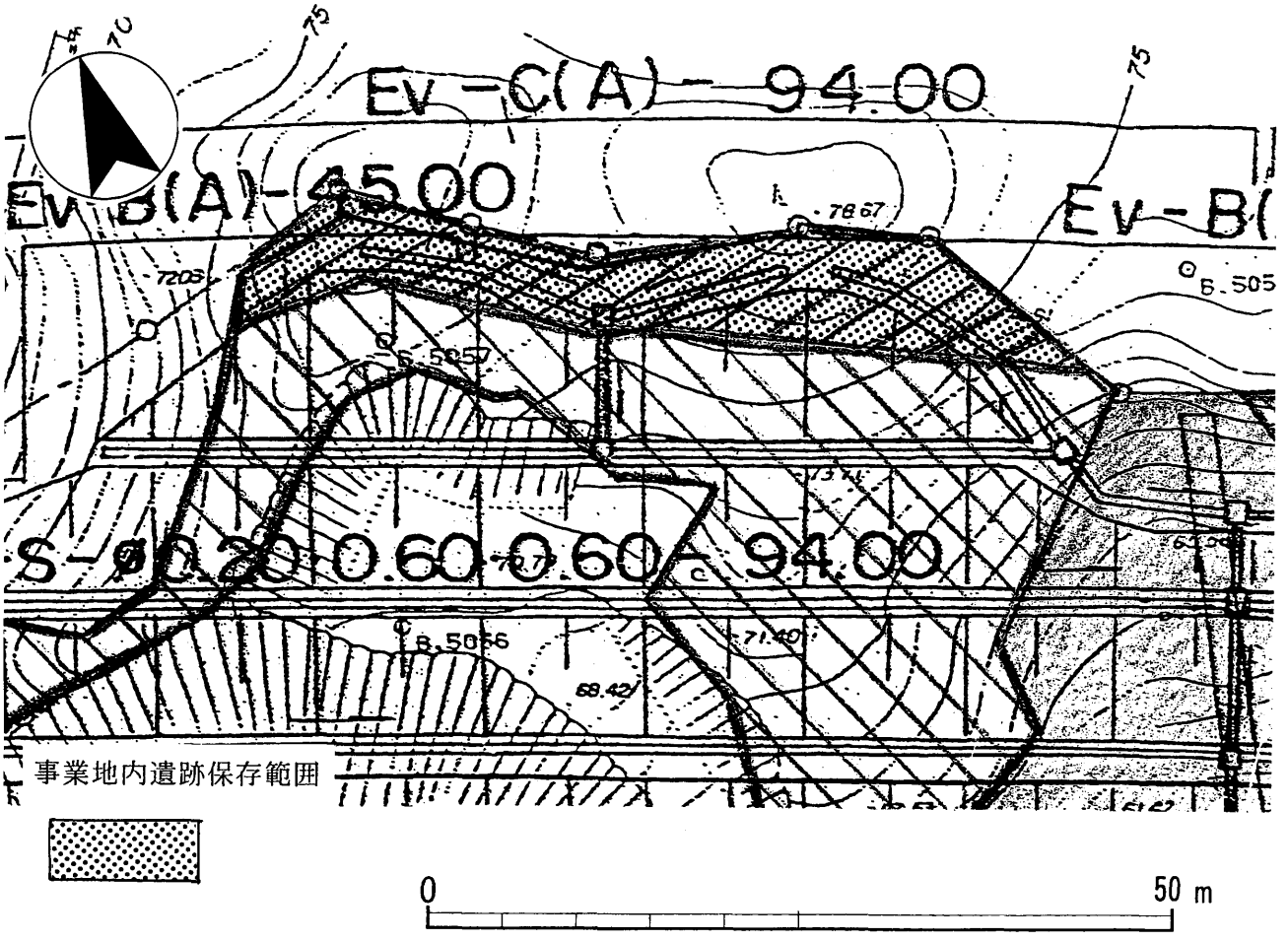
［註］

① 調査中の地元聞き取りでは、この土取りの際に多量の遺物が出土したとのことである。その一部は、山村町在住の松下宏氏によって所蔵されている。また、今回横穴墓が検出された西尾根で表採された遺物も同町在住の稲垣義一氏・稲垣寿一氏の両氏によって所蔵されている。その遺物の詳細・考察は、倉田文美「金塚古墳群の出土遺物について」（『研究紀要』第８号―創立10周年記念論文集―1999.３三重県埋蔵文化財センター）に詳しい。中央尾根と西尾根との間からも須恵器が出土したことから、土取り部分にも横穴墓が存在していた可能性は十分に考えられる。

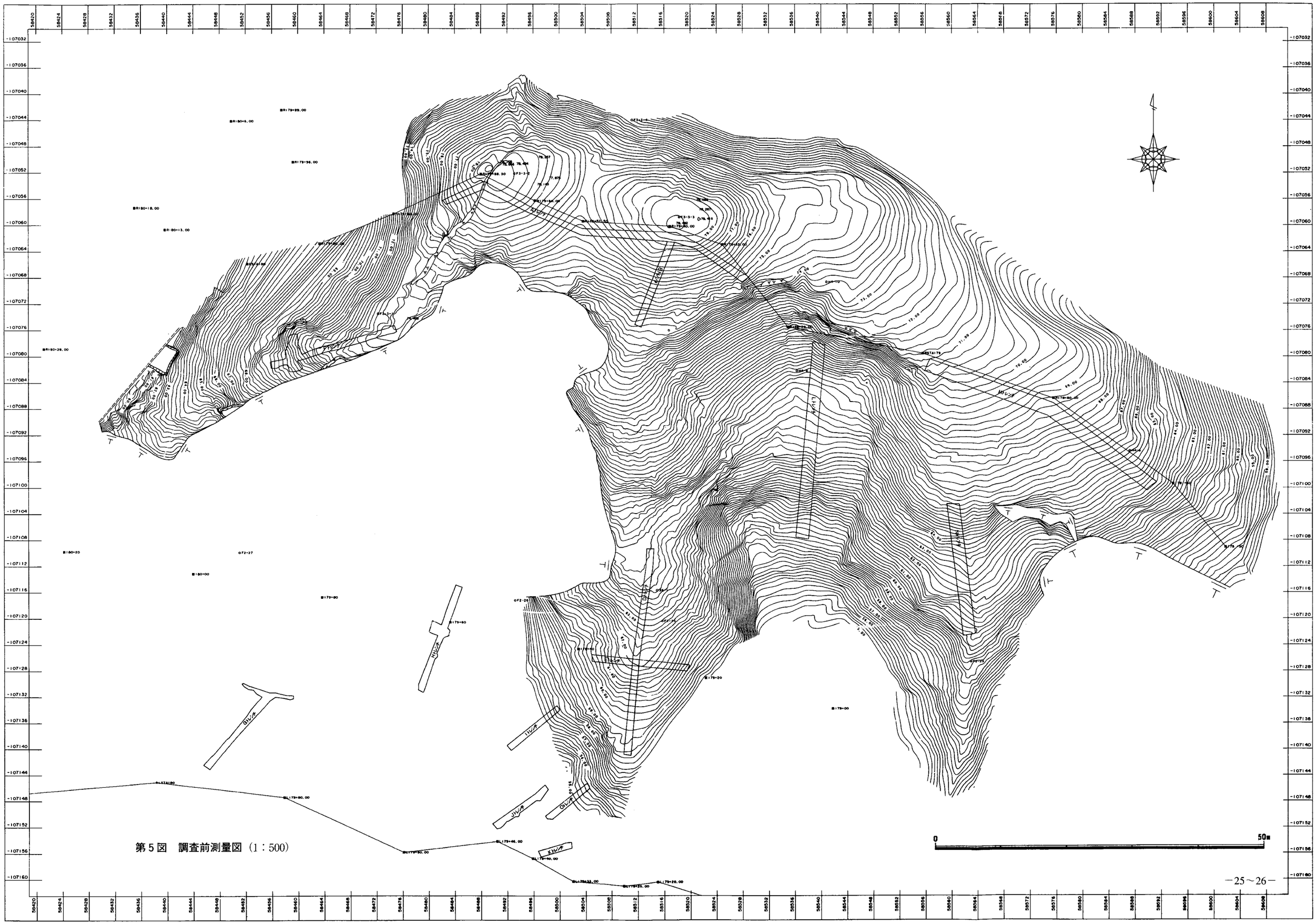
② 吉田史郎・栗本史雄・宮村学『地域地質研究報告５万分の１地質図幅京都（11）第31号　桑名地域の地質』通商産業省工業技術院　地質研究所1991

③ 鈴木敏雄（『三重県三重郡八郷村考古誌考』1938）

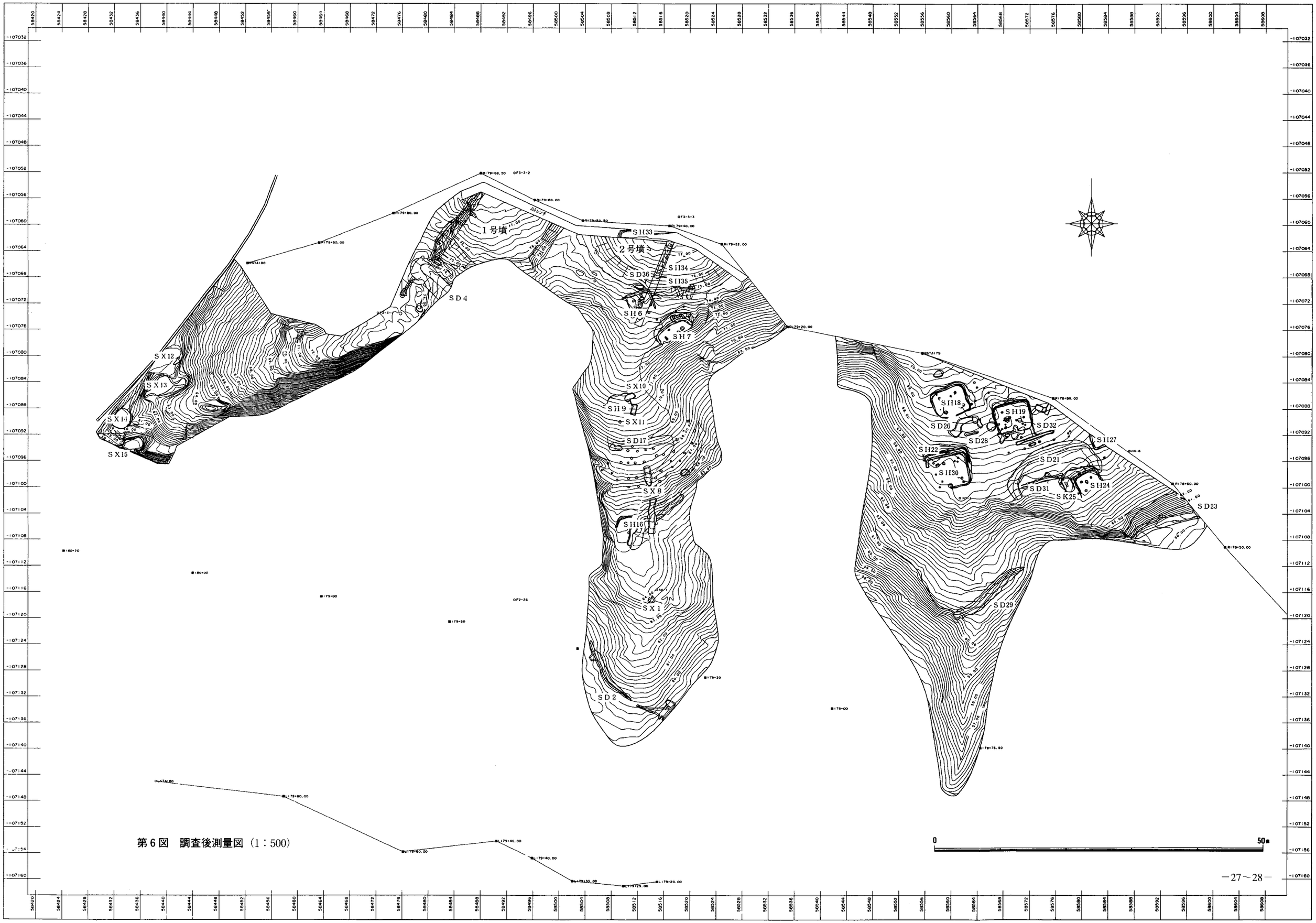
④ 四日市市埋蔵文化財調査報告18　三重県四日市市遺跡地図―改訂版―（四日市市教育委員会　1994）



第４図　調査範囲及び保存範囲（１：500）



第５図　調査前測量図（1：500）



第6図　調査後測量図（1：500）

2．調査の成果

（1） 弥生時代後期（第８図）

遺構は、中央尾根と東尾根の標高約60mの等高線に沿って、環壕と考えられる溝を３ヶ所と、それに囲まれた丘陵上の標高約70mに竪穴住居13棟、40数個の柱穴群・土坑・溝、さらに丘陵頂部で墳丘墓２基を検出した。当遺跡の南東に広がる沖積地からの比高は約60mで、丘陵の斜面はかなり急である。また、丘陵上からは、朝明川対岸の丘陵はもちろん、伊勢湾を介して愛知県の知多半島も望むことができ、高地性集落の立地条件としては申し分ない。

主な出土遺物として、銅鐸片・銅鏃・鉄製品・磨製石鏃・土玉・凹石・軽石・弥生時代後期の土器の各器種がある。

a　環壕（ＳＤ２・23・29）

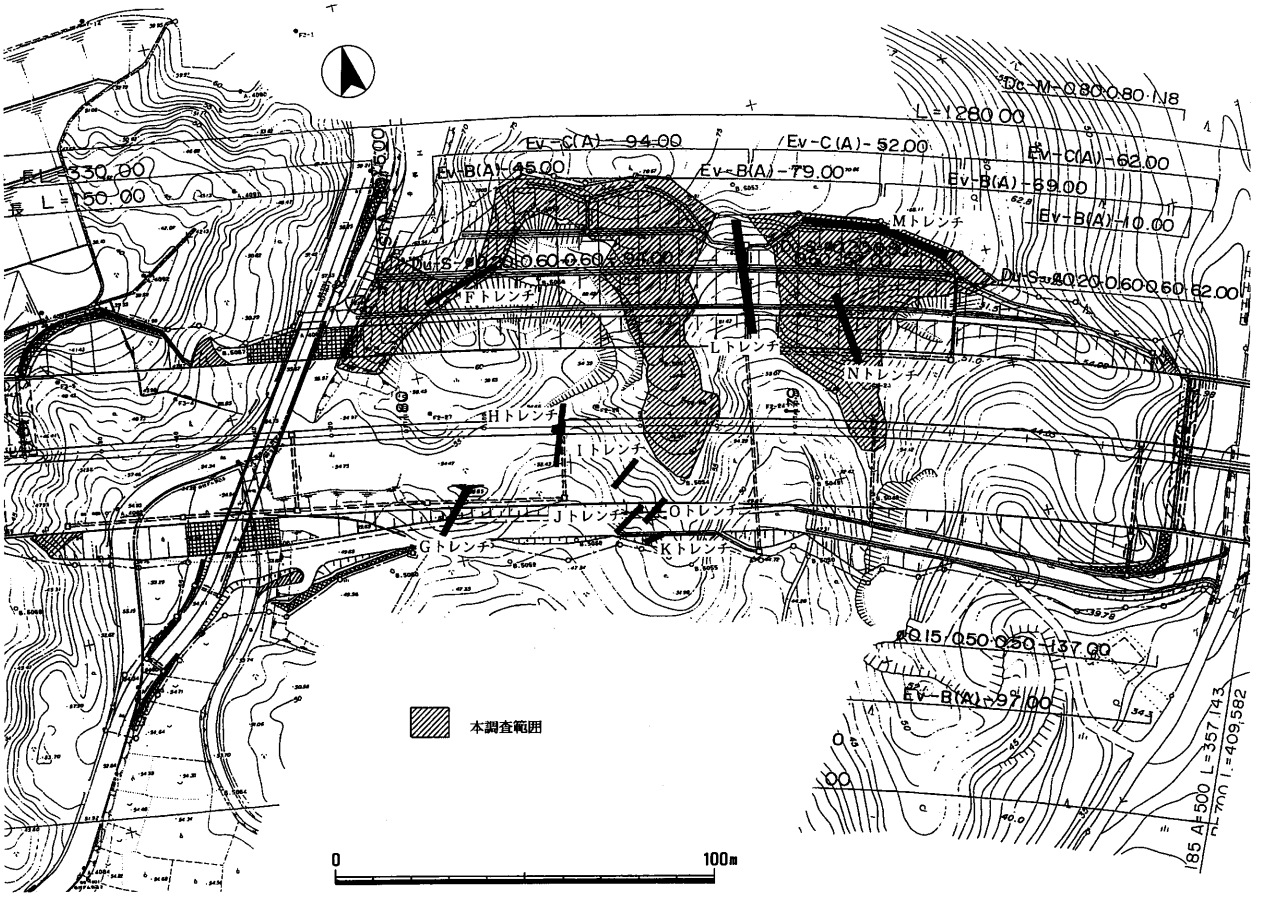
中央尾根の南と、東尾根の東斜面および南へ延びる尾根の中腹で溝を３ヶ所で検出した。これらは概ね標高約60mの等高線に沿うように掘削され、当時は繋がっていた可能性も考えられる。そのため、これら３ヶ所の溝を環壕として報告する。

ＳＤ２（第９・10図・写真６～８）　中央尾根の標高約60mの所で、尾根を切断し、等高線に沿って弧を描くように検出された。この溝の下方に比べると上方の方が若干傾斜は急である。

断面は逆台形状で、暮明累層の砂に掘削される。残存の最大幅は約1.2m、深さは約0.4mであるが、上面の流出が激しいためか、溝の底近くしか残存していない可能性がある。なお、この中央尾根の下方で設定した範囲確認トレンチでは、遺構・遺物共に検出されていない。

出土遺物（第11図・写真86）　主に溝の西側部分の明黄褐色土で集中して出土した。器種には壷・甕・高杯などある。

壷（１～７）　口縁端部を肥厚させ、外側に幅広の面をもつもの（１・２）と外反させて端部を丸くするもの（３）がある。底部が残っているもの（５～７）では、外側を若干突出させている。４は、口縁端部を短く肥厚させ、頸部に２対２個の穿孔がなされる。体部最大径はほぼ中央にある。短頸壷とする



第７図　調査区位置図（１：2,000）

が、鉢とした方がよいかもしれない。

高杯（８・９） 杯部の形状は不明であるが、脚部は緩やかに開くものと思われる。ともに縦方向のミガキを施す。９は、杯部の底中央に円盤状のもので充填させた痕跡が脚部内面の観察でわかる。

甕（10～12） 口縁部を外反させるもの（10）は、平底である。12は、口縁部に低い段を作り、その端部は上方へ細く跳ね上げるようにさせる。また、体部上半には粗い刺突文を施す。

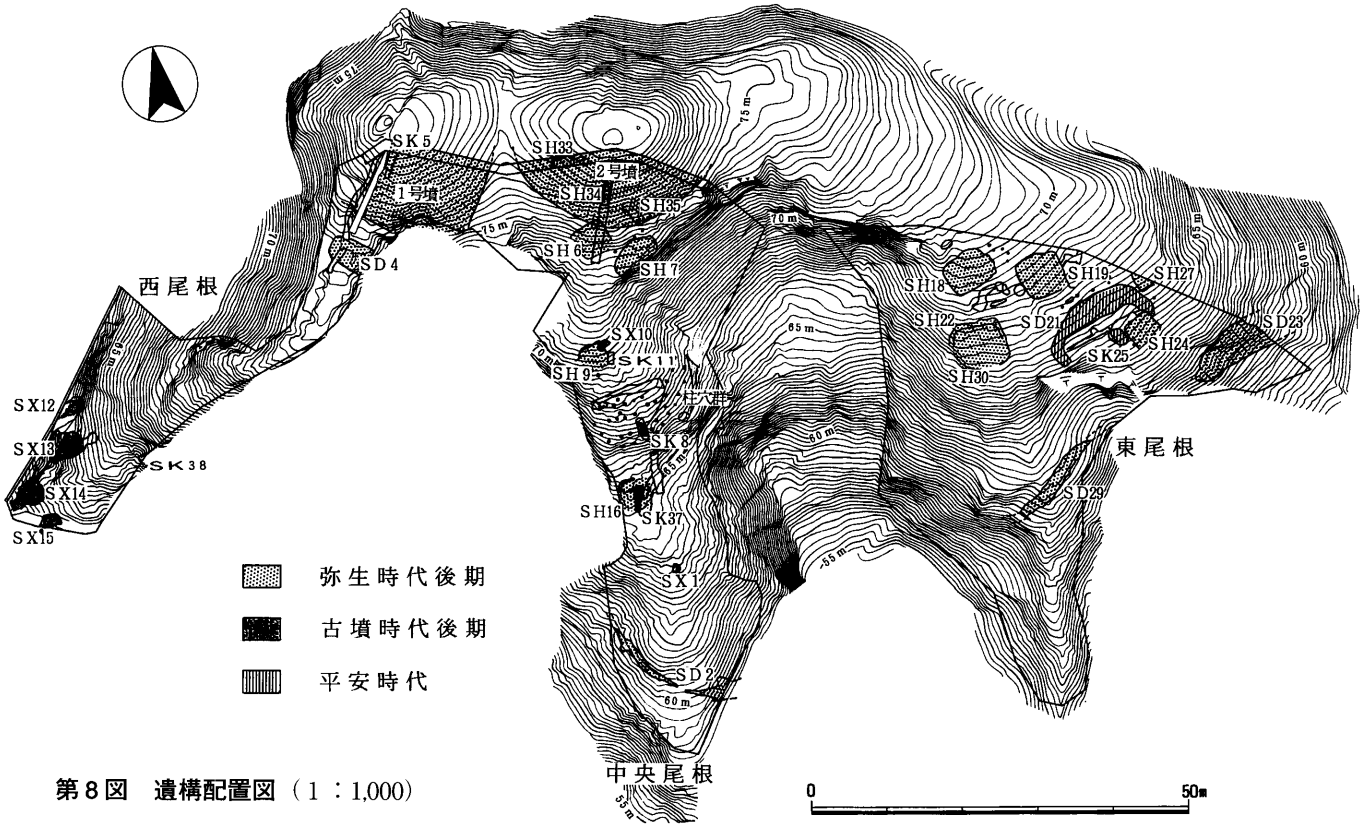
ＳＤ23（第12・13図・写真９～11） 東尾根には、標高約65ｍより高所にやや平坦の部分が広がるが、その東側斜面で検出した。標高約61ｍで、ほぼ東西方向に尾根を切断する形で掘削されている。溝は、調査区外へさらに延びるが、北側に回り込むかどうかは不明である。

上面からは斜めに、底近くではさらに垂直に約１ｍ掘削される。残存の最大幅は約4.5ｍ、深さは溝の上側（内側）の肩部から底まで約2.5ｍある。埋土の状況から、掘り直されたものと思われる。この溝も前述のＳＤ２と同様、下方に比べ上方は非常に傾斜が急である。東尾根はこの溝以東、やせ尾根の部分が見られる。この部分には範囲確認トレンチを設定しなかったため、溝などの遺構が存在するかどうかなどの詳細は不明である。

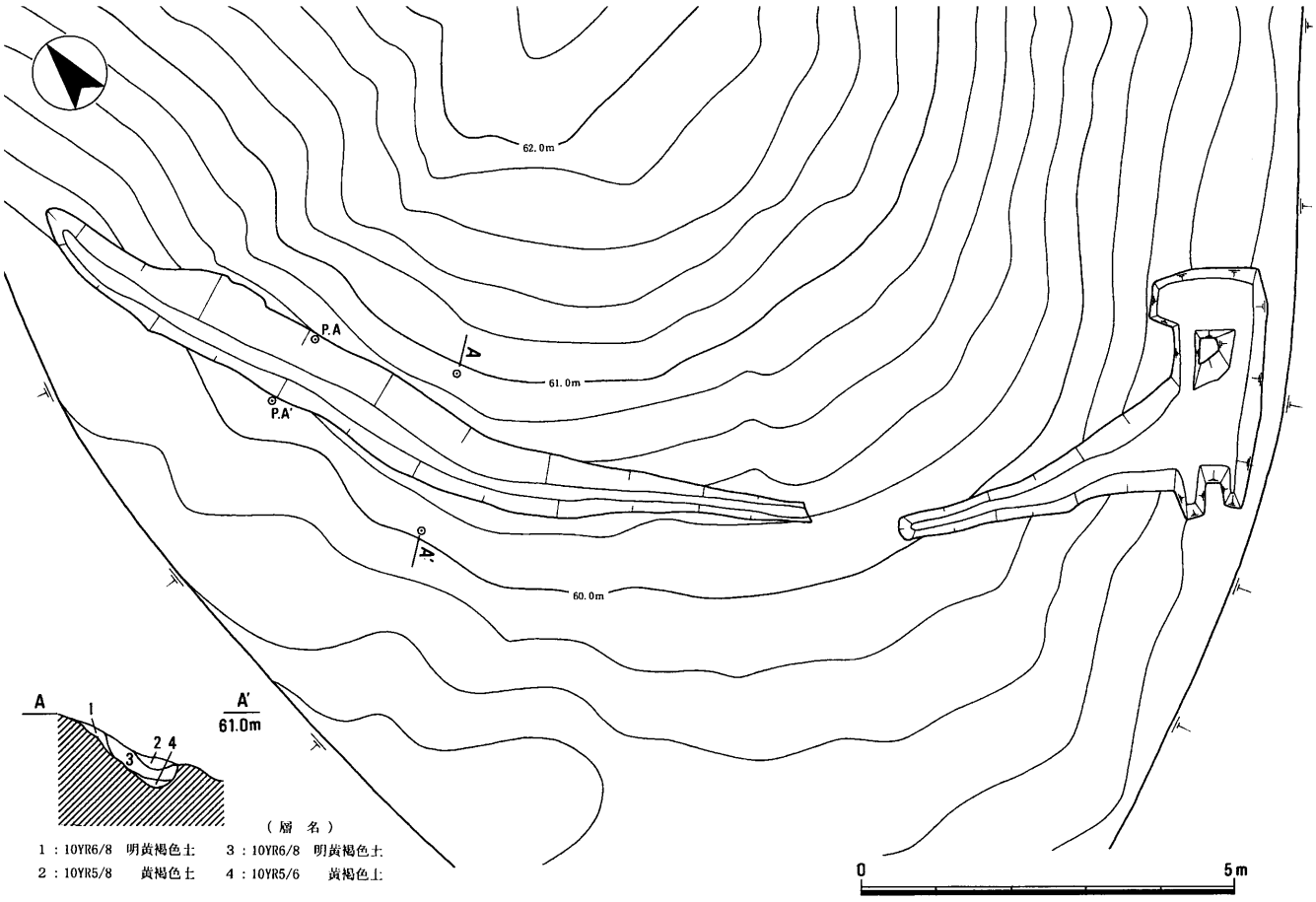
出土遺物（第13・14図・写真87～89） 遺物は、掘り直された底部分の黒褐色土・褐色土で多く出土した。器種には、壷・甕・台付甕・高杯・器台・凹石などがある。また、銅鏃と思われる破片が検出中に出土した。

壷（13～26） 口縁部を大きく外反させ、端部を肥厚させるもの（13・14）、短く外反させるもの（16・17）、口縁端部を短く直角に折り曲げるもの（17）などがある。なお17は、肩部に一段の凸帯を持ち、刺突文を施す。体部の残るもの（19～22）には、上部に平行直線文と波状文によって飾られる。26は、短い口縁部に下膨れの体部を持ち、台が取り付く。台部端部には粗い刺突文を施す。

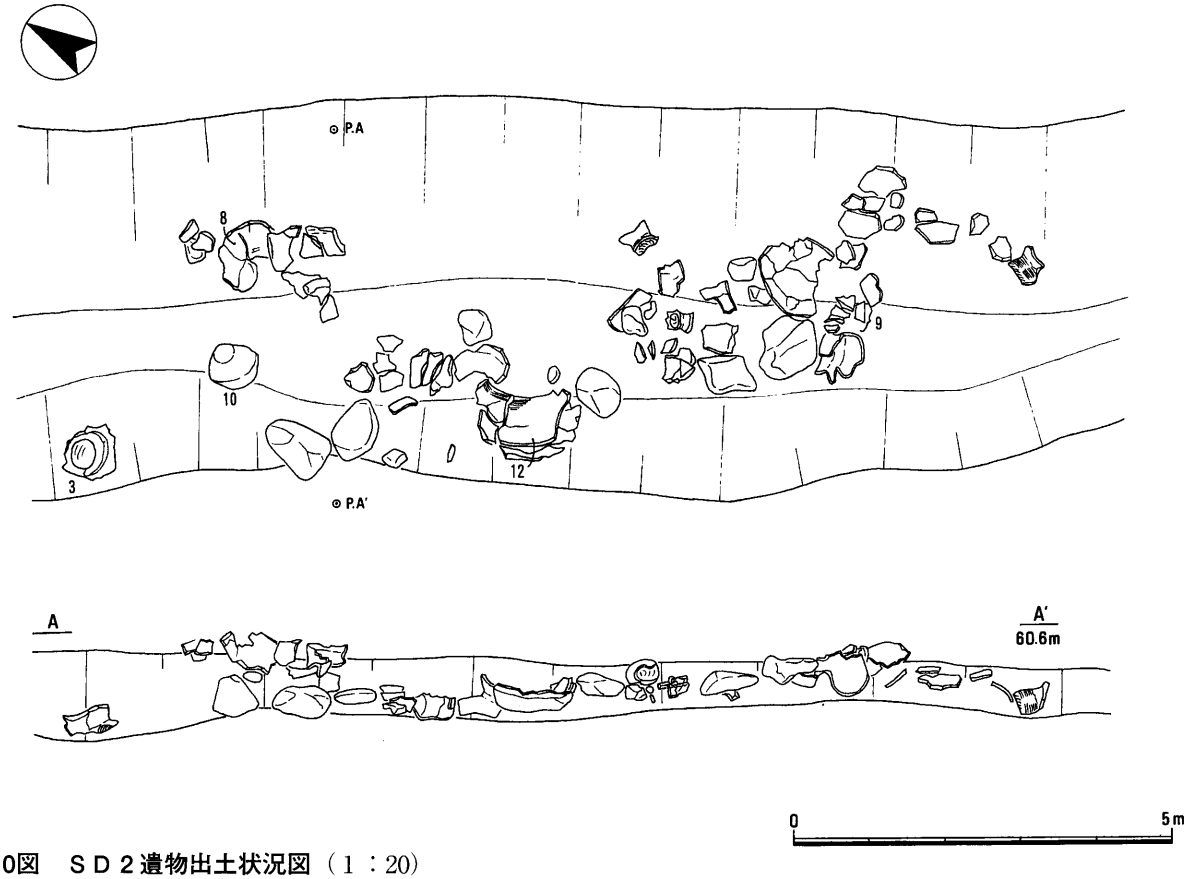
高杯（27～33） 27は杯部の形状がわかるが、上段は外湾し、端部は面をもつ。筒部は円柱状で緩やかに脚部が開くもの（27～30）、筒部が円柱状のもの（31）、脚部が大きくひらくもの（33）がある。31は、杯部、脚部が屈曲して取り付く形状になろう。



第８図　遺構配置図（１：1,000）



第９図　ＳＤ２平面図・土層断面図（１：100）



第10図　ＳＤ２遺物出土状況図（１：20）

器台（34）　口縁部が大きく開き、肥厚させた端部には円形浮文を付ける。また脚部には２段に４方向の穿孔を交互に配置する。

甕（35～41）　口縁部が短く「く」の字になるもの（35）のほかは、口縁端部を緩やかに上方へ折り曲げるもの（36～41）が多い。脚部のわかるものでは、「ハ」の字に開き端部を丸くさせる。38は、口縁端部に粗い刻み目を施し、体部上半に意図的と思われる穿孔がなされる。

凹石（42）　砂岩製の丸い形状のもので、片面中央に使用痕と思われる擦り減りが見られる。

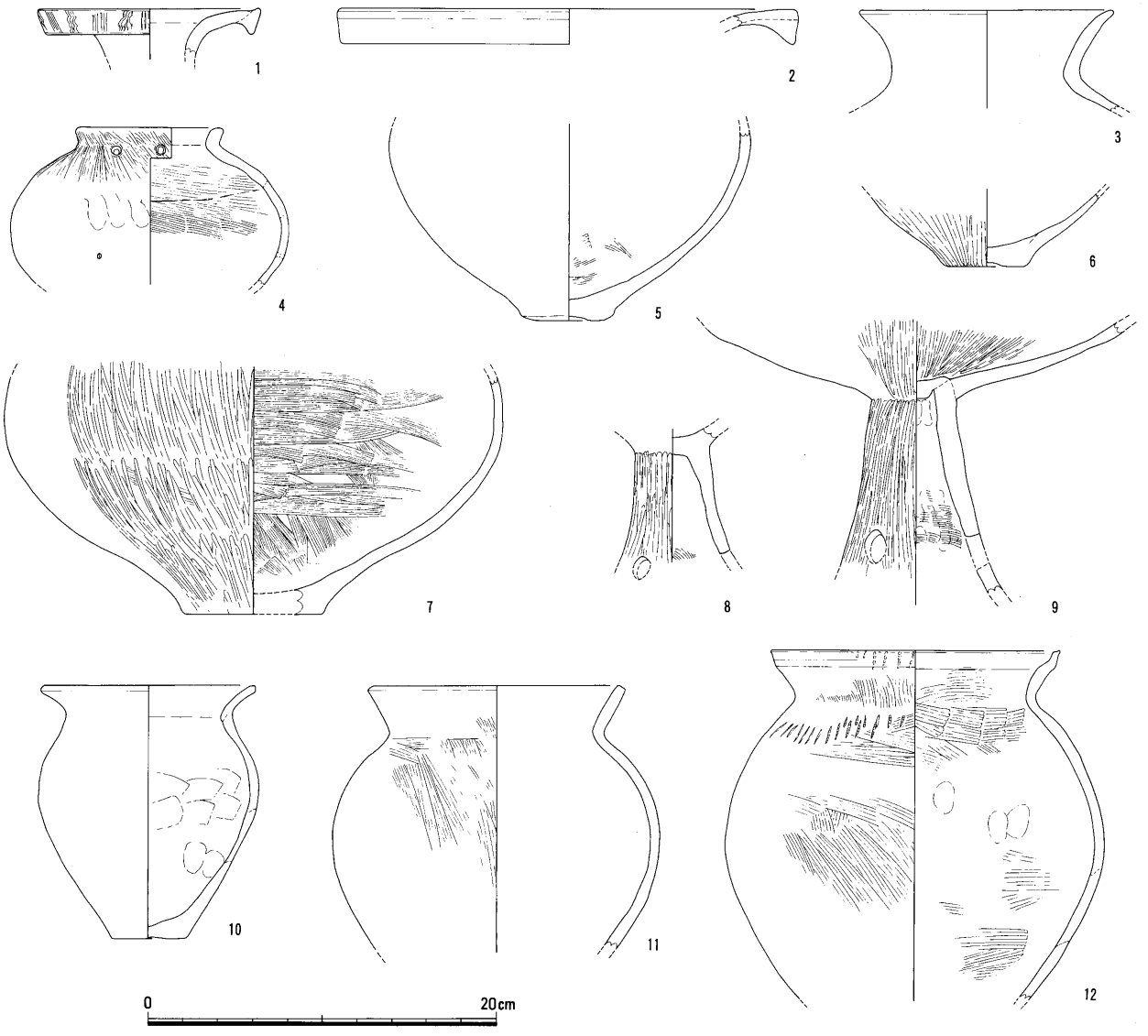
ＳＤ29（第16・17図・写真12・13）　東尾根から南に延びるやせ尾根の中腹で、尾根を切断するように掘削されている。この溝とＳＤ23との間には自然の崩落があるが、繋がっていたことは十分に考えられる。また、西側の谷地形の部分は砂地のため崩れて不明であるが、中央尾根のＳＤ２へ向かい、標高約60mの等高線に沿うように弧を描いて繋がっていた可能性が考えられる。

残存の最大幅は約１.８ｍ、深さは約１ｍである。なお、この南側にも尾根は延びるが、すぐ東側で土取りがなされており、確定はできないが断面観察では、溝などの遺構の存在は確認できない。

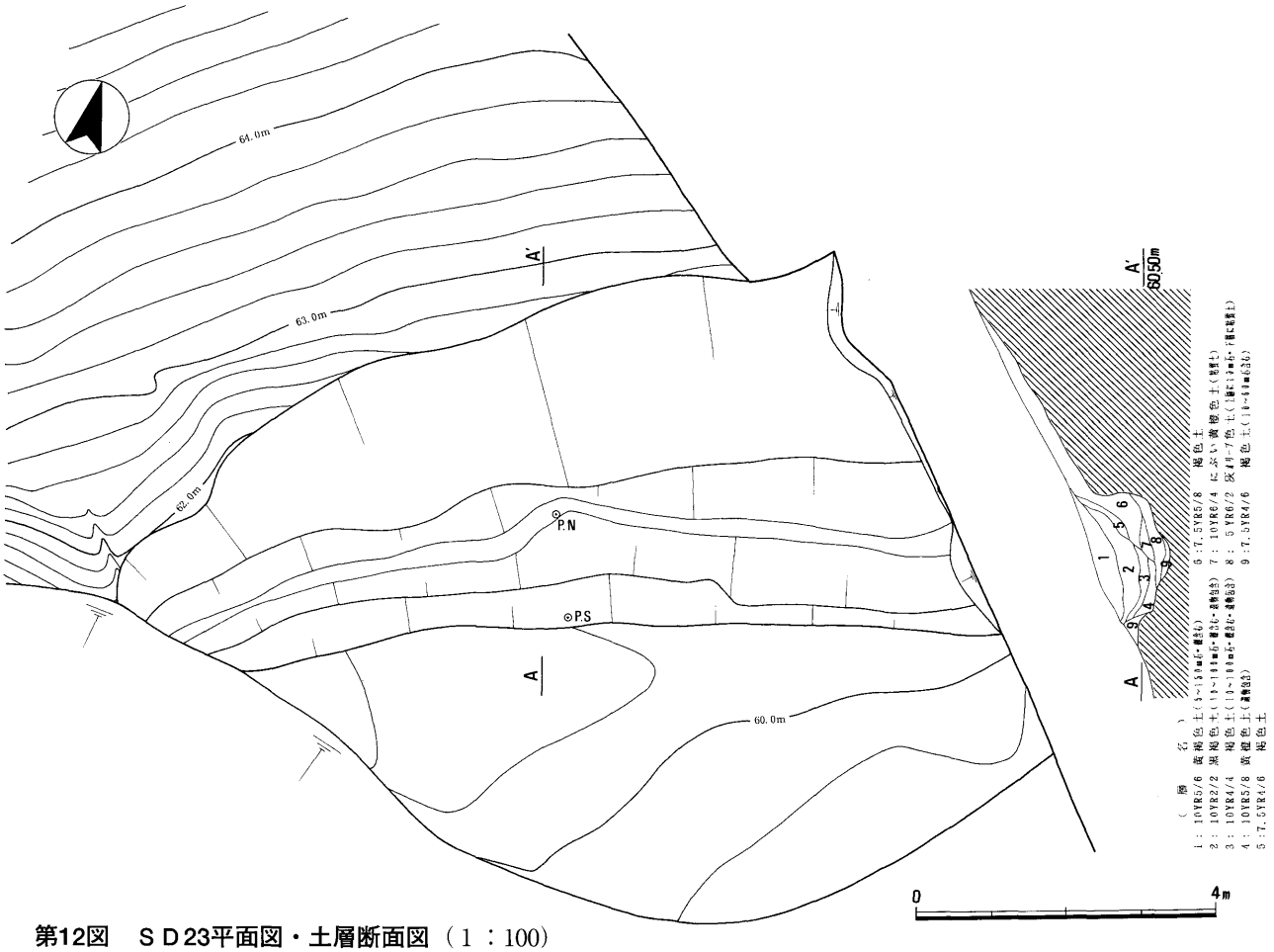
出土遺物（第18・21図・写真89～92）　壷・小型短頸壷・甕・台付甕・高杯・ミニチュア土器・凹石などがある。

また、図示し得なかったが、軽石も出土している。

壷（43～47）　43･44は口縁部が大きく外反し、端部に面を持つ。47は短めの口縁がやや直立気味に立ち、下膨れの体部に平底を呈する。

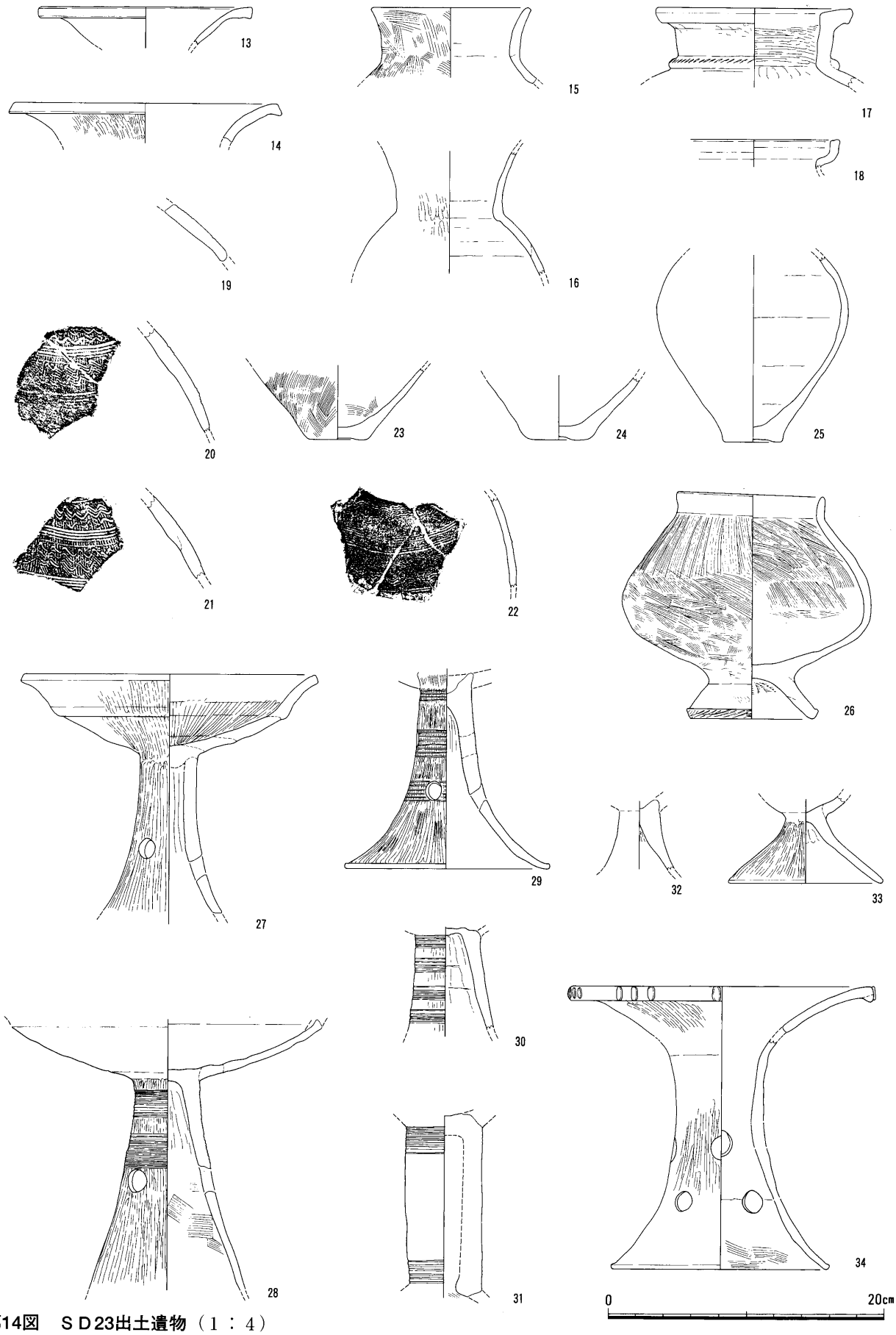


第11図　ＳＤ２出土遺物（１：４）

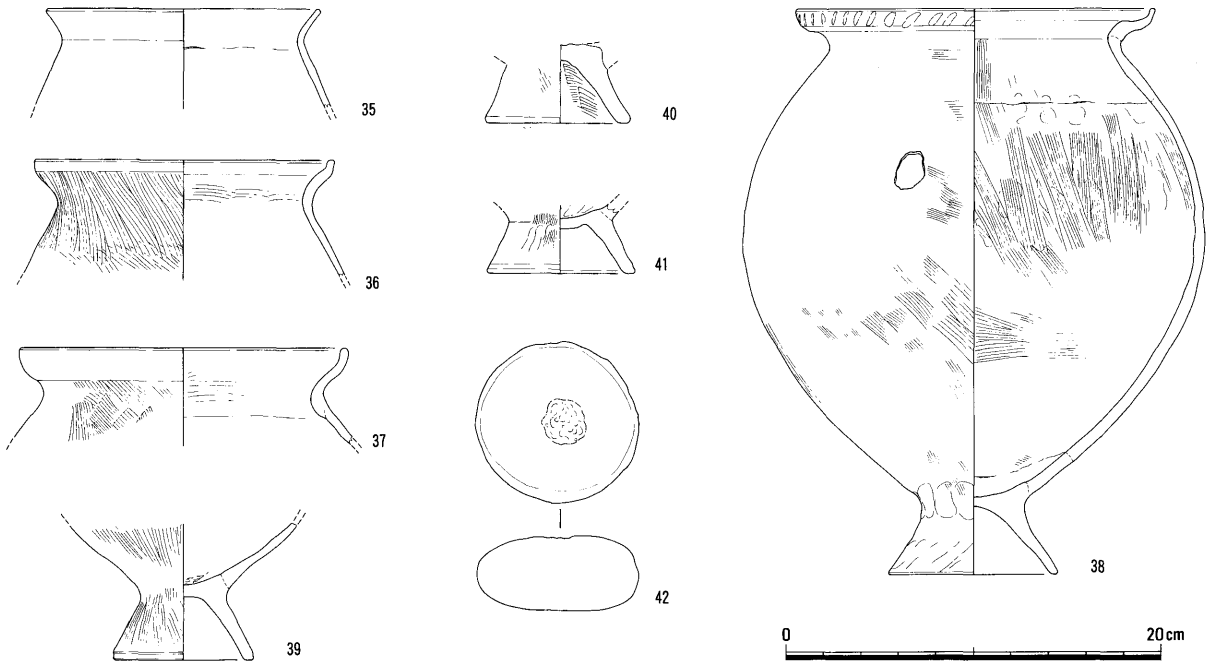


第12図　ＳＤ23平面図・土層断面図（１：100）

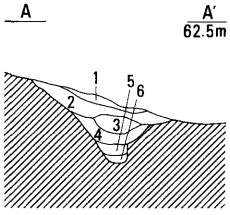
第13図　ＳＤ23遺物出土状況図（１：20）



第14図　ＳＤ23出土遺物（１：４）

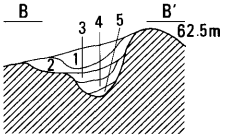


第15図　ＳＤ23出土遺物（１：４）



（層　名）

1：10 YR5/6　黄褐色土
2：10 YR5/6　黄褐色土　(B断面１層相当)
3：10 YR5/4　にぶい黄褐色土　(遺物含む)
(B断面２層相当)
4：10 YR6/6　明黄褐色土　(B断面３層相当)
5：7.5YR6/6　橙色土　(B断面４層相当)
6：7.5YR7/8　黄橙色土　(B断面５層相当)

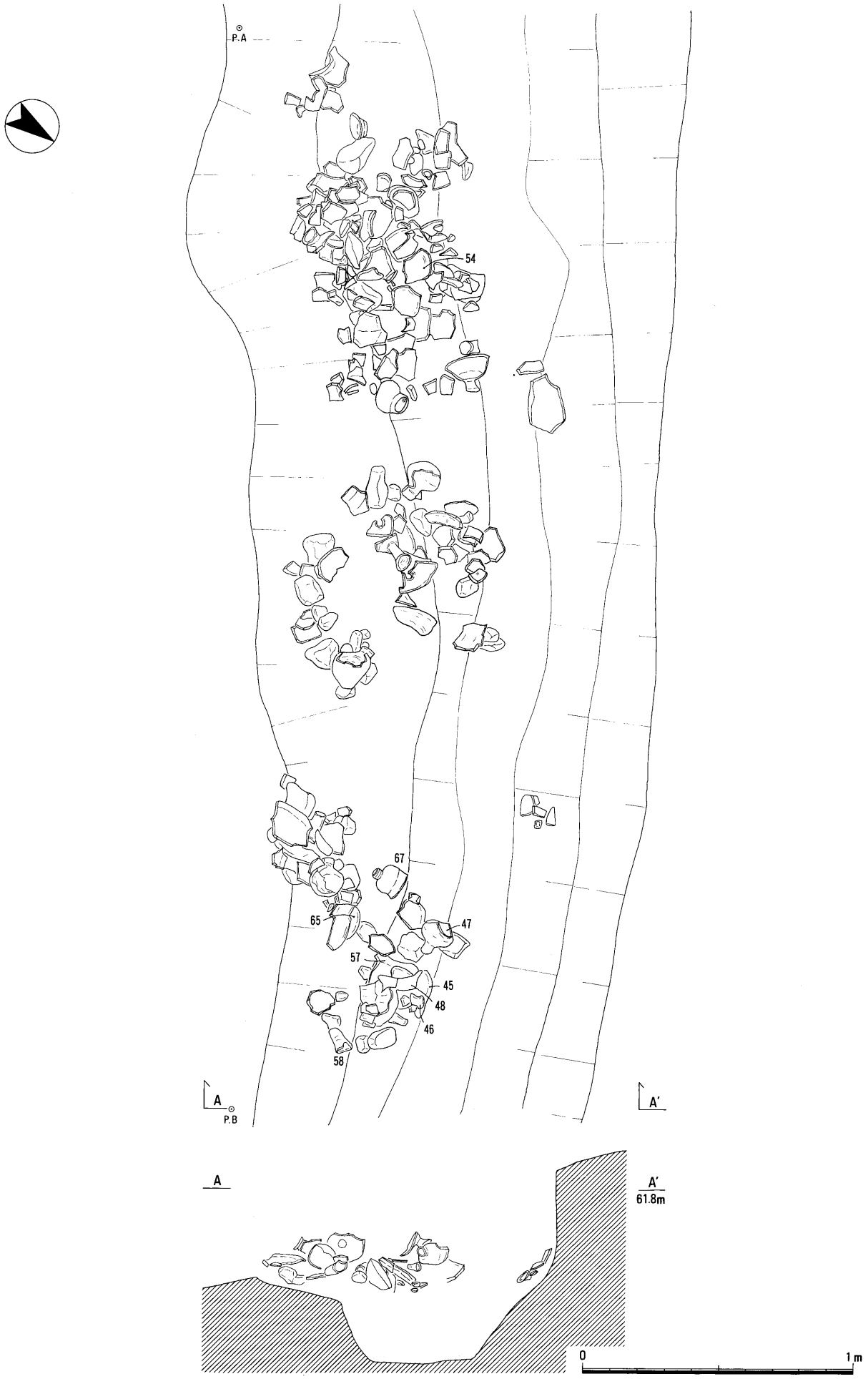


（層　名）

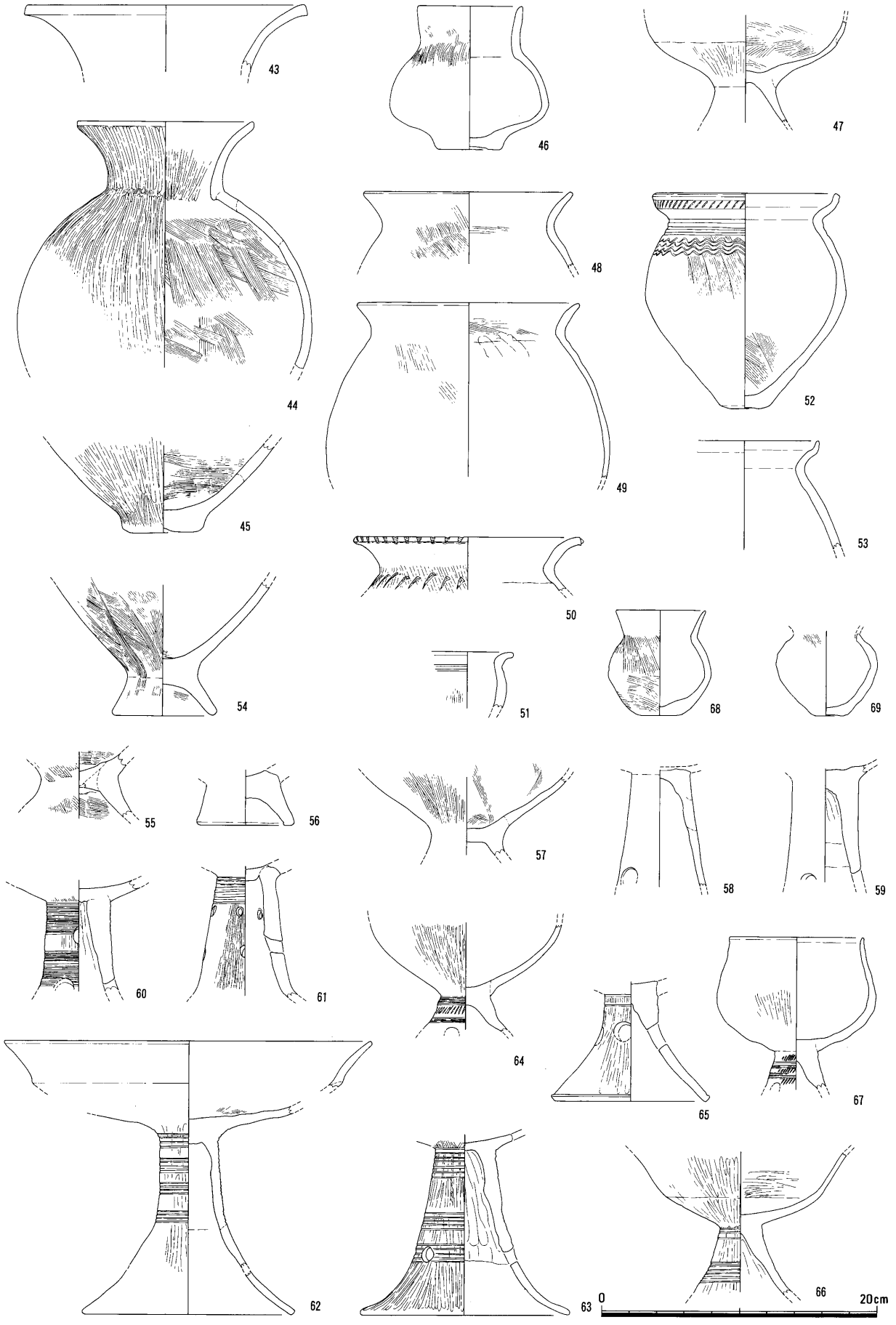
1：10 YR5/6　黄褐色土
2：10 YR5/4　にぶい黄褐色土（遺物含む）
3：10 YR6/6　明黄褐色土
4：7.5YR6/6　橙色土
5：7.5YR7/8　黄橙色土

0　5m

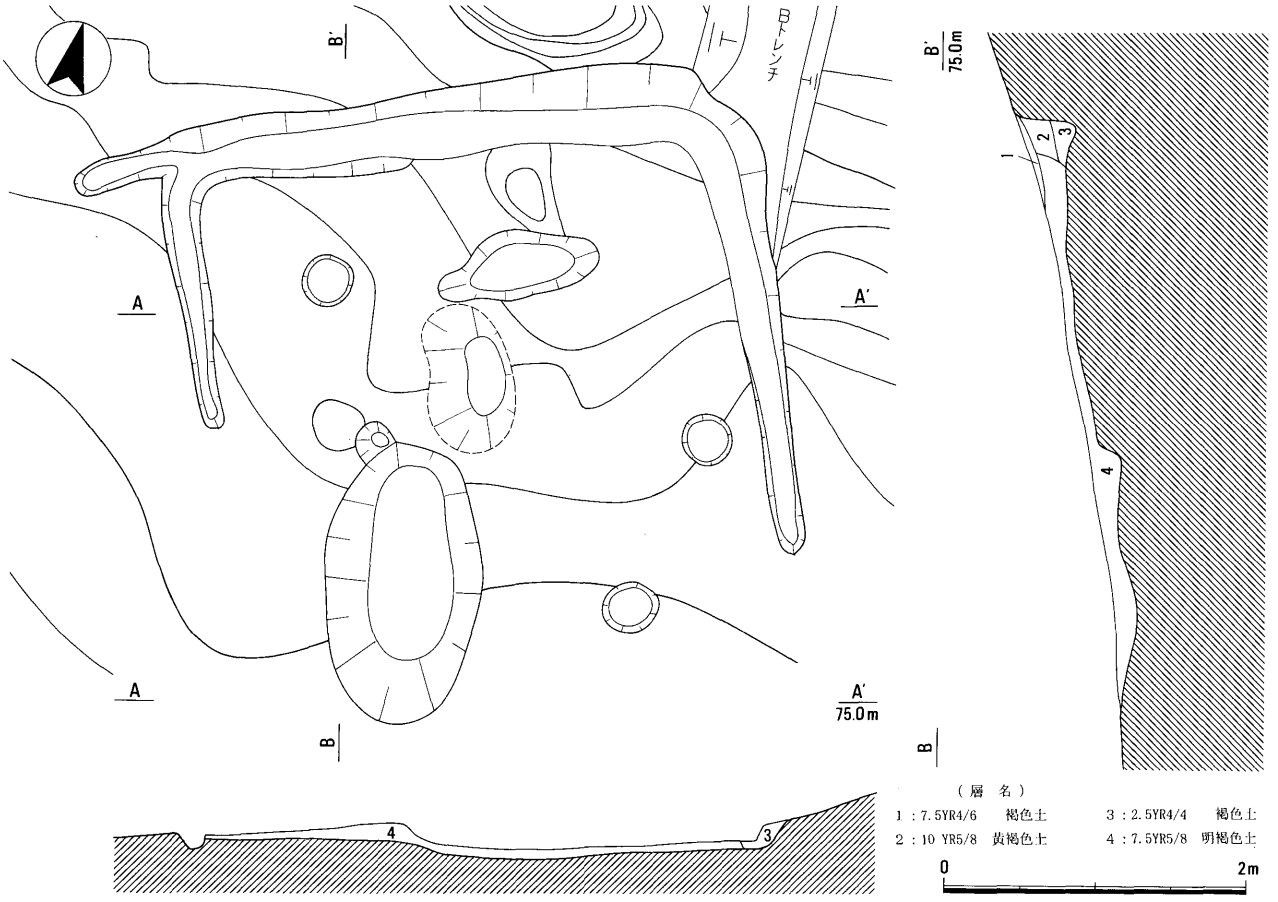
第16図　ＳＤ29平面図・土層断面図（１：100）



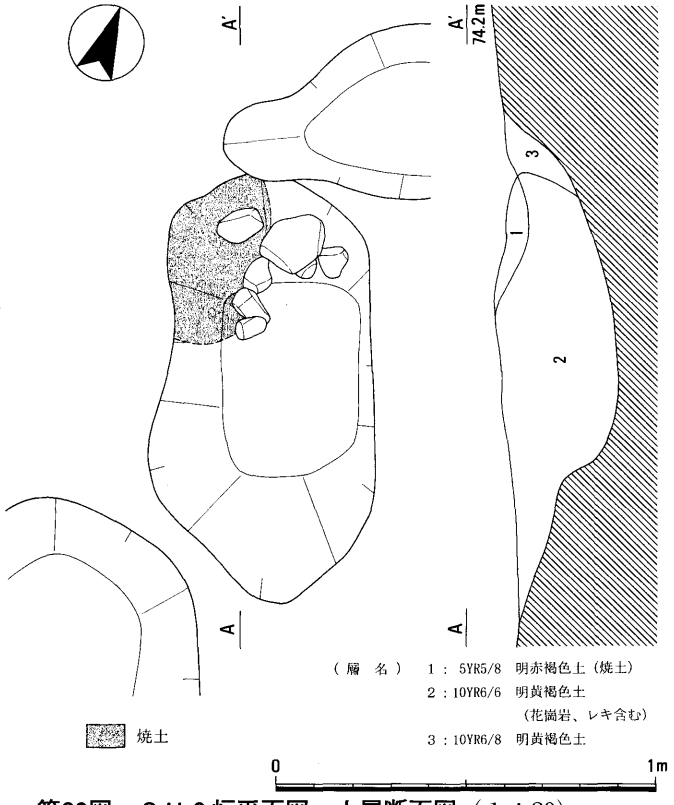
第17図　ＳＤ29遺物出土状況図（１：20）



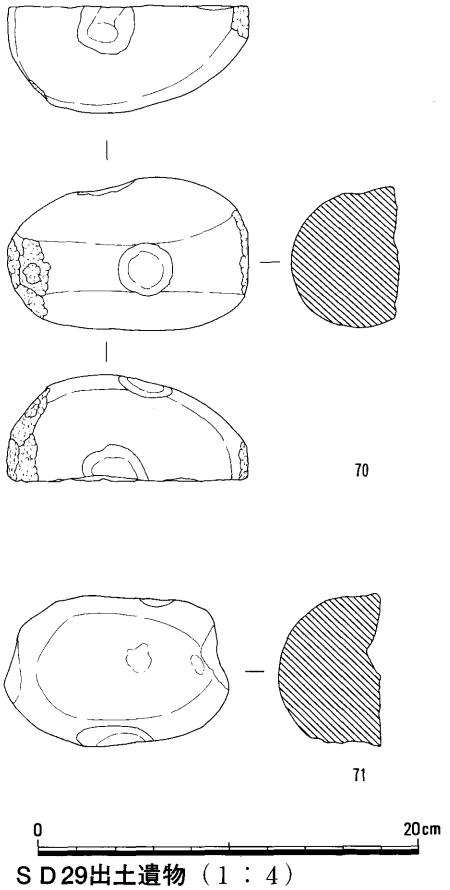
第18図　ＳＤ29出土遺物（１：４）



第19図　ＳＨ６平面図・土層断面図（１：50）



第20図　ＳＨ６炉平面図・土層断面図（１：20）



第21図　ＳＤ29出土遺物（１：４）

甕（48～57）48～51の口縁端部は短く「く」の字に外反させるが、52・53はさらに上方へ折り曲げる。52の底部は、平底を呈する。55は、台部の破片であるが、体部の底部分を台部へ貼り付けた痕跡が明瞭に分かる。

高杯（58～67）脚部上半は筒状を呈し、裾部で緩やかに開く形状のもの（58～64）が多い。直接の接合部分はないが62は、脚部から杯部への形状がある程度復元できる。杯部は大きく水平に広がり、稜の上半でさらに緩やかに外反すると思われる。64～66の脚部は付け根部分から直線的に「ハ」の字に開く形状である。67は、いわゆるワイングラス形の高杯である。杯部下半がやや下膨れ状を呈する。

ミニチュア土器（68・69）68は体部が球形で、69は肩部に最大径があるが、ともに平底を呈する。

凹石（70・71）　ともに砂岩製で、半分程度の残存である。70は、両先端や中央に使用痕跡が認められる。

b　竪穴住居（ＳＨ６・７・９・16・18・19・22・24・27・30・33・34・35）

中央尾根で７棟、東尾根で６棟の計13棟が検出された。中央尾根の７棟の内、４棟（ＳＨ６・33・34・35）は後述する２号墳の盛土下での検出である。形状は隅丸方形で、規模は一辺約４～８ｍあり、東西方向に長い長方形の平面形態のものが多い。中央に炉を持つものや、排水溝を持つもの、竪穴住居が切り合うものもある。なお、東尾根のＳＨ19だけ焼失住居である。出土遺物の詳細な検討を要するが、大きく山中期の前半と後半の２時期の竪穴住居が存在する。これは、環壕の掘り直しと連動する可能性も考えられる。

ＳＨ６（第19・20図・写真14・15）　中央尾根の頂上付近、後述する２号墳の南裾部分、標高は約75ｍで検出した。南側の周溝は、流出を受け確認できなかったが、東西約3.9ｍの規模の竪穴住居である。中央に長径1.2ｍ、短径0.5ｍの楕円形の落ち込みを検出した。この北側部分には拳大から人頭大の石が数個検出され、また、その周辺が熱を受けている。地床炉になると思われる。

主柱穴の検出に努めたが、相当する部分には確実な痕跡は認められなかった。この炉の周辺に土坑状の遺構を確認したが、抜根作業による攪乱で詳細は不明であるが、土器細片が多く出土した。貯蔵穴になろうか。

なお、この竪穴住居のちょうど北東隅部分に、２号墳の盛土確認のＢトレンチが設定されたが、土層の検討では、このＳＨ６の廃絶後に２号墳の盛土がなされている。

出土遺物（第25図・写真92）　細片が多く、図示し得たのは壷・高杯・土玉に限られる。

壷（72）小型の壺の低部で、平底である。

高杯（73）杯部稜の上半のみである。緩やかに外反させ、端部に面を持つ。

土玉（74）半分の破片である。直径2.8cmに復元できる。

ＳＨ７（第22～24図・写真16～18）　ＳＨ６の南東部分で検出した。竪穴住居の南東部分の大半が流出のため検出できなかったが、南北方向5.7ｍの規模である。ＳＨ６と比べると若干隅丸方形状を呈する。

北西の周溝の外側に、弧を描く緩やかな傾斜部分が存在する。この部分に３個の柱穴が存在するが、外側に存在する柱穴とともに柵列もしくは、竪穴住居の屋根を支えるためのものの可能性も考えられる。住居内西側中央にやや小さ目で楕円形の柱穴が存在するが、はしご穴的な機能のものかもしれない。

出土遺物（第25図・写真92～93）　周溝の南西隅の部分で、上部からの転落と考えられるが、壷の口縁部が出土した。その他の器種には、甕・台付甕・鉢・高杯・器台・土玉などがある。

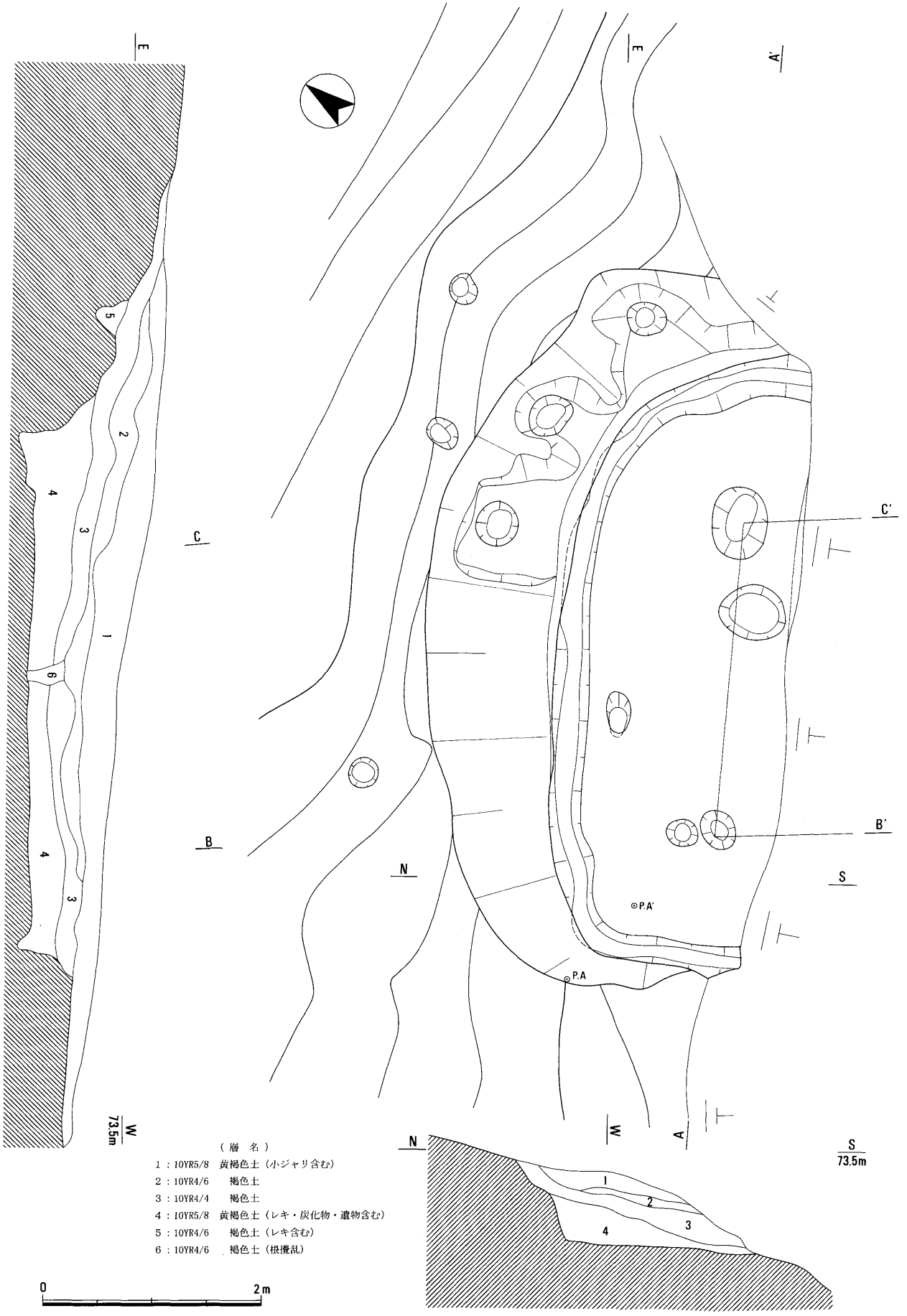
壷（75～77）75は口縁部が大きく外反し、端部に面を持つ。頸部、口縁端部には刻み目を施す。

甕（78～82）口縁端部が「く」の字を呈するもの（78）のほか、受け口状を呈するもの（79・80・88）には、その屈曲の強いもの（80）もあるが、端部の刻み目を施すのは共通である。

高杯（84～87）筒状の脚部には、縦方向のミガキをした後、直線文が施されるが、87は直線文の間に刻み目を１方向・２方向と交互に繰り返す。

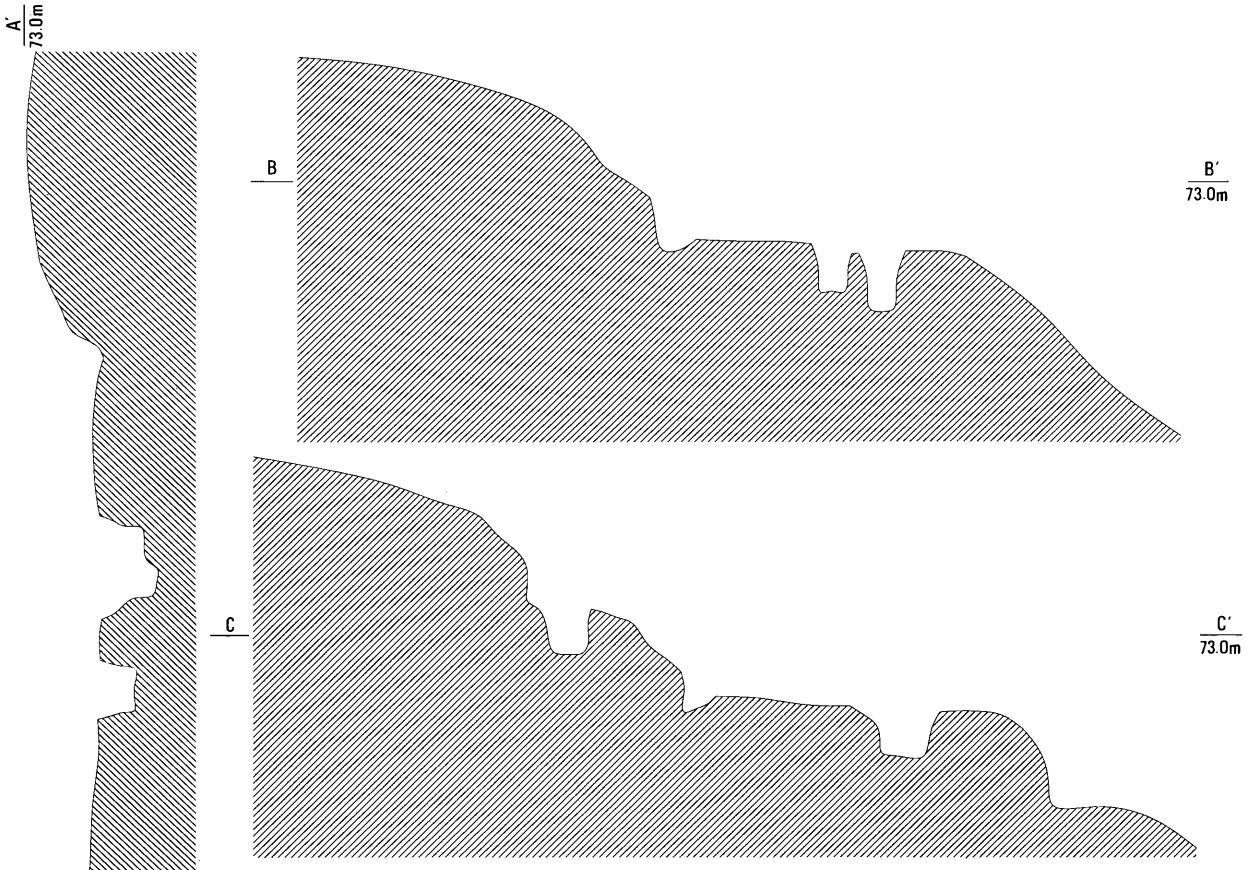
鉢（88）手焙り形土器の可能性もある。

器台（89）円形の透かし穴の痕跡があるため器台としたが、壺の口縁の可能性もある。端部を厚く肥厚

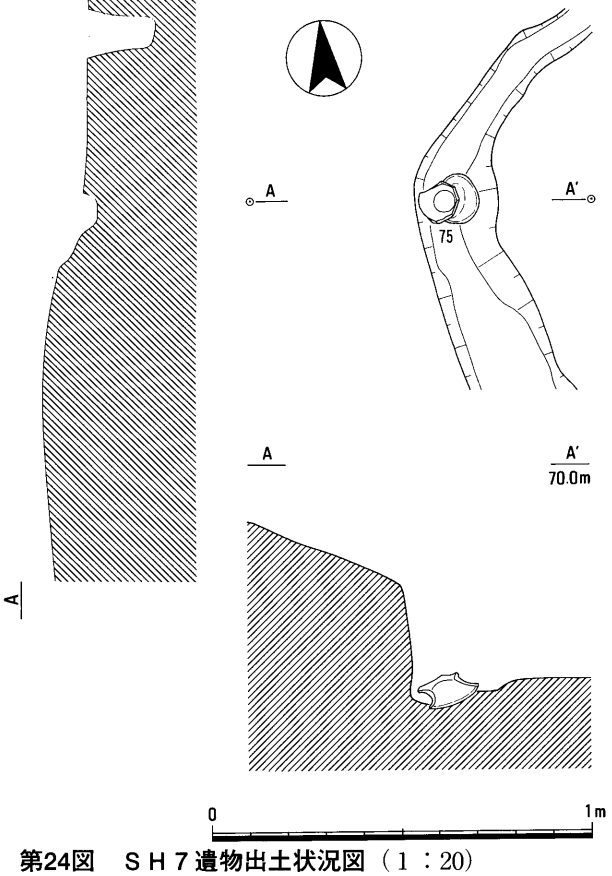


（層　名）
1：10YR5/8　黄褐色土（小ジャリ含む）
2：10YR4/6　褐色土
3：10YR4/4　褐色土
4：10YR5/8　黄褐色土（レキ・炭化物・遺物含む）
5：10YR4/6　褐色土（レキ含む）
6：10YR4/6　褐色土（根攪乱）

第22図　ＳＨ７平面図・土層断面図（１：50）



第23図　ＳＨ７断面図（１：50）



第24図　ＳＨ７遺物出土状況図（１：20）

させる。

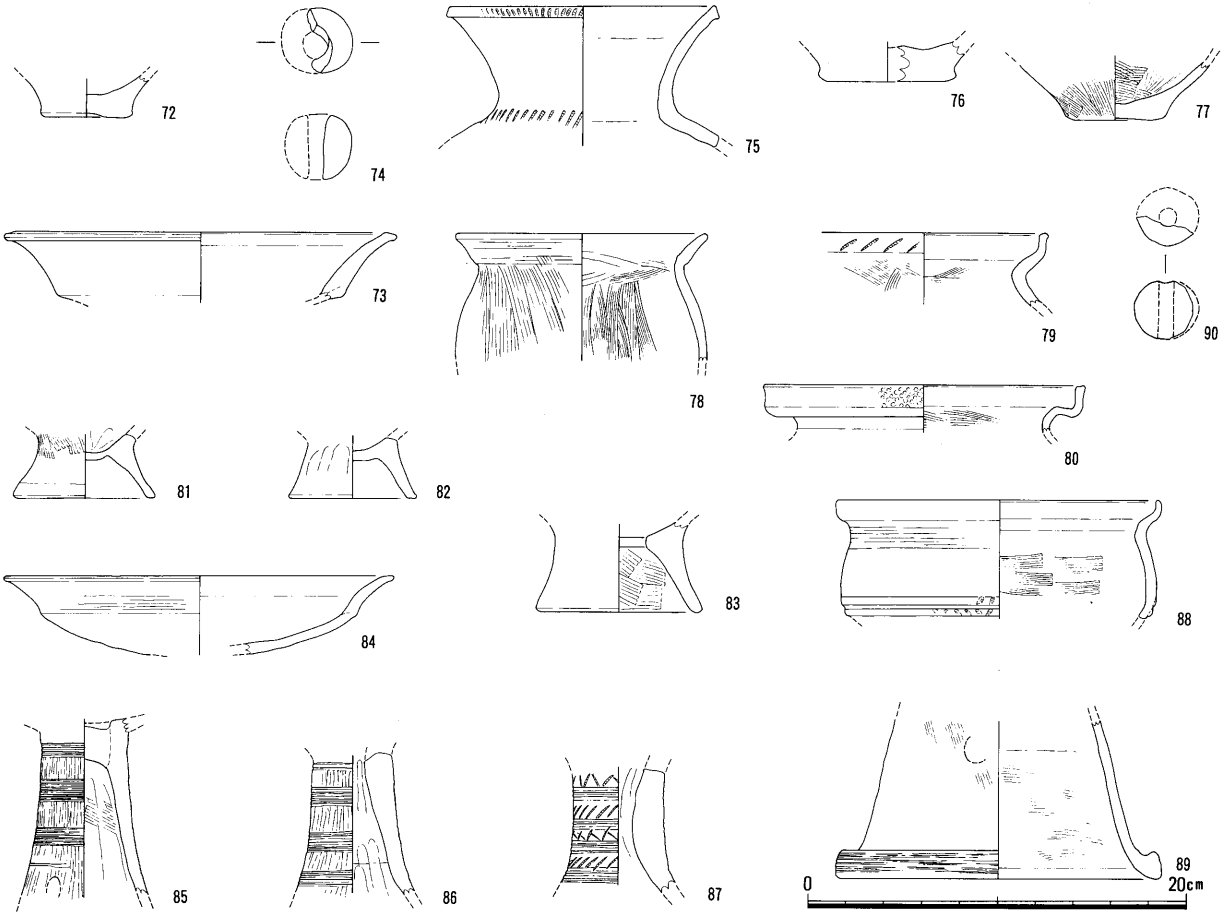
ＳＨ９（第26図）　中央尾根のほぼ中央部分、標高約70mで検出した。中央尾根では、この標高70m前後から下位にかけて、暮明層群の互層が始まり、しかも検出面が礫層となることから、遺構北側の若干の落ちを確認したに止まる。東西の規模は、3.8mである。東側壁は、後述するＳＸ10とＳＫ11に切られる。なお、周溝の痕跡、主柱穴、炉跡などは検出されなかった。

出土遺物　弥生土器と思われる小片が若干出土したに止まる。

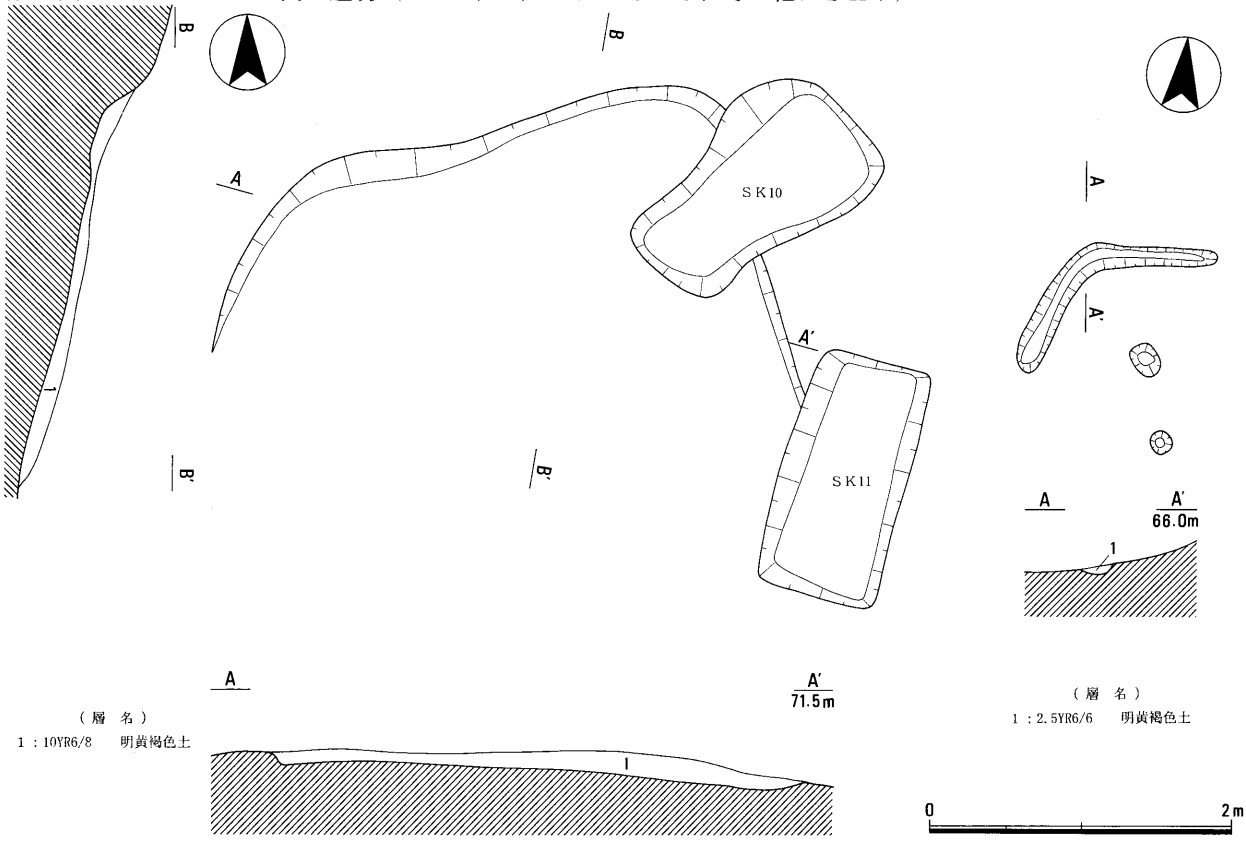
ＳＨ16（第27図）　中央尾根の標高約65mの付近で検出した。流出のため、周溝の北側と西側のみの検出で全体の規模は不明である。柱穴を２個確認したが、主柱穴になるかどうかは不明である。

出土遺物　土器の細片が出土したに止まり、時期は確定できない。

ＳＨ18（第28・30図・写真19～21）　東尾根の調査区北西隅で検出した。東西約6.0m、南北約4.7mの

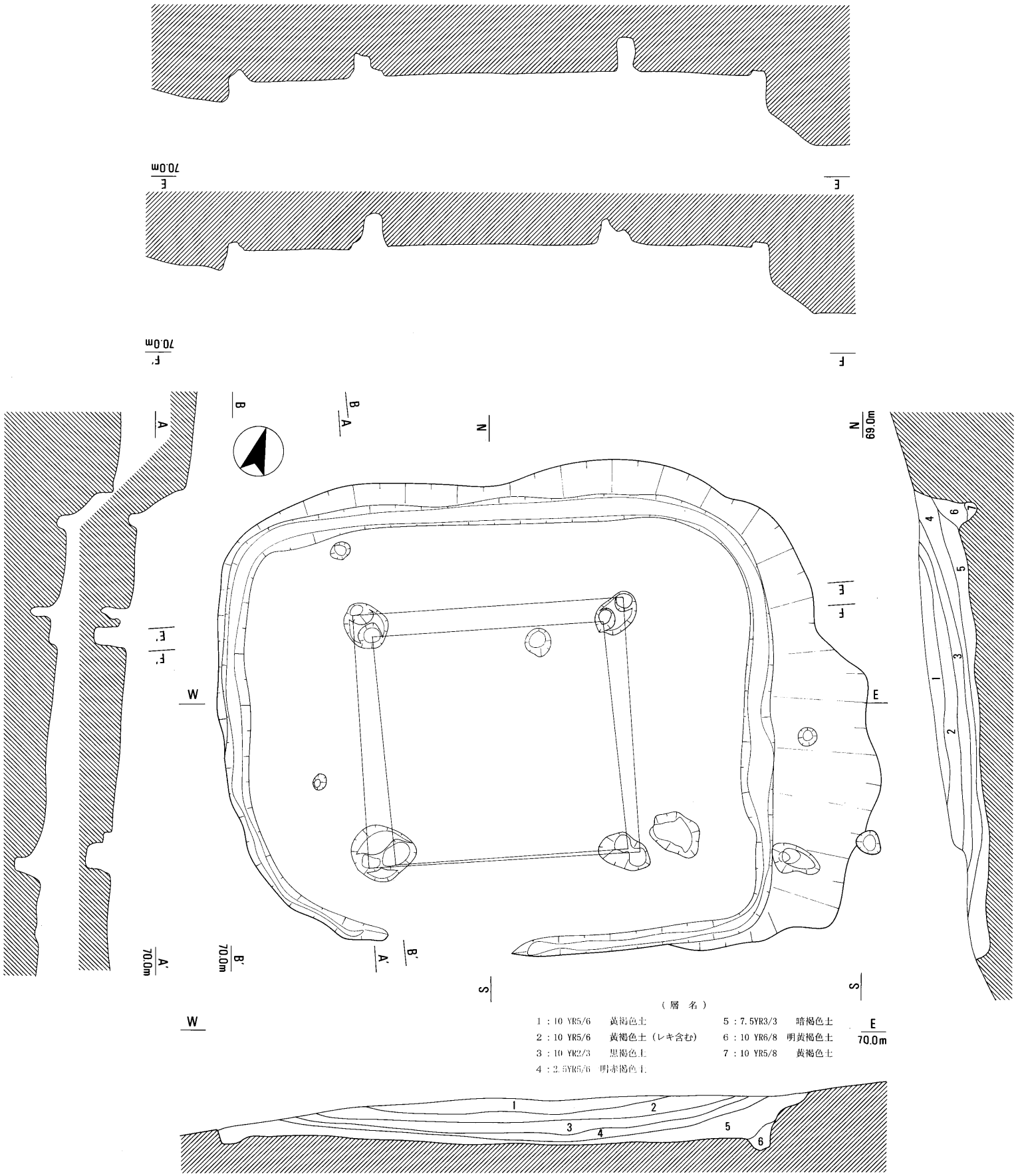


第25図　ＳＨ６・ＳＨ７出土遺物（１：４）（72～74はＳＨ６、その他はＳＨ７）

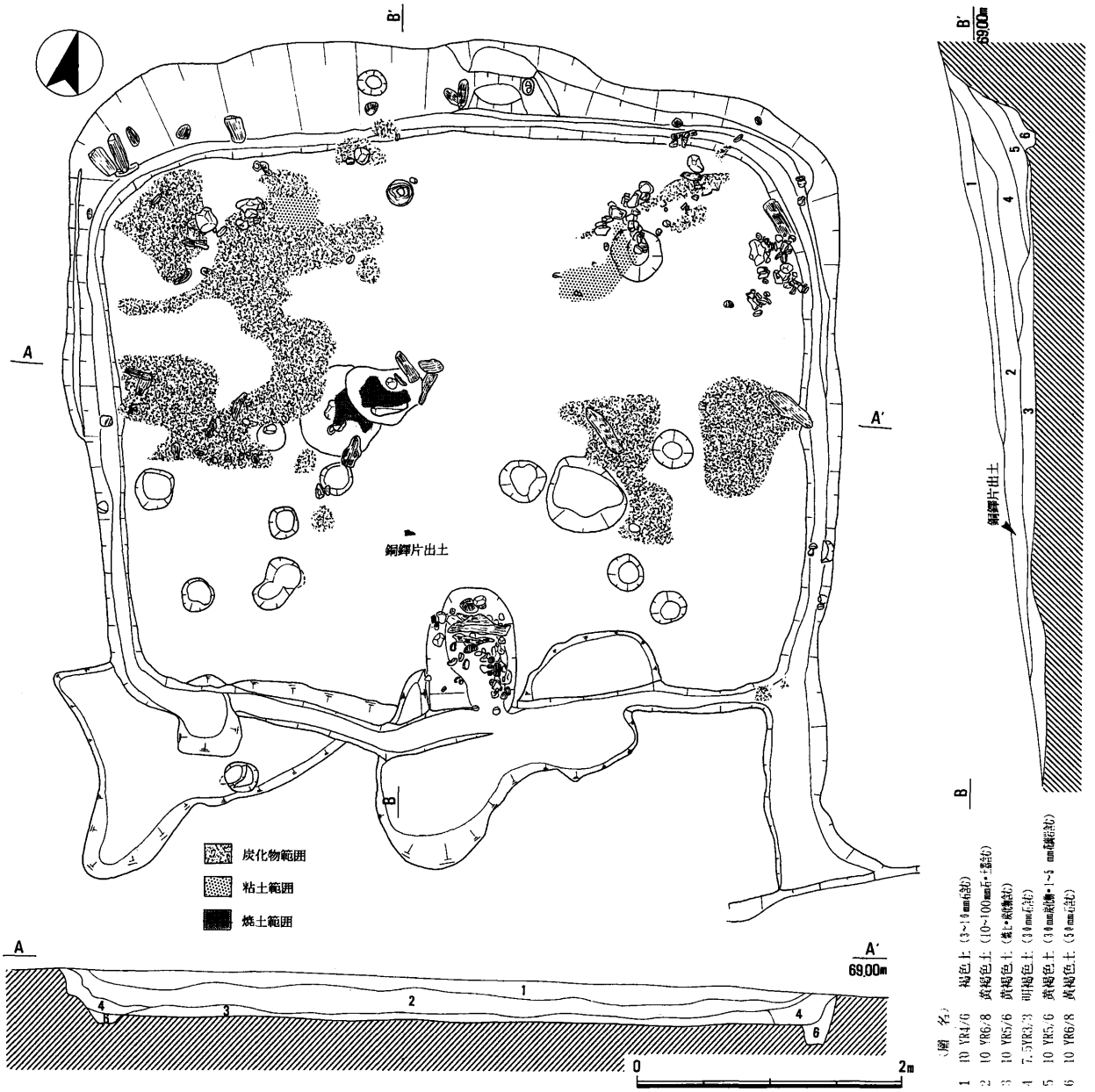


第26図　ＳＨ９平面図・土層断面図（１：50）

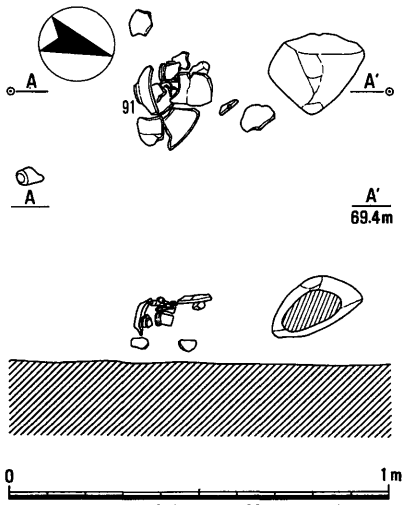
第27図　ＳＤ16平面図・土層断面図（１：50）



第28図　ＳＨ18平面図・土層断面図及び断面図（１：50）



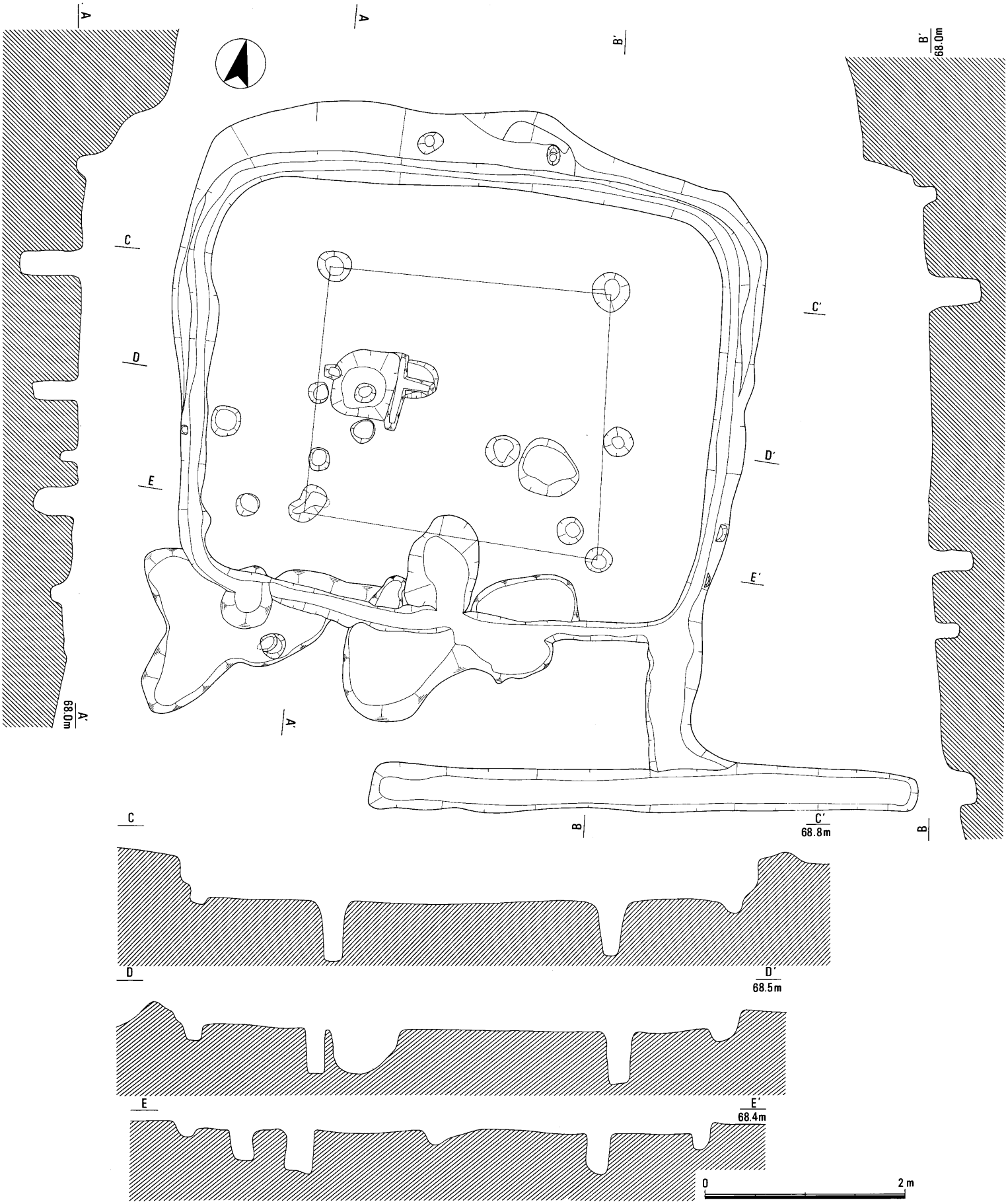
第29図　ＳＨ19平面図・土層断面図（１：50）



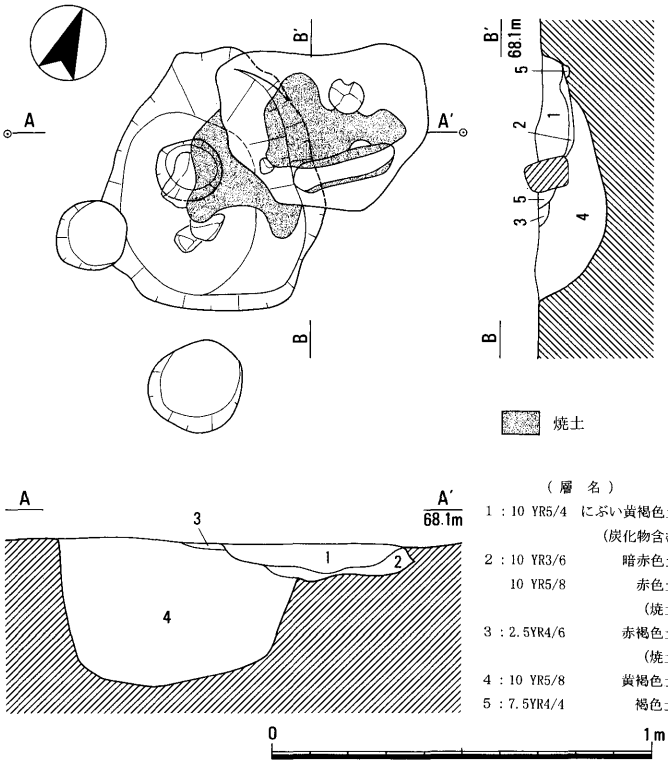
第30図　ＳＨ18遺物出土状況図（１：20）

長方形の竪穴住居である。検出面からの深さは、北と東側では約60cmあるが、南側では流出のため周溝が途切れる。主柱穴は４個検出できたが、各々柱穴の対角線状の外側にも柱穴が存在する。竪穴住居の切り合いは確認できず、柱穴の切り合い関係もなかったため、主柱穴を支える添え柱の可能性が考えられる。炉跡と思われる痕跡や貯蔵穴は検出されなかった。なお、この竪穴住居の東側は緩やかな傾斜をもって掘削され、この部分に小穴が存在する。

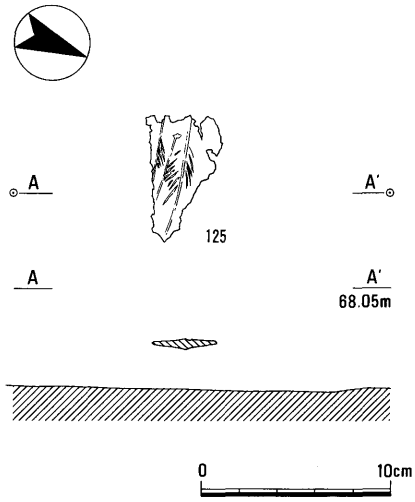
出土遺物（第36図）　竪穴内の北東隅から壺・台付甕・高杯などが出土した。



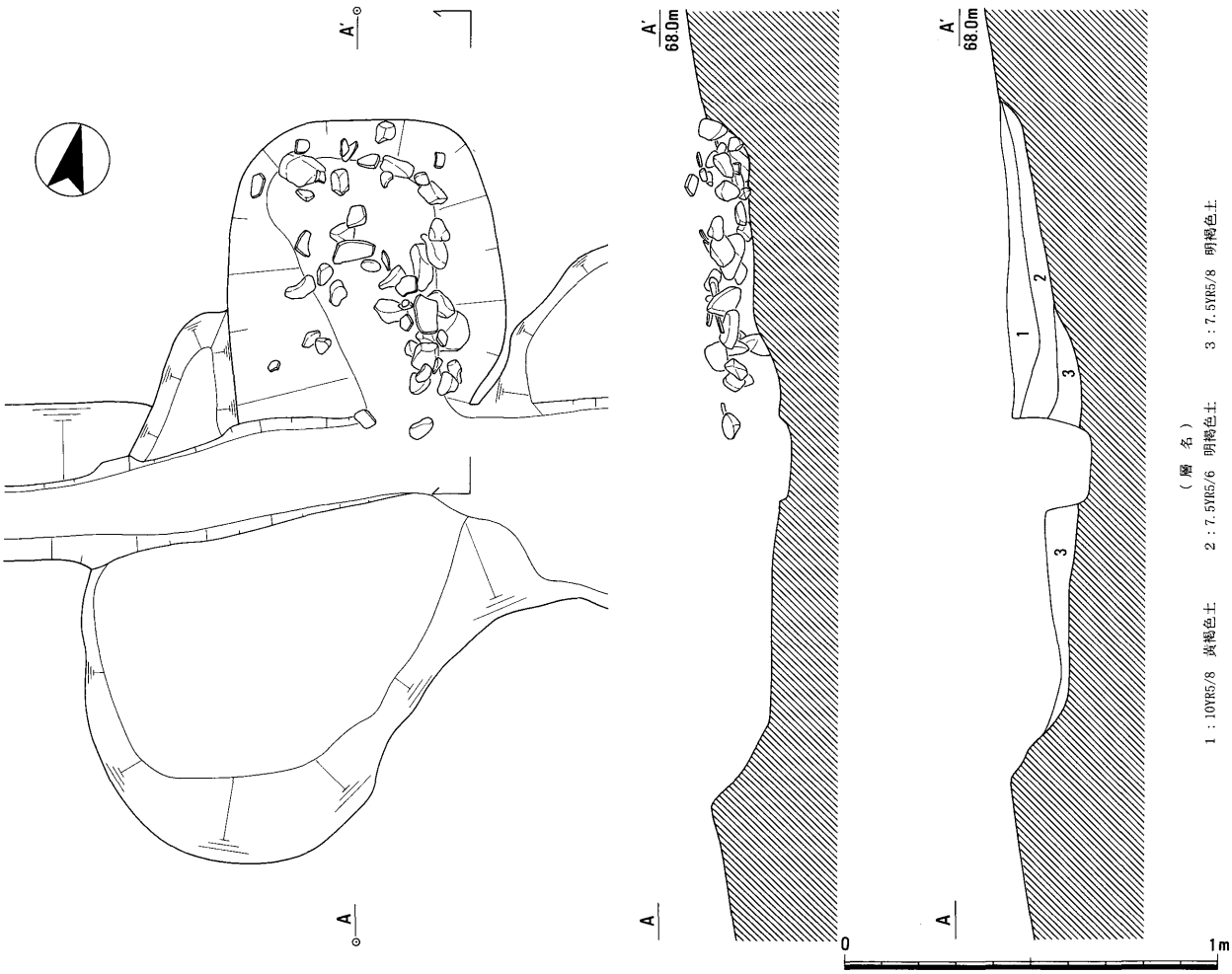
第31図　ＳＨ19完掘平面図・断面図（１：50）



第32図　ＳＨ19炉平面図・土層断面図（１：20）



第33図　銅鐸片出土状況図（１：４）



第34図　ＳＨ19貯蔵穴平面図・土層断面図（１：20）

壺（91）平底の壺の底部であるが、中央をやや凹状にさせる。

甕（92）台部分の破片である。端部は丸くさせる。

高杯（93・94）93は、やや内湾気味の深い形状の杯部である。

ＳＨ19（第29・31～35図・写真22～30）　ＳＨ18の東で検出した。東西約5.7m、南北約5.1mの長方形の竪穴住居で、南東隅の周溝内から南へ約1.5m延びる、幅0.4mの排水溝が伴う。主柱穴は６ヶ所検出され、６本柱の建物と考えられる。

中央やや西よりの床面で炉跡を検出した。この炉跡は造り替えが行われた可能性があり、南側の方が新しく、長さ約30cmの炉石が残っていた。

この住居は火災を受けたものと思われ、埋土の下層に炭が多く確認され、中には柱部材と考えられる炭化物も残存していた。なお、北と東の周溝外側の壁には壁柱と思われる部材も炭化した状態であった。また、主柱穴の北側２本の場所では、炭の上面で粘土の塊が見つかっている。

竪穴住居の南側中央で、拳大の小石や土器砕片を多く含む土坑を検出した。貯蔵穴であろうか。

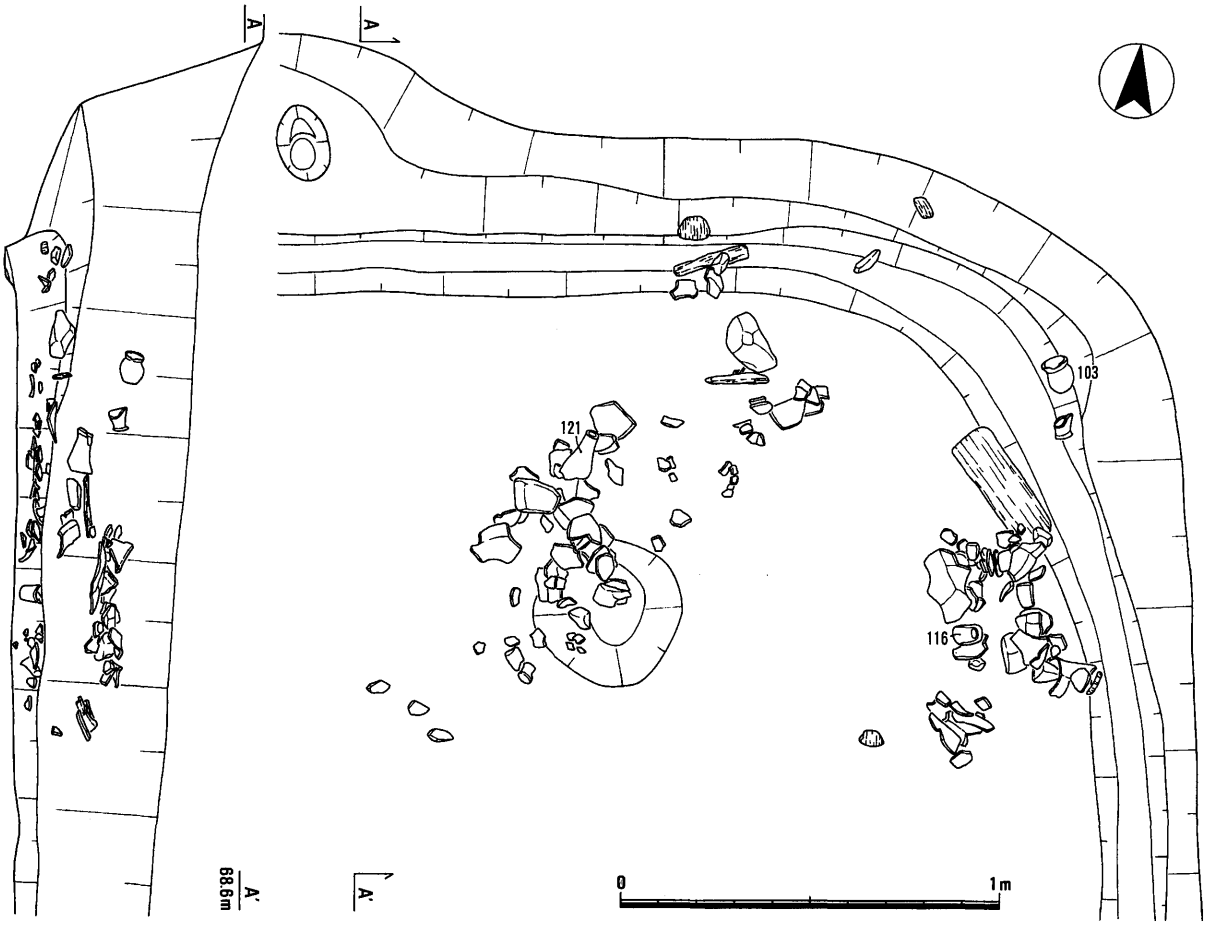
出土遺物（第36・37図・写真94～96）　遺物は、主に北東部分に集中するが、炭が含まれる層の上層からの出土である。器種には壺・甕・台付甕・高杯・小型甕・砥石・軽石・鉄製品の他、特筆すべき遺物として銅鐸片などがある。

壺（95～102）　口縁端部を肥厚させ大きく外反し、底の形状も厚い平底のものが多い。

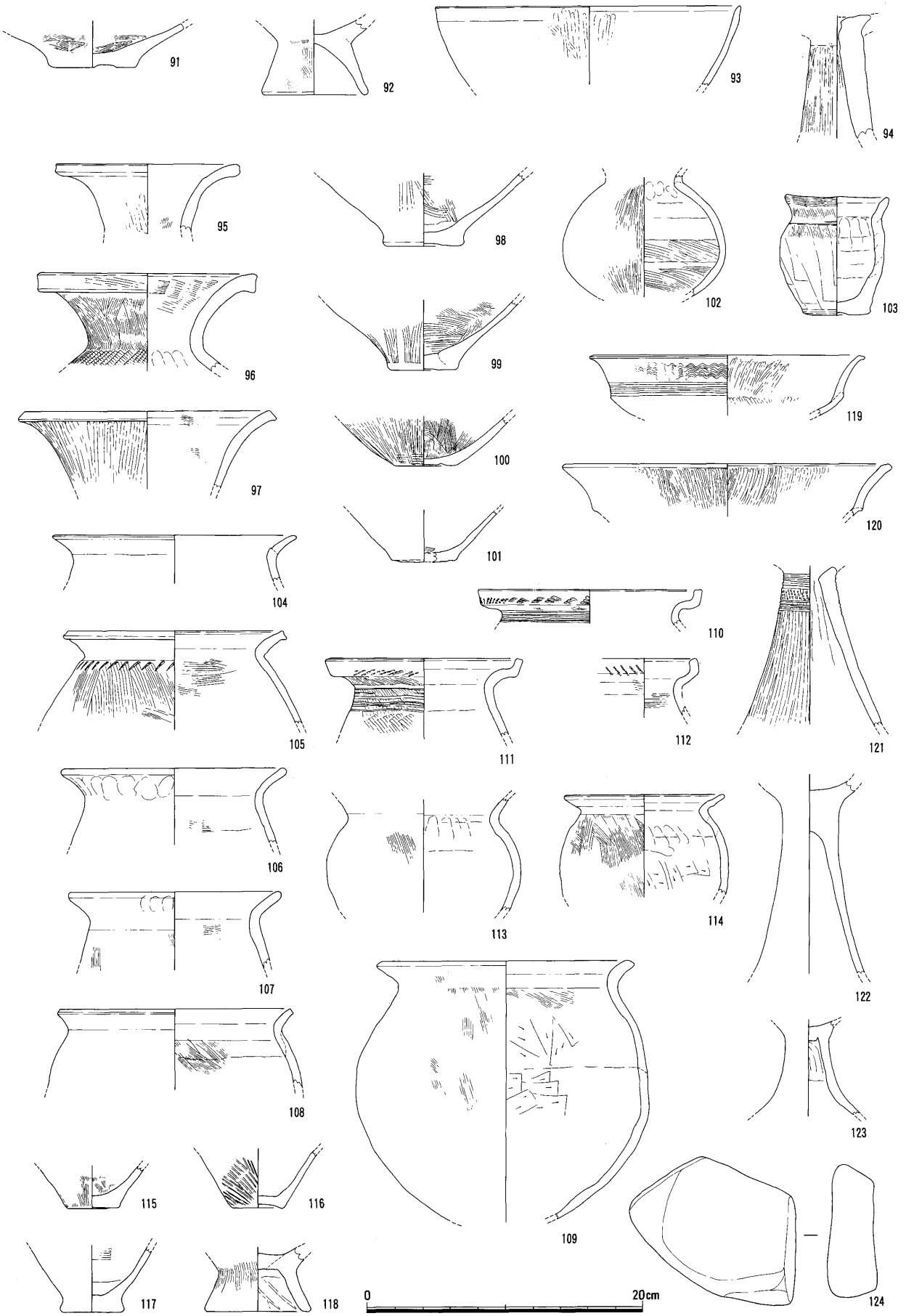
てづくね土器（103）　平底で、口縁を短く「く」の字にさせる。

甕（104～118）　口縁部は短くゆるやかに「く」の字にさせるもの（104～108・113・114）と、口縁端部をさらに上方へ折り曲げるもの（110～112）がある。113・114の体部はやや球形を呈する。また、端部を折り曲げるものの内（111）は、色調が他に比べ淡褐色を呈し、焼成もやや堅い感があり、近江からの搬入の可能性がある。

高杯（119～123）　脚部は、比較的円柱状のもの（119～122）と、やや小型で円錐状（123）がある。119・120はともに、稜の上部がゆるやかに外反する。



第35図　ＳＨ19遺物出土状況図（１：20）



第36図　ＳＨ18・ＳＨ19出土遺物（１：４）（91～94はＳＨ18、その他はＳＨ19）

砥石（124）不定形であるが、平坦面の中央に使用痕跡が認められる。

銅鐸（125） 鈕の部分の破片で、残存長6.8cm、幅4.2cm、稜線部分の厚さ0.6cmである。残存の重さは18.89ｇである。稜線の両側に、やや鋭角的な綾杉文を交互に重ねて配置する。出土した位置は炉跡の南側で、層位は床面直上の炭の層より上の褐色粘質土である。住居が焼失した後、廃棄された可能性がある。

鉈（126）断面形は長方形を呈し、若干反り返る。鉈もしくは、鏃の破片であろうか。

ＳＨ22（第38・39図・写真31・32） 東尾根の南西部分、南北方向に尾根が始まる緩斜面で検出した。後述するＳＨ30とほぼ重なり、一回り大きい形であるが、土層の確認ではＳＨ30より古い。南西部分が流出を受けているため、全体の規模は不確かであるが、東西方向に7.0mを計る。

主柱穴は、西側で３ヶ所検出でき、６本柱の可能性がある。竪穴住居南側中央で、径0.7mの土坑を検出した。ＳＨ30とどちらに伴うか不明であるが、貯蔵穴であろうか。

出土遺物（第42図・写真97） 細片が多く、図示できたのは台付甕１点に止まる。

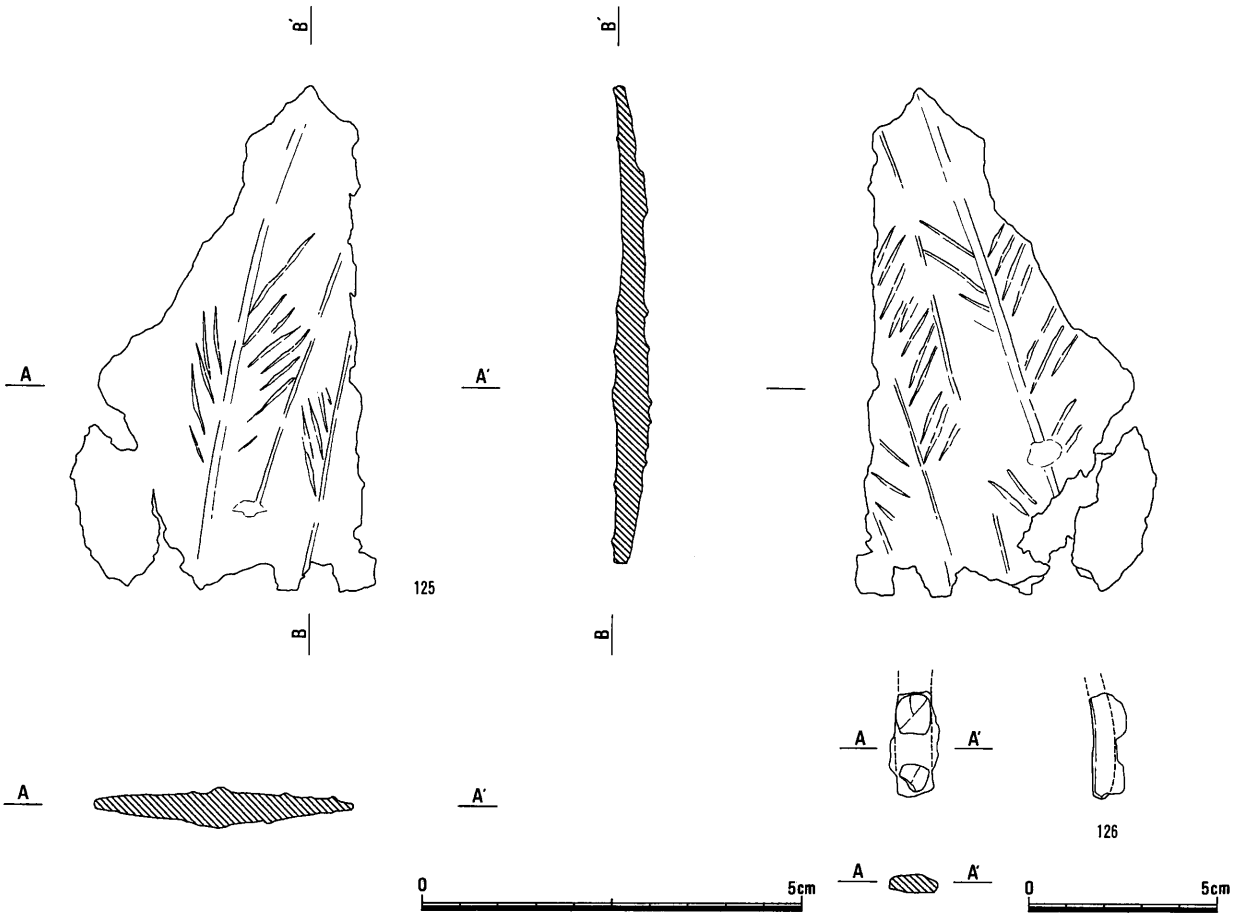
台付甕（127）「ハ」の字状に直線的に開く。

ＳＨ24（第40図・写真33～35） 東尾根の中でも緩やかに東へ傾斜し始めた部分で検出した。東西4.0m、南北方向へは周溝が検出されなかったため不明であるが、3.0m以上の規模である。主柱穴は、４ヶ所検出した。

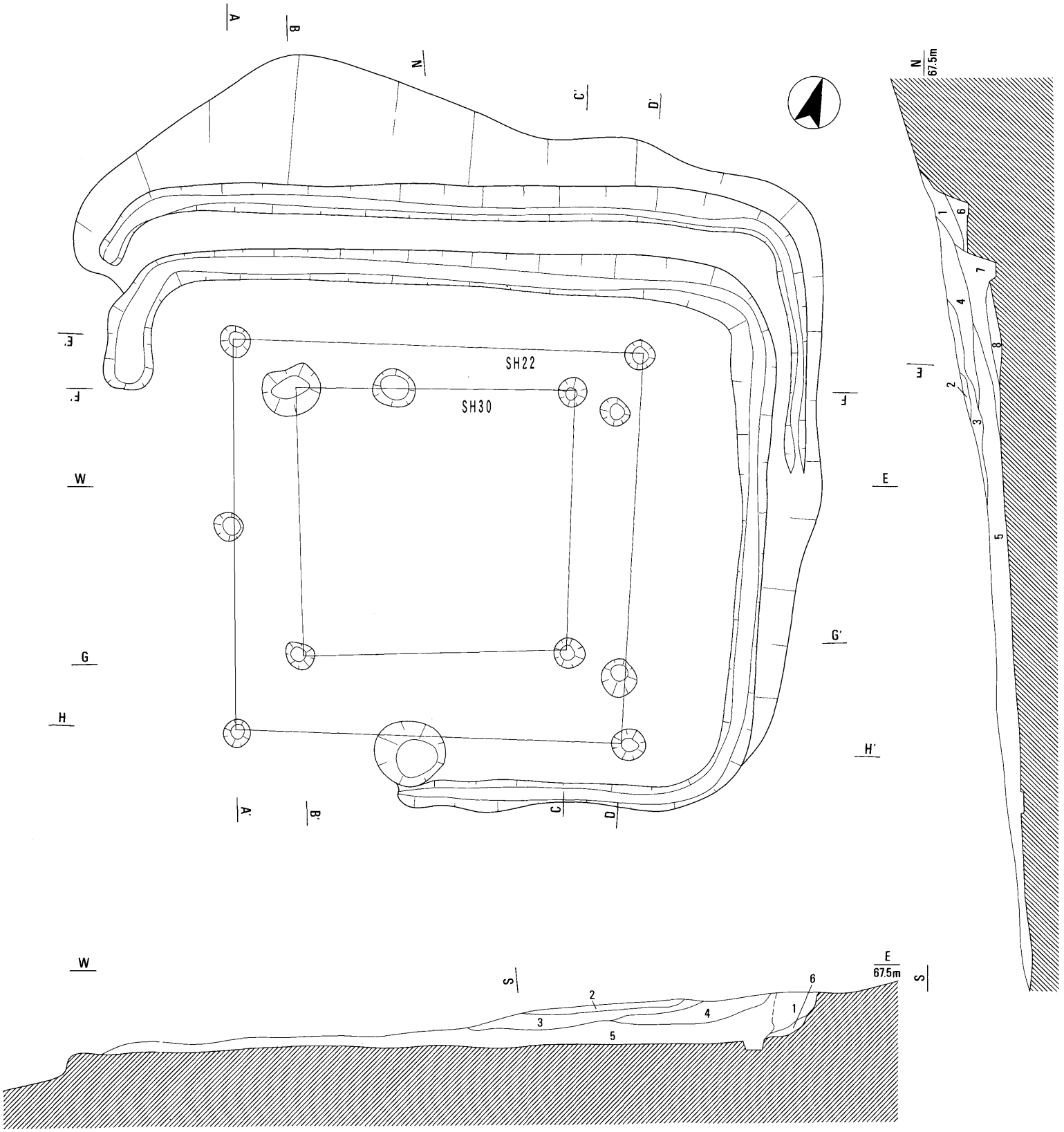
中央やや西よりで、直径約60mの焼土範囲を確認した。地炉跡と考えられる。この竪穴住居の北側には、１段高くなる部分があり、他の竪穴住居が存在する可能性も考えられる。ＳＨ18・19・22に見られたような緩やかな傾斜ではない。

出土遺物（第42図・写真96） 壷・甕・台付甕・高杯などがある。

壷（128～132） 128は、やや厚手の口縁で口径が小さい割りには垂直に立ち、端部から大きく外反させる。底部の形状は、平底が多い。132は、底部と口縁部が欠けるが小型の球形の体部である。



第37図　ＳＨ19出土遺物（125は１：１、126は１：２）

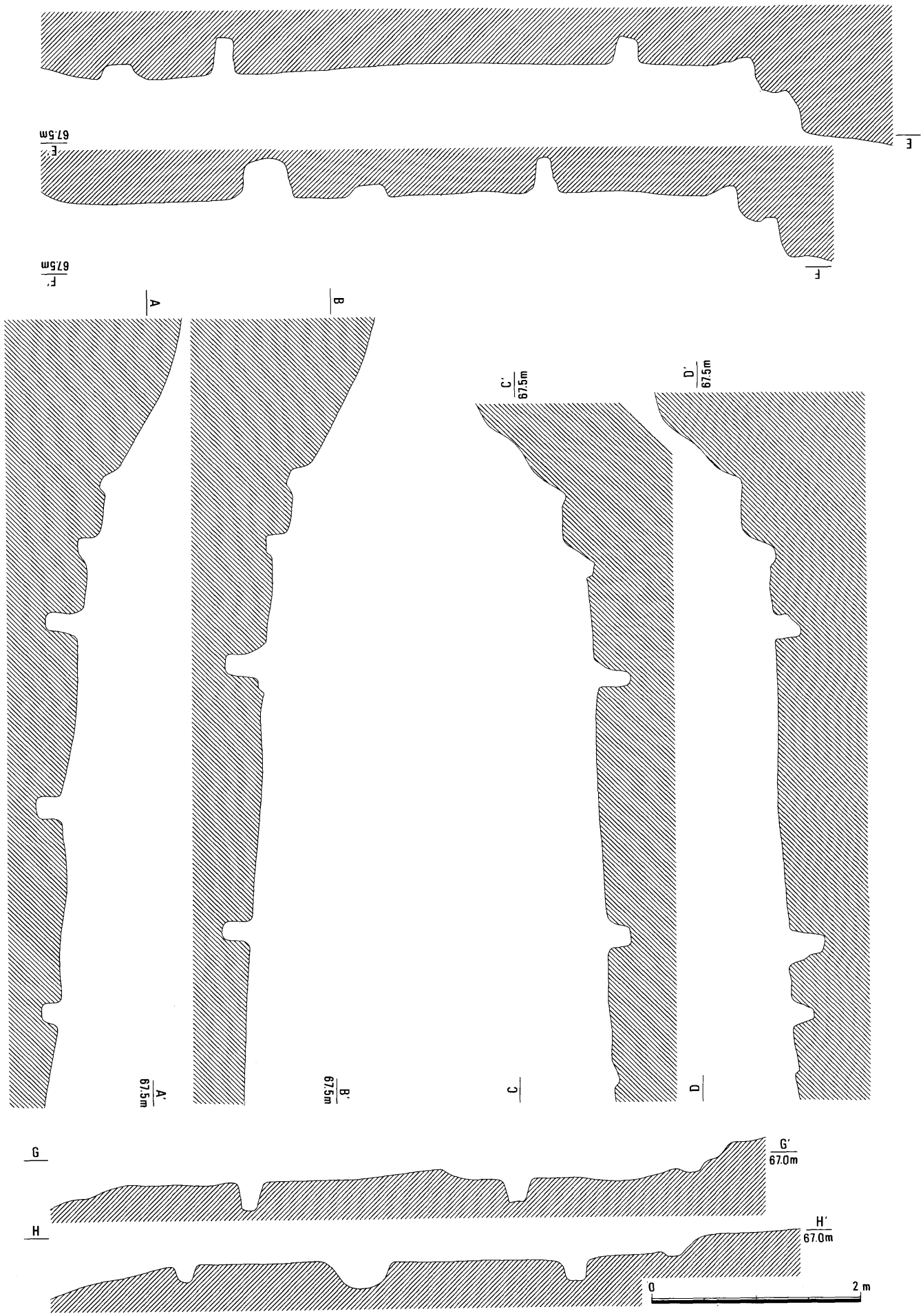


（層　名）

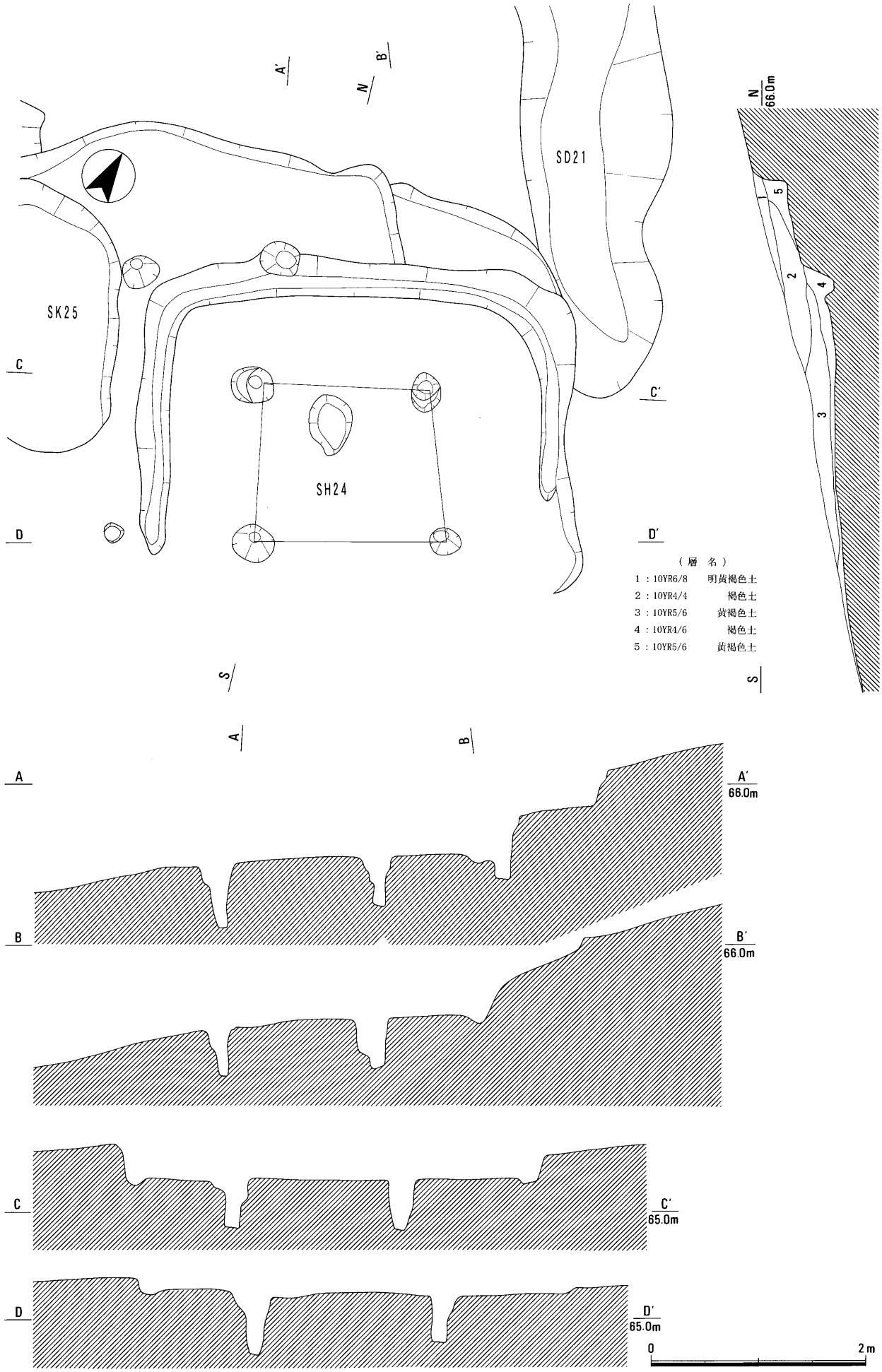
1：7.5YR5/8　明褐色土	5：10 YR6/6　明黄褐色土
2：10 YR5/8　黄褐色土	6：10 YR6/4　褐色土
3：10 YR6/4　褐色土	7：10 YR6/8　明黄褐色土
4：10 YR5/8　黄褐色土	8：7.5YR5/6　明褐色土

0　2m

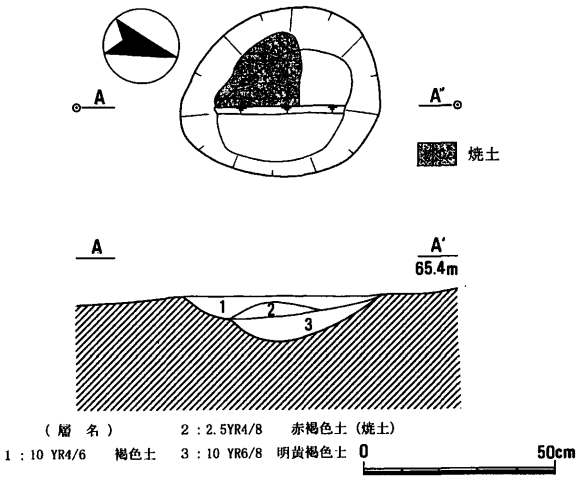
第38図　ＳＨ22・ＳＨ30平面図・土層断面図（1：50）



第39図　ＳＨ22・ＳＨ30断面図（１：50）



第40図　ＳＨ24平面図・土層断面図及び断面図（１：50）



第41図　ＳＨ24炉平面図・土層断面図（１：20）

甕（133～136）　台部分の破片である。（135・136）は、やや厚手で垂直気味で、端部を肥厚させる。

高杯（137～139）　137は、稜の上部が大きく外反する。脚部では、円柱状ので横線文を施すもの（138）と、「ハ」の字に開き端部がやや内湾するもの（139）がある。

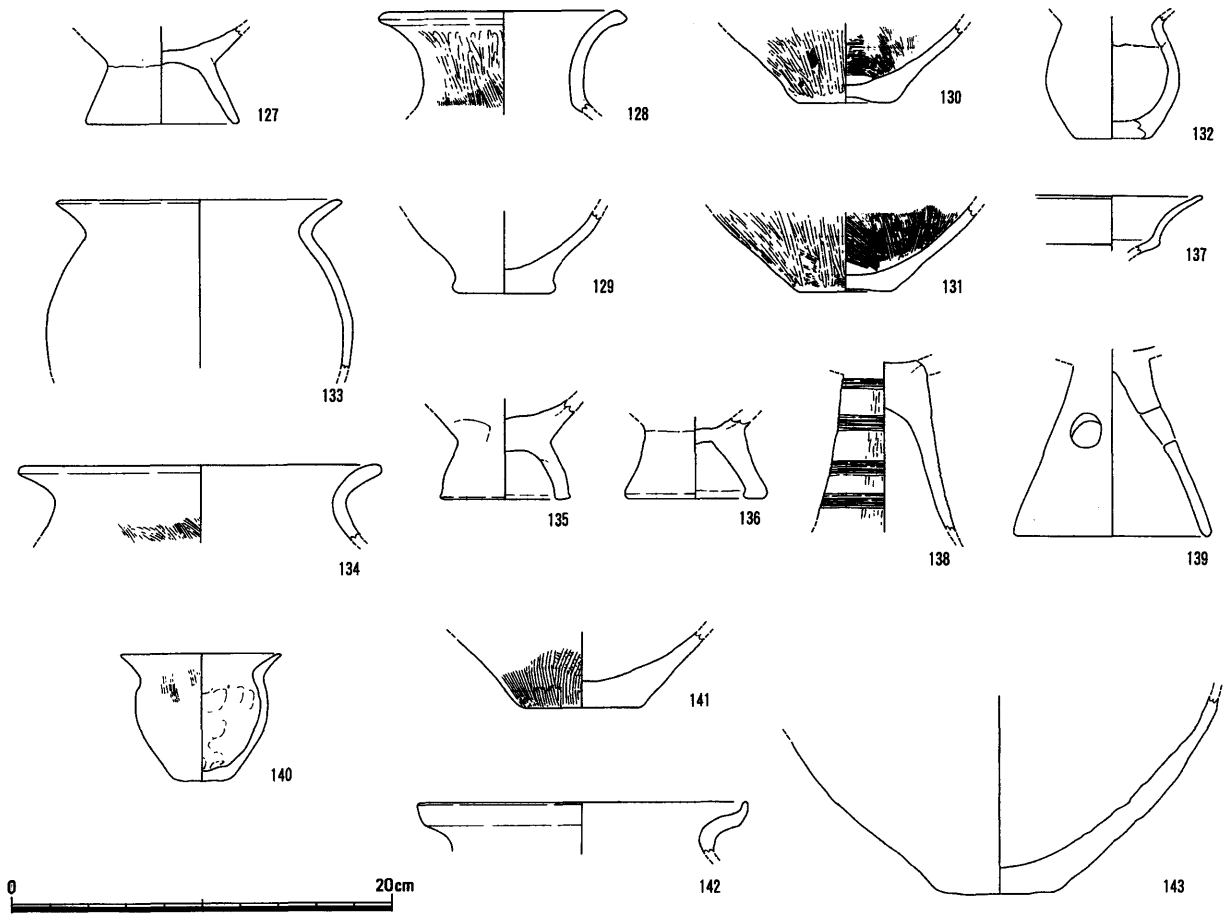
ＳＨ27（第43図）　東尾根の中央東側で検出した。西側と南側の周溝一部を確認したに止まり、全体の規模は不明である。この竪穴住居が存在する部分より北側に平坦な部分があり、他に竪穴住居が存在することは十分に考えられる。主柱穴・炉跡・貯蔵穴などは検出されなかった。なお、出土遺物はない。

ＳＨ30（第38・39図・写真31・32）　前述のＳＨ22の内側で検出した。東西6.4m、南北5.3mの竪穴住居である。主柱穴は４ヶ所検出された。SH22とともに炉跡など検出されなかった。ＳＨ22との平面切り合い関係と土層観察により、SH30の方が新しい。

出土遺物（第42図・写真97）　壷・甕・高杯などの器種があるが、細片が多く、図示し得たのは、小型甕に止まる。

小型甕（140）　平底で、短い口縁部がまっすぐにのびる。

ＳＨ33（第43図・写真36）　２号墳の中央やや西寄り、しかも墳丘の下で検出した。盛土確認のＡトレンチの幅しか掘削出来なかったので、全体は不明であるが、東西方向に3.8mを確認した。主柱穴・炉・



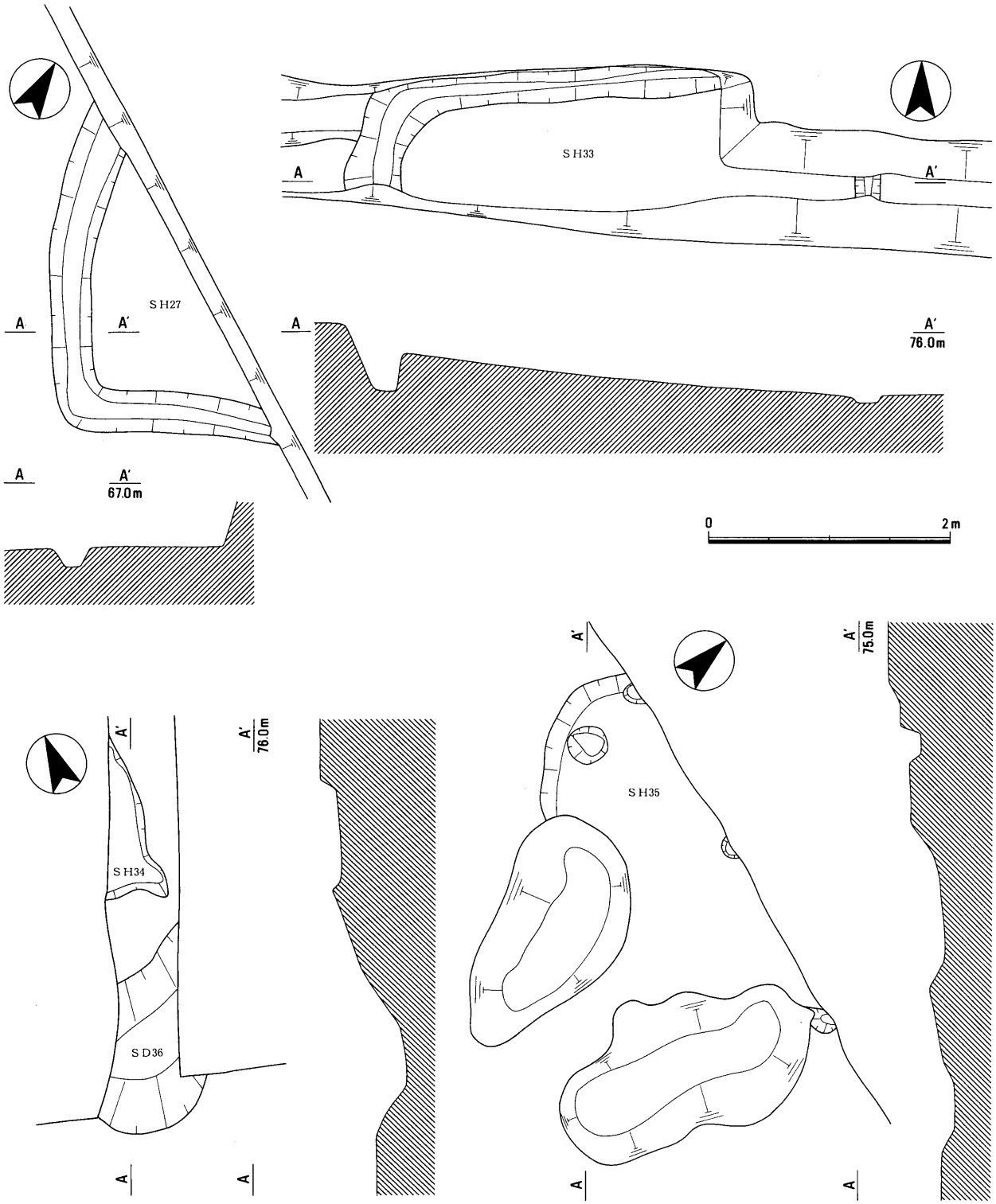
第42図　ＳＨ22・ＳＨ24・ＳＨ30・ＳＤ４・ＳＤ17出土遺物（１：４）
（127はＳＨ22、128～139はＳＨ24、140はＳＨ30、141はＳＤ４、142・143はＳＤ17）

貯蔵穴などは確認されなかった。

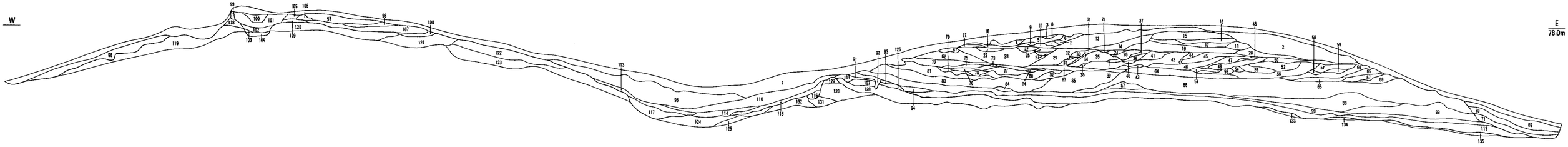
出土遺物　細片が少量出土したに止まる。

ＳＨ34（第43図・写真37）　ＳＨ33同様に、２号墳の墳丘下、幅約１ｍのＢトレンチの部分で検出した。周溝・主柱穴・炉・貯蔵穴などは検出されなかったが、おそらく竪穴住居の南東隅部分の確認と思われる。なお、出土遺物はない。

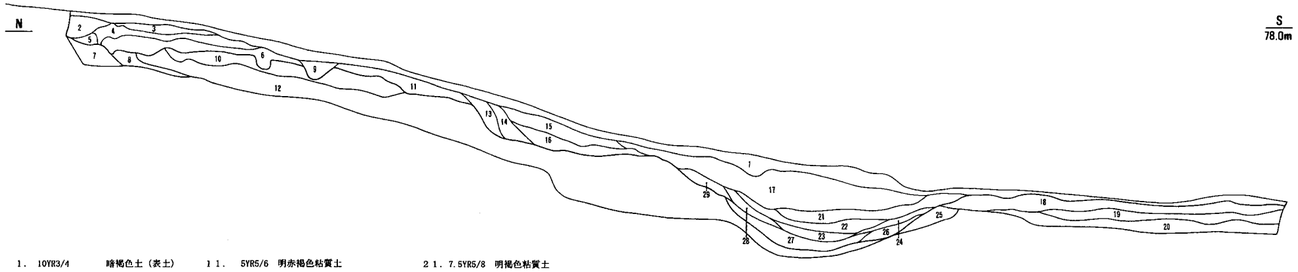
ＳＨ35（第43図・写真38）　２号墳の盛土確認のため、東西方向に断ち割りを行ったが、その盛土下で検出した。根攪乱で全体の様相は判然としないが、おそらく竪穴住居の北西隅と南東隅の一部を確認したものと思われる。なお、出土遺物はない。

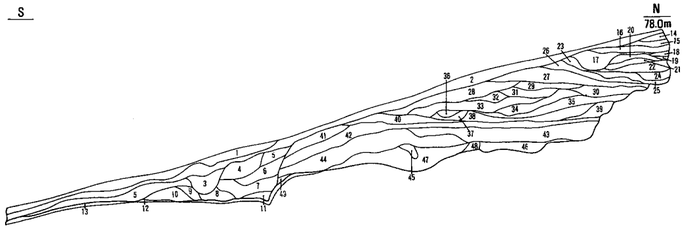


第43図　ＳＨ27・ＳＨ33・ＳＨ34・ＳＨ35平面図・断面図（１：50）



1：10YR3/4　暗褐色土（腐食土）
2：7.5YR5/8　明褐色砂質土
3：5YR4/6　赤褐色粘質土
4：7.5YR4/6　褐色粘質土
5：10YR4/6　褐色砂質土
6：5YR5/6　明赤褐色粘質土
7：10YR5/8　黄褐色粘質土
8：5YR5/6　明赤褐色粘質土
9：7.5YR5/8　明褐色砂質土
10：10 YR6/4　鈍黄橙砂質土
11：10 YR5/8　黄褐色粘質土
12：10 YR6/8　明黄褐色砂質土
13：7.5YR6/4　鈍橙色粘質土
14：10 YR4/4　褐色粘質土
15：7.5YR6/6　橙色砂質土
16：5YR4/6　赤褐色砂質土
17：5YR5/6　明赤褐色粘質土
18：7.5YR4/6　褐色砂質土
19：7.5YR4/6　褐色粘質土
20：5YR5/8　明赤褐色砂質土
21：7.5YR5/8　明褐色粘質土
22：10YR6/8　明黄褐色粘質土（礫を含む）
23：7.5YR6/6　橙色砂質土
24：2.5 Y7/3　浅黄色砂質土
25：10YR6/8　明黄褐色粘質土
26：7.5YR6/8　橙色粘質土
27：10YR6/8　明黄褐色粘質土
28：10YR5/8　黄褐色砂質土
29：10YR5/8　黄褐色砂質土（礫を含む）
30：10YR5/8　黄褐色砂質土
31：10YR6/8　明黄褐色砂
32：2.5 Y7/4　浅黄色砂
33：10YR6/8　明黄褐色砂質土
34：10YR5/6　黄褐色砂
35：10YR5/6　黄褐色砂質土
36：10YR5/6　黄褐色砂
37：2.5 Y7/4　浅黄色砂
38：2.5 Y7/6　明黄褐色砂
39：10YR5/8　黄褐色砂質土
40：10YR5/8　黄褐色砂質土
41：2.5 Y6/2　灰黄色砂
42：10YR5/6　黄褐色砂質土
43：5YR5/8　明赤褐色粘質土
44：2.5 Y6/6　明黄褐色砂
45：10YR5/8　黄褐色粘質土
46：10YR6/6　明黄褐色砂
47：7.5YR5/8　明褐色粘質土
48：2.5 Y6/4　鈍黄色砂
49：7.5YR5/6　明褐色粘質土
50：2.5 Y7/3　浅黄色砂
51：10YR5/6　黄褐色砂
52：10YR6/3　鈍黄橙色砂
53：2.5 Y5/3　黄褐色砂
54：2.5 Y5/3　黄褐色砂
55：2.5 Y5/4　黄褐色砂
56：10YR6/3　鈍黄橙色砂
57：10YR7/4　鈍黄橙色砂
58：10YR5/8　黄褐色砂
59：5YR6/6　橙色砂質土
60：7.5YR7/4　鈍橙色粘質土（礫を含む）
61：10YR6/8　明黄褐色砂質土
62：10YR7/8　黄橙色砂質土
63：2.5YR6/6　明黄褐色砂
64：2.5 Y6/6　明黄褐色砂
65：5YR5/6　明赤褐色砂質土
66：10YR5/8　黄褐色砂
67：7.5YR6/6　橙色粘質土（礫を含む）
68：10YR7/6　明黄褐色砂
69：7.5YR5/6　明褐色砂質土（流出土）
70：7.5YR5/6　明褐色砂質土（流出土）
71：7.5YR6/4　鈍橙色砂質土（流出土）
72：7.5YR5/8　明褐色粘質土
73：10YR5/8　黄褐色粘質土
74：10YR6/6　明黄褐色砂質土
75：10YR5/6　黄褐色粘質土（礫を含む）
76：7.5YR5/8　明褐色粘質土
77：10YR6/8　明褐色砂質土
78：10YR5/8　黄褐色粘質土
79：7.5YR5/8　明褐色粘質土
80：10YR5/8　黄褐色粘質土（礫を含む）
81：5YR6/6　橙色砂質土
82：7.5YR5/8　明褐色粘質土
83：7.5YR5/6　明褐色粘質土（礫を含む）
84：7.5YR5/6　明褐色粘質土
85：10YR5/8　黄褐色砂質土
86：5YR5/8　明赤褐色粘質土（礫を含む）
87：10YR5/6　黄褐色粘質土
88：7.5YR5/6　明褐色粘質土
89：7.5YR4/6　褐色粘質土
90：10YR3/3　暗褐色粘質土（弥生土器包含）
91：7.5YR5/8　明褐色粘質土
92：10YR5/6　黄褐色粘質土（攪乱層）
93：7.5YR5/6　明褐色粘質土
94：10YR5/6　黄褐色粘質土
95：10YR7/8　黄橙色粘質土
96：7.5YR6/8　橙色粘質土
97：7.5YR5/6　明褐色粘質土
98：7.5YR5/8　明褐色粘質土
99：7.5YR6/8　橙色粘質土
100：10YR5/8　黄褐色土（攪乱層）
101：7.5YR5/6　明褐色砂質土
102：7.5YR5/8　明褐色粘質土
103：7.5YR5/6　明褐色粘質土
104：10YR1.7/1　黒色土（炭化物層）
105：7.5YR5/8　明褐色砂質土
106：7.5YR5/6　明褐色砂質土
107：10YR6/6　明黄褐色粘質土（弥生土器包含）
108：10YR6/8　明黄褐色粘質土（礫を含む）
109：10YR5/8　黄褐色粘質土
110：10YR5/8　黄褐色粘質土
111：7.5YR5/6　明褐色粘質土
112：7.5YR4/6　褐色粘質土（弥生土器包含）
113：10YR4/6　褐色粘質土
114：10YR5/6　黄褐色粘質土
115：10YR5/6　黄褐色粘質土（礫を含む）
116：10YR5/6　黄褐色粘質土
117：10YR6/8　明黄褐色砂質土
118：7.5YR5/6　明褐色粘質土
119：5YR5/8　明赤褐色粘質土
120：7.5YR5/6　明褐色粘質土
121：10YR5/8　黄褐色粘質土（礫を含む）
122：7.5YR5/8　明褐色粘質土（礫を含む）
123：5YR5/6　明赤褐色粘質土
124：7.5YR6/8　橙色砂質土
125：7.5YR5/8　明褐色粘質土
126：7.5YR5/6　明褐色粘質土（礫を含む）
127：7.5YR5/8　明褐色粘質土
128：5YR4/8　赤褐色粘質土
129：10YR5/8　黄褐色粘質土
130：5YR4/8　赤褐色粘質土
131：10YR5/8　黄褐色粘質土
132：5YR4/8　赤褐色粘質土
133：7.5YR5/6　明褐色粘質土
134：7.5YR5/6　明褐色粘質土
135：7.5YR5/6　明褐色粘質土



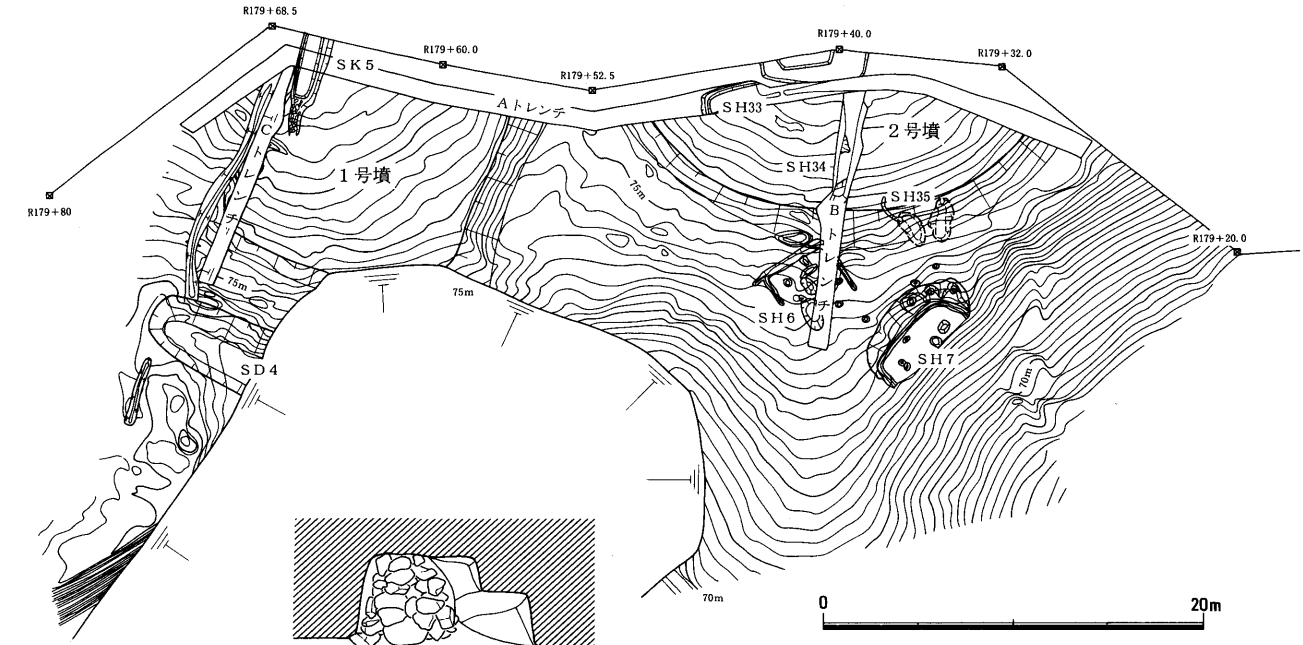


1．10YR3/4　暗褐色土（表土）
2．10YR5/6　黄褐色土
3．7.5YR5/6　明褐色砂質土
4．10YR6/6　明黄褐色砂質土
5．5YR5/8　明赤褐色粘質土
6．5YR5/8　明赤褐色粘質土
7．7.5YR5/8　明褐色粘質土
8．10YR5/6　黄褐色粘質土
9．7.5YR5/8　明褐色粘質土
10．5YR4/8　赤褐色粘質土
11．5YR5/6　明赤褐色粘質土
12．10YR6/8　明黄褐色砂質土
13．7.5YR5/8　明褐色粘質土
14．10YR6/6　明黄褐色粘質土
15．10YR5/6　黄褐色粘質土（礫を含む）
16．10YR6/6　明黄褐色砂質土
17．10YR5/6　黄褐色粘質土
18．5YR5/8　明褐色砂質土
19．7.5YR5/8　明褐色砂質土
20．10YR7/3　鈍黄橙色粘質土
21．7.5YR5/8　明褐色粘質土
22．7.5YR5/6　明褐色粘質土
23．7.5YR3/1　黒褐色粘質土
24．7.5YR4/6　褐色粘質土
25．7.5YR6/8　橙色粘質土
26．7.5YR5/6　明褐色粘質土
27．10YR5/6　黄褐色粘質土
28．10YR4/6　褐色粘質土
29．10YR5/8　黄褐色粘質土

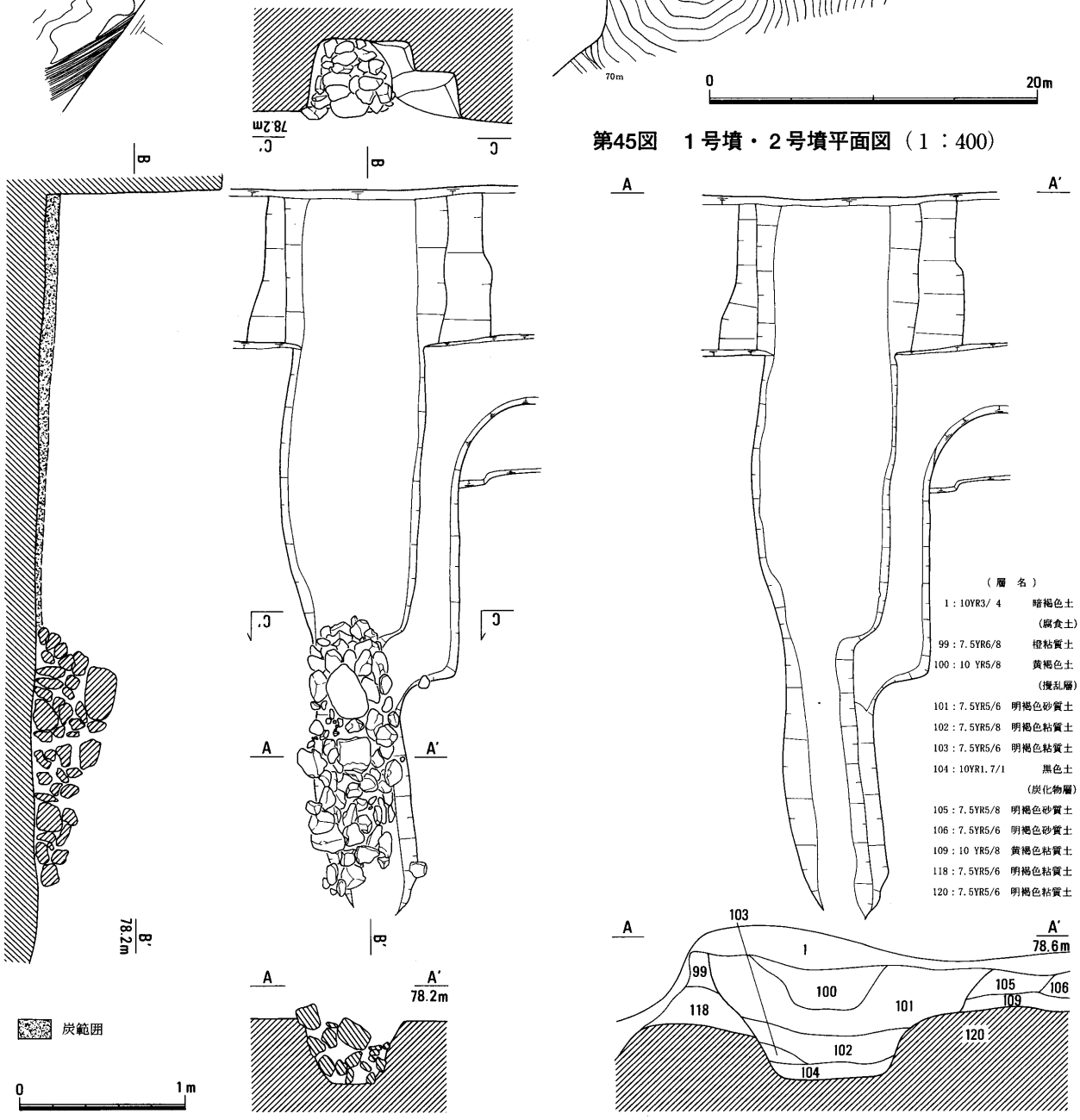
1．暗褐色土（表土）
2．暗褐色土（表土）
3．10YR4/6　褐色砂質土
4．10YR4/6　褐色粘質土（礫を含む）
5．10YR4/4　褐色粘質土
6．7.5YR3/2　褐色粘質土
7．7.5YR4/6　褐色砂質土
8．7.5YR5/8　明褐色砂質土
9．2.5YR5/8　明赤褐色砂質土
10．7.5YR3/2　黒褐色粘質土（弥生土器含む）
11．7.5YR4/4　褐色粘質土
12．7.5YR5/6　明褐色粘質土
13．2.5YR5/8　明赤褐色砂質土
14．10YR4/4　褐色砂質土
15．10YR3/3　暗褐色粘質土
16．10YR4/4　褐色粘質土（礫を含む）
17．2.5YR7/6　明黄褐色砂
18．7.5YR7/8　黄橙色砂質土
19．2.5Y7/6　明黄褐色砂
20．7.5YR7/8　黄橙色砂
21．2.5Y7/6　明黄褐色砂
22．10YR8/1　灰白色砂
23．7.5YR5/8　明褐色粘質土（礫を含む）
24．2.5Y6/8　明黄褐色砂
25．2.5Y6/4　鈍黄色砂
26．2.5Y7/6　明黄褐色砂
27．2.5YR5/8　明赤褐色砂
28．2.5YR5/4　鈍褐色砂質土
29．7.5YR5/6　明褐色砂
30．7.5YR6/8　橙色粘質土
31．7.5YR7/8　橙色砂質土（礫を含む）
32．10YR6/8　明黄褐色砂質土
33．10YR6/8　明黄褐色砂質土
34．7.5YR8/8　黄橙色砂質土
35．7.5YR5/8　明褐色粘質土
36．7.5YR6/8　橙色粘質土
37．7.5YR6/8　橙色粘質土（礫を含む）
38．7.5YR4/8　黄橙色砂質土
39．2.5YR5/8　明赤褐色砂
40．7.5YR6/8　橙色粘質土（礫を含む）
41．7.5YR4/4　褐色粘質土
42．10YR3/4　暗褐色粘質土（遺物包含）
43．10YR5/1　黄褐色粘質土
44．10YR5/6　黄褐色粘質土
45．7.5YR5/8　明褐色粘質土
46．10YR5/6　黄褐色粘質土
47．7.5YR5/8　明褐色粘質土
48．10YR5/8　黄褐色粘質土

0　10m

第44図　1号墳・2号墳土層断面図（1：200）



第45図　１号墳・２号墳平面図（１：400）



第46図　ＳＫ５平面図・土層断面図（１：40）

c　墳丘墓

標高約78mの丘陵の頂部で東西方向に並んで、2基の墳丘墓を検出した。ともに墳丘の北側の半分以上は調査区外になる。

1号墳（第44・45図・写真39・40）　西尾根の最高所、標高は約78mに位置する。規模は一辺約20mで方形状を呈すると思われる。なお、南東隅部分は流出されてやや突出した部分が残り、西側約3分の1は昭和時代の尾根道により削平を受ける。また、墳丘南側の西尾根部分に、後述する東西方向のＳＤ４が掘削されており、墳丘高が強調されている。

墳丘の裾部分は、地山を削り出して整形を行い、墳丘の中央部分は、弥生時代後期の土器を含む明黄褐褐色粘質土の上に、橙色あるいは明褐色粘質土、明褐色砂質土などで約0.5mの盛土を行っている。

ＳＫ５（主体部）（第46図・写真41～43）

墳頂部のやや西よりで、南北方向の土坑を検出した。幅約1.2 m、長さ約2.5 m以上あるが、北側は路線外に延びる。土坑の床面全体には、厚さ約5cmの炭の層が存在する。この遺構に伴う遺物は出土せず、明確な時期は不明であるが、位置から考えて主体部と思われる。

また、この土坑の南側に人頭大程度の礫を含む溝を約1.8 m検出した。土坑側の石は4段程度積まれて閉塞されている様な状況が見受けられるが、その他の石は乱積みである。主体部に伴う排水施設の可能性が考えられる。

1号墳流出土出土遺物（第48図・写真98）

壷（144・145）　145は、小型の丸底の壷で、口縁端部が若干欠損する。

甕（146）　短い台の部分の破片である。

高杯（147）　小型で円錐状を呈する脚部の一部である。円形の穿孔が3ヶ所に施される。

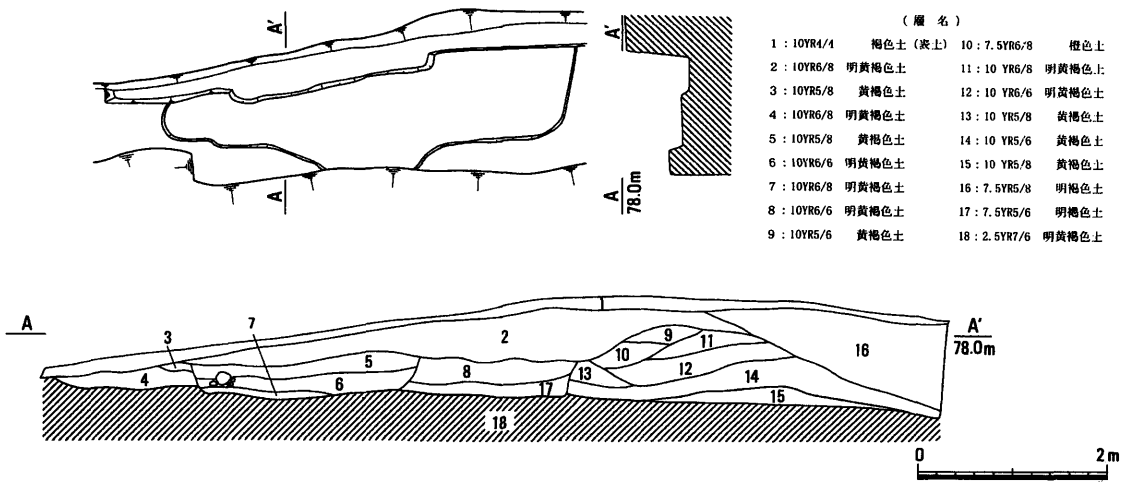
2号墳（第44・45図・写真45～50）　1号墳の東、中央尾根と東尾根の分岐点に位置する。1号墳でも確認された弥生時代後期の土器を含む暗褐色粘質土の上に、明黄褐色などの砂（粗砂）・黄褐色砂質土・赤褐色粘質土（礫を含む）などを何層も交互に重ねながら、約2.5 mの盛土を行い、1号墳とほぼ同じ高さにしている。

盛土中の土層に2回水平になる部分が確認でき、大きく3段階に分けて築造された可能性がある。この盛土中にも後期の土器細片が含まれている。

規模は直径約20mの円形を呈すると思われるが、調査区外の北東部分には、幅約15m、長さ約20mの長方形状の平坦な部分が存在する。

主体部？（第47図・写真44）

墳頂部のやや西よりで、主体部と思われる東西方向の土坑と掘り方を検出した。土坑は長さ約2.2 m、残存の幅は約30cm、深さは約60cmである。掘り方は長さ約4.4m、幅は約1.2m、深さは約50cmである。平面での検出は、共に土色・土質など明瞭な輪郭を見出すことは困難であったが、断面での観察で遺構の確認ができたのが実態である。

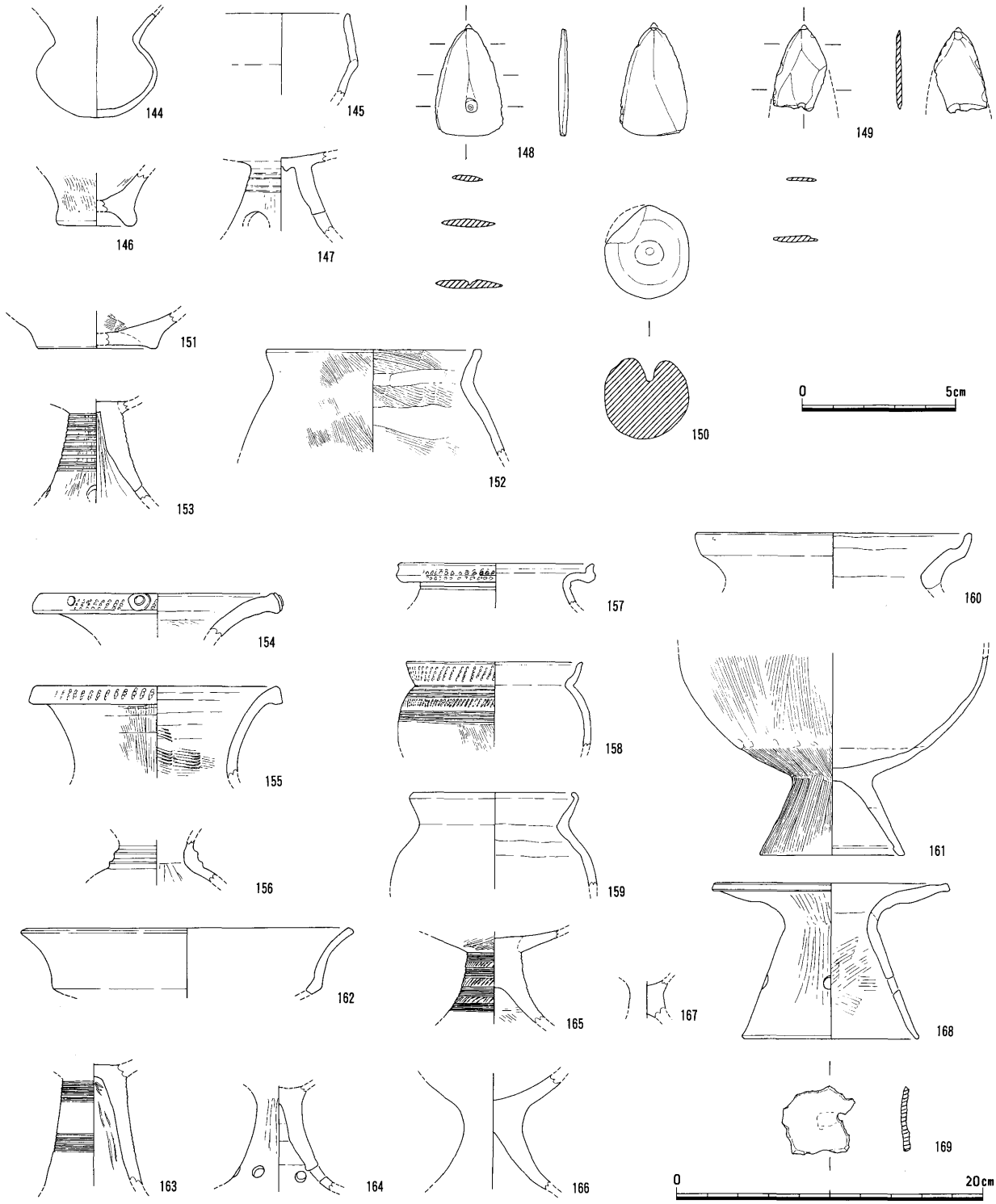


第47図　2号墳主体部平面図・土層断面図及び断面図（1：80）

出土遺物（第48図･写真97）　主体部と思われる部分を検出中に、磨製石鏃２点、土玉１点と弥生土器の細片が出土した。また、墳丘の盛土からも弥生土器の細片が数点出土したが、図示し得たのは壷・甕・高杯の３点である。なお、２号墳の流出土から多くの遺物が出土した。器種には、壷・甕・高杯・器台・不明鉄製品などがある。

主体部出土遺物（第48図・写真97）

磨製石鏃（148・149）　148は、緑白色をした蛇紋岩系と思われる無茎の石鏃である。中央よりやや下で、片面から穿孔されるが、貫通はしていない。ほぼ完形である。149は、同じく無茎の石鏃であるが、先端部分の約２分の１の残存である。穿孔がなされているが貫通しているかどうか不明である。



第48図　１号墳流出土・２号墳主体部・盛土・流出土出土遺物（148～150は１：２、その他は１：４）
（144～147は１号墳流出土、148～150は２号墳主体部、151～153は２号墳盛土、154～169は２号墳流出土）

土玉（150）　直径2.8cm。一部が窪み、穿孔の途中のように見える。石鏃・土玉の違いはあるが、主体部からの出土遺物のいずれも、穿孔が貫通していないことは興味深い。

２号墳盛土出土遺物（第48図）

壷（151）　平底で、やや厚手のものである。

甕（152）　ゆるやかに短く「く」の字に開き、端部に面を持つ。

高杯（153）　円柱状の脚部で、裾部が大きく開き気味になる。

２号墳流出土出土遺物（第48図・写真97～98）

壷（154～156）　口縁部が大きく開き、端部を厚くさせる（154）には円形浮文が施される。155は、口縁端部に刻み目を施し、156は頸部に凸帯がなされる。

甕（157～161）　口縁端部に段を有するものが多く、中でも（157）は大きく開き、さらに上方へも大きく屈曲させ、刻み目を施す。

高杯（162～167）　162は、口縁部を緩やかに外反させ端部に面を持つ。脚部が円柱状のものが多いが、165の脚部は断面が厚みをもち、外面に刻み目の後、横線文を施す。

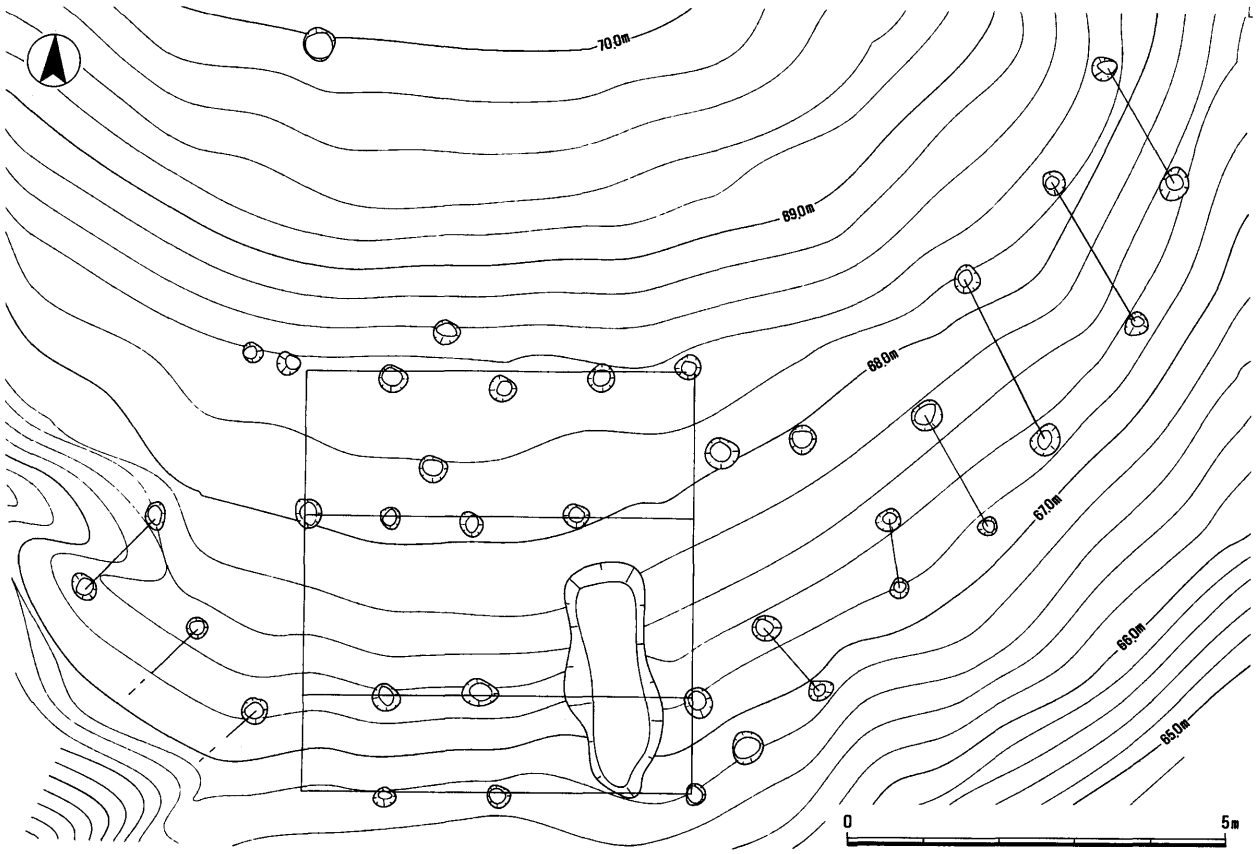
器台（168）　大きく開く口縁部から、直線的に「ハ」の字の脚部になる。脚部中央に円形の穿孔が４ヶ所施される。

不明鉄製品（169）　幅4.5cm、残存の長さ4.7cm、厚さ0.4cmの不定形の板状を呈する。中央に円形の穿孔がなされているようである。用途は不明である。

ｄ　溝（ＳＤ４・17・26・28・31・32）

多くは東尾根で検出されたが、その性格は各々場所によって異なるものと思われる。明確に溝として掘削を行ってしまったが、高地性集落にしばしば見受けられる、段状の整形痕跡（段状遺構・地山整形遺構・地山切りこみ遺構などと呼ばれている）である可能性のものや、竪穴住居などの遺構の残骸もあろうかと思われる。

ＳＤ４（第45図・写真51）　１号墳の南側で検出した。西尾根を切断する形で掘削され、より１号墳の高まりが強調される。幅4.6m、残存の深さは1.2mである。前述の環壕としている溝の断面と比較すると緩やかである。標高の違いもあり、１号墳に関連する



第49図　柱穴群平面図（１：100）

溝と考えられる。

出土遺物（第42図・写真97） 溝の埋土底近くから甕の底部が出土したに止まる。

甕（141） 厚手の器壁で、平底である。

ＳＤ17（第６図） 中央尾根の柱穴群上方で検出した。幅０.55m、深さ０.04m、長さ１.65mである。

出土遺物（第42図・写真98） 図示し得たのは、甕（142・143）の２点である。142の口縁部は、短く大きく外反させた後、上方へつまみあげ、丸くおさめる。143は、やや大型の甕で平底を呈する。

ＳＤ26（第６図・写真52） 東尾根でＳＨ18とＳＨ19の間で検出した。緩やかな孤状を呈する。残存の悪い竪穴住居の周溝の可能性も考えられる。出土遺物はない。

ＳＤ28（第６図・写真52） ＳＤ26の南で検出した、幅0.4m、深さ0.2mの溝である。ほぼ直線で約２ｍあるが、場所がＳＨ18の南側で平行な位置関係でもあり、竪穴住居に関連する可能性もある。出土遺物はない。

ＳＤ31（第６図） ＳＨ24の西側で検出した幅0.3m、深さ0.2mの溝である。ＳＤ28同様の形状で、約５ｍの長さである。出土遺物は、極少量の土器細片に止まる。

ＳＤ32（第31図） ＳＨ19の南側、排水溝に直交し取り付く形で検出した。幅0.4m、深さ0.2m、長さ5.5mである。ＳＤ28とＳＨ18との関係と同様の性格、もしくは、より下方の遺構へ雨水などが流れ込まさせないような機能の可能性もある。出土遺物は、極少量の土器細片に止まる。

ｅ　柱穴群（第49図・写真55）

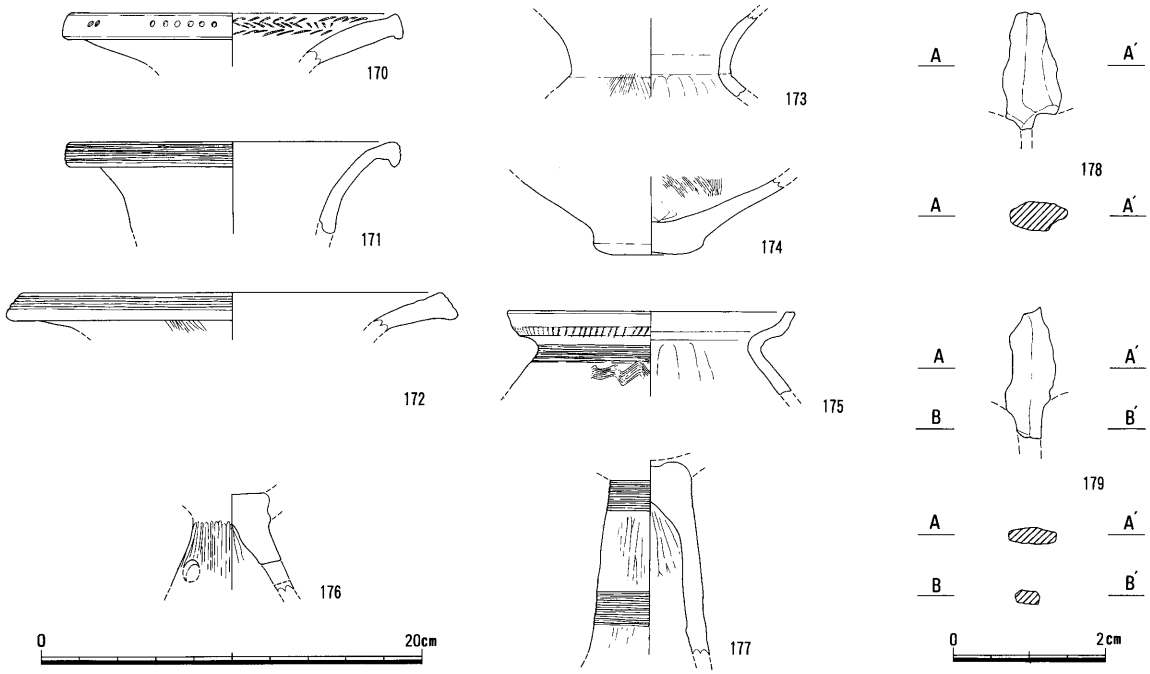
中央尾根の中腹、標高約68m前後の場所で40個程度の柱穴が検出された。柱穴は直径25～30cm、残存の深さは約30cmで、垂直に掘削される。尾根の稜線を削平し、平坦な面を造りだしている状況が見られ、この部分の柱穴群は東西方向に直線に並び、４間×３間の物見やぐら的な建物と想定される。

また、この建物の東と西側の柱穴群は、丘陵の斜面に等高線に沿って、弧を描く様に２個ずつ対に並ぶ。両側から建物に階段状に上がるための柱、もしくは建物に伴う二重の柵列のいずれかの可能性が考えられる。

出土遺物　この柱穴群の中からの明確な遺物はないが、検出中に弥生土器の細片が若干出土した。

ｆ　その他の遺構

東尾根のＳＤ29の北西上方、Ｐ－35地区で、こぶし大の礫を多く含む場所が存在した。規模にして約１ｍ四方であった。遺構か礫層の露出かの検討をして検出に努めたが、礫はすべて自然石（加工品はない）と判断し、遺物としての取り上げは行わなかった。スナップ写真撮影（写真53）だけ行い、図化作



第50図　東尾根包含層・遺構検出中出土遺物（178・179は１：１、その他は１：４）

業を怠ってしまった。他の高地性集落でしばしば見受けられる投石（つぶて石）の集石遺構であった可能性もある。

東尾根遺構検出中出土遺物（第50図・写真98）　東尾根の竪穴住居や溝などの遺構検出中の遺物を掲載した。器種には壷・甕・高杯・銅鏃などがある。

壷（170～174）　口縁部は大きく開くものが多く、端部を肥厚させる。170の口縁端部の内面には、刻み目を交互に施す。

甕（175）　口縁部は緩やかな段を有し、端部は面を持つ。

高杯（176・177）　脚部が小さく「ハ」の字に開くもの（176）と、長く円柱状を呈し横線文を２段施すもの（177）がある。

銅鏃（178・179）　２点ともに摩滅が著しく原型は留めていない。前述SD23の遺構検出中に、その上面で出土した。SD23に伴うものか、それより上部からの流れ込みかは不明である。　（服部芳人）

遺構名	規模（m）		面積（m²）	柱間（m）		主軸方向	炉	備考
	東西	南北		東西	南北			
ＳＨ６	3.9	(3.5)	13.65	—	—	N18°W	中央	南側以外の三方に周溝
ＳＨ７	5.7	(2.2)	(12.54)	2.9	—	N33°W		南東部分大半流出
ＳＨ９	3.8	(2.4)	(9.12)	—	—	N21°W		北側のみ若干残存
ＳＨ16	(1.6)	(1.6)	(2.56)	1.8	—	N４°W		北西部分のみ残存
ＳＨ18	6.0	4.7	28.20	2.3	2.2	N25°W		主柱穴各２本ずつ
ＳＨ19	5.7	5.1	29.07	2.8	2.7	N15°W	中央西	焼失住居・銅鐸片出土
ＳＨ22	7.0	—	-	3.9	—	N12°W		ＳＨ30によって切られる
ＳＨ24	4.0	(3.0)	(12.00)	1.6	1.4	N26°W	中央北	南側以外の三方に周溝
ＳＨ27	(1.8)	(2.4)	(4.32)	—	—	N17°W		南西部隅のみ検出
ＳＨ30	6.4	5.3	33.92	2.6	2.4	N12°W		
ＳＨ33	3.8	—	-	—	—	N５°W		２号墳下層で検出
ＳＨ34	(0.5)	(1.3)	(0.65)	—	—	N６°W		２号墳下層で検出
ＳＨ35	(3.0)	(1.5)	(0.45)	—	—	N25°W		２号墳下層で検出

第４表　竪穴住居一覧表

No	遺跡名	所在地	数	形式	備考	文献
1	西金井	桑名市西金井	1	円基無茎	発掘	1
2	野々田	大安町石榑	1	欠損不明	表採	2
3	西ヶ広	四日市市伊坂町	1	円基無茎短身	発掘	3
4	菟上	四日市市伊坂町	3	凹基無茎(1)　尖基無茎(1)　凸基有茎(1)	発掘	4
5	東沖	四日市市水沢町	1	平基無茎短身	表採	5
6	大道端	四日市市座間町	1	円基無茎長身	表採	6
7	大西野	四日市市南小松町	1	円基無茎短身	表採	7
8	椿一宮	鈴鹿市椿一宮町	1	――――	表採	8
9	東庄内Ｂ	鈴鹿市東庄内町	1	円基無茎短身	発掘	9
10	一反通	鈴鹿市上野町	43	平基無茎(11)　円基無茎(5)　尖基無茎(9) 凸基有茎(6)　凹基有茎(3)　細片不明(9)	発掘表採	10
11	納所	津市納所町	6	円基無茎長身(2)　平基無茎(1)　有基磨製石槍(1)	発掘	11
12	長	津市河辺町	3	平基無茎短身(2)　平基無茎長身(1)	発掘	12
13	和遅野	一志郡白山町	1	平基無茎有孔短身	表採	13
14	片野	一志郡一志町	1	凸基有茎長身	表採	14
15	岩内	多気郡明和町	1	――――	表採	15
16	ママ田	度会郡小俣町	1	平基無茎２孔有孔短身	表採	16
17	白浜	鳥羽市浦村町	1	有茎磨製石槍	発掘	17
18	源鳥４号	上野市依那具	1	――――	発掘	18

第5表　三重県内出土磨製石鏃一覧表

（註）岡田登「三重県鈴鹿市上野町一反通遺跡採集の磨製石鏃について」『史料』131号皇學館大學史料編纂所1994の（表２．三重県下の磨製石鏃）に一部加筆

*文献

1　渡辺・齋藤宇・水谷『西金井発掘調査報告書』桑名市教育委員会1993
2　岩野見司『考古学からみた北伊勢』三岐鉄道株式会社1956
　大安町教育委員会編『大安町史第一巻』1986
3　小玉・山澤・谷本『日本道路公団東名阪埋蔵文化財調査報告』日本道路公団名古屋支社・三重県文化財連盟1970
4　近畿自動車道名古屋神戸線(第二名神)愛知県境～四日市JCT『埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター（2000.3）・整理途中で増える可能性あり。
5　四日市教育委員会編『四日市市史第二巻資料編考古Ⅰ』1988
6　四日市教育委員会編『四日市市史第二巻資料編考古Ⅰ』1988
7　四日市教育委員会編『四日市市史第二巻資料編考古Ⅰ』1988
8　鈴木敏雄「磨製石鏃石槍発見地」『県内出土遺物一覧』（鈴木目録224番）
9　小玉・山澤・谷本『日本道路公団東名阪埋蔵文化財調査報告』日本道路公団名古屋支社・三重県文化財連盟1970
10　岡田登「三重県鈴鹿市上野町一反通遺跡採集の磨製石鏃について」『史料』131号皇學館大學史料編纂所1994
11　伊藤・吉水『納所遺跡』三重県教育委員会1980
12　津市埋蔵文化財センター池端清行氏御教示
13　津市教育委員会『故酒井萬馬氏の考古遺物１－石器編－』1980
14　吉村利男「原始・古代の一志町」『一志町史』上巻1981
15　鈴木敏雄「磨製石鏃石槍発見地」『県内出土遺物一覧』（鈴木目録224番）
16　岡田登氏表採資料
17　本浦遺跡調査会『白浜遺跡発掘調査報告』1990
18　三重県埋蔵文化財センター『平成３年度三重県埋蔵文化財センター年報３』1992

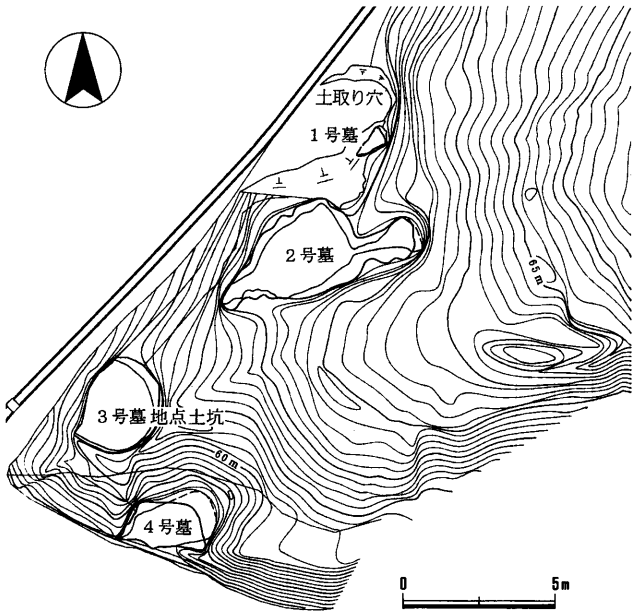
（２）古墳時代後期（飛鳥時代）

西尾根で横穴墓４基(全壊状態のもの１基を含む)と不明土坑１基、中央尾根で土壙墓２基とそれに類する土坑３基を検出した。人骨・須恵器・耳環・銀製空玉・ガラス小玉・刀子・鉄釘が出土した。

a　横穴墓（１～４号墓）

西尾根先端部付近（標高約60m）の西斜面や南端面で横穴墓４基を確認した。中位段丘堆積物および暮明累層の砂層の軟弱な地盤を掘り込んでいるため、天井部および側壁上部は崩落し、周囲上方から流れ込んだ土砂により、埋没していた。

なお、西尾根南東壁の標高61.５m付近には、ＳＫ37（第59図・写真75）がある。残存長3.2m、幅0.5m、西壁の立ちあがり0.3mを確認したが、大半が土取りにより破壊され、全体の形状は不明で、出土遺物は皆無である。横穴墓の可能性もあるが、遺構の性格を決定する材料があまりにも乏しいので、断定は避けておく。ただ、同じ南東壁で確認された最近の動物の巣とみられる穴とは明らかに違う、しまりのある埋土であった。



第51図　西尾根横穴墓測量図（１：250）

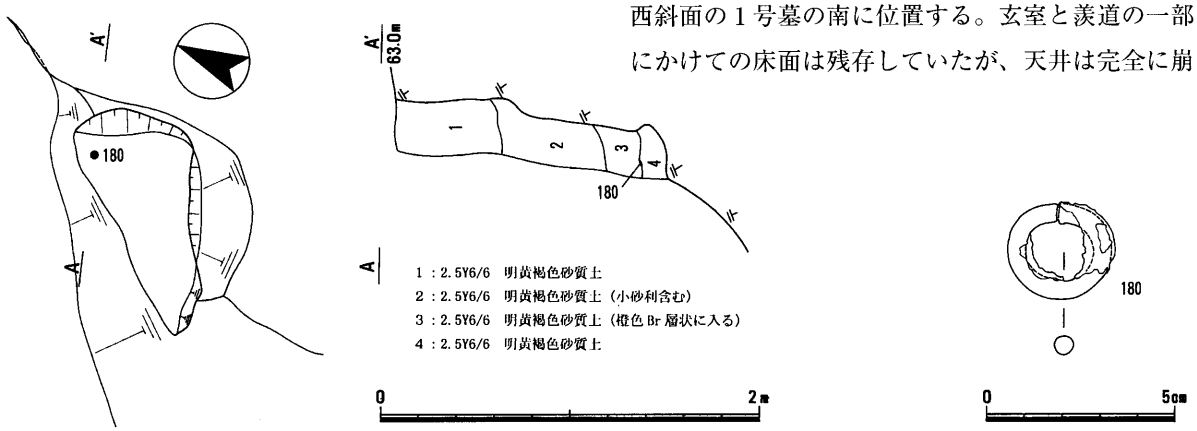
１号墓（概報での遺構番号ＳＸ12：第52図・写真58）

西尾根西斜面に位置する横穴墓のうち最も高所（北）に位置する。最近の土取りにより大きく損なわれており、土取りの崖面に僅かに玄室の一部が残存しているにすぎなかった。

他の横穴墓の形状・方向性から類推すると、残存部は玄室の右奥隅で、東側壁１m分×奥壁0.6 m分と考えられる。玄室床面は平坦で、壁は床上0.7 mまでは垂直に立ち上がるが、それ以上は崩れており、天井の形状は不明である。掘削床面の標高は61.5m。埋土は４層に分層できた。色調・混入物に若干の違いが認められるものの、基本的に橙色土塊を含む明黄褐色砂質土で、周囲の地山が崩壊し埋没したものと推測される。

出土遺物（第52図・写真100）　約15cmある最下層の上面から耳環が１点出土した(180)。耳環の周囲にのみ、やや粘質の茶褐色を呈する有機質のようなものが認められた。Ⅲ―（１）で触れたが、最近の土取りの際、この１号墓付近においてほぼ同形同大の耳環１点が採集されており（写真102)、本調査出土品と対をなすと考えられる。表面には緑青がふいており、Ｘ線写真の画像から、中実の銅芯に銀の薄板を巻き付けたものと推測される。

２号墓（ＳＸ13：第53～55図・写真60～67）　西尾根西斜面の１号墓の南に位置する。玄室と羨道の一部にかけての床面は残存していたが、天井は完全に崩



第52図　１号墓実測図（１：40）**・出土遺物実測図**（１：４）

落していた。奥壁右（東）隅にはさらに奥へ小穴が穿たれていた。その小穴は上方の地山が崩れ埋没していたが、元は直径20cmほどの断面円形を呈するトンネル状のものと思われる。掘削したところ、奥深くに入り込み、不規則に屈曲するため、動物による攪乱巣穴ではないかと推定される。

長さ3.1m、最大幅2.2mの平面略長方形を呈する玄室には、短辺のほぼ中央に羨道がとりつき、境には明瞭な袖が認められる。羨道は、検出面での幅0.6m、底面幅0.3m。残存長は1.5mにすぎないが、周囲を大きく土取りされているため、本来更に長かったと推測される。玄室と羨道の底面は、段差なく連続しており、羨道から奥壁へ向かって20cmほど緩やかに上昇している。玄門部に閉塞施設の痕跡は認められなかった。

埋土は、縦断面１面と横断面３面の断面観察により41層に分層したが、大半は天井および壁の崩落土と周囲の地山の流れ込みである。玄室床面直上の21層はほぼ均一に堆積しており、その上面では約20cm大の円礫が多数確認された。円礫は、奥壁から0.6mと2.0mの位置に、奥壁に平行して２列並べ、据え置かれたような状態で確認された。このことから、玄室を荒掘りした後に簡単な整地を行ない、棺台を設置したという手順が想定される。玄室を横断する土層断面で確認した34層については、その断面の形状から、排水溝の可能性を想定し、平面的な検出を試みたが、面的な広がりを持っておらず、排水溝とは考えられなかった。

出土遺物（第56図・写真100）　玄室構築時の整地土と考えられる21層の直上に堆積する19層から、人骨・装身具・鉄製品が出土した。

人骨の詳細については、Ｖ－（３）を参照されたいが、奥壁側の石列の奥で頭骨が２点（Ａ・Ｂ）並んで見つかったほか、羨道側の石列より入り口側の西壁寄りで別遺体の下顎骨と歯（Ｃ）が確認された。奥壁西側の頭骨（Ａ）は、頭蓋内の土色が有機物の変質したような茶褐色を呈していたほか、下顎骨付近の埋土に赤色を呈する場所があり、これはほぼ口腔から頸にあたる。また、頭骨以外には、石列間から四肢骨と考えられる骨が検出されている。

なお、玄室の東壁寄りには、さらに一体分の空間があるが、遺体が埋葬された痕跡は認められない。

鉄釘(220～229)は、石室内の３ヶ所にまとまりが認められ、フルイ掛けした埋土中のものを含めると、都合８本ほどが出土した。出土位置がわかる３ヶ所と、フルイ掛けした埋土のおよその位置を繋ぐと、Ｂの遺体を取り囲むような縦1.9m、横0.6m程の長方形を呈する。鉄釘に木質が付着していることからみて、Ｂの埋葬には木棺が使用されたのであろう。

副葬品としては、装身具と刀子が出土した。装身具には、Ａに伴う耳環１個(181)、Ｂに伴うガラス小玉32個(188～218)・銀製空玉５～７個(184～187)、Ｃに伴う耳環２個(182・183)がある。ガラス小玉と銀製空玉はBの首の位置から連なっていたような状態で出土した。刀子(219)は、フルイ掛けをした埋土から出土したため、原位置は不明である。

耳環３点は、いずれも１号墓のものと同様に中実で、銅芯に銀の薄板を巻きつけたものと推測される。

ガラス小玉は、すべて青色の丸玉。長径0.8cm前後、短径0.5～0.7cm程度のものが多いが、個体差が大きい。ほとんどが扁球形を呈するが、200のみ真球形で、色調も淡く他と異なる。

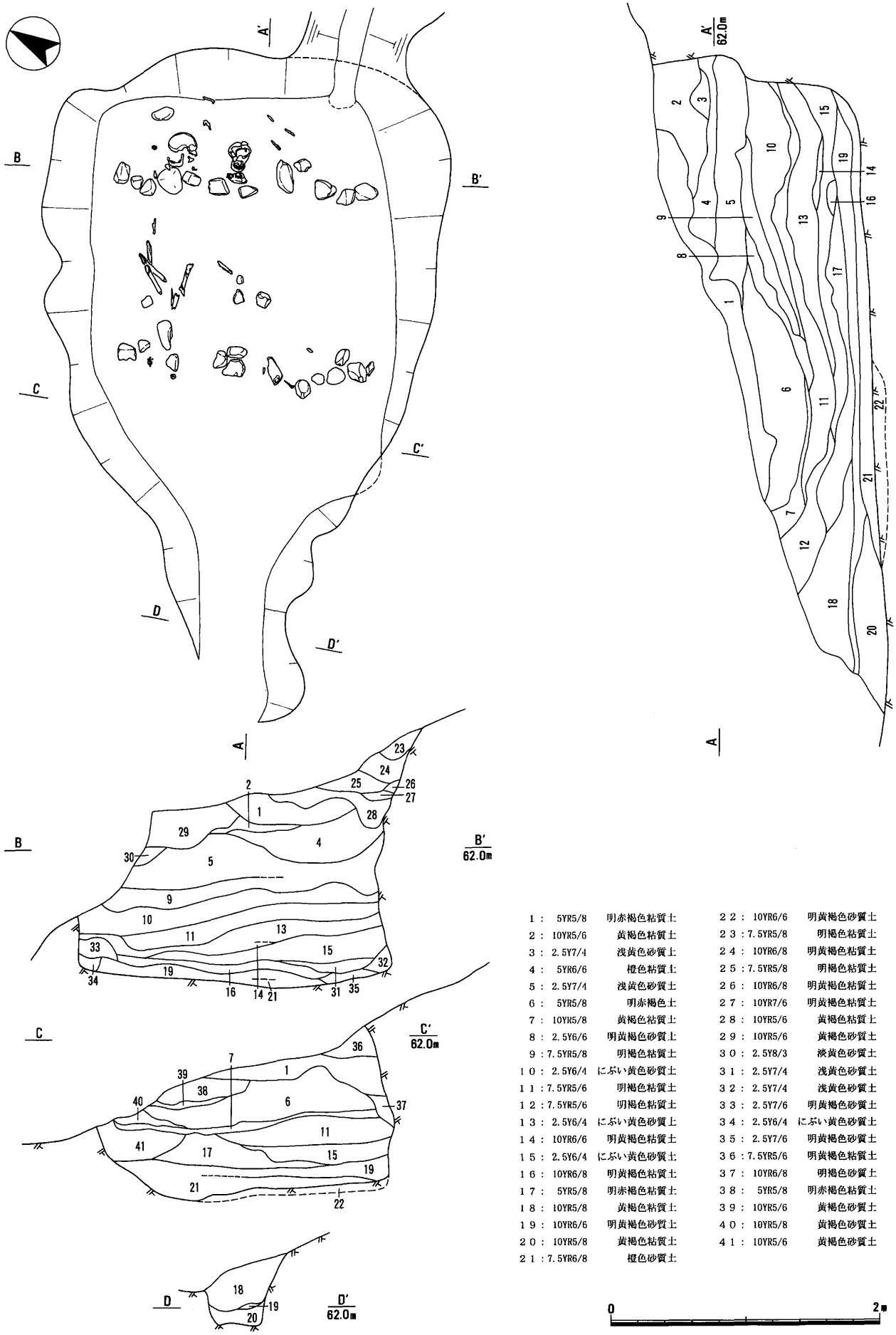
空玉は、非常に薄い銀板を八稜の半球形に型押しし、２枚をあわせた梔子形のものである。

３号墓地点土坑（ＳＸ14：第57図・写真68･69）　西尾根西斜面の南隅近くに位置する。床は直径約3.0mのいびつな円形で平坦である。埋土は、大半がセメントなどの攪乱土であるが、その下の旧表土と地山の間は地山類似土が認められた。

埋土の大半が攪乱土であることや、他の横穴墓の形とは異なることからは現代の土坑と考えられるが、前述のように、調査以前にこの場所でまとまった量の須恵器・土師器が採集されていること、床面が水平なことを勘案すれば、後世の改変は著しいものの横穴墓の名残と見ることは可能であろう。

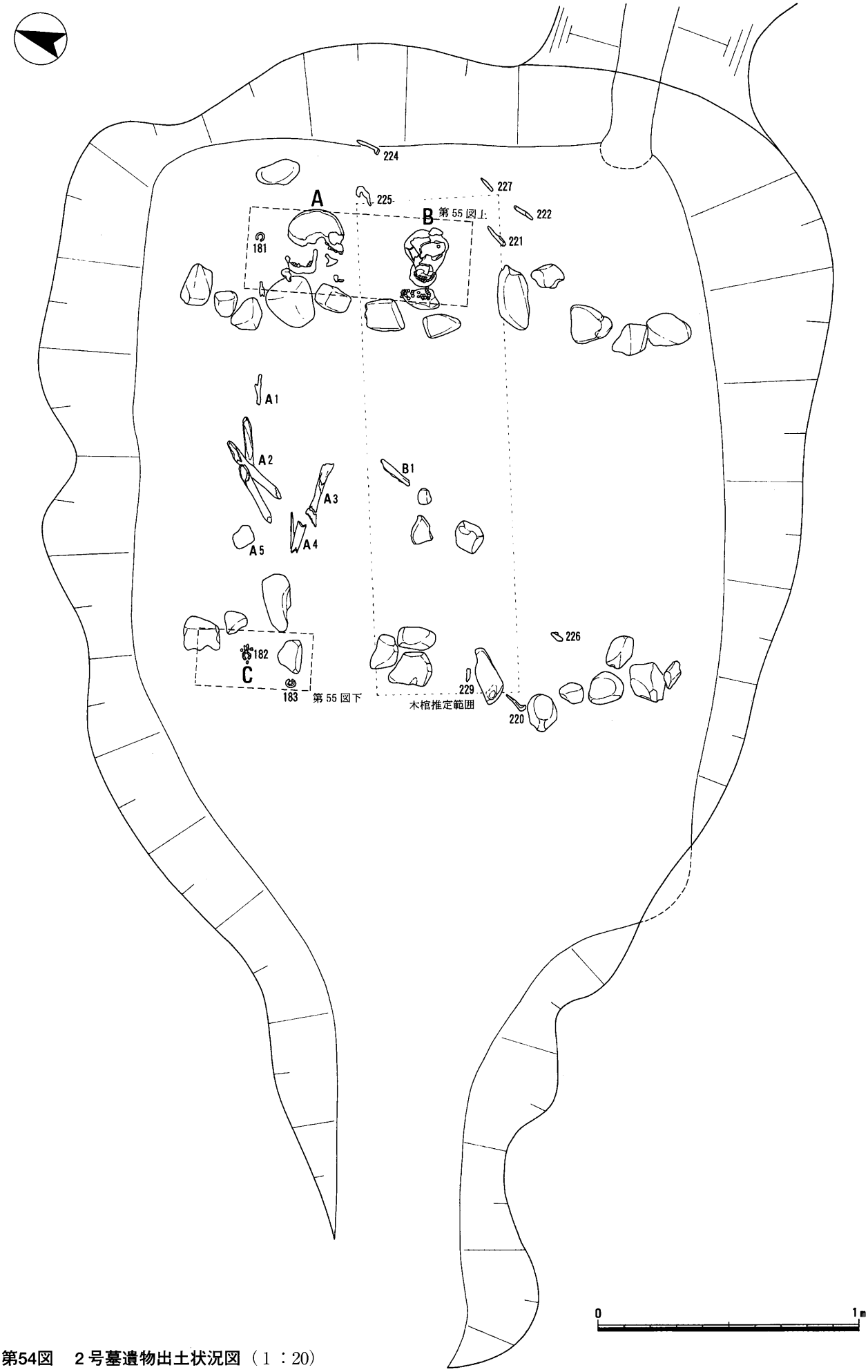
出土遺物（第57図・写真100）　床面直上から須恵器の高杯（230）・壺の破片が出土した。高杯は腰に稜の巡る杯部、壺はカキメの施された小破片で、まとめでも述べるが、以前採集されたものと同一個体である。

４号墓（ＳＸ15：第58図・写真70～74）　西尾根先端の崖面で検出された。玄室の大部分と羨道の一部に

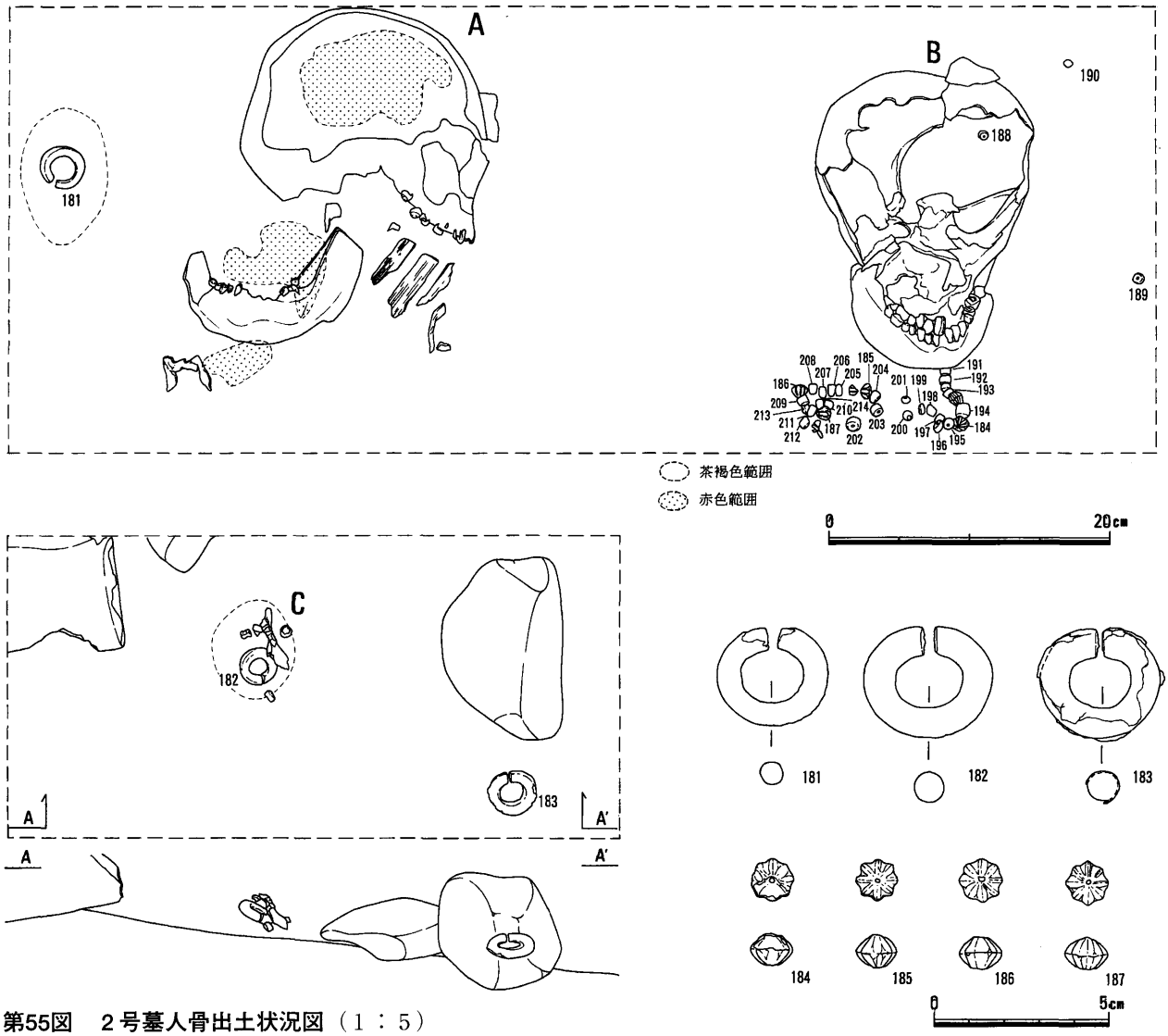


1： 5YR5/8	明赤褐色粘質土	22： 10YR6/6	明黄褐色砂質土
2： 10YR5/6	黄褐色粘質土	23：7.5YR5/8	明褐色粘質土
3： 2.5Y7/4	浅黄色砂質土	24： 10YR6/8	明黄褐色粘質土
4： 5YR6/6	橙色粘質土	25：7.5YR5/8	明褐色粘質土
5： 2.5Y7/4	浅黄色砂質土	26： 10YR6/8	明黄褐色粘質土
6： 5YR5/8	明赤褐色土	27： 10YR7/6	明黄褐色粘質土
7： 10YR5/8	黄褐色粘質土	28： 10YR5/6	黄褐色粘質土
8： 2.5Y6/6	明黄褐色砂質土	29： 10YR5/6	黄褐色砂質土
9：7.5YR5/8	明褐色粘質土	30： 2.5Y8/3	淡黄色砂質土
10： 2.5Y6/4	にぶい黄色砂質土	31： 2.5Y7/4	浅黄色砂質土
11：7.5YR5/6	明褐色粘質土	32： 2.5Y7/4	浅黄色砂質土
12：7.5YR5/6	明褐色粘質土	33： 2.5Y7/6	明黄褐色砂質土
13： 2.5Y6/4	にぶい黄色砂質土	34： 2.5Y6/4	にぶい黄色砂質土
14： 10YR6/6	明黄褐色粘質土	35： 2.5Y7/6	明黄褐色砂質土
15： 2.5Y6/4	にぶい黄色砂質土	36：7.5YR5/6	明黄褐色粘質土
16： 10YR6/8	明黄褐色粘質土	37： 10YR6/8	明褐色砂質土
17： 5YR5/8	明赤褐色粘質土	38： 5YR5/8	明赤褐色粘質土
18： 10YR5/8	黄褐色粘質土	39： 10YR5/6	黄褐色砂質土
19： 10YR6/6	明黄褐色砂質土	40： 10YR5/8	黄褐色砂質土
20： 10YR5/8	黄褐色粘質土	41： 10YR5/6	黄褐色砂質土
21：7.5YR6/8	橙色砂質土		

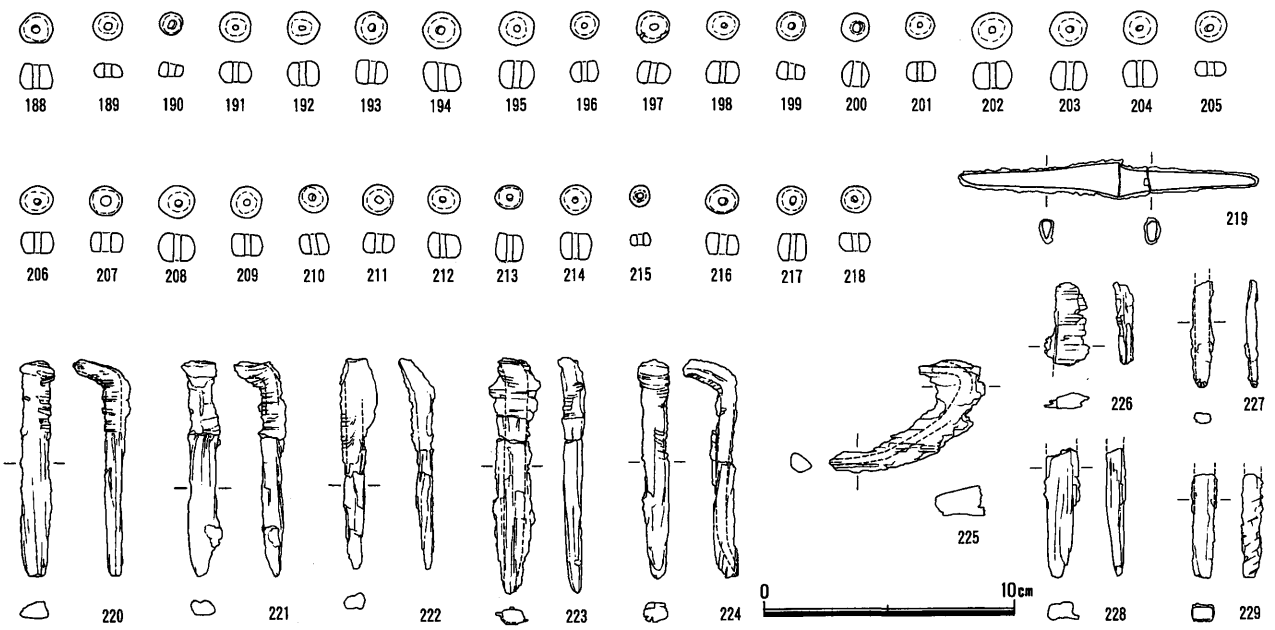
第53図　2号墓実測図（1：40）



第54図　２号墓遺物出土状況図（１：20）



第55図　２号墓人骨出土状況図（１：５）



第56図　２号墓出土遺物実測図（181～218は１：２、219～229は１：３）

かけての床面が残存していたが、天井は崩落していた。

玄室は、長さ2.5mで、最大幅1.6m。玄門付近が一部損なわれていたが、全体の平面形は奥壁側がやや広い羽子板形を呈する。玄室の短辺に羨道がとりつき、奥壁に向かって左側には明瞭な袖が認められるが、右側は損なわれており不明。明確な段差はないが、玄室床面は羨道床面より数cm高く、玄門から奥壁へ向かって20cmほど緩やかに上昇している。

埋土は玄室床上直上にきめの細かい粘質土（19・20層）が堆積しており、その上層は天井及び壁の崩落土と流入土である。19・20層の上面は、場所によって若干凹凸があるものの、玄室床面に置かれていた円礫の高さにほぼ揃っている。円礫は、掘削床面に直接置かれた状態で多数出土した。

出土遺物（第58図・写真100）　玄室から耳環（231）・須恵器平瓶（232）が出土した。

耳環は、奥壁近くで床面から数cm浮いた状態で２点、付近の土中から２点、合計４点出土した。いずれも錫製で、非常に劣化していたため、実測に耐え得るものは１点のみであった。

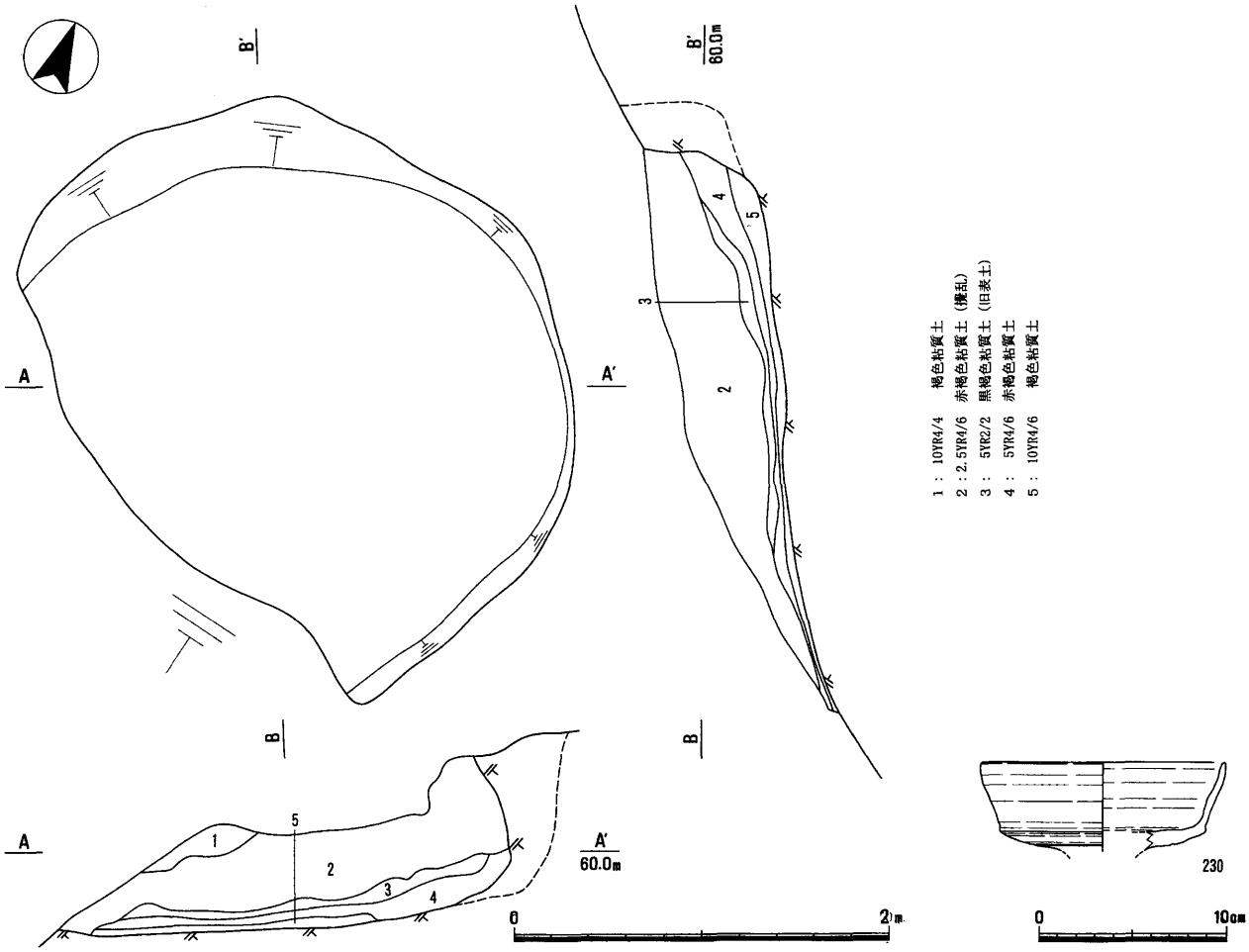
須恵器の平瓶は、玄室内南西隅から天地逆転した状態で出土した。頸部両脇の肩部に把手の痕跡が２つあるが、いずれも欠失している。

b　土壙墓（ＳＸ１・10、ＳＫ８・11・38）

中央尾根中腹の尾根筋上で土壙墓２基（ＳＸ１・10）と、それに類似する土坑３基（ＳＫ８・11・38）の合計５基を確認した。

ＳＸ１（第60図・写真78～81）　平面形は0.9m×0.8mの長方形を呈する。深さは最も残りのよい東側部分でも15cmにすぎず、西側の立ち上がりはほとんど残っていない。自然流出で遺構上面が大きく失われているため、本来の西端はさらに西側で、平面形はより長辺の長い長方形であった可能性もある。底面にはかなりの凹凸が認められる。

出土遺物（第60図・写真99）　東辺の中央付近で、蓋を被せた状態の須恵器蓋杯４組（233～240）が出土した。床面から５～10cm浮いた状態の出土である



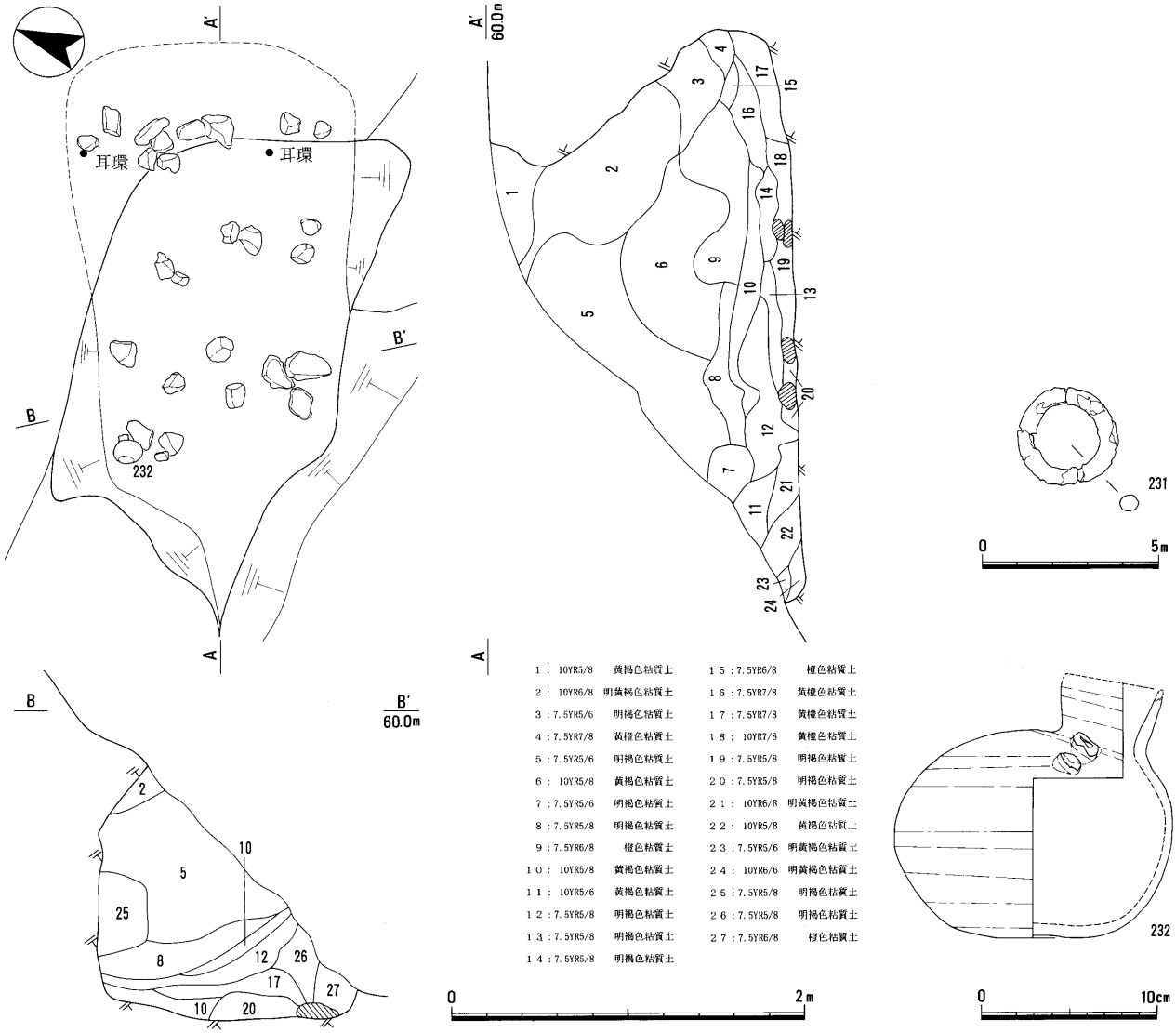
第57図　３号墓地点土坑実測図（１：40）**・出土遺物実測図**（１：４）

が、その部分の底面は周囲と比べて若干深くなっている。蓋杯は、蓋につまみと返りが付くもので、235･236は口縁部形状や胎土が他と異なる。

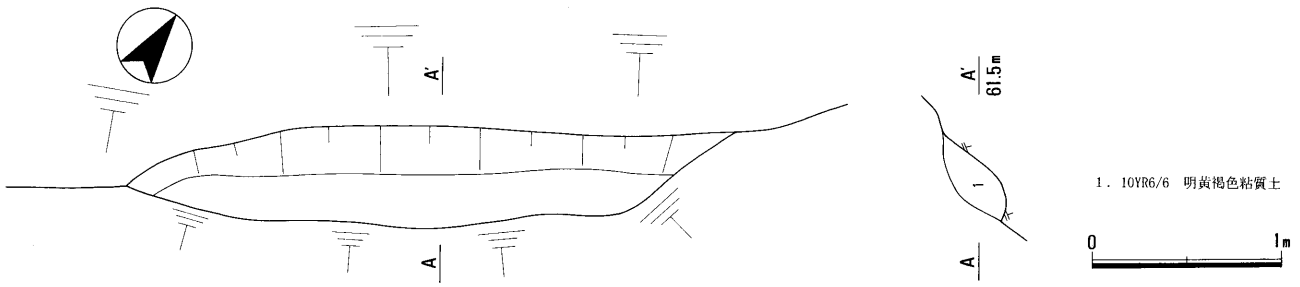
ＳＸ10（第60図）　平面形は、1.6m×1.0mの略長方形。この遺構も上面が激しく自然流出しており、検出面からの深さは30cmにすぎない。

出土遺物（第60図・写真101）　埋土から須恵器の平底の鉢（241）と小型の高杯（242）が出土した。

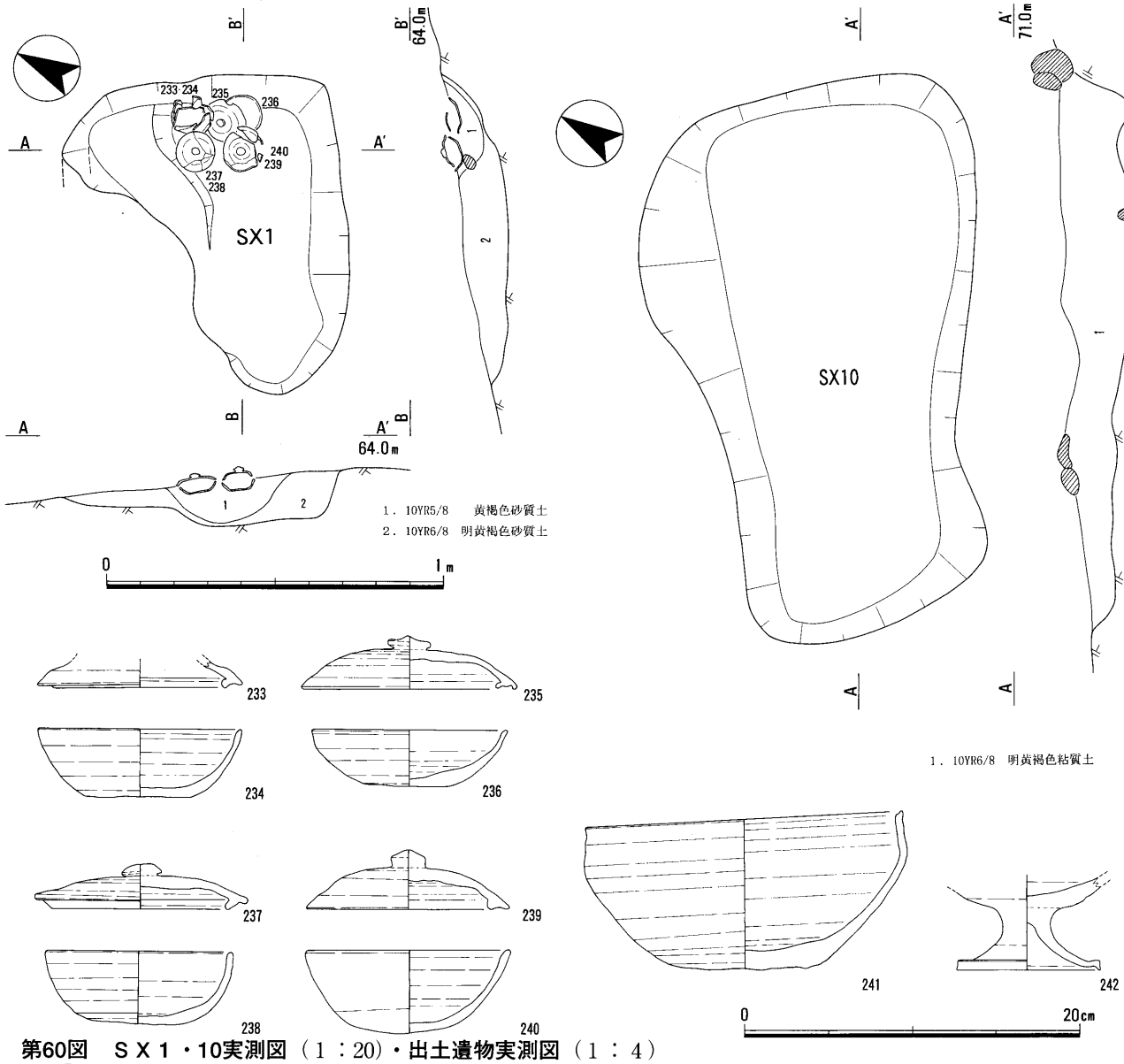
ＳＫ８・11・38（第61図）　ＳＫ８は2.3m×1.0m、ＳＫ11は1.6m×0.8m、ＳＫ38は3.5m×1.0mの平面が長方形を呈する土坑。明確な副葬品がないため、断定は避けたいが、ＳＸ１・10と形態的に類似しており、同じ中央尾根に位置していることなどからみて、土壙墓である可能性は十分に考えられる。



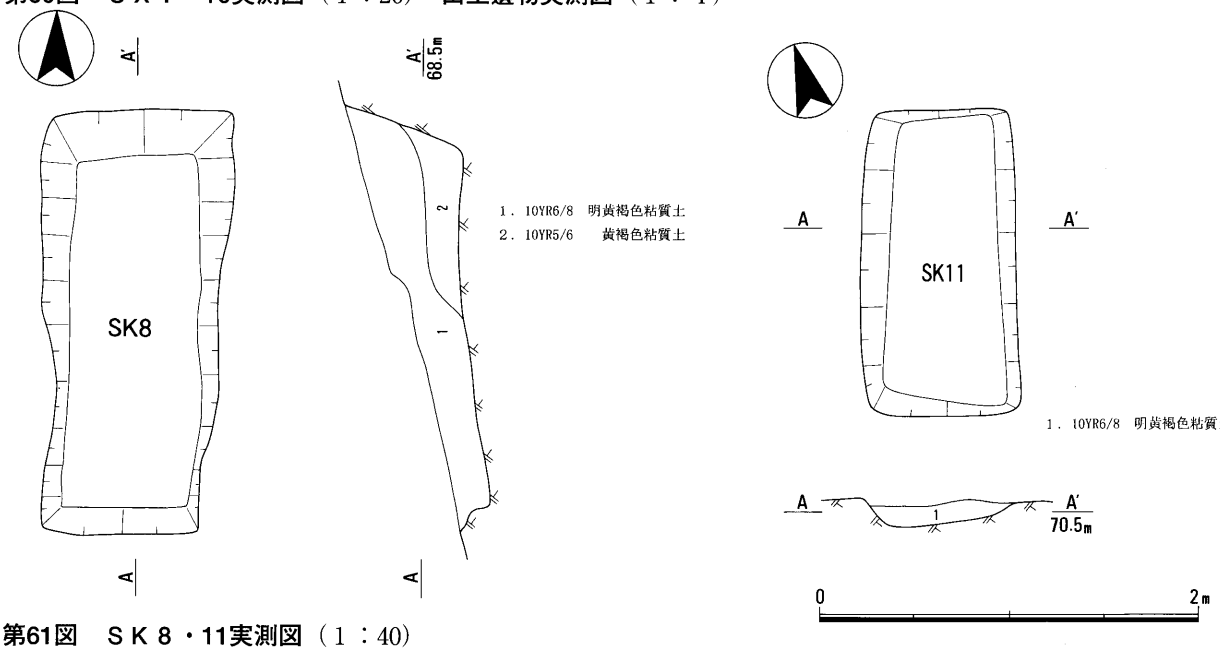
第58図　４号墓実測図（１：40）**・出土遺物実測図**（231は１：２、232は１：４）



第59図　ＳＫ37実測図（１：40）



第60図　ＳＸ１・10実測図（１：20）・出土遺物実測図（１：４）



第61図　ＳＫ８・11実測図（１：40）

（3）平安時代

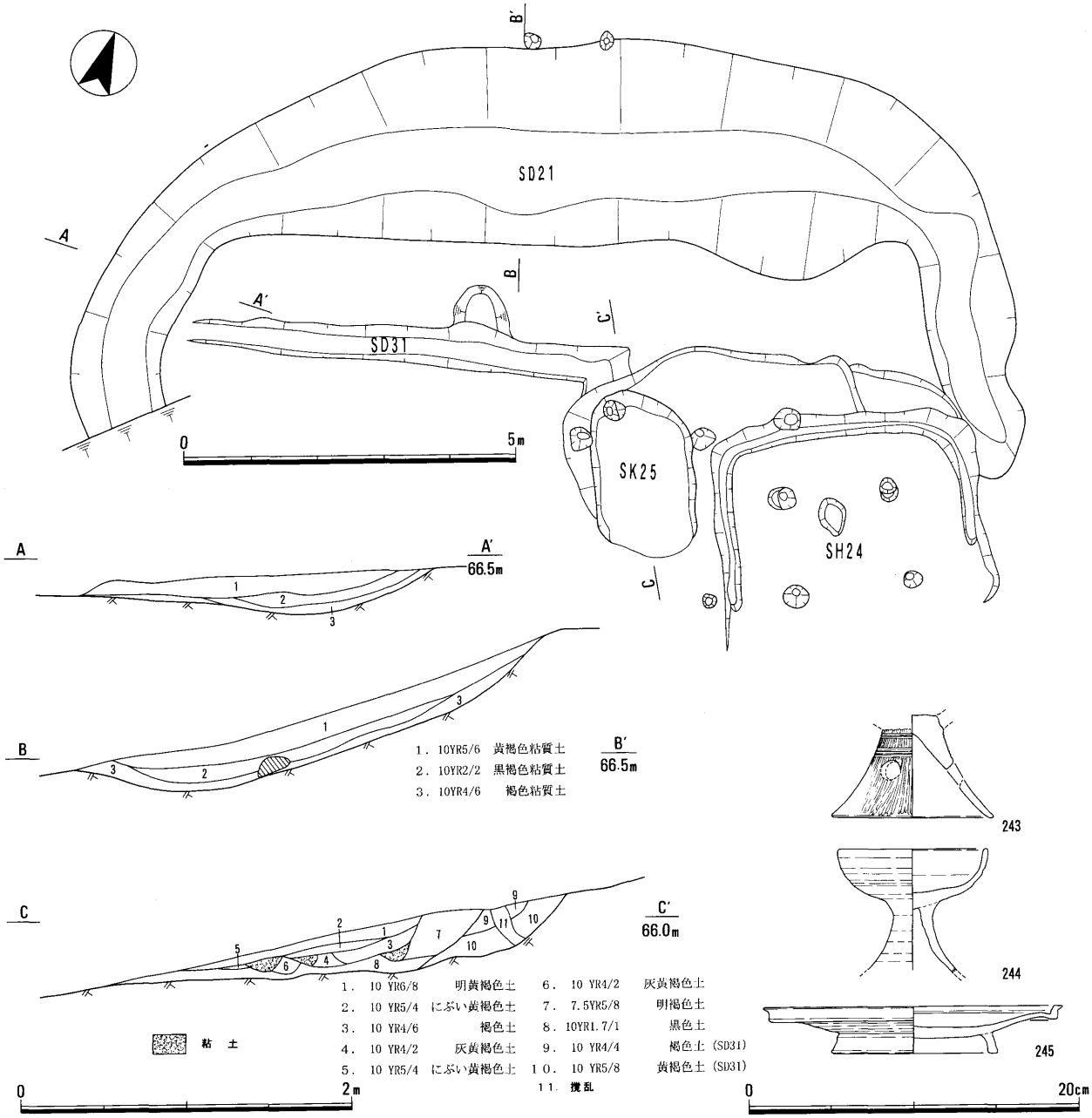
古墓（ＳＫ25・ＳＤ21：第62図・写真85）

東尾根の平坦面南斜面で炭の詰まった土坑（ＳＫ25）と、それを「コ」字形に取り囲む溝（ＳＤ21）を確認した。位置関係からみて一連の遺構と考えられ、封土・周溝を伴う古墓の可能性が高い。

ＳＫ25　平面形は2.4m×1.5mの長方形を呈し、検出面からの深さは30cmである。基本的な埋土は下層から炭化物層（８層）・炭化物混じりの黄褐色土層（２・５層）・地山類似層（１層）であるが、壁際では炭化物層を直接地山類似層が被っている。また、炭化物層の上面には部分的に粘土塊も認められた。ＳＫ25の両脇には、径0.3m深さ0.4m程のピットがあり、この遺構に伴うとすれば、何らかの上屋も想定できる。

ＳＤ21　ＳＫ25の西・北・東を「コ」字形に囲む溝。北辺の長さ14m、最大幅3.1m、深さ0.3mで、埋土は、自然堆積層とみられる。

出土遺物（第62図・写真101）　ＳＤ21出土遺物として、弥生土器の高杯脚部（243）と須恵器の高杯（244）・盤（245）があるが、弥生土器は周囲の竪穴住居からの混入品であろう。須恵器の盤は猿投窯産で、平安時代前期（概ね９世紀）頃のもの。ＳＫ25からの遺物の出土はない。　（水橋公恵）



第62図　ＳＤ21・ＳＫ25実測図（平面図１：100・土層図１：40）**・出土遺物実測図**（１：４）

3．まとめ

（1）銅鐸片について

ＳＨ19の埋土から出土した銅鐸片は、鈕の部分の破片である。稜線の両側に両面とも、やや鋭角的な綾杉文を交互に重ねて配置する、特異な紋様構成である[1]。本例の様な綾杉文を重ねる銅鐸例は、全国的にみてもあまり多くはないが、外縁紐２式の段階から近畿式銅鐸の突線鈕２式の段階まで存在する（第６表）。

No.	形　式	出土遺跡名	高　さ	備　考
1	外縁紐２式	徳島・川島神後	42cm	流水文
2	外縁紐２式	兵庫・気比４号鐸	42cm	流水文
3	外縁紐２式	兵庫・気比２号鐸	42cm	流水文
4	外縁紐２式	兵庫・桜ケ丘３号鐸	42cm	流水文
5	外縁紐２式	兵庫・野々間１号鐸	20cm	四区袈裟襷
6	扁平紐（新）	兵庫・桜ケ丘４号鐸	42cm	四区袈裟襷
7	突線紐１式	奈良・石上１号鐸	60cm	流水文
8	突線紐２式	岡山・妹	45cm	流水文
9	突線紐２式	不明・明治大学所蔵	40cm	四区袈裟襷

第６表　主な綾杉文を重ねる銅鐸一覧表

上記の表がすべてではないが、外縁紐２式段階の綾杉文はやや緩やかで、突線紐２式と時代が新しくなるにつれて、鋭角的に施される傾向にある。本例は、他に比べると綾杉文が鋭角的に施されていることが特徴である。

また、本例は稜線がやや直線的であり、伊坂銅鐸[2]の同一部位であろう部分と比較して、本体の大きさは60cmを越えるものと推定していた[3]。しかし、扁平紐（新）の段階から稜の位置が外側へ付くことがあり（外側に付くことでより直線的になる）、単純に稜が直線的であることから大きさの推定はできないが、他の類例から判断して50cm前後の大きさ[4]の推定が妥当なところといえようか。

また、本例は非常に腐食が進んでおり、「カスカス感」がある。銅鐸の成分としては、外縁紐２式を境にして、古い段階は錫の成分が多く、新しくなるにつれて錫の成分は少なくなる傾向にある。錫の成分が少なくなると腐り具合が激しくなることからも、本例は新しい段階のものと考えることができよう。

ただし、近畿式銅鐸より界線が細く、器壁が薄いなど古い要素を持つことも考慮すれば、本例は扁平紐の新段階から突線紐２式段階までの幅の中で捉えるのが一番妥当であろう。

ところで、銅鐸は全国で約480個余り発見されている。その多くは完全な形で、１個または複数個で埋納されていることは周知のことである。しかし、本例のような破片での発見例は、管見に触れる限りでは、これまでに県内では３例、全国でも29例程度が知られる（第７表）のみである[5]。これを見ると、形式は突線鈕の３～５式が大半で、部位も飾耳が多い。そのため、「飾耳を切断することによって、銅鐸がもつ力を殺ぐ破壊的行為がとりおこなわれた」[6]すなわち、銅鐸祭祀の終焉を示す行為の現れとも考えられている。

しかし本例は、上述のように扁平紐の新段階から突線紐２式段階に属する考えられ、時期的にも他の破片銅鐸とは、自ずとその性格も異なる可能性も否定できない。想像たくましくするならば、銅鐸祭祀の終焉という性格というより、何処かで生産された際の不良品か、もしくは破片にされた後の、武器・利器への再利用の産物とは考えられないだろうか。本例の紐部分内側の断面が、やや鋭利な形をしており、何か物を切断できそうな感じも受ける。また、本例と同様な時期、扁平紐式の香川県森広遺跡例[7]は、鋳かけを行う際の円孔がなされており、何らかの再利用を目的としたことも考えられる。ただ、同時期の出土例が少ないが故に、その性格をこれ以上断定することはできない。

また、破片銅鐸の出土遺構は、溝や土坑内に廃棄された状態での出土が多く、竪穴住居内からの出土は稀である。なお、この竪穴住居ＳＨ19だけ、検出された13棟の中で、唯一焼失家屋であることは、非常に興味深い事実である。それ故に、本例はこの金塚遺跡の集落の廃絶と銅鐸祭祀の終焉の関連性を意味するものとも考えていた。しかし、上述のことや、出土位置を層位から判断すると、この竪穴住居が焼失廃絶した後に、偶然に廃棄もしくは混入された可能性もあるため、結局のところ、詳細は不明と

言わざるを得ない。

最後に、この破片銅鐸と文様構成がほぼ同じであると考えられる扁平紐式新段階の伊坂銅鐸との関連性を、朝明川の周辺の遺跡との状況から総合的に検討を加える必要があるが、浅学故に深く立ち入ることはできない。

いずれにしても、文様構成・形式・出土遺構など特異な本例は、今後の銅鐸祭祀の終焉などを検討する上で、貴重な資料と言えることは間違いないであろう。　(服部芳人)

［註］

① 京都国立博物館学芸課考古室長難波洋三氏の御教示による。

② 文久2（1862）年、四日市市伊坂町字鐙谷（通称重地山）から出土した扁平紐式の銅鐸。金塚遺跡の西方約1kmに位置する。現在、四日市市立博物館所蔵で、大きさ40.3cmを測る。

③ 『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市ＪＣＴ埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター 1999.3）

④ 京都国立博物館収蔵庫・展示室で実際に50cm前後の大きさの銅鐸を実見し、稜のカーブを比較させていただいたが、概ね妥当であることも実感した。

⑤ 破片といっても、銅鐸の一部（飾耳・紐・鰭部分など）が単独で出土したもの（A）、完全な形の銅鐸が細かく砕かれたように多量な破片で出土したもの（B）、地中から掘り起こされた際、またはその後に道具類などで一部が欠損したもの（C）などがあると思われる。今回、一覧表作成に当たっては、（C）と考えられるものは省いた。取捨選択は、主観的な要素があるため、29例程度とした。

⑥ 『銅鐸－埋納と終焉を考える－』（銅鐸博物館、1997）

⑦ 『森広遺跡Ⅱ』香川県埋蔵文化財調査年報1（香川県教育委員会、1997）
『森広遺跡』新編香川叢書（香川県教育委員会、1983）

No.	遺跡名	よみかた	所在地	型式	部位	出土年	出土遺構	備考	参考文献
1	宮淵遺跡	みやぶち	長野県松本市宮淵字本村二ツ塚	突線鈕3式(三遠式)	鈕部分			松本市博物館所蔵・松本民俗資料館	信濃史料刊行会「信濃史料」第1巻下1956　大場『信濃』Ⅱ2－8　桐原『信濃』18－4
2	藤井原遺跡	ふじいはら	静岡県沼津市下香貫字藤井原	突線鈕3～5式	双頭渦紋飾耳		竪穴住居153号	孔を開けて再利用・垂飾品に加工・住居址覆土から出土・沼津市歴史民俗資料館所蔵	沼津市教育委員会『沼津市藤井原遺跡第3次発掘調査概報』1977
3	伊場遺跡(国鉄浜松工場地)	いば・はままつこうじょうち	静岡県浜松市南伊場町官有無番地	突線鈕2～3式	双頭渦紋飾耳	1982	A4区土坑2	弥生土器・大型ハマグリ刃石斧と伴出	『国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次発掘調査概報』1983.12浜松市遺跡調査会
4	松東遺跡	まつひがし	静岡県浜松市松東	突線鈕3式(近畿Ⅱ式)	鐸身飾耳	1989	SX08(土坑)	推定高さ70～80cm	『松東遺跡Ⅱ』1990浜松市文化協会
5	瓜郷遺跡	うりごう	愛知県豊橋市瓜郷町字寄道	不明	鐸身部分			豊橋市美術館所蔵	豊橋市教育委員会『瓜郷』1963
6	椛遺跡	なぐさ	愛知県渥美町椛・伊川津	突線鈕5式(6区袈裟襷文)	1個体分	1983	丘陵斜面	渥美町教育委員会・渥美町郷土資料館	梅原末治「銅鐸の研究」1927・「三代実録」
7	椛遺跡	なぐさ	愛知県渥美町椛・伊川津	突線鈕5式(6区袈裟襷文)	1個体分	1983	丘陵斜面	渥美町教育委員会・渥美町郷土資料館	梅原末治「銅鐸の研究」1927・「三代実録」
8	朝日遺跡	あさひ	愛知県西春日井郡清洲町朝日	突線鈕5式	双頭渦紋飾耳	1975	包含層・山中期の土器を伴出	愛知県清洲貝殻山貝塚資料館所蔵	愛知県教育委員会「朝日遺跡」1982 高橋信明「愛知県朝日遺跡出土の銅鐸片」(『考古学雑誌』第68巻第1号1982)
9	朝日遺跡	あさひ	愛知県西春日井郡清洲町朝日	突線鈕3～5式	双頭渦紋飾耳	1980		愛知県清洲貝殻山貝塚資料館所蔵	愛知県教育委員会「朝日遺跡」1982 高橋信明「愛知県朝日遺跡出土の銅鐸片」(『考古学雑誌』第68巻第1号、1982)
10	見晴台遺跡	みはらしだい	愛知県名古屋市南区見晴町	突線紐式(近畿式)	双頭渦紋飾耳	1999	包含層		名古屋市見晴台考古資料館報「みはらし」No.203・1999.10.10
11	一反通遺跡	いったんどおり	三重県鈴鹿市石薬師町	突線鈕式	鰭部分				
12	西場谷C遺跡	にしばたに	三重県上野市中友生字西場谷	突線鈕式	鰭部分	1989	SK1(平安以前の土坑墓)に混入	4.6×2.6・厚3cm	上野新都市開発整備区域埋蔵文化財発掘調査報告書　第3分冊　1994.3上野市遺跡調査会
13	(伝)伊賀国出土(阿山郡府中村)	でんいがこくあやまぐんふちゅうむら	三重県上野市千歳	突線鈕式	飾耳	不明		京都大学所蔵	
14	下長遺跡	しもなが	滋賀県守山市古高町	突線鈕3式	双頭渦紋飾耳	1990	溝SD2806	最下層の黒灰色粘質土層(布留式並行期古段階に埋没)	下長遺跡発掘調査報告書Ⅲ守山市文化財調査報告書第50冊1993.3(守山市教育委員会)
15	唐古・鍵遺跡	からこ・かぎ	奈良県田原本町		鐸身部分	2000		四区袈裟襷文	
16	纒向遺跡	まきむく	奈良県桜井市辻	突線鈕3～5式	双頭渦紋飾耳		弥生後期末～古墳前期初土器包含層中		石野博信ほか「纒向」1976年
17	利倉遺跡	とくら	大阪府豊中市利倉	突線鈕3～5式	鰭部分飾耳	1974		庄内式・布留式	豊中市教育委員会「利倉遺跡」1976年
18	亀井遺跡	かめい	大阪府八尾市亀井町	扁平鈕1式	鈕部分	1975～1980			(財)大阪文化財センター「亀井・城山」1980
19	亀井遺跡	かめい	大阪府八尾市亀井町	突線鈕3～5式	鰭部分	1975～1980			(財)大阪文化財センター「亀井・城山」1980
20	池上曽根遺跡	いけがみそね	大阪府和泉市池上町	突線鈕3～5式	鐸身部分	1969～1980			佐原真・春成秀爾「銅鐸出土地名表」『考古学ジャーナルNo.210』1982 石神怡「池上弥生ムラの変遷」『考古学研究23-4』1977
21	池上曽根遺跡	いけがみそね	大阪府和泉市池上町	突線鈕3～5式	鐸身部分	1969～1980			佐原真・春成秀爾「銅鐸出土地名表」『考古学ジャーナルNo.210』1982 石神怡「池上弥生ムラの変遷」『考古学研究23-4』1977
22	神倉山遺跡	かみくらやま	和歌山県新宮市神倉山	突線鈕4式・近畿ⅢBかC	鈕・鐸身・鰭	1957	経塚遺物と混在	速玉神社所蔵・22片	田中巽「近時の銅鐸の出土について(『日本古代史論叢』1960 上野元・巽三郎「熊野新宮経塚の研究」1963 和歌山県史編さん委員会『和歌山県史』考古史料1983 新宮市史史料編さん委員会『新宮市史』1972
23	岩野辺穴尾遺跡	いわのべあなお	兵庫県宍粟郡千種町岩野辺字穴尾	突線鈕3～5式	鈕部分	1980		個人蔵(村上紘揚)・長5.8×18.6、厚0.2cm・千種町歴史民俗資料館	千種町史編さん委員会編「千種町史」1983
24	女代神社遺跡	めしろじんじゃ	兵庫豊岡市九日市上町	突線鈕2式	鰭部分	1991			
25	久田谷遺跡	くただに	兵庫県日高町久田谷字タカボコ	突線鈕5式	1個体分(117片)	1978		総重量7.7Kg・破片は5～6cm前後の大きさ・文化庁・日高町教育委員会所蔵	加賀見省一「兵庫県久田谷遺跡出土の銅鐸片」(『考古学雑誌』第68巻第1号・1982
26	森弘遺跡	もりひろ	香川県大川郡寒川町加藤・森広	扁平鈕1式	鐸身部分・7片	1978	包含層	3個円形の孔がある・肩部に鋳かけによる補鋳のあとが明瞭に認められる	『森広遺跡Ⅱ』香川県埋蔵文化財調査年報1979香川県教育委員会 『森広遺跡』新編香川叢書1983香川県教育委員会
27	玉野市海底沖	たまのしかいていおき	岡山県玉野市海底沖	突線鈕式	鐸身部分				
28	青谷上寺地遺跡	あおやかみじち	鳥取県青谷町青谷	突線鈕4～5Ⅰ式	鐸身部分2片	1998	包含層		鳥取県教育文化財団調査報告72「一般国道9号改築工事(青谷・羽谷道路)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ青谷上寺地遺跡3」2001.3(財団法人鳥取県教育文化財団・国土交通省鳥取工事事務所
29	西川津遺跡	にしかわつ	島根県松江市西川津町	外縁付紐2式か扁平紐1式	鐸身右上半	1997			

第7表　破片銅鐸出土一覧表

［註・参考文献］
・「銅鐸埋納と終焉を考える－」（銅鐸博物館）1997を参考にして、以下の文献で加筆
・佐原真・春成秀爾「銅鐸出土地名表」『考古学ジャーナルNo.210』1982
・「昭和58年度国庫補助による出土青銅器遺物の実態調査報告書」（財団法人元興寺文化財研究所）1984
・『共同研究「古代の祭祀と信仰」附篇』（国立歴史民俗博物館研究報告第7集）1985.3

（2）2号墳の盛土の方法について

墳丘墓[1]とした2号墳の、盛土の方法について、簡単にまとめることにする。

できる限りの分層を試みた結果、135層（1号墳も含む）にも及んでしまった。この分層に際しては、より客観性を持たせるため、色調については、小山・竹原編『新版標準色帖』（9版・1989）を用いた。また、土の粘性具合としまり具合をそれぞれ、かなり強い、やや強い、強い、弱い、やや弱い、かなり弱いの6段階に分類した。これは色調とは違い、担当者の主観が入ることは免れないが、できる限り複数の人数でしかも他の層と比較しながら、短期間にその具合を確認することに努めた。

また、それぞれの層に含まれる礫・花崗岩・粘土ブロックなどの大きさやその量なども記録に止めた。

ところで調査中からこの2号墳の盛土に関して、大きく2点、気が付くことがあった。第1点は、砂・粘質土・礫などを交互に盛土を行っている可能性があること。第2点は、約2.5mの盛土を行うに当たって2回その作業を止めて、水平にさせていることである。

そこでまず、この135に分けられた層を、しまり具合と粘性具合の組み合わせで、粘質土と砂質土の2つの基本層に、まず分類を試みた。その基準は以下の通りである（第8表）。

		粘性	
		かなり強い やや強い 強い	弱い やや弱い かなり弱い
しまり	かなり強い やや強い 強い	粘質土	砂質土
	弱い やや弱い かなり弱い	粘質土	砂質土

第8表　基本層分類の基準

さらに、そのうえで粘質土には礫を含まないもの（A）と、礫を多く含むもの（B）に分け、あとは砂（粗砂を含む）ものを（C）、砂質土を（D）の4つに分類し、色分けを行い検討を加えることにした。その結果、盛土の方法には、概ね次のような傾向があることが分かった（第63図）。

まず、2号墳は、弥生土器を包含する層（Aトレンチ90層・112層）の上に約2.5mの盛土をすることで、墳丘を築造している。その際、大きく3段階に分け、それぞれ約80cm程度で作業工程を止めているのか、水平を意識したような層が観察できる。

Aトレンチの断面観察では、大きく3段階に分けた1段階目の約80cmにはレキを多く含む粘質土（B）が、2段階目の約80cmには砂（粗砂を含む）（C）が、3段階目の約80cmには粘質土（A）が大半を占めるように見える。以下に、各段階の作業内容を概略する。

・第1段階前　弥生土器を包含する層（Aトレンチ90層・112層）が東側へ傾斜をしているため、その上に第88層・第89層の粘質土を墳丘東側裾部分に盛ることで、傾斜を埋めて水平に均している。

・第1段階　主にレキを多く含む粘質土（B）を東側に単層に盛るが、西側は粘質土（A）・レキを含む粘質土（B）・砂質土（D）を大きなレンズ状の互層にして盛る。

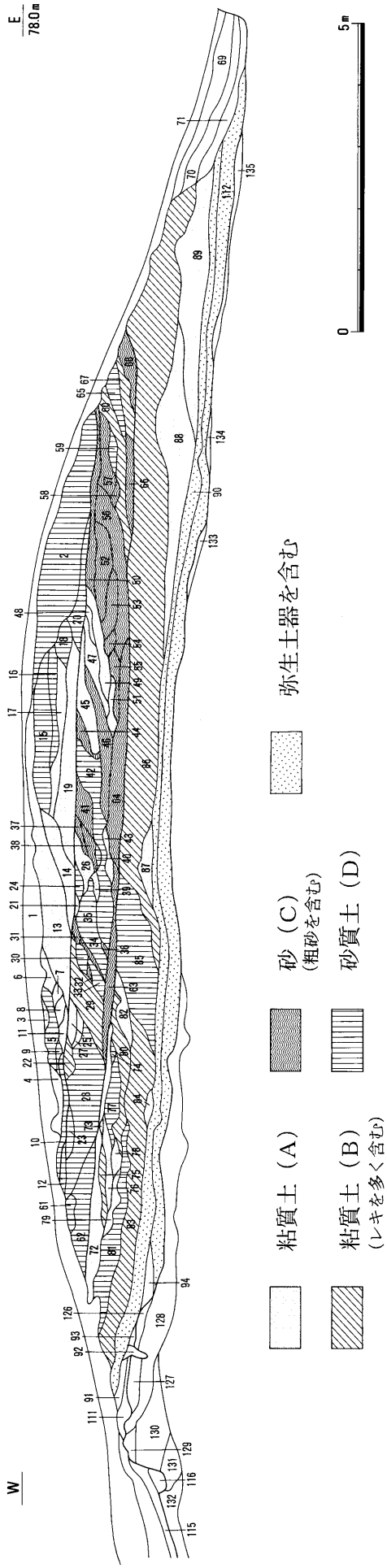
・第2段階　第1段階の（B）層のほぼ上に、主に砂（粗砂を含む）（C）層を盛る。ただし単層ではなく、幾つかの層として盛っているようである。また、西側は第1段階と同様にレンズ状の互層で、（A）・（B）・（C）・（D）の各層を盛るが、第1段階に比べるとやや小さな感がある。

・第3段階　東側は（D）の砂質土、西側は（A）の粘質土で主に盛る。

その後の盛土については、流出もあろうが、現時点では上記の3段階の作業工程で、2号墳の盛土が行われていることが判明した。

さて、土質工学的には砂と粘土の互層を繰り返すことで、より土の強度が増すという[2]。また、第1段階でのレキを含む（B）層を傾斜の下る側に盛り、流出を防いでいることなどから、詳しく言及する知識は持ち合わせていないが、単に土砂を盛って築造されたのではなく、かなり細かく丁寧にしかも、流出を防ぐために企画・施行された墳丘であることは間違いないのではないだろうか。

Aトレンチと直交する形でBトレンチも設定して同一層の把握に努め、より立体的に盛土の方法を探ろ



第63図　2号墳盛土模式図（1：100）

うとした。しかしながら、たかだか1mではあるがAトレンチの幅のため、層の接点がなく、同一層と確実に認識できる層は弥生土器を包含する層のみであることは、調査担当者の未熟さに起因して、いささか残念ではある。ただ、2つのトレンチの土層確認では、盛土の単位については、概ね土嚢袋大の大きさである可能性も窺われ、貴重な資料を提供していることを、最後に記述しておくことにする。

（服部芳人）

［註］

① 弥生時代の墓の名称として、墳丘墓・方形台状墓・弥生墳墓などがある。山田猛「前田遺跡」（『昭和57年農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘報告』1983.3）によると、「方形台状墓は、集団墓地から隔絶した高所に位置し、溝やテラスで区画し、地山の削り出しや盛土によって立体的に造られた、特定小集団の墓であり、墳丘墓とは立地や造墓技術は方形台状墓と基本的に変わらないが、主墳丘に祭壇としての造出しが付設され、主被葬者が明確であるものを呼ぶ。」としている。

また、近藤義郎「古墳以前の墳丘墓」（『岡山大学法文学部学術紀要』371977）によると、「主に周囲の削り出しによって墓域を画するか、主に盛土によって墓域を画し形成しようとするかによって、方形台状墓とを区別してる。」とする。

今回、2号墳で墳丘墓の名称を使用じているが、①「盛土を行っていること」、②「主体部と認識した遺構（出土遺物が卓越しているとは言いがたいが、穿孔途中の磨製石鏃や土玉の存在は、いかにも非日常的（墓的？）な要素ではある）が1つであること」から判断した。また、路線内で墳丘の3分の1程度しか調査することはできていないが、弥生土器を含む層（90層・112層）の上に盛土を行っていること、埴輪、須恵器など古墳時代の遺物の出土がないことからも、この名称が妥当であると判断した。なお、1号墳でも2号墳の盛土下で確認された弥生時を含む層に相当する層（107層）の上に約0.5mの盛土を行っている。盛土前の立地条件としては、1号墳の存在する場所は、2号墳よりも高所にあたるため、確証はが2号墳よりも前の築造と考えた。名称は盛土があるため、墳丘墓を採用しているが、東側・南側の地山削り出しや形状（方形）から、台状墓とする方がよいのかもしれない。

② 西田一彦「古墳の築造」（『阡陵№27』関西大学考古学研究室1993）

（3）環壕を[1]伴う高地性集落について

中央尾根と東尾根で、ＳＤ２・ＳＤ23・ＳＤ29の３ヶ所の溝を検出した。東尾根のＳＤ23とＳＤ29については、近接しており繋がっていたことは間違いなかろう。また、このＳＤ23・29と中央尾根のＳＤ２との繋がりは、後世の土取りと自然の崩落が激しく、距離も約30mと離れるため、不確定なところが大きいが、出土した遺物から同時期と考えられ、また、標高約60mとほぼ同じ高さであることから、本来は一つの溝であったと推定している。なお、ＳＤ２の存在する中央尾根の西側も、後世の土取りなどで横穴墓が検出された西尾根までの距離が約60mと、大きく崩落している。また、西尾根での標高60m地点は、調査区内では存在していないため、この溝がどこまであったかは不明である。

上記３ヶ所の溝であるが、いずれも尾根上に所在し、等高線に沿うような形で掘削されている。また、これらの溝が所在している場所より高所に、同時期の竪穴住居・柱穴群・墳丘墓などの遺構が存在している。このため、これらの溝は集落を取り囲み、防御するための機能を持つ「環壕」と考えられる。なお、この環壕より低所では溝は確認されておらず、１条であったものと思われる。

ところで、調査前の地目は、竹林や雑木林であった。伐採して初めて、当遺跡からは南の朝明川中下流域やその南対岸の垂坂丘陵、さらには伊勢湾を挟んで愛知県の知多半島も望むことができることが分かった。条件さえ良ければ伊勢湾口に浮かぶ神島までも望むこともでき、まさに伊勢湾全体を一望できる場所に、当遺跡は所在する。

遺構は、概ね標高約70mで確認され、南東に広がる朝明川下流の低地との比高差は60m程度あり、高地性集落の範疇でとらえるべき遺跡である。

以上のことから、金塚遺跡については、環壕を伴う高地性集落という位置付けが可能であると思われる。

次に、この金塚遺跡周辺の弥生時代遺跡（第64・65図・第９表）を概観して、その性格についてを若干考えてみようと思う。

朝明川下流の北岸には、多くの弥生時代の遺跡が存在する。まず前期であるが、確実にこの時期に遡る遺跡は、現在までのところ確認されていない[2]。

中期になると、当遺跡の西方約１kmには、中葉から後葉にかけて、50棟以上の竪穴住居が検出された菟上遺跡（６）が存在する。また、この菟上遺跡のさらに西方には古代東海道が通っていた可能性のある南北方向の谷筋を挟んで、伊坂遺跡（７）が存在する。この遺跡からは、約130年前に扁平紐式（新）段階の銅鐸が発見されており、その関係は非常に興味深いものがある。

また、菟上遺跡の東方には、牛谷・西谷・東谷という小さな谷筋を挟んで、山村遺跡（５）が存在している。平成11年度の県道の調査において19基もの方形周溝墓が[3]、また本書収録の第二名神高速道路の工事用進入路部分でも方形周溝墓１基と、環壕１条が確認されており、当時期の墓域と考えられている。

この菟上遺跡については、銅鐸埋納地（伊坂遺跡）の祭祀域と、方形周溝墓（山村遺跡）の墓域を備えた中期の拠点集落とも想定されている[4]。

なお、朝明川北岸の朝明丘陵の南縁辺部分には小さな谷筋が走っているような地形がいくつか存在する。谷によって分断され、それぞれが個別単独に所在するように捉えがちであるが、菟上遺跡・伊坂遺跡・山村遺跡のような、各々が有機的な繋がりを有している可能性は十分に考えられる。今後、周辺の遺跡の性格を考えていく上で貴重な成果を示しているように思われる。

次に、後期に入ると、この菟上遺跡を中心とする集落が広がりを持つのか、分散するのかは不明であるが、西方に西ヶ広遺跡（８）・東方に金塚遺跡（１）・城ノ谷遺跡（２）などが存在するようになる。

西ヶ広遺跡は、これまでに第１次調査[5]として東名阪自動車道建設に伴う調査（Ａ地区・Ｂ地区・Ｃ地区）と、第２次調査[6]として土取りに伴って四日市市教育委員会による調査（Ｄ地区）、第二名神高速道路に伴って第３次・第４次調査[7]（Ｅ地区）を行っていいる。遺跡の立地としては、東西方向に200m、南北方向に100mの半島状の平坦な段丘上に位置し、約30棟の竪穴住居が確認されている。中には一辺約10mの大型住居も含まれ、この平坦面全体に住居が存在していた可能性も指摘されている。また、環壕は調査区内では確認されていないが、標高差20m以

上の段丘崖と段丘に切りこむ２本の谷によって、充分な防御性が確保されていたと推定される。

また、城ノ谷遺跡は当遺跡の南東300mの谷を挟んだ、標高約50mの中位段丘面に位置する。この遺跡では弥生時代後期の竪穴住居６棟（内、火災住居１棟）が確認されており[8]、時期も金塚遺跡と同時期でその関係も注目される。ただ、遺跡範囲の大半は団地造成などさまざまな改変によって消滅しており、調査で確認された場所は、段丘面平坦部分の北東隅に当たる。よって遺跡の中心は、南西方向に広がる平坦面になると考えられるが、その間には南北２方向から細長い谷地形が存在しており、この場所に山村遺跡と同様な性格の環壕が存在していたことも推察が可能かもしれない。

推測の域を越えないが、もしそうであれば、金塚遺跡の南西方向には山村遺跡、南東方向には城ノ谷遺跡とで１次的な防御的性格の遺跡が存在し、より高所の北方に金塚遺跡が存在することになる。

一方、朝明川の南岸には東西方向の垂坂丘陵が広がる。近年、北勢バイパス建設事業などに伴って発掘調査が行われており、弥生時代の様相も徐々にではあるが判明しつつある。

前期の遺跡については、北岸と同様に確実な遺跡は確認されていない。次に、中期の遺跡として、久留倍遺跡（12）がある。平成11年度の北勢バイパスに伴う調査において、弥生時代中期の竪穴住居１棟が、遺跡範囲の南縁で検出されている。さらに範囲確認調査の結果、多くの竪穴住居・土坑・溝などが検出されており、事業地内だけでも約18,900㎡、丘陵全体の約100,000㎡（東西350m×南北300m）がその範囲であると考えられている[9]。この遺跡の立地としては、標高15m前後の沖積地から西側に緩やか丘陵上を呈する所に位置する。今後の調査によって、さらに詳細は判明するものと思われるが、朝明川左岸の同時期の菟上遺跡と双璧を成す拠点集落になる可能性もある。

また、この丘陵の大矢知町青木山で、宝鐸２口が出土したという記録もあり[10]、もし銅鐸であったとすれば、北岸の菟上遺跡と伊坂遺跡の関係と同様に、久留倍遺跡と大矢知銅鐸の関係も想定され興味深いものがある。

後期を代表する遺跡として、竪穴住居が100棟以上も確認されている山奥遺跡（20）が挙げられる[11]。この遺跡は、垂坂丘陵の東斜面に位置するが、その先端からは約700m程西へ奥まった所で、しかも先端部分の北側からは久留倍遺跡の所在する丘陵が、南側からは糠塚古墳が所在する丘陵が迫っており、入江状の奥、まさに「山奥」である。当遺跡からまた、土製模造鏡などの特殊な遺物の出土やその立地、重複して存在する100棟以上もの竪穴住居、五角形の竪穴住居の存在などから、何か特異な性格、例えば港的な性格、もしくは環壕などは検出されていないが、遺跡の所在する場所そのものから、防御的な性格を有するような遺跡の可能性も考えられそうである。なお、金塚遺跡とはほぼ同時期であるにも関わらず、垂坂丘陵の北側の標高が高く、金塚遺跡から直接、山奥遺跡を望むことができないことも、その性格を考える上で重要な要素になるのかもしれない。

その他、後期の遺跡としては、羽津広遺跡（21）・井詰遺跡（23）・大城遺跡（19）などがある。これらの遺跡は、詳細な発掘調査が実施されておらず、詳細は不明であるが、朝明川北岸同様に、後期になると久留倍遺跡を中心とする集落が広がりを持つかのように増加する傾向にはありそうである。

朝明川下流の北岸と南岸における弥生時代の遺跡の変遷を概述してきた。いずれも前期は不明であるが、中期には菟上遺跡（北岸）、久留倍遺跡（南岸）を拠点集落として発展してきたようである。後期に入ると、集落内の住居数の増加・大規模集落の出現と共に、防御性を有した環壕集落・高地性集落の確認がなされたことは、朝明川を挟んでの集落間の軋轢が発生し、政治的緊張関係が増加したような感がある[12]。

また、古墳時代前期の古墳として、志氐神社古墳があるが、この古墳は現存する四日市市唯一の前方後円墳（もしくは前方後方墳）で、朝明川流域ではなく、その南約２ｋｍに東流する米洗川と海蔵川とに挟まれた標高約10mの低丘陵の東端に位置する。この古墳の位置は、朝明川・海蔵川・三滝川をも視野に含んだ場所であり、弥生時代後期に行われた各流域の集落間の政治的緊張関係が統一されたことを

物語るようでもある。

最後に、出土土器の中には近江系の土器が含まれている。当遺跡の位置は、伊勢湾西岸地域の海上を北上する南北ルートと、滋賀からの陸路の東西ルートの接する地点とも考えられる。今後、朝明川の上中流域にも、同様な高地性集落が発見される可能性は十分に考えられる。当遺跡の存在は、今後高地性集落の性格を広域な視野で検討していく上で重要な意味を持つものと思われる。　　（服部芳人）

［註］

① 「壕」の字にあえて「濠」を使っていないのは、「…空壕をめぐらしたものと、周囲に水を湛えた水濠をめぐらしたものとがあり、厳密には前者を「環壕」、後者を「環濠」と書き分けることができる。もちろんこれは、結果的には、丘陵・台地上と低地という集落の立地条件によるわけであるし、…」という寺沢薫氏「環壕集落の系譜」（『古代学研究』146号、古代学研究1999.5）の趣旨による。

② 朝明川の流域では、確実に弥生時代前期に遡る遺跡は確認されていない。しかし、県内では津市の納所遺跡・鈴鹿市上箕田遺跡などの沖積地に所在する前期の遺跡もあり、標高10m前後の沖積地の微高地に所在する下ノ宮遺跡・下ノ宮南遺跡（ともに南岸）、や間ノ田遺跡・辻子遺跡（ともに北岸）周辺などでも今後確認される可能性も考えられる。

③ 山村遺跡（第2次）発掘調査概要2000.1.29　現地説明会資料

④ 穂積裕昌「Ⅳ．菟上遺跡　3．まとめ」（『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT　埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター、2000.3）

⑤ 小玉道明ほか「西ヶ広遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』（三重県教育委員会）1970

⑥ 小玉道明ほか『西ヶ広遺跡発掘調査報告― D地区―』（四日市市教育委員会、1972）

⑦ 片岡博「Ⅷ．西ヶ広遺跡（E地区）」（『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター、2000.3）

田中久生「Ⅴ　西ヶ広遺跡」（『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財調査報告Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター、2001.3）

⑧ 田中久生「Ⅳ．城ノ谷遺跡」（『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財調査報告Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター、1999.3）

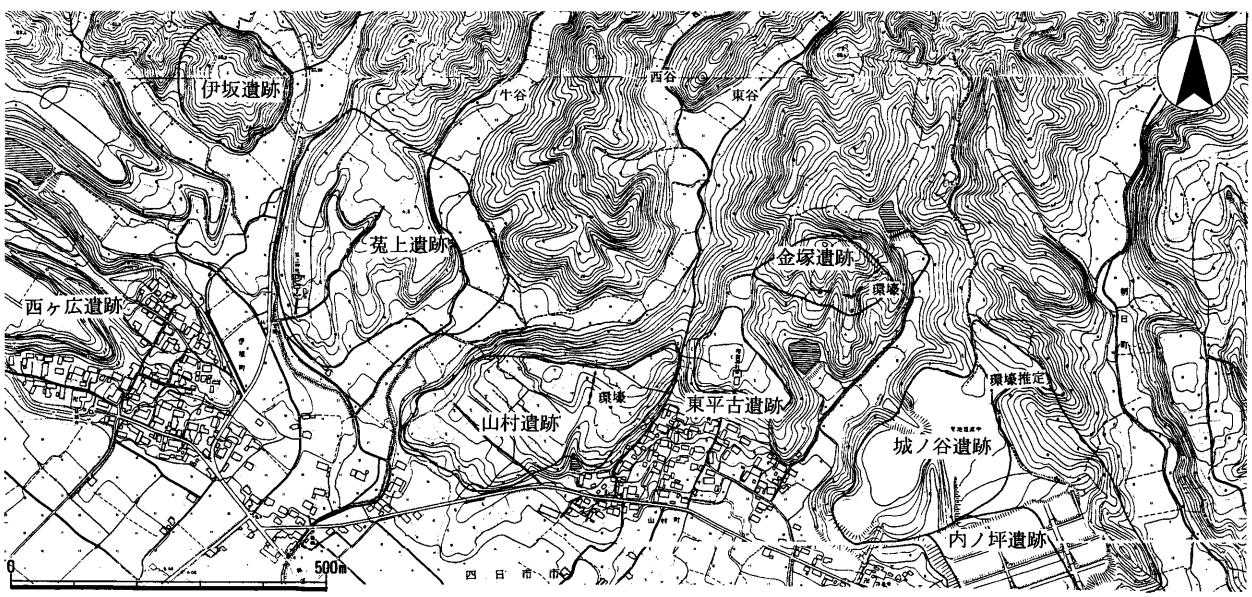
田中久生「Ⅸ．城ノ谷遺跡」（『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財調査報告Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター、2000.3）

⑨ 清水政宏「Ⅲ久留倍遺跡」（『一般国道1号線北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』四日市市教育委員会、2000.3）

⑩ 『皆書国誌』によると4口、『勢陽五鈴遺響』によると」2口の宝鐸が、大矢知町青木山光明寺跡（久留倍遺跡の範囲内にその伝承地がある）で、1716年～41年（享保・元文年間）に発見されている。風鐸の可能性もあり、疑問視するむきもあるが、現存せず不明である。岡田登「三重県鈴鹿市高岡山遺跡群発見の銅鐸片」（『考古学雑誌』第75巻第4号、日本考古学会、1990.3）

⑪ 荒木昌俊・佐々木裕「Ⅱ　山奥遺跡」（『一般国道1号線北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』四日市市教育委員会、2000.3）ほか

⑫ 清水政宏「北勢地域の弥生集落の様相」－小特集：三重県における集落の様相―（『みずほ』34号、大和弥生文化の会、2000.3）



第64図　金塚遺跡周辺地形図（1：12,000）昭和36年・39年 四日市市都市計画図（1：3,000）を合成して作成

No	遺跡名	ルビ	市番号	所　在　地	弥生時代 前期	弥生時代 中期	弥生時代 後期	流　域	立　地	主な遺構	主な遺物	備　考	参考文献
1	金塚	コガネヅカ	65	山村町字池ノ谷			―	朝明川下流北岸	朝日丘陵の頂部・尾根上・標高70m	溝３（環壕）・竪穴住居13・墳丘墓２・柱穴群	銅鐸紐片・銅鏃２・磨製石鏃２・土玉・弥生後期（壺・甕・高杯・器台）	環壕で囲まれた高地性集落	①
2	城ノ谷	シロノタニ	66	広永町字南山朝日町大字埋縄字刈ケ谷			―	朝明川下流北岸	朝日丘陵南縁・標高52～47m	竪穴住居６	弥生後期（壺・甕・高杯・器台）・スリ石・土玉	弥生後期の竪穴住居１棟は焼失住居	①
3	内ノ坪	ウチノツボ	67	広永町字内ノ坪				朝明川下流北岸	標高50m台地上			西方の西ケ広遺跡、南方の雲天遺跡との距離は1.5km・1959（昭和34）年農道敷設工事中に弥生土器採集	⑥
4	間ノ田	マノダ	68	広永町字間ノ田				朝明川下流北岸	標高15mの微高地	方形周溝墓	昭和36年、地表下50～70cmの深さで、弥生土器発見・分布調査時、壺口縁表採	内ノ坪遺跡との関連・平成１３年度調査中	⑥⑦
5	山村	ヤマムラ	249	山村町字西・西平古		―		朝明川下流北岸	朝日丘陵南縁の尾根上・標高43.3～47.3m	環濠２・方形周溝墓１	弥生土器（壺）	金塚遺跡の広がりが想定	②③
6	菟上	ウナガミ	61・62・247	伊坂町字菟上・牛谷		―		朝明川下流北岸	朝日丘陵南縁段丘中位面及び東方の谷水田・標高40m	竪穴住居50棟以上・掘立柱建物・方形周溝墓	弥生土器（各種）・石器・木器	弥生中期では、北勢最大級の集落	②③
7	伊坂	イサカ	429	伊坂町字鎧谷		―		朝明川下流北岸	標高60mの丘陵上	土坑（弥生）	弥生土器片	偏平鈕式銅鐸出土（文久２年）	②③
8	西ケ広	ニシガヒロ	59	伊坂町字西之広・松山			―	朝明川下流北岸	標高40～50mの台地中位面・河岸段丘上	竪穴住居（弥生後期29）・土坑（弥生後期５）	弥生後期（壺・甕・高杯・台付鉢・器台・手焙・小型・土錘）		②③④⑤
9	西辻	ニシツジ	462	西大鐘町字西辻				朝明川中流北岸	標高25～27mの段丘下位面	分布調査のみ・詳細不明	壷・甕小片	古代大金郷の中心集落の可能性	⑦
10	北山Ｃ	キタヤマ	241	西大鐘町字北ノ山・北畑・京塚・中の丸・南林北山町字経塚・中野			―	朝明川中流北岸	西大鐘町集落の北方台地上・標高56～61m	竪穴住居３・溝２	弥生土器（壺・台付甕）	製鉄集落か？	⑧⑨
11	下之宮	シモノミヤ	512	下之宮町字神宮地・北神宮地・鉾田・位田・東浦・笠木・耳常山・浦山				朝明川下流南岸	標高５m前後の氾濫平野	自然流路	弥生時代中期（壷・甕・高杯）	北伊勢工業用水道第４期事業に伴って立会調査実施	⑯⑰⑱
12	久留倍	クルベ	74	大矢知町字久留倍・字矢内谷		―	―	朝明川下流南岸	標高10m～30m、東側に緩やかに傾斜した丘陵上	竪穴１	壷・甕・高杯		⑪⑫
13	山畑	ヤンバタ	76	大矢知町字山畑				朝明川下流南岸	大矢知丘陵・標高28m				⑥
14	斎宮谷	イツキダニ	80	大矢知町字斎宮谷・字山畑				朝明川下流南岸	大矢知丘陵・標高32～20m		石鏃		⑥
15	青木谷	アオキダニ	72	大矢知町字青木谷				朝明川下流南岸	大矢知丘陵・標高40m・	溝	弥生土器・須恵器・土師器	1985（昭和60年）・1987（昭和62年）土取りのための緊急発掘調査	⑥
16	富士谷	フジタニ	75	大矢知町字富士谷・字矢内谷				朝明川下流南岸	大矢知丘陵・標高25～40m			1960・61年採土・地形改変・青木谷遺跡と一体？	⑥
17	雲天	ウンテン	71	大矢知町字雲天				朝明川下流南岸	大矢知丘陵の北・東縁辺裾部		無頸壺形土器	八反縄遺跡と一体（大矢知遺跡）	⑥
18	八反縄	ハッタンナワ	70	大矢知町字雲天・字上沢・字三石塚				朝明川下流南岸	大矢知丘陵の北・東縁辺裾部		坩・椀	八反縄遺跡と一体（大矢知遺跡）	⑥
19	大城	オオジロ	69	大矢知町字大城				朝明川下流南岸	丘陵		甕形土器（完形品・表採）・磨製石斧		⑥
20	山奥	ヤマオク	84	大字羽津字山ノ奥大矢知町字鳴浦			―	十四川上流南岸	標高20数m～40数mの緩やかな丘陵傾斜	竪穴住居100棟以上	弥生土器（各種）・土製模造鏡・土製丸玉	現在調査中、遺構の数はさらに増加する	⑩⑪⑫⑬
21	羽津広	ハヅヒロ	336	大字羽津字山ノ奥大矢知町字北之脇				十四川下流南岸	標高50m・垂坂丘陵		弥生後期（壷・甕・高杯）・石斧	山奥遺跡と連続し一体をなす遺跡	⑥
22	垂坂	タルザカ	251	垂坂町字鏡田・大字羽津字練塚山				米洗川下流南岸	標高30～40m				⑥
23	井詰	イヅメ	90	南いかるが町			―	米洗川下流南岸	標高20～30m・台地	竪穴住居	石斧	昭和50年代、西方隣接の大膳寺址調査時、弥生後期竪穴住居確認	⑥
24	東山	ヒガシヤマ	45	朝明町字東山				朝明川中流南岸	標高55m・台地上			同一台地上の西方２kmに真造寺遺跡、東方４に大城遺跡。その中間に１遺跡存在の可能性	⑥
25	上野	ウエノ	479	西阿倉川町字上野		―		海蔵川下流北岸	標高６～10m阿倉川台地の南向きの斜面	竪穴住居26棟・環壕・掘立柱建物・方形周溝墓	弥生土器（各種）・	重複関係・出土遺物から四時期に分けられ、一時期に１～3棟により集落の形成	⑭⑮
26	西ヶ谷	ニシガタニ	126	東坂部町字西ケ谷・山之一色町字白見谷				部田川中流北岸	部田川北岸の丘陵及び丘陵裾部に広がる			遺跡範囲の西部に弥生時代の遺物が散布	⑦
27	荒井田	アライダ	121	山之一色町字荒井田				部田川中流西岸	標高22m・台地上		弥生中期後半壺形土器採集	部田川沿い唯一の遺跡	⑥
28	四ヶ谷	ヨツヤ	408	東坂部町字四ヶ谷				海蔵川中流北岸	標高20丘陵台地の先端			八郷地区の内ノ坪遺跡と間ノ田遺跡の関係と同様、北側に貝野遺跡が存在	⑥
29	大谷	オオタニ	129	生桑町字大谷・東坂部町字東菖蒲谷	―		―	海蔵川中流右岸	標高25m生桑台地の北東端	環壕（前期）・竪穴住居（前期・後期）・方形周溝址（前期）・土坑・炉	前期（壺・鉢・蓋形・甕・高杯）・後期土器・土錘・紡錘車・磨製石斧・打製石斧・環状石斧・扁平片刃石斧・石鏃・砥石・石匙・石包丁・勾玉形土製品・石錘		⑲⑳㉑
30	永井	ナガイ	137	尾平町字永井上・石塚	―	―	―	三滝川中流北岸	標高20～30m生桑丘陵の南東端	環壕（前期）・方形周溝墓（中期）・竪穴住居（後期）	前期（壷・甕・鉢・蓋）・中期（壷・細頸壷・甕・無頸壷・高杯）・後期（壷・台付壷・甕・高杯）・石鏃・石剣・石斧・石包丁・石匙・不定形刃器・独鈷石・砥石・土錘・紡錘車・滑石製勾玉		㉒
31	上畑	ウエハタ	337	尾平町字上畑			―	三滝川中流北岸	標高25m生桑台地の南東端	竪穴住居７（後期）	後期（壷・甕・高杯）・石斧・砥石・土錘		㉓

第９表　朝明川流域の弥生時代遺跡一覧表

＊清水政宏「北勢地域の弥生集落の様相」－小特集：三重県における集落の様相－『みずほ』34号（大和弥生文化の会）2000.3収録　表１北勢地域における弥生遺跡・一覧表及び、４まとめ「四日市市内の弥生遺跡について」『一般国道１号線バイパス埋蔵文化財は靴調査概報Ⅳ』（2000.3）収録　表４四日市市内発掘の弥生遺跡・一覧表を参考にして、作成

［参考文献］
① 近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市ＪＣＴ『埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター（1999.3）
② 近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市ＪＣＴ『埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター（2000.3）
③ 近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市ＪＣＴ『埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター（2001.3）
④ 小玉道明ほか「西ケ広遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会（1970）
⑤ 小玉道明ほか『西ケ広遺跡発掘調査報告－D地区－』四日市市教育委員会（1972）
⑥『四日市市史』第２巻史料編考古Ⅰ（1988）
⑦『四日市市史』第３巻史料編考古Ⅱ（1993）
⑧ 小玉道明・番条勇雄『北山遺跡試掘調査概要』四日市市教育委員会（1975）
⑨ 四日市市遺跡調査会『北山Ｃ遺跡－（仮称）緑の広場計画に伴う試掘調査報告書』（1988）
⑩ 一般国道１号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ（1998.3）
⑪ 一般国道１号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ（1999.3）
⑫ 一般国道１号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ（2000.3）
⑬ 一般国道１号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ（2001.3）
⑭ 四日市市遺跡調査会『上野遺跡－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（四日市市遺跡調査会文化財発掘調査報告書Ⅱ）（1991）
⑮ 四日市市遺跡調査会『上野遺跡２－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（四日市市遺跡調査会文化財発掘調査報告書Ⅸ）（1992）
⑯『三重県埋蔵文化財センター年報７』（三重県埋蔵文化財センター）1996.3
⑰『三重県埋蔵文化財センター年報８』（三重県埋蔵文化財センター）1997.3
⑱『三重県埋蔵文化財センター年報９』（三重県埋蔵文化財センター）1998.3
⑲ 小玉道明『大谷遺跡発掘調査報告－A地区・B地区－』（四日市市埋蔵文化財調査報告２）四日市市教育委員会、（1966）
⑳ 小玉道明『大谷遺跡発掘調査報告Ⅱ－C地区の遺構－』（四日市市埋蔵文化財調査報告11）四日市市教育委員会、（1976）
㉑ 伊藤洋『大谷遺跡発掘調査報告Ⅲ－C地区の遺物－』（四日市市埋蔵文化財調査報告14）四日市市教育委員会、（1977）
㉒ 小玉道明・伊藤洋他『永井遺跡発掘調査報告』（四日市市埋蔵文化財調査報告７）四日市市教育委員会、（1973）
㉓ 小玉道明『上畑住居址群発掘調査概要』（概要報告５）四日市市教育委員会、（1967）

第65図　金塚遺跡周辺弥生時代遺跡図（1：30,000）

（4）横穴墓について

これまで三重県内では，磨き砂の採掘坑の可能性があるような不確かなものを含めても、横穴墓は4遺跡でしか知られていなかった。このため、その存在自体あまり注目されてこなかったが、金塚横穴墓群をはじめとして、近隣地域で近年行われた発掘調査により相次いで発見されるに及んで、横穴墓を当地域における古墳時代後期の墓制の一つとして認識できるようになった。近年横穴墓の本格的な発掘調査が行われた広永横穴墓群・金塚横穴墓群・菟上遺跡の3遺跡（計11基）と、今まで知られていた死人谷横穴古墳群（四日市市）・山辺横穴墓（鈴鹿市）・陰涼寺山横穴墓群（亀山市）・半田横穴群（津市）を合わせると、現時点では、朝明川流域の丘陵上に7遺跡中4遺跡が集中するという分布状況にある。ただ、当横穴墓群をはじめとする近年の調査例が、当初から横穴墓の存在を想定していたわけではないことを考えると、丘陵斜面の重要性を認識せずに見過ごされてきた横穴墓は少なからずあったのではないかとも思われる。したがって、朝明川流域に集中する現在の分布状況は、この地域の丘陵斜面で大規模な発掘調査が行われたことによるもので、他地域での今後の調査状況により変わりうるものと思われる。

ここでは、未だ正報告書が刊行されていないが、当遺跡に近く、遺構の残存状態が比較的良好な広永横穴墓群との比較を交えながら、当遺跡の特徴を考察してみたい。なお、広永横穴墓群の概要については、概報（田中1999）および横穴墓のシンポジウム資料（田中2001）によった。

①立地・分布について

広永横穴墓群は、標高約35mの丘陵上に位置し、金塚横穴墓群から南東へ約500mの所にある。同一尾根上で横穴式石室1基と横穴墓6基が確認されており、横穴墓の残存状態は金塚横穴墓群よりも全般的に良好である。しかし、調査区域が狭小であるため、横穴墓の面的な分布や群構成を把握できる状況にはない。本遺跡の場合も、一つの尾根に4基検出されたにすぎず、このような点に論及することは難しい。ただ、本遺跡では、西尾根と中尾根の間にあった張り出しが大規模に土取りされた際に、同時代のものと見られる須恵器が多量に出土しており（倉田1999）、この張り出し部分にも横穴墓が造られていた可能性がある[1]。そのように考えた場合、本遺跡で確認された横穴墓群は、さらに広く展開していた横穴墓群の中の一つの丘陵上に営まれた小支群と考えることもできる。

広永横穴墓群では、玄室は、その主軸と等高線が直交するようにして、頂部へ向かって築造されている。これに対し、本遺跡では、尾根の軸線に沿って掘削されているように一見思われる。しかし、周辺の地形は大きく改変されているため、戦後に米軍が撮影した航空写真や古い図面を検討し、最近の改変以前の地形を考えると、やはり尾根南西斜面の等高線に対し、直交またはやや斜めに築造されていたと推測される。

ところで、広永横穴墓群は尾根頂部を墳丘と意識した有墳丘横穴墓とされており、当横穴墓の場合も尾根先端にある若干の高まりに向かって玄室が構築されていることから、同様に有墳丘横穴墓と評価することが可能かもしれない。しかし、この高まりは地山であり、広永横穴墓群で想定されているような墳丘上祭祀の痕跡も認められないことから、積極的に有墳丘横穴墓とする根拠を見いだすことも難しい。

②横穴墓造営の時期について

先に述べたように、当地域における横穴墓の本格的な発掘調査は、ようやくその端緒についたにすぎない。このため、横穴墓の形態の時期的変遷を検討しうるだけの資料の蓄積がなく、遺構から時期を判断することは難しい。一方、出土遺物には、土器・耳環・玉・刀子・釘があり、この中では、須恵器の編年的研究が最も進んでいる。そこで、ここでは須恵器を中心にして、金塚横穴墓群造営の時期について考えてみることとしたい。

北勢地域は、畿内と東海という文化圏の周縁に位置しており、両者の影響を大きく受けてきた地域である。消費遺跡における須恵器の様相も同様で、どちらかと言えば畿内の陶邑窯のものに似た須恵器と、尾張の猿投窯産の特徴をもつ須恵器（猿投窯系）の両者が混在している。時には、古墳から出土した杯の半数を占めるほど猿投窯系が持ち込まれていることもあるが（葛山1997）、地域で主体を成すのは前者で、少数の異質な須恵器を含むが、形態・胎土か

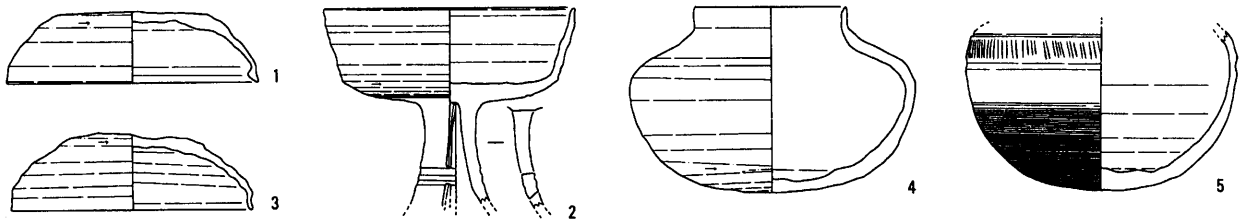
ら細部のくせまで類似する一群が主体を占めている。この一群の須恵器は、北勢地域の四日市市周辺で集中的に出土することから、四日市市を中心とした地域で生産を行っていた単一または少数の同系工人集団による製品ではないかと考えられ、同じ特徴をもつ須恵器は、四日市市内の岡山古窯跡群（小玉他1971）や西ヶ谷古窯跡群（春日井他1992）で出土している。したがって、この須恵器の一群を、岡山・西ヶ谷窯系須恵器[2]と称することも可能であるとは思うが、ここでは在地窯系須恵器と仮称しておく。

在地窯系須恵器については、未だ相対編年が確立されておらず、紀年銘資料など直接的に実年代を導きだせるような材料も全くない状況にある。したがって、ある程度実年代を押さえられる地域の須恵器と対比する方法が考えられるが、地域色の認められる須恵器なので、表面的な類似性だけで他地域の須恵器編年に当てはめることには躊躇をおぼえる。

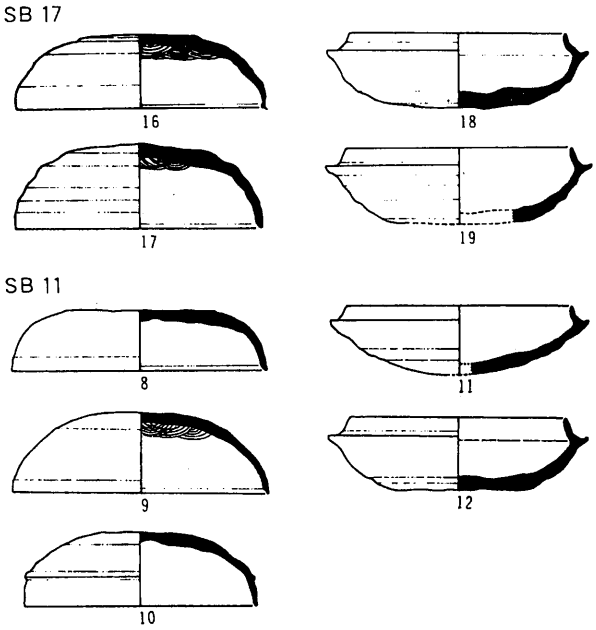
しかし、幸いなことに、北勢地域では在地窯系須恵器と猿投窯系須恵器が共伴する事例が少なからず存在する。猿投窯系須恵器は、比較的年代決定の材料に恵まれている飛鳥地域でも出土しており、そこから在地窯系須恵器の実年代を導き出すことも可能ではないかと思われる。

ところで、金塚横穴墓群からは、本調査では3点の須恵器しか出土していない。しかし、本調査以前に、西尾根で土師器の甕1点と共に、7点の須恵器が採集されている（倉田1999）。7点の須恵器の中には、杯蓋・高杯・壺・提瓶が含まれており、そのうち、高杯（第66図2）と短頸壺（同5）は、3号墓地点土坑出土の須恵器高杯・壺の破片と接合でき、同一個体であることが確認できた。さらに、採集地点もまさに3号墓地点[3]であり、付近に横穴墓以外の遺構が確認されていないことを考えあわせると、これらの採集資料を3号墓に伴う遺物と考えても問題なかろう。そこで、以下では本調査前に3号墓地点で採集された須恵器も含めて、横穴墓の造営時期を検討する材料として用いることとする。

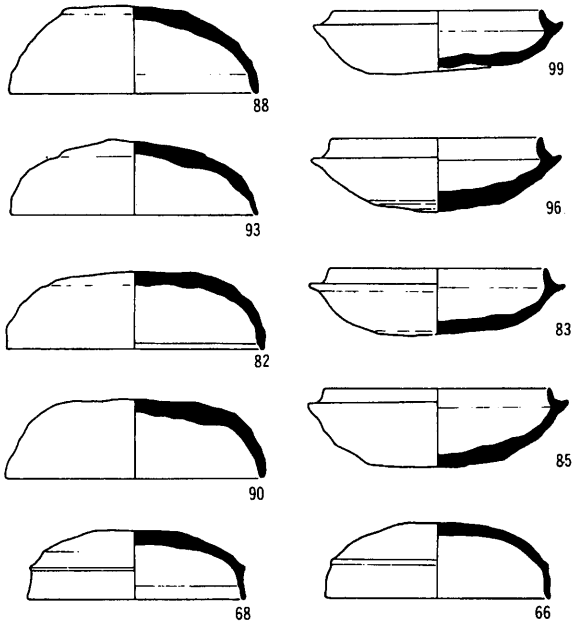
これら金塚横穴墓群出土の須恵器は、残念ながら



第66図　金塚横穴墓群3号墓地点採集遺物（1：4）



第67図　西ヶ広遺跡出土遺物（1：4）



第68図　和田ヶ平1号墳出土遺物（1：4）

すべて在地窯系で、猿投窯系の須恵器は含まれていない。しかし、近隣の西ヶ広遺跡（小玉他1970）で、金塚横穴墓群採集資料の杯蓋（第66図１）の類品と、猿投窯系須恵器の接点を見いだすことができた。

西ヶ広遺跡は、当横穴墓群から西に約1.2kmの台地上にある縄文時代から中世までの複合遺跡で、当該時期の竪穴住居が多数確認されている。竪穴住居SB17出土の在地窯系須恵器杯蓋（第67図16･17）は、金塚横穴墓群で採集された蓋とほぼ同大で、口縁部内端に面をもつ特徴や全体の形状・胎土に共通性が認められる[4]。このSB17から猿投窯系須恵器の出土はないが、SB11ではSB17出土の杯身（18）と酷似する杯身（12）に、猿投窯系須恵器の杯蓋（10）が共伴している。この杯蓋を猿投窯の出土遺物と比較すると、東山44号窯出土品に類似性が高いことから、金塚横穴墓群の須恵器杯蓋は西ヶ広遺跡SB11・17の資料を媒介として、東山44号窯とほぼ同時期のものと考えることができる。

しかし、ここでは複数の遺構を介在させて時期の推定を行っているため、猿投窯系須恵器との直接的な共伴例から年代を導き出した場合と較べて、大きな誤差が生じていることも予想される。そこで次に、猿投窯系須恵器と直接共伴する在地窯系須恵器の杯蓋と金塚横穴墓群出土杯蓋とを比較し、先の推定が妥当であるかを検証したい。

当該時期の猿投窯系と在地窯系の須恵器が供伴する例については、葛山氏の論考（葛山1997）に詳しいが、その好例として和田ヶ平１号墳（小玉他1974）・青木川２号墳・西ヶ谷遺跡が挙げられ、なかでも和田ヶ平１号墳の在地窯系杯蓋は、金塚横穴墓群出土杯蓋との類似性が高い（第68図）。和田ヶ平１号墳は、遺物の出土状況から１次埋葬と２次埋葬に分けられているが、共伴する猿投窯系須恵器はいずれも東山44号窯期から直接後続する東山15号窯期のものとされており、１次埋葬と２次埋葬の土器群に、明らかな型式差は認められない。そこで、和田ヶ平１号墳出土遺物をひとくくりにして、金塚横穴墓群のものと比較してみると、両者の在地窯系杯蓋は非常によく似ているが、和田ヶ平１号墳の方が若干新しい様相を呈している。したがって、金塚横穴墓群出土杯蓋を東山44号窯の須恵器とほぼ同時期に位置付ることには、やはり十分な妥当性があると思われる。

次に、実年代について考えてみたい。飛鳥地域では、東山44号窯と同時期と見られる猿投窯系須恵器は、川原寺下層ＳＤ02出土遺物の中に認められる（西口1993）。この遺構は、川原寺創建以前のものとされているが、川原寺の創建年代には諸説あるため、実年代を絞り込むことは難しい。しかし、東山44号窯の直後の東山15号窯と同時期のものと見られる猿投窯系須恵器は、645年の乙支の変との関連が指摘されている甘橿丘東麓遺跡焼土層ＳＸ037から出土している（次山1995）。東山44号窯と東山15号窯の須恵器を較べてみると、わずかに新旧関係が認められるものの、重複する要素も非常に多く、それほど大きな時期差は想定できない。

したがって、資料的制約により、それぞれの横穴墓の年代にまで言及はできないが、以上の検討から、金塚横穴墓群が造営された時期の一端を、645年をやや遡る７世紀前半と考えることができよう[5]。

③横穴墓の形態について

金塚横穴墓群と広永横穴墓群には、平面形態や奥壁の立ちあがり、奥壁と側壁の境の状況など、玄室の形態に異なる点が非常に多い（第69図）。一般的に形態差の要因については、個体差・地域差・時期差などが考えられるが、両横穴墓群の形態差がどれに起因するものなのかを検討してみたい。

まず、個体差の可能性については、両横穴墓群の各横穴墓の形態が、それぞれの群の中で非常に似通っており、均質的なあり方を示していることからみて、考えにくい。

次に、地域差を考えるべきかどうかだが、両横穴墓群は直線距離にしてわずか500ｍしか離れていない。朝日丘陵上の同じ四日市市側に位置していることを考え併せると、地域差を想定するには、あまりにも近すぎるのではないだろうか。

最後に、残る時期差について検討してみよう。金塚横穴墓群が造営された時期の一端を、645年をやや遡る７世紀前半と考えられることについては既に述べた。では、広永横穴墓群はいつ頃の造営と考えられるだろうか[6]。詳細については本報告を待ちたいが、現段階で実測図が公表されている遺物の中に

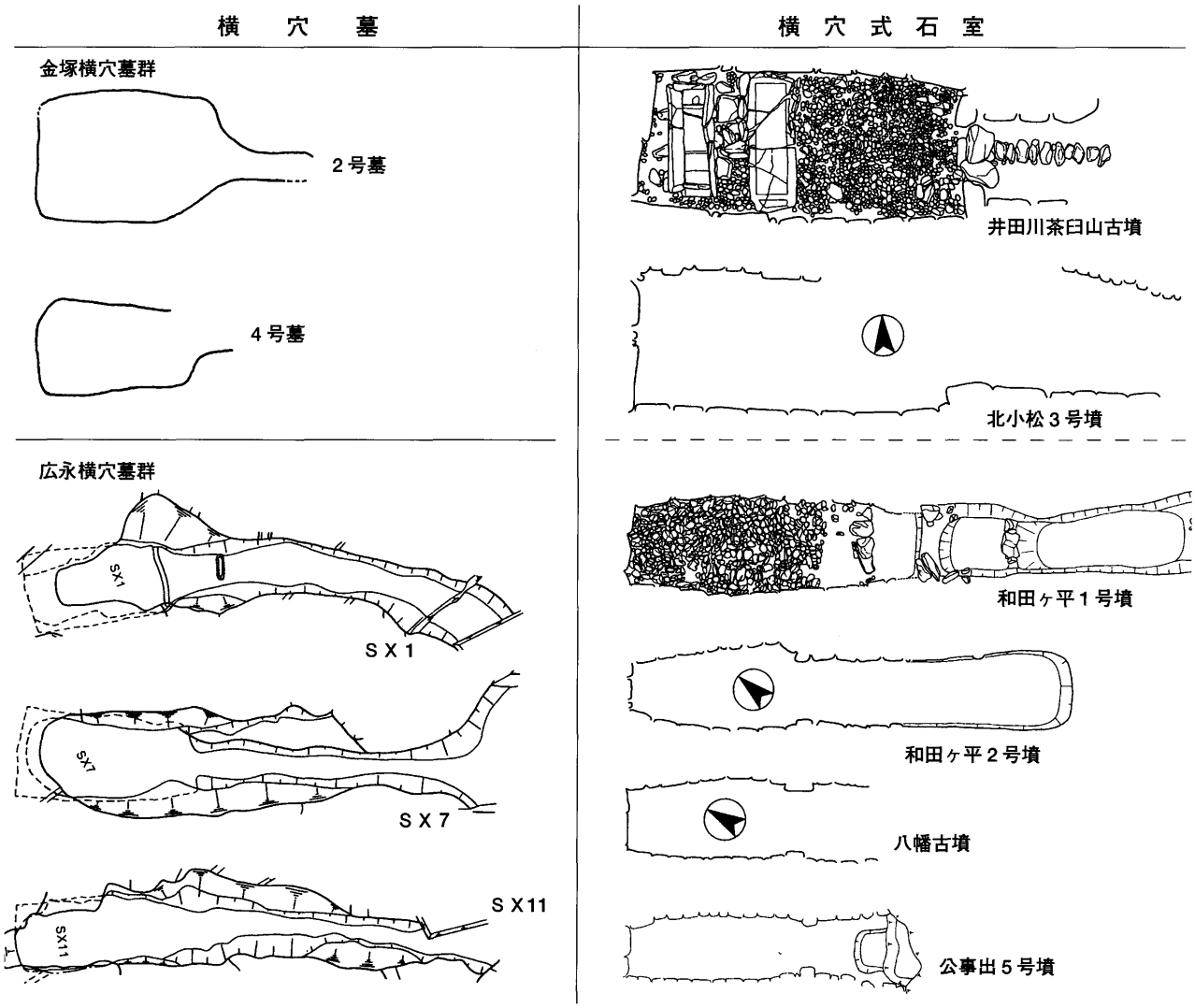
猿投窯系須恵器が含まれていることが手がかりとなる。広永横穴墓群で出土している猿投窯系須恵器は、おおよそ東山15号窯や東山16号窯出土遺物と対比できるもので、一部にはさらに後出する要素をもつものまで認められる。東山15号窯の時期については既に述べたが、東山16号窯については、同時期のものと見られる杯身・杯蓋が飛鳥水落遺跡（奈文研1995）から出土しており、この遺跡が661年に建設され、667年もしくは671年に廃絶した漏刻（水時計）と推定されていることから、７世紀の第３四半期頃と考えられる。したがって、さらに後出要素を持つものの存在を考慮すれば、広永横穴墓群の造営時期は、およそ７世紀半ば～後半頃と推定できるのではないだろうか。

つまり、金塚横穴墓群が７世紀前半の築造と推定されるのに対して、広永横穴墓群はやや新しい時期の築造と考えられ、両者の間には時期差が存在するのではないかと思われる。したがって、両横穴墓群の玄室の形態差に、造営された時期の違いが反映している可能性は十分に考えられよう。

ところで、他地域での研究によれば、横穴墓は立地・分布から被葬者の階層まで、多岐にわたって同時代の墓制である横穴式石室と比較し関連づけて論じられることが多く、形態についても同様である。

そこで、北勢地域の横穴式石室についても一瞥しておこう。

北勢地域には、良好な遺存例はあまり多くないため、横穴式石室の変遷を詳細に捉えることは難しいが、大まかには、玄室の幅が広くて袖が明瞭なものから、玄室幅が狭くて袖が小さなものや不明瞭なも



第69図　金塚横穴墓群・広永横穴墓群と北勢地域の横穴式石室の平面形態（１：120）

のへの流れがあるように思われる⑦。前者の様相を示す新しい事例の北小松３号墳が東山44号窯とほぼ同時期と考えられ、後者の様相を示す古い事例の和田ヶ平１号墳が東山44号窯～東山15号窯とほぼ同時期と考えられているため、その変換点をおよそ７世紀前半～中葉におくことができるのではないだろうか。

つまり、金塚横穴墓群と広永横穴墓群は、北勢地域の横穴式石室の形態が大きく変化する時期の前後に造営されたもので、金塚横穴墓群が、玄室幅が広く袖が明瞭であるのに対して、広永横穴墓群は、玄室幅が狭く袖が小さなものや不明瞭なものであるという形態差は、まさしく、北勢地域の横穴式石室の形態変化と対応しているのではないかと推測できる。

さらに、横穴墓と横穴式石室との関連が推測できる類似点としては、石室前面にとりつく非常に長い素掘りの溝、墓道状遺構が挙げられる。従来、これは北勢地域の横穴式石室の特徴として認識されてきたが、広永横穴墓群でも、残存状態のよい横穴墓にはすべてに確認されている。これも、当該地域における横穴墓と横穴式石室の形態的類似性を示唆する要素ではないだろうか。そうだとすれば、玄室の手前が後世の土取りにより失われていた金塚横穴墓群についても、広永横穴墓群と同様の長い墓道状遺構があった可能性も十分に考えられる。（水橋公恵）

［註］

① 中央尾根で確認されたような土壙墓の可能性もある。

② 岡山古窯跡群は、須恵器から灰釉陶器まで焼成した窯跡であり、全ての時期にあてはまるかは不明であるが、当該時期の前後についてはその見通しを持っている。

③ 倉田1999の本文中で、稲垣義一氏の採集地点が別地点（第2図1）となっているのは誤植で、出土したのは第2図の2であるとのご教示を得た。稲垣義一氏の話では、この地点は土器が採集される以前から若干くぼんでいたということである。

④ 異なる点としては、西ヶ広遺跡のものが2点とも天井部内面に同心円文の当て具痕があるのに対し、西尾根出土のものは不定方向になでられていることをあげられる。しかし、西ヶ広遺跡出土の在地窯系杯蓋の中には、SB17とほぼ同形のものが数点あり、それらの天井部内面はなでられているものが多い。また、採集資料のなかにも高杯ではあるが、杯部内面中央に同心円文当て具痕がある。したがって、天井部に当て具痕があるものと、なでられているものの差異は時期差というよりも個体差と考えられる。

⑤ 本来、土器による時期決定に際しては、個別の器種だけでなく、共伴するすべての器種について検討を行うのが望ましいとは思うが、筆者の知見の範囲では、他の器種の類例と猿投窯系須恵器との良好な共伴例を見つけることができなかった。したがって、本稿では杯蓋からの検討に止まらざるを得なかった。

⑥ 時期について、田中1999と田中2001では異なる見解が出されており、検討中とのことである。

⑦ 北勢地域の横穴式石室には、東海地方に特徴的な胴張り形のものと畿内との関係が想定される矩形のものの2者が存在する。その一方で、東海系と畿内系と単純に2系列に分けられない在地での展開があり、複雑な様相を呈している。この点については、詳しくは竹内1995・1996を参照されたいが、ここでは、目に付く現象を単純に捉えた。

参考・引用文献

・春日井恒他1992『西ヶ谷古窯跡群』四日市市遺跡調査会

・北野保他1977『北小松古墳群・日永貝之谷古墳』四日市市教育委員会

・葛山拓也1997「北勢中部」『古代の土器5-1　7世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器研究会

・葛山拓也1998『公事出古墳群　公事出遺跡』四日市市教育委員会

・倉田文美1999「金塚古墳群の出土遺物について」『研究紀要』 第8号　三重県埋蔵文化財センター

・小玉道明他1970「西ヶ広遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』 日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会

・小玉道明他1971『岡山古窯址発掘調査報告』四日市市教育委員会

・小玉道明他1974『四日市の後期古墳』四日市市教育委員会

・小玉道明1988『井田川茶臼山古墳』三重県教育委員会

・竹内英昭1995「三重県の横穴式石室研究」『研究紀要』第4号　三重県埋蔵文化財センター

・竹内英昭1996「北勢地域の胴張形石室―「三重県の横穴式石室研究」補論―」『MieHistory』vol.8三重歴史文化研究会

・田中久生1999「広永城跡・広永古墳群・広永横穴墓群」『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT　埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター

・田中久生2001「三重県の横穴墓―伊勢平野の現状－」『静岡県考古学会2000年シンポジウム　東海の横穴墓』静岡県考古学会

・次山　淳1995「甘橿丘東麓の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』25　奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

・西口寿生1993「飛鳥・藤原地域出土の土器」『古代の土器研究会第2回シンポジウム　古代の土器研究―律令的土器様式の西・東2　須恵器―』古代の土器研究会

・奈良国立文化財研究所1995『飛鳥・藤原宮跡発掘調査報告Ⅳ―飛鳥水落遺跡の調査―』

出典一覧（いずれも一部転載）

第66図　倉田1999

第67図　小玉他1970

第68図　小玉他1974

第69図　小玉1988・北野1977・小玉他1974・葛山1998・田中1999

No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	口径 cm	器高 cm	その他 cm	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	004－01	壷	S－22 SD2	12.2	—	—	内:ナデ 外:ナデ・波状文	密	良	橙 7.5YR.7/6	1/8	
2	004－03	壷	S－22 SD2	25.7	—	—	内:ナデ 外:ユビオサエ・ナデ	やや密	やや良	にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙 10YR5/4	1/10	
3	001－02	壷	S－22 SD2	14.6	—	—	内:風化のため不明 外:風化のため不明	やや粗 (2～4mm石含む)	不明	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部2/3	取り上げNO.20
4	005－02	壷	S－22 SD2	8.0	—	—	内:ハケメ 外:ハケ後ナデ・ユビオサエ	やや粗	良	明黄褐 10YR6/6	口縁部2/3 1/5	体部焼成後穿孔 頸部円形2箇穿孔
5	004－04	壷	S－22 SD2	—	—	底径 4.0	内:ハケメ 外:風化のため不明	やや粗	良	橙 5YR6/6	1/5	
6	004－02	壷	S－22 SD2	—	—	底径 4.5	内:ハケメ 外:ミガキ	粗 (直径3mm以下の石を含む)	良	内:褐灰 10YR5/1 外:にぶい黄橙 10YR6/4	底部完形	
7	002－02	壷	S－22 SD2	—	—	底径 7.8	内:ハケメ 外:ハケメ後ミガミ	やや密	良	黄橙 10YR5/6	底部1/4 1/5	
8	004－05	高杯	S－22 SD2	—	—	—	内:ハケメ・ナデ 外:ミガキ	やや密	やや良	橙 7.5YR7/6	1/3	取り上げNO.2 円形スカシ3方
9	005－01	高杯	S－22 SD2	—	—	—	内:ミガキ・ナデ・オサエ後ハケ 外:ミガキ	やや粗 (4mm以下の小石あり)	やや良	にぶい黄 2.5YR6/3	杯部1/8 脚部2/3	取り上げNO.13 円形スカシ3方
10	001－01	甕	S－22 SD2	12.2	14.5	底径 4.2	内:オサエ・ケズリ・ナデ 外:不明	やや粗 (2～6mm石含む)	不明	明赤褐 5YR5/6	3/5	取り上げNO.19
11	002－01	甕	S－22 SD2	14.6	—	—	内:風化のため不明 外:ヨコナデ・ハケ	やや粗 (1～2mm石含む)	良	明褐 7.5YR.5/6	口縁部1/6 2/5	
12	003－01	甕	S－22 SD2	16.6	—	—	内:ユビオサエ・ナデ・ハケメ(4～5本/cm) 外:ハケメ(8本/cm・4～5本/cm)・刺突・ナデ	粗 (直径4mm以下のレキを含む)	不明	明黄橙 10YR6/6	1/2	取り上げNO.15
13	012－01	壷	N－43 SD23 (明褐色土)	15.0	—	—	内:風化のため調整不明 外:風化のため調整不明	やや粗 (2mm以下の小石少量含む)	良	黄橙 10YR8/6	口縁部1/5	
14	012－02	壷	N－44 SD23 (黒褐色土)	18.8	—	—	内:不明 外:ミガキ・ヨコナデ	やや粗 (1mm以下の小石少量含む)	良	橙 7.5YR7/6	口縁部1/5	
15	007－02	壷	N－43 SD23 (黄褐色土)	11.2	—	—	内:ナデ? 外:ハケメ	粗 (4mm以下の小石含む)	やや 不良	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/2	
16	007－01	壷	N－44 SD23 (黄褐土)	—	—	—	内:ナデ 外:ハケメ後ミガキ(表面ハクリはげしい)	粗 (4mm以下の小石含む)	不良	淡黄 2.5Y8/4	1/3	
17	015－03	壷	N－43SD 23	13.9	—	—	内:ミガキ?・ユビオサエ 外:ナデ?・ハケ?・刺突	粗 (5mm以下の小石多量含む)	不良	橙 7.5YR7/6	口縁部1/2 1/3	
18	016－03	壷	N－44S D23 (明褐色土)	—	—	—	内:不明 外:不明	やや粗 (2mm以下の砂粒含む)	不良	淡黄 2.5Y8/4	口縁部小片	
19	007－04	壷	N－43S D23 (黄褐色土)	—	—	—	内:不明 外:直線文・波状文・ナデ	密	良	内:淡黄 2.5Y8/4 外:橙 7.5YR7/6	体部小片	
20	013－02	壷	N－44S D23 (黒褐色土)	—	—	—	内:ナデ 外:タテハケ・波状文6本・直線文4本・6本	やや粗 (礫少し含む)	良	橙 7.5YR7/6	体部小片	
21	007－03	壷	N－44S D23	—	—	—	内:ハケメ 外:直線文(5本)波状文(3本・4本)タテハケ	やや粗 (3mm以下の小石含む)	良	明黄褐 10YR6/6	体部小片	
22	013－03	壷	N－43S D23 (黒褐色土)	—	—	—	内:ハケメ外:タテハケ・波状文(5本・7本)・直線文(7本)	やや粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	体部小片	
23	011－02	壷	N－44 SD23 (黒褐色土)	—	—	底径 4.3	内:ハケ・風化大 外:ハケ	やや粗 (2mm以下の小石少量含む)	良	明黄褐 10YR7/6	底部2/3	取り上げNO.8
24	011－01	壷	N－43 SD23 (黒褐色土)	—	—	底径 4.1	内:不明 外:不明	やや粗 (クサリ礫少量含む・1mm以下の小石多い)	良	浅黄橙 7.5YR8/4	底部1/2	取り上げNO.16
25	017－04	壷	N－43 SD23 (褐色土)	—	—	底径 4.1	内:調整不明 外:調整不明	粗 (5mm以下の石含む)	不良	にぶい黄橙 10YR7/4 底部:赤橙 0R6/8	底部ほぼ完形 1/2	
26	009－02	台付無頸壷	N－44 SD23 (黒褐色土)	10.4	16.3	底径 8.9	内:ハケメ・ナデ 外:ハケメ・ナデ	やや粗 (5mm以下の小石多量含む)	不良	浅黄 2.5Y7/4	口縁部1/3 底部ほぼ完形 2/3	
27	008－01	高杯	N－44 SD23 (黒褐色土)	20.8	—	—	内:ナデ 外:ミガキ	密	良	明黄褐 10YR7/6	2/3	円形3方スカシ
28	009－01	高杯	N－44 SD23 (黒褐色土)	—	—	—	内:ハケメ・表面ハクリのため調整不明 外:直線文(9本・12本)・ミガキ・表面ハクリのため調整不明	粗 (5mm以下の小石含む)	不良	橙 7.5YR7/6	1/3	円形3方スカシ
29	008－02	高杯	N－44 SD23	—	—	底径 14.4	内:不明 外:ハケ後ミガキ	やや粗 (5mm以下の小石含む)	不良	橙 7.5YR6/6	1/2脚部のみ	円形5方スカシ
30	012－04	高杯	N－44 SD23 (黒褐色土)	—	—	—	内:不明 外:直線文(5本)・ヘラミガキ	やや粗	良	橙 7.5YR7/6	上脚部1/2	取り上げNO.5 円形3方スカシ
31	013－01	高杯	N－44 SD23 (黒褐色土)	—	—	—	内:ハケ 外:直線文・直線文(7本/2cm)・風化のため調整不明	やや粗	良	黄橙 7.5YR7/8	柱状部完存	赤色顔料付着
32	012－06	高杯	N－44 SD23	—	—	—	内:不明 外:風化のため調整不明	粗	良	浅黄橙 10YR8/4	上脚部わずか残存	
33	011－04	高杯	N－44 SD23 (黒褐色土)	—	—	底径 10.9	内:ミガキ 外:ミガキ	やや粗 (2mm以下の小石少量含む・雲母少し含む)	良	浅黄橙 7.5YR8/6	脚部一部欠	
34	010－01	器台	N－44 SD23	21.3	20.4	底径 15.4	内:調整不明・ハケメ 外:一部ミガキ・円形浮文	粗 (5mm以下の小石含む)	不明	浅黄橙 10YR8/4	2/3	円形4方スカシ2段
35	011－05	甕	N－44 SD23 (明褐色土)	14.4	—	—	内:不明 外:不明	やや粗 (2mm以下の小石少量含む)	良	黄橙 7.5YR8/6	口縁部1/5	
36	005－03	甕	N－43 SD23 (黒褐色土)	15.7	—	—	内:ナデ 外:ナデ・ハケメ	粗 (2.5mm以下の小石あり)	不良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部1/2	スス痕あり

第10表　遺物一覧表（1）

No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	口径 cm	器高 cm	その他 cm	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
37	011－06	甕	N－44 SD23	17.0	—	—	内:ハケ痕跡・ヨコナデ 外:ヨコナデ・ハケ	やや粗	良	明赤褐 5YR5/6	口縁部1/3	
38	014－01	台付甕	N－43 SD23 (明褐色土)	18.9	30.1	底径 8.8	内:ユビオサエ後ハケ目 外:ユビナデ・ハケメ・ユビオサエ後ナデ	粗 (1mm～3mm小石含む)	不良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部2/5 底部4/5	焼成後穿孔
39	015－02	台付甕	N－43 SD23 (黒褐色土)	—	—	底径 7.2	内:ナデ・一部ハケ 外:ナデ・ハケメ	やや粗 (3mm以下の小石含む)	良	黄灰 2.5Y5/1	底部1/21/4	
40	011－03	台付甕	N－44 SD23 (黒褐色土)	—	—	底径 7.45	内:ハケ 外:ハケ・摩耗著しく調整不明	やや粗 (2mm以下の小石少量含む)	良	橙 5YR7/6	脚部ほぼ完存	
41	016－02	台付甕	N－43 SD23	—	—	底径 7.6	内:ナデ 外:ハケのちナデ?	やや粗 (5mm以下の小石含む)	不良	にぶい黄橙 10YR7/4	底部1/8 1/10	
43	020－04	壷	SD29 (黄褐色土)	20.2	—	—	風化のため調整不明	密	不良	橙 5YR6/8	1/5	
44	015－04	壷	P－37 SD29 (黄褐色土)	12.4	—	体部 21.1	内:ミガキ?・ヨコハケのちタテハケ(10本/cm) 外:ナデ・ハケ後タテミガキ	やや粗 (4mm以下の小石含む)	良	橙 2.5YR6/6	口縁部1/3 1/3	
45	020－01	壷	SD29 (黄褐色土)	—	—	底径 5.8	内:ハケメ(14本/0.9cm) 外:ハケメ後ミガキ・ハケメ(7本/1.2cm程度)・ナデ	密	良	内:浅黄橙 10YR8/4 外:橙 7.5YR7/6	底部完存 体部下部1/5	取り上げNO.3
46	021－01	壷	P－37 SD29 (黄褐色土)	7.6	10.4	底径 4.6	内:表面ハクリのため調整不明 外:ハケメ(10本/1.2cm)・表面ハクリのため調整不明	粗 (1～6mmの石を多く含む)	不良	橙 7.5YR7/6	口縁部完存 底部完存2/3	取り上げNO.3
47	017－03	台付壷?	P－37 SD29 (黄褐色土)	—	—	—	内:ハケメ・(6本/cm)外:ミガキ?	粗 (4mm以下の石含む)	良	内:浅黄 2.5Y8/4 外:浅黄 2.5Y7/3	1/3	取り上げNO.8
48	020－03	甕	SD29 (黄褐色土)	15.0	—	—	内:ハケメ 外:ハケメ(7本/1cm)単位不明	粗 (1～5mmの石を含む)	不良	浅黄橙 7.5YR8/3～ 橙 7.5YR7/6	1/4	取り上げNO.4
49	018－01	甕	SD29 (黄褐色土)	15.8	—	—	内:ハケメ・ナデ・調整不明 外:一部ハケ痕(調整不明)	粗 (4mm以下の小石含む)	不良	内:黒褐 10YR3/1 外:にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/3 1/5	
50	022－01	甕	P－37 SD29	16.0	—	—	内:不明 外:刺突文様・ハケメ	やや粗 (4mm以下の小石を含む)	良	明赤褐 5YR5/6	口縁部1/5	
51	024－01	甕	P－38 SD29	—	—	—	内:不明 外:直線文・ハケメあり	やや粗	良	橙 7.5YR6/6	口縁部小片	
52	018－04	甕	P－37 SD29 (黄褐色土)	12.9	15.6	底径 2.2	内:ハケメ 外:刺突文・直線文・波状文(4本)・ハケメ(12本/cm)	粗 (6mm以下の砂粒含む)	不良	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/8 底部完形1/3	
53	020－05	甕	SD29 (黄褐色土)	—	—	—	表面ハクリのため調整不明	粗 (1～3mmの石を含む)	不良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部小片	
54	019－05	台付甕	SD29	—	—	—	内:ハケメ 外:ハケメ(9本/cm)	粗 (1～3mmの小石を含む)	不良	橙 7.5YR7/6	脚部ほぼ完存 体下部1/4	取り上げNO.18
55	019－02	台付甕	SD29 (黄褐色土)	—	—	—	内:ユビオサエ・ハケメ(10本/cm) 外:ハケメ	やや密 (1mmの石をわずかに含む)	良	にぶい橙 7.5YR7/4～ 橙 7.5YR7/6	1/3	底部に充填技法痕跡
56	019－01	台付甕	SD29 (黄褐色土)	—	—	底径 5.0	内:ナデ 外:表面ハクリのため調整不明	粗 (1～2mmの石を多く含む)	不良	底部内:にぶい橙 2.5YR6/4 外:橙 7.5YR7/6	脚部完存	
57	020－02	台付甕	SD29 (黄褐色土)	—	—	—	内:ハケメ 外:ハケメ(8本/1cm)	粗 (砂粒を多くと1～2.5mmの石を含む)	不良	にぶい橙 5YR7/3～ 橙 2.5YR7/6	1/3	取り上げNO.4
58	019－04	高杯	SD29 (黄褐色土)	—	—	—	内:ナデ?(表面ハクリのため) 外:表面ハクリのため調整不明	粗 (1～5mmの小石を含む)	不良	橙 5YR6/6	脚部上部完存	取り上げNO.2 円形3方スカシ
59	022－02	高杯	P－37 SD29	—	—	—	内:不明 外:不明	やや粗 (3mm以下の砂粒を含む)	不良	にぶい黄橙 10YR7/3	脚部上半のみ	円形3方スカシ
60	019－03	高杯	SD29 (黄褐色土)	—	—	—	内:表面ハクリのため調整不明・下方ナデ 外:ハケメ・ミガキ・直線文(11本・12本)・表面ハクリのため調整不明	やや粗 (1～2mmの小石を含む)	不良	内:にぶい橙 5YR7/4 外:橙 5YR7/6	脚部上部1/2	円形3方スカシ2段
61	022－03	高杯	Q－36 SD29	—	—	—	内:ナデ 外:ミガキ・直線文	粗	良	橙 7.5YR7/6	脚部上半のみ	円形4方スカシと 円形6方スカシの2段
62	006－01	高杯	SD29 (黄褐色土)	26.3	—	底径 12.01	内:ハケ後ミガキ・脚部調整不明 外:ミガキ後直線文・脚部調整不明	粗 (4mm以下の小石あり)	並	浅黄橙 10YR8/4	1/3	
63	023－03	高杯	Q－36 SD29	—	—	底径 15	内:不明 外:ハケメ・ミガキ後直線文・表面ハクリ	やや粗	良	橙 7.5YR6/6	脚部完存	円形3方スカシ
64	017－02	高杯	SD29 (黄褐色土)	—	—	—	内:調整不明・ナデ? 外:ミガキ・直線文・キザミ	粗 (2mm以下の砂粒含む)	やや不良	淡黄 2.5Y8/4	1/4	円形3方スカシ
65	021－02	高杯	P－37 SD29 (黄褐色土)	—	—	底径 11.4	内:ナデ外:ミガキ	やや密 (1～3mmの石をわずかに含む)	不良	灰白 10YR8/2～ 橙 7.5YR7/6	5/6	取り上げNO.5 円形4方スカシ
66	023－02	高杯	P－37 SD29	—	—	—	内:ミガキ 外:ミガキ後直線文	やや粗	良	橙 7.5YR6/6	端部欠損	
67	017－01	高杯	SD29 (黄褐色土)	9.5	—	—	内:ミガキ? 外:ミガキ?・調整不明・キザミ・直線文	粗 (3mm以下の砂粒含む)	不良	内:黄橙 7.5YR7/8 外:一部橙 2.5YR7/6	口縁部1/3 1/2	取り上げNO.7 円形4方スカシ?
68	018－03	ミニチュア	SD29 (黄褐色土)	6.4	7.7	底径 2.45 体部	内:ナデ 外:ハケメ	やや密 (4mm以下の石少量含む)	不良	淡黄 2.5Y8/4	口縁部1/10 底部完存2/3	
69	018－02	ミニチュア	Q－37 SD29	—	6.0	底径 2.05	内:ナデ? 外:ナデ?ハケメ?	やや密 (3.5mm以下の小石含む)	不良	灰白 2.5Y8/2	底部完形4/5	
72	025－02	壷	SH6 Ⅲ区	—	—	底径 3.8	内:調整不明 外:調整不明	やや粗 (3mm以下の砂粒含む)	不良	内:橙 5YR6/6 外:にぶい赤橙 5YR5/3	底部1/3 1/10	
73	025－01	高杯	SH6 炉	19.4	—	—	内:調整不明 外:調整不明	粗 (4mm以下の砂粒多量含む)	不良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部1/10	
75	026－05	壷	SH7 周溝内	13.8	—	—	内:表面ハクリのため調整不明 外:刺突文・調整不明	やや粗 (5mm以下の小石含む)	不良	浅黄橙 10YR8/4	1/4	
76	028－06	壷	SH7 黒褐色土	—	—	—	内:不明 外:ナデ	やや粗	良	橙 7.5YR7/6	底部1/2	底部外面木葉痕

第11表　遺物一覧表（2）

No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	口径 cm	器高 cm	その他 cm	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
77	025－03	壷	SH7 Ⅲ区	—	—	底径 4.0	内:ハケメ(5本/cm)? 外:ハケメ(8本/cm)	やや粗 (3mm以下の小石含む)	不良	灰黄 2.5Y7/2	底部ほぼ完形 1/10	
78	027－02	甕	SH7 Ⅱ区	12.9	—	—	内:ハケメ 外:ヨコナデ・ハケメ(6本/cm)	やや粗 (4mm以下の石含む)	良	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/10 1/8	
79	027－05	甕	SH7	—	—	—	内:ハケ痕あり・ナデ 外:ナデ・ハケメのちナデ・キザミ	やや粗 (3mm以下の石含む)	良	内:褐灰 10YR6/1 外:明黄褐 10YR7/6	口縁部小片	
80	027－04	甕	SH7 黒褐色土	16.7	—	—	内:ハケメ?・ナデ・ 外:調整不明・列点文	やや密 (2mm以下の砂粒含む)	やや良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部1/10 1/10	
81	025－04	台付甕	SH7	—	—	底径 7.1	内:ユビナデ・ナデ 外:ハケのちナデ	やや粗 (5mm以下の小石含む)	やや不良	にぶい赤褐 5YR5/4	底部2/3 1/10	
82	025－06	台付甕	SH7	—	—	底径 6.4	内:ナデ 外:指によるナデ?	やや粗 (4mm以下の小石含む)	並	内:暗赤灰 2.5YR8/1 外: にぶい赤褐 2.5YR5/4		
83	025－05	甑?	SH7 Ⅰ区	—	—	底径 8.0	内:ハケメ(5本/cm) 外:調整不明	やや粗 (4mm以下の小石含む)	不良	灰白 7.5YR8/2	底部1/4 1/10	
84	027－03	高杯	SH7 Ⅰ区	20.0	—	—	内:調整不明 外:調整不明	やや粗 (5mm以下の小石含む)	やや不良	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/8 1/3	
85	026－01	高杯	SH7	—	—	—	内:ハケメ(7本/cm) 外:直線文(4本・6本・7本)・ミガキ	やや粗 (3mm以下の小石含む)	やや不良	にぶい黄橙 10YR7/4	2/3	円形3方スカシ?
86	026－03	高杯	SH7	—	—	—	内:指ナデ 外:ミガキ・直線文(5本)	やや粗 (5mm以下の砂含む・1.2cm以下の砂粒含む)	不良	灰白 2.5Y8/2	1/3	
87	026－02	高杯	SH7 Ⅱ区	—	—	—	内:ナデ 外:直線文(3本)・ハケメのちミガキ?	やや密 (3mm以下の石含む)	やや不良	黄橙 10YR8/6	1/5	円形3方スカシ
88	027－01	手あぶり?	SH7 Ⅱ区 黄褐土	17.0	—	—	内:ハケメ 外:キザミ・櫛描直線痕・調整不明	やや粗 (3mm以下の砂粒含む)	不良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/5 1/10	
89	027－06	器台	SH7 Ⅰ区	—	—	底径 16.5	内:ハケメ痕あり 外:ハケメ?ミガキ痕あり	粗 (3mm以下の砂粒含む)	やや不良	浅黄橙 10YR8/4	底部1/10	
91	028－02	壷	SH18 Ⅰ区	—	—	底径 5.9	内:ハケメ(8～9本/cm)・ユビオサエ 外:ハケメ	やや粗 (2mm以下の石含む)	良	浅黄橙 7.5YR8/4	底部完存	取り上げNO.2
92	028－01	台付甕	SH18 Ⅰ区 黄褐土	—	—	底径 7.2	内:不明 外:ハケメ・風化のため詳細不明	粗 (5mm以下の石含む)	良	赤褐 2.5YR4/6	底部2/3	
93	028－03	高杯	SH18 Ⅳ区	21.8	—	—	内:風化のため調整不明(ミガキか?)・ヨコナデ 外:ヨコナデ・ハケ後ミガキ・ミガキ	やや粗	良	橙 7.5YR7/6	口縁部1/8	
94	028－04	高杯	SH18 Ⅲ区 黄褐土	—	—	—	内:不明 外:ミガキ	やや粗 (6mm以下の石含む)	良	黄橙 10YR8/6	上脚部1/2残存	
95	034－03	壷	SH19 Ⅰ区 褐色土	12.9	—	—	内:ハケメ 外:ヨコナデ・ミガキ(0.3cm幅)	やや粗 (～3mm以下砂粒あり)	良	橙 7.5YR6/6	口縁部1/6	赤色顔料
96	031－01	壷	SH19 Ⅳ区 褐色土	15.4	—	—	内:ナデ・ハケメ 外:ナデ・タテハケ(6本/cm)・一部ナデ・ハケ	やや粗	やや不良	黄橙 10YR8/6	口縁部1/3	
97	032－04	壷	SH19 Ⅰ区 褐色土	18.5	—	—	内:ハケメ 外:ミガキ	並	良	橙 7.5YR6/6	1/8	
98	035－03	壷	SH19 Ⅳ区 褐色土	—	—	底径 5.5	内:ハケメ 外:ハケメ・ヨコナデ	やや粗	良	にぶい黄橙 10YR7/4	底部1/2	
99	024－03	壷	SH19 Ⅰ区 褐色土	—	—	底径 4.8	内:ハケメ 外:ハケメ	やや粗	良	橙 5YR6/6	底部完形	
100	033－04	壷	SH19 Ⅰ区 褐色土	—	—	底径 4.4	内:ハケメ 外:ミガキ(単位5本)後ハケメ	やや粗 (～3mm砂粒含む)	良	にぶい黄橙 10YR7/4	底部完形	
101	029－02	壷	SH19 Ⅰ区 黄褐土	—	—	底径 3.3	内:風化大のため調整不明(一部ハケ見える) 外:風化大のため調整不明	粗	良	内:赤黒 2.5YR2/1 外:明赤褐 2.5YR5/6	底部のみ	029－01の底部か?
102	032－03	壷	SH19	—	—	体部径 11.8	内:ユビオサエ・ハケメ 外:ミガキ	並	良	浅黄橙 10YR8/4	1/5	
103	031－02	手づくね	SH19 Ⅰ区 褐色土	7.3	8.6	3.4	内:ユビオサエ・調整不明 外:ヨコハケ・タテハケ・ナデ・板状工具によるナデ	粗 (4mm以下の砂粒含む)	やや不良	内:にぶい黄橙 10YR7/4 外:にぶい黄 10YR7/3 暗灰 N3/0	ほぼ完形	
104	030－02	甕	SH19 Ⅰ区 褐色土	17.2	—	—	内:調整不明 外:調整不明	粗 (3mm以下の砂粒含む)	不良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/10	
105	030－03	甕	SH19 Ⅰ区 黄褐土	15.4	—	—	内:ナデ 外:タテハケ・ヨコハケ・ナデ・きざみ文	やや粗 (3mm以下の礫含む)	やや良	橙 5YR7/6	口縁ほぼ完存	
106	034－02	甕	SH19	15.9	—	—	内:ナデ・ハケメ・ヨコナデ 外:指オサエ・ハケメ	やや粗 (1～3mm以下の砂粒を含む)	良	にぶい黄褐 10YR7/4	口縁部1/6	
107	032－02	甕	SH19	15.0	—	—	内:ハケメ 外:ユビオサエ・ハケメ	やや粗	良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部3/10	
108	034－01	甕	SH19 Ⅳ区 褐色土	16.5	—	—	内:ヨコナデ・ハケメ(5本) 外:ヨコナデ	やや粗	良	にぶい褐 7.5YR6/4	口縁部1/12	
109	029－01	壷	SH19 Ⅰ区 黄褐土	17.8	—	体部 21.1	内:ハケメ・ケズリ?調整不明 外:風化大のため調整不明・ハケ後ナデ	粗 (6mm以下の小石多量含む)	良	内:灰赤 10R4/2 外:赤 10R5/6	口縁部1/2 1/3	
110	034－04	甕	SH19 Ⅰ区 暗褐色土	16.2	—	—	内:ナデ 外:列点文様・ヨコナデ後ハケメ・直線文	粗	良	黄灰 2.5Y5/1	口縁部1/6	
111	030－01	壷	SH19 Ⅰ区 褐色土	13.5	—	—	内:ナデ 外:ナデ・ハケメ・刺突文・直線文(6本)	やや粗 (3mm以下の礫含む)	やや不良	内:褐灰 10YR5/1 外:明黄褐 10YR6/6	口縁部1/10	
112	033－02	甕	SH19 Ⅰ区	—	—	—	内:ナデ後ハケメ 外:ヨコナデ後列点文・ハケメ	やや粗	良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部小片	
113	030－04	甕	SH19 Ⅳ区 褐色土	—	—	—	内:ユビオサエ・ナデ 外:ナデ・一部ハケ痕アリ	粗 (3mm以下の礫含む)	不良	内:橙 7.5YR6/6 外:にぶい橙 2.5YR6/4	1/5	

第12表　遺物一覧表（3）

No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	口径 cm	器高 cm	その他 cm	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
114	030－05	甕	SH19 Ⅰ区 褐色土	14.0	—	—	内:ナデ・ケズリ・ヨコナデ 外:ナデ・ハケメ(9本/cm)・強いヨコナデ	密	良	灰 N4/0	口縁部1/8 1/4	
115	035－01	壷	SH19 Ⅳ区 褐色土	—	—	底径 3.6	内:ハケメ 外:ハケメ後ヨコナデ	やや粗	良	明黄褐 10YR7/6	底部完形	
116	036－01	甕	SH19 Ⅰ区 褐色土	—	—	底径 3.6	内:不明 外:ハケ状のナデ(5, 6本/単位)	やや粗 (3mm以下の石含む)	良	にぶい黄橙 10YR7/4	底部1/2	取り上げNO.4
117	035－04	甕	SH19 Ⅳ区 褐色土	—	—	底径 4.2	内:ハケメ 外:不明	粗 (～3mm以下砂粒あり)	並	橙 5YR6/6	底部完形	
118	035－02	台付甕	SH19 Ⅳ区 褐色土	—	—	底径 7.4	内:ミガキ 外:ハケメ	粗	良	にぶい黄橙 10YR6/4	底部3/8	円盤充てん
119	032－01	高杯	SH19 Ⅳ区 黄褐土	19.1	—	—	内:ミガキ 外:波状文あり・直線文(7本)	やや粗	良	橙 7.5YR7/6	口縁部1/10	
120	033－01	高杯	SH19 Ⅳ区 褐色土	23.4	—	—	内:ミガキ後ハケメ 外:ミガキ後ハケメ	並	良	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/8	
121	031－03	高杯	SH19 褐色土	—	—	—	内:不明 外:ミガキ・刺突文・直線文(4本)	粗 (5mm以下の砂粒含む)	良	橙 7.5YR6/6	脚部1/3	取り上げNO.7 赤色顔料付着
122	036－02	高杯	SH19	—	—	—	内:不明 外:風化のため調整不明	やや粗 (3mm以下の石含む)	良	浅黄橙 10YR8/4	上脚部	
123	033－03	高杯	SH19 明褐色土	—	—	—	内:不明 外:表面ハクリ	粗	不良	にぶい黄橙 10YR7/4	脚部上半	
127	038－05	台付甕	SH22 Ⅰ区	—	—	底径 8.0	内:表面ハクリのため調整不明 外:表面ハクリのため調整不明	粗 (4mm以下の石含む)	不良	橙 2.5YR6/6	4/5	
128	038－01	壷	L－40S H24 褐色土	13.0	—	—	内:表面摩耗のため調整不明瞭 外:ハケメ後ミガキか?	やや密 (1～2mmの小石を含む)	不良	黄橙 7.5YR7/8	口縁部1/6	
129	038－03	壷	M－40 SH24 黄褐色土	—	—	底径 5.4	内:表面ハクリのため調整不明 外:表面ハクリのため調整不明	粗(砂粒を多く含む)	不良	橙 5YR7/6	底部ほぼ完存 1/6	
130	037－01	壷	L－42 SH24	—	—	底径 5.4	内:ハケメ(11本/0.9cm程度) 外:ハケメ後ミガキ	やや密 (1mmの小石をわずかに含む)	やや良	にぶい黄橙 10YR7/4	底部完存	
131	037－02	壷	L－42 SH24	—	—	底径 5.2	内:ハケメ単位(8本/8mm) 外:ハケメ後ミガキ	やや密 (1～1.5mmの小石をわずかに含む)	やや良	浅黄橙 7.5YR8/6	底部完存	
132	039－06	小型壷	L－40 SH24 褐色土	—	—	体部 最大径 7.0	内:不明外:不明	粗 (砂粒を多く含む)	不良	橙 5YR7/6	1/2	
133	038－02	甕	M－40 SH24	15.0	—	—	内:表面ハクリのため調整不明 外:表面ハクリのため調整不明	粗 (1～2.5mmの小石を含む)	不良	橙 7.5YR7/6	口縁部1/6	取り上げNO.6
134	037－03	甕	L－42 SH24	19.0	—	—	内:表面ハクリのため調整不明(ナデか) 外:ハケメ(単位不明)	粗 (1～3mmの石を多く含む)	不良	橙 2.5YR6/8	口縁部1/4	
135	038－04	台付甕	L－40 SH24	—	—	底径 7.0	内:表面摩耗のため調整不明・ナデ 外:ナデ	粗 (2.5mm以下の石を多く含む)	不良	橙 7.5YR7/6	底部1/3	
136	039－02	台付甕	L－40 SH24	—	—	底径 7.2	内:表面ハクリのため調整不明 外:表面ハクリのため調整不明	粗 (1～3mmの小石を多く含む)	不良	黄橙 7.5YR7/8	底部3/4	
137	042－01	高杯	SH24	—	—	—	内:不明外:不明	やや粗	良	にぶい橙 7.5YR7/4	小片	
138	039－04	高杯	M－40 SH24	—	—	—	内:表面摩耗のため調整不明 外:ミガキ・直線文4本	粗 (1～2mmの小石を多く含む)	不良	黄橙 7.5YR7/8	5/6	取り上げNO.1
139	039－01	高杯	L－42 SH24	—	—	底径 10.0	内:表面ハクリのため調整不明 外:表面ハクリのため調整不明	やや粗 (4mmぐらいの小石をわずかに含む)	不良	橙 7.5YR7/6	底部1/2	円形3方スカシ
140	050－02	小型甕	SH30 L－35 検出中	8.2	6.8	—	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ・ハケ・風化大	やや粗 (3mm以下の石含む)	良	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/3 2/3	
141	044－01	壷	D－16 SD4	—	—	底径 6	内:ナデか? 外:ハケ・風化大	やや粗	良	黄橙10YR8/8 (黒 10YR1.7/1あり)	底部完存	
142	012－03	甕	L－24 SD17 検出中	17.2	—	—	内:不明 外:不明	粗 (1mm以下の小石少量含む	良	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/5	
143	008－03	甕	L－24 SD17 検出中	—	—	底径 6.2	内:不明 外:不明	密	不良	内:にぶい黄橙 10YR7/4 外:にぶい赤橙 10R6/6	1/4	
144	043－04	小型壷	1号墳 B－20 流出土	—	—	—	内:風化大 外:風化大	粗	良	明褐 7.5YR5/8	1/2	
145	043－01	壷	D－21 流出土	—	—	—	内:不明 外:不明	粗	良	橙 7.5YR7/6	口縁部小片	
146	043－02	甕	C－21 赤褐色土	—	—	底径 4.9	内:ナデ 外:ハケ	粗	良	浅黄橙 7.5YR8/6	底部1/2	
147	043－03	高杯	1号墳 C－16 流出土	—	—	—	内:不明 外:直線文(3本)・ミガキ痕跡・風化大	粗	良	橙 7.5YR7/6	脚上部1/3	
151	045－04	壷	C－25 2号墳 22層	—	—	底径 7.6	内:ハケメ(7本/cm) 外:ヨコナデ・ナデ	やや密 (1～2mmの石を少し含む)	やや良	橙 7.5YR7/6～ 褐灰 7.5YR5/1	1/3	
152	039－05	甕	2号墳 D－27 A27層	13.5	—	—	内:ハケメ・ヨコハケ(7本/1.1cm)・ナデ 外:ハケメ(10本/cm)	粗 (1～3mmの小石を多く含む)	不良	黄橙 7.5YR7/8～ 浅黄橙 7.5YR8/3	口縁部1/8	
153	046－02	高杯	C－24 2号墳 30層			脚部 上部径 3.5	内:不明 外:表面ハクリのため調整不明・ミガキのち直線文(13本確認)	やや密 (砂粒を少しと1～2mmの小石をわずかに含む)	不良	橙 5YR6/6	2/3	円形4方スカシ
154	045－02	壷	2号墳 E－23 流出土	15.0	—	—	内:強いヨコナデ・ハケ後ナデ・ハケの痕跡 外:刺突文・強いヨコナデ・ナデ・円形浮文	粗 (1～2mmの小石を多く含む	不良	橙 5YR6/6	1/8	
155	045－01	壷	2号墳 F－24 流出土	—	—	—	内:ヨコハケ後ヨコナデ・ヨコハケ(6本/cm) 外:刺突文・ヨコナデ・タテハケ後ヨコナデ・ハケメ(5本/cm)	粗 (砂粒を多く含む)	不良	橙 5YR7/6	1/7	

第13表　遺物一覧表（4）

No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	口径 cm	器高 cm	その他 cm	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
156	049－05	壷	2号墳 F－24 流出土	—	—	—	内:不明 外:不明	密 (4mm以下の砂粒含む)	良	明黄褐 10YR7/6	口縁部のみ	赤色顔料付着
157	045－06	甕	2号墳 F－24 流出土	12.5	—	—	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ・刺突・沈線	粗 (1～2mmの小石を多く含む)	不良	橙 7.5YR	1/9	
158	048－01	甕	2号墳 F－23 流出土	12.5	—	—	内:不明 外:刺突文・直線文(単位4本)・ハケ	やや粗 (2mm以下の石含む)	良	明黄褐 10YR6/6	口縁部1/8	
159	045－03	甕	2号墳 F－25	10.6	—	—	内:ナデ 外:表面風化のため調整不明	粗 (1～4mmの石を多く含む)	不良	浅黄橙 10YR8/3～ 橙 7.5YR6/6	1/6	
160	045－05	甕	2号墳 C－26 流出土	17.8	—	—	内:ヨコナデ・風化のため表面調整不明 外:ヨコナデ・風化のため調整不明	粗 (1～2mmの小石を多く含む)	不良	橙 7.5YR7/6	1/6	
161	047－02	台付甕	2号墳 C－22 流出土	—	—	底径 9.2	内:ナデ 外:ハケメ(6本/cm)	粗 (3mm以下の砂粒含む)	良	明褐 7.5YR5/6	底部1/3 1/4	
162	048－03	高杯	2号墳 E－24 流出土	20.8	—	—	内:不明 外:風化大	やや粗 (2mm以下の石含む)	良	橙 2.5YR6/8	口縁部1/8	
163	046－04	高杯	2号墳 E－24 流出土	—	—	—	内:表面摩耗のため調整不明 外:表面摩耗のため調整不明・直線文(8本,6本確認)	粗 (0.5～2mmの小石を多く含む)	不良	橙 7.5YR6/6～橙 5YR6/6	2/3	
164	046－03	高杯	2号墳 F－24 流出土	—	—	—	内:ナデ・表面ハクリのため調整不明瞭 外:表面ハクリのため調整不明瞭ミガキか?	粗 (1～2.5mmの小石を多く含む)	不良	橙 7.5YR7/6	2/3	円形3方スカシ
165	046－01	高杯	2号墳 F－24 流出土	—	—	—	内:表面ハクリのため調整不明・ハケメ(5本/cm) 外:ミガキ・刺突・直線文(4本)	やや密 (1～3mmの小石をわずかに含む)	やや良	橙 7.5YR7/6	1/3	
166	048－04	高杯	2号墳 F－24 流出土	—	—	—	内:不明外:風化大	やや粗	良	黄橙 7.5YR8/8	脚上部1/3	
167	048－02	高杯	2号墳 F－24 流出土	—	—	—	内:不明外:風化のため不明瞭ハケか?	やや粗	良	淡黄 2.5Y8/3	接合部のみ	
168	047－01	器台	2号墳 E－24 流出土	15.0	10.2	底径 11.2	内:ミガキ?ナデ調整不明・ハケメのちナデ 外:ミガキ	やや粗 (6mm以下の礫含む)	良	明黄褐 10YR6/6	口縁部1/3 底部1/8 1/3	円形4方スカシ
170	049－03	壷	M－39 表土直下	17.0	—	—	内:キザミ・ナデ外:ナデ・刺突文	やや密 (6mm以下の石少量含む)	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部1/10	
171	049－01	壷	L－39 検出中	16.9	—	—	内:調整不明・波状文・調整不明 外:櫛描直線文・調整不明	粗 (4mm以下の礫多く含む)	不良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/3	
172	049－02	壷	M－42 検出中	21.9	—	—	内:調整不明・きざみ 外:櫛描直線文(3本)・調整不明ナデ?・ミガキ?	やや粗(5mm以下の小石含む)	良	橙 7.5YR7/6	口縁部1/10	
173	049－04	壷	M－42 検出中	—	—	—	内:ナデ 外:風化大のため調整不明・ハケ痕あり	やや粗 (5mm以下の砂粒含む)	良	橙 7.5YR0/6	1/10	
174	050－03	壷	K－39 検出中	—	—	底径 3.2	内:ナデ・ハケメ 外:ナデ	やや粗 (6mm以下の石含む)	良	内:明黄褐 10YR6/6 外:明黄褐 10YR7/6	底部残存	取り上げNO.1
175	049－06	壷	L－42 検出中	14.9	—	—	内:ナデ・ユビナデ 外:キザミ・ナデ・直線文・波状文	やや粗 (3mm以下の礫含む)	良	にぶい黄橙 7/4	口縁部1/10	
176	050－04	高杯	M－42 検出中	—	—	—	内:シボリ 外:ナデ	やや粗 (1mm以下の石含む)	良	橙 7.5YR7/6	脚上部のみ残存	
177	050－01	高杯	M－43 検出中	—	—	—	内:不明 外:直線文(8本/単位)・風化大ミガキ	やや粗	良	黄橙 7.5YR8/8	脚上部のみ	
230	051－02	須恵器 高坏	SX14 3号墓	13.0			内:ロクロナデ 外:ロクロナデ・ハリツケナデ・ロクロケズリ	やや粗 (1mm程の砂粒多く含む)	良	暗青灰 5B4/1	杯部のみ1/8	
232	051－01	須恵器 平瓶	SX15 4号墓	5.7	14.9	体部 最大径 15.8	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ・ハリツケナデ・ロクロケズリ	やや粗 砂粒右→左	良	灰白 5Y7/1	完形	
233	041－01	須恵器 杯蓋	P－24 SK1	9.8	—	—	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	密	良	灰白 2.5Y7/1	底部1/4	P－3
234	041－02	須恵器 杯身	P－24 SK1	11.8	4.1	—	内:ナデ・ロクロナデ 外:ロクロナデ・ヘラ切り	密	良	灰白 2.5Y7/1	完形	P－3
235	040－01	須恵器 杯蓋	P－24 SK1	12.5	3.2	つまみ 径2.5	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ・ロクロケズリ	密	良	浅黄 2.5Y7/4	完形	P－4
236	040－02	須恵器 杯身	P－24 SK1	11.4	3.4	—	内:ナデ・ロクロナデ 外:ロクロナデ・ヘラ切り	密	良	灰 7.5Y6/1	完形	P－4
237	041－03	須恵器 杯蓋	P－24 SK1	10.4	2.8		内:ロクロナデ 外:ロクロナデ・ロクロケズリ・ハリツケナデ	密	良	灰白 2.5Y7/1	完形	P－1 外面全面自然降灰
238	041－04	須恵器 杯身	P－24 SK1	10.9	4.5		内:ロクロナデ 外:ロクロナデ・ヘラ切り無調整	密	やや良	灰白 2.5Y7/1	完形	P－1
239	040－03	須恵器 杯蓋	P－24 SK1	11.8	3.1	つまみ 径2.0	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ・ロクロケズリ	密	良	浅黄 5Y7/3	完形	P－2
240	040－04	須恵器 杯身	P－24 SK1	11.9	5.0	—	内:ナデ・ロクロナデ 外:ロクロナデ・ヘラ切り	密	良	灰黄 2.5Y7/2	完形	P－2
241	042－03	須恵器 鉢	SX10	18.6	8.9	—	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ・ヘラ切り	密	良	内:にぶい黄 2.5Y6/3 外:灰 N6/0～暗灰 N3/0	口縁部1/5 底部完存 1/2	自然釉
242	042－04	須恵器 高杯	K－24 SX10	—	—	底径 8.8	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	密	良	灰 5Y6/1	底部3/12	
243	015－01	高杯	L－39 SD21 (褐色土)	—	—	底径 9.5	内:ナデ? 外:ミガキ・直線文(2本・3本)	やや粗 (5mm以下の小石含む)	良	橙 5YR6/8	底部1/8 1/3	円形3方スカシ
244	022－04	須恵器 高杯	L－41 SD21	8.7	—	—	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	やや粗	やや良	灰黄 2.5Y7/2	口縁部3/12	
245	023－01	須恵器 盤	L－39 SD21	17.4	3.9	底径 9.9	内:ロクロヘラケズリ・ナデ 外:ロクロナデ・ナデ	やや密	やや良	にぶい黄 2.5Y6/3	7/12	内側自然釉

第14表　遺物一覧表（5）

No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	直径cm (残存)	高さcm (残存)	孔径cm (残存)	重さcm (残存)	色調	残存	備考
90	026－04	土製品 土玉	SH7	(2.8)	(2.45)	(0.65)	(7.09)	浅黄橙 10YR8/3	1/3残	
74	042－02	土製品 土玉	SH6	(2.8)	(2.9)	(0.7)	(11.89)	褐灰 10YR5/1	1/2残	
150	053－02	土製品 土玉	2号墳主体部	2.8	2.75	1.0	19.62	浅黄橙 10YR8/4 橙 2.5YR6/8		
184	058－01	空玉	I-5SX13 2号墓	1.2	0.9	0.1	0.44		7/8残	No.10
185	058－02	空玉	I-5SX13 2号墓	1.2	0.9	0.1	0.53		完形	No.21
186	058－03	空玉	I-5SX13 2号墓	1.2	0.9	0.2	0.46		完形	No.27
187	058－04	空玉	I-5SX13 2号墓	1.2	0.9	0.1	0.49		完形	No.30
188	059－01	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.82	0.68	0.2	0.67	紺・透明		No.1
189	059－02	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.72	0.38	0.2	0.27	紺・透明		No.2
190	059－03	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.52	0.4	0.2	0.19	青緑・透明		No.3
191	059－04	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.82	0.55	0.2	0.52	紺・不透明		No.4
192	059－05	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.82	0.65	0.2	0.59	紺・不透明		No.5
193	059－06	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.83	0.62	0.2	0.63	紺・透明		No.7
194	059－07	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	1.0	0.8	0.2	1.11	紺・透明		No.9
195	059－08	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.9	0.73	0.2	0.86	紺・やや不透明		No.11
196	059－09	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.75	0.58	0.2	0.43	紺・透明		No.12
197	059－10	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.84	0.6	0.2	0.55	紺・不透明		No.13
198	059－11	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.85	0.62	0.1	0.58	紺・透明		No.14
199	059－12	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.75	0.48	0.2	0.37	紺・透明		No.15
200	059－13	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.75	0.68	0.3	0.43	青・透明		No.16 他とは異質
201	059－14	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.7	0.53	0.1	0.39	紺・やや不透明		No.17
202	059－15	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	1.04	0.72	0.2	1.07	紺・透明		No.18
203	059－16	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.96	0.75	0.2	0.98	紺・透明		No.19
204	059－17	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.91	0.7	0.2	0.83	紺・透明		No.20
205	059－18	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.8	0.4	0.2	0.41	紺・透明		No.23
206	059－19	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.83	0.58	0.2	0.55	紺・透明		No.24
207	059－20	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.85	0.52	0.3	0.50	紺・透明		No.25
208	059－21	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.9	0.8	0.2	0.9	紺・透明		No.26
209	059－22	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.85	0.61	0.2	0.68	紺・透明		No.28
210	059－23	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.78	0.56	0.2	0.49	紺・透明		No.29
211	059－24	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.83	0.55	0.2	0.53	紺・透明		No.31
212	059－25	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.8	0.68	0.2	0.69	紺・透明		No.32
213	059－26	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.7	0.75	0.2	0.53	紺・透明		No.34
214	059－27	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.8	0.72	0.2	0.7	紺・透明		No.35
215	059－28	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.55	0.32	0.2	0.12	紺・やや不透明		No.36
216	059－29	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.8	0.58	0.2	0.53	紺・やや不透明		床直1
217	059－30	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.75	0.72	0.2	0.61	紺・透明		床直2
218	059－31	ガラス玉	I-5SX13 2号墓	0.75	0.48	0.2	0.39	紺・透明		床直3

第15表　玉類一覧表

No.	登録番号	器 種	出土位置 遺構	縦 cm	横 cm	断 面	重さ g	色 調	残 存	備 考
180	054－01	耳環	H-6 SX12 1号墓	2.81	2.52	0.47	8.8	全面緑青	完存	青銅製中実
181	055－03	耳環	I-5 SX13 2号墓	3.12	2.80	0.63	17.1	全面緑青	完存	C
182	055－02	耳環	I-5 SX13 2号墓	3.59	3.16	0.81	33.0	全面緑青	完存	B 中実の銅芯(7mm)に銀？ 板まきつけ
183	055－01	耳環	I-5 SX13 2号墓	3.36	3.22	0.81	30.4	全面緑青	完存	A 中実の芯にまきつけた銀？ 板がはがれかけている。
231	060－01	耳環	I-5 SX15 4号墓	2.8	2.8	0.5	5.15		完存	床面直上 錫製？

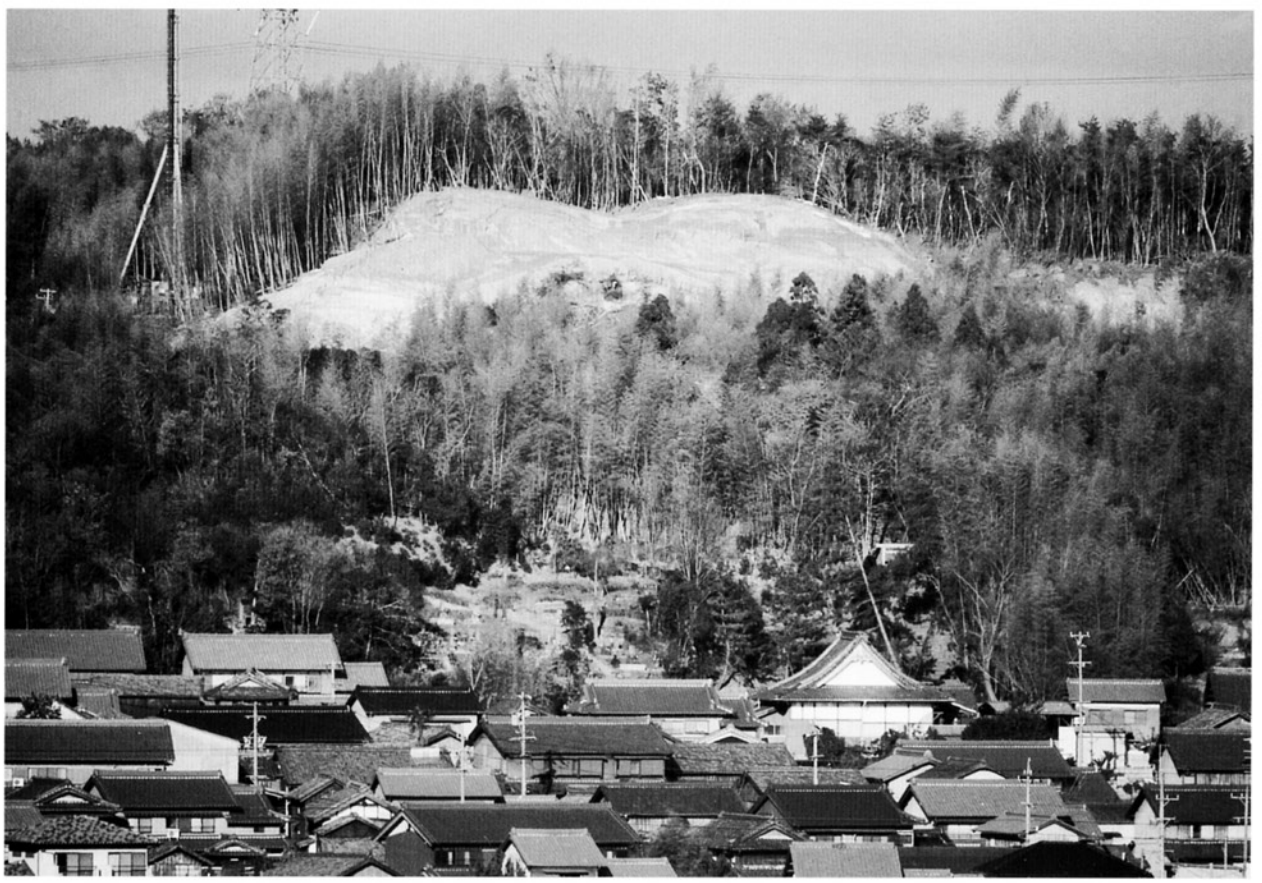
第16表　耳環一覧表

No.	登録番号	機 種	出土位置 遺構	長さ cm (残存長)	幅 cm (残存幅)	厚さ cm (残存厚)	重さ g (残存重)	残 存	備 考
42	016－01	石製品 凹石	N－44 SD23	—	8.6	4.0	407.9		
70	021－03	石製品 凹石	P－37 SD29	12.6	8.0	5.8	785		
71	024－02	石製品 凹石	P－38 SD29	11.7	8.0	5.4	815		
124	036－03	石製品 砥石	SH19 I 区	12.0	10.8	3.6	641		
125	052－01	銅鐸 鈕片	SH19 II 区	(6.8)	(4.2)	(0.6)	(18.89)		黒褐色土中より出土
126	052－04	鉄製品 鉈	SH19 I 区	(2.8)	(0.9)	(0.5)	(3.57)		No.1
148	053－01	石製品 磨製石鏃	C－25 2号墳	3.5	2.2	0.3	2.908		平基無頸。 穿孔は途中まで。擦痕は比較的方向性を持つ。
149	053－03	石製品 磨製石鏃	C－25 2号墳	(2.7)	(1.5)	0.2	1.163		頁岩？ 擦痕は方向性はなく、様々な方向に何度もすられている。
169	061－01	鉄製品 用途不明	範囲確認調査 Aトレンチ－12	(4.7)	(4.5)	0.4		約1／2程度	不定形の板状・中央に円形の穿孔
178	052－03	銅製品 銅鏃か？	L－43 検出中	(1.6)	(0.9)	(0.4)	(0.93)	表面摩滅が著しい	
179	052－02	銅製品 銅鏃か？	N－43 検出中	(1.8)	(0.7)	(0.2)	(0.63)	表面摩滅が著しい	褐色土
219	055－04	鉄製品 刀子	I－5 SX13 2号墓	柄部 11.5 刃部 6.2	1.4	柄部 0.4 刃部 0.4	13.1		二つに破損
220	056－01	鉄製品 釘	I－5 SX13 2号墓	8.45	1.1	0.7	14.7	完存	No.1
221	056－04	鉄製品 釘	I－5 SX13 2号墓	8.55	1.0	0.6	12.3	完存	No.4
222	056－05	鉄製品 釘	I－5 SX13 2号墓	8.3	0.8	0.7	10.1	完存	No.5
223	057－02	鉄製品 釘	I－5 SX13 2号墓	9.2	0.8	0.6	15.9	完存	No.8
224	057－01	鉄製品 釘	I－5 SX13 2号墓	8.55	1.0	0.8	13.7	完存	No.7
225	057－04	鉄製品 釘	I－5 SX13 2号墓	(4.4)	(6.1)	(7.0)	11.87		木質
226	056－03	鉄製品 釘	I－5 SX13 2号墓	(3.25)	(1.8)	(0.6)	(4.3)	上1/2残	No.3
227	056－06	鉄製品 釘	I－5 SX13 2号墓	(4.2)	(0.6)	(0.4)	(2.7)	下1/2残	No.6
228	057－03	鉄製品 釘	I－5 SX13 2号墓	(5.1)	(1.0)	(0.6)	6.1	下1/2残	No.9
229	056－02	鉄製品 釘	I－5 SX13 2号墓	(4.05)	0.8	0.4	(5.6)	下1/2残	No.2

第17表　その他遺物一覧表

写　真　図　版

（金塚遺跡・金塚横穴墓）



遺　跡　全　景

（朝明川対岸・垂坂丘陵より望遠で望む・南から）

写真１　極東米軍機による遺跡周辺の垂坂写真（1947年撮影）

写真２　遺跡遠景（朝明川を挟んで、手前南岸が垂坂丘陵、北岸が朝明丘陵。南西上空から）

写真３　遺跡遠景（中央に山村貯水地、手前右前方が当遺跡。南上空から）

写真４　遺跡近景（東上空から）

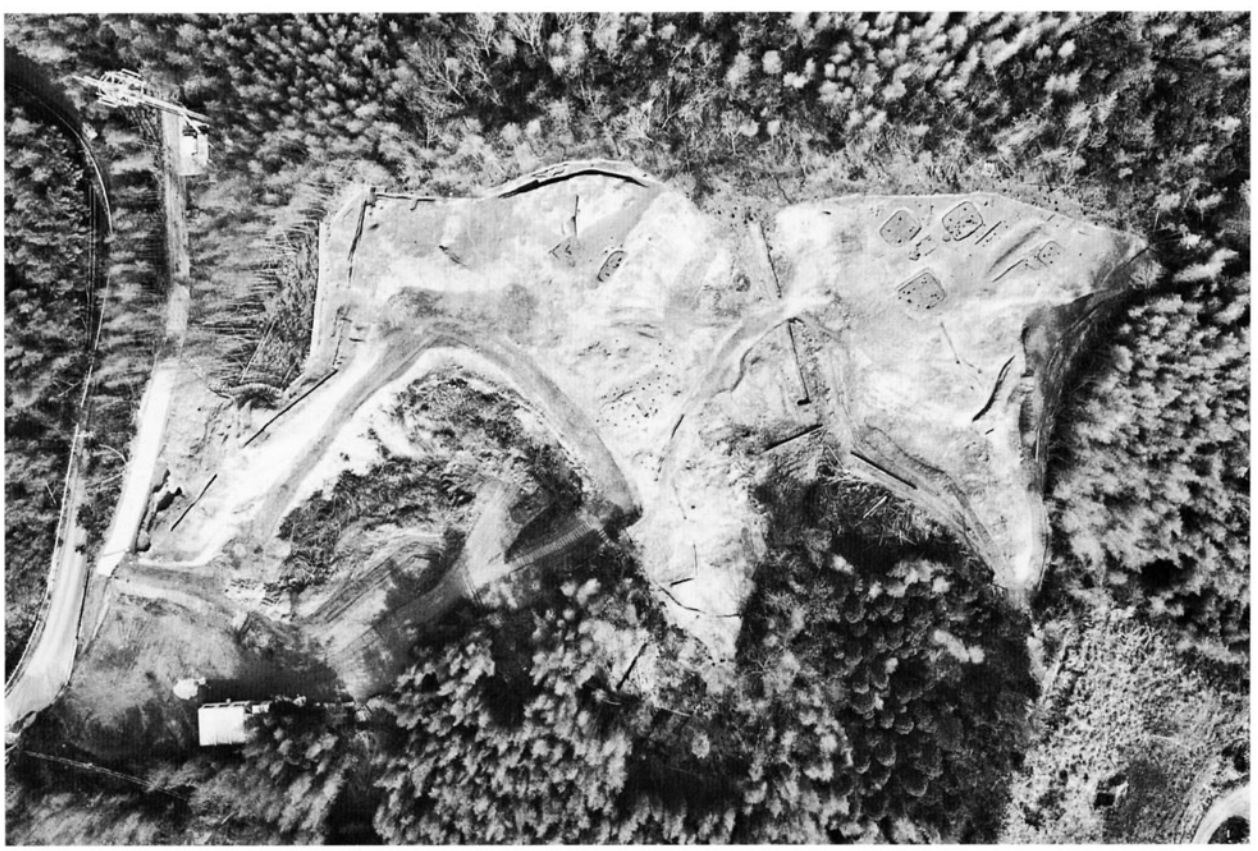


写真５　遺跡全景（上空垂直・上が北）

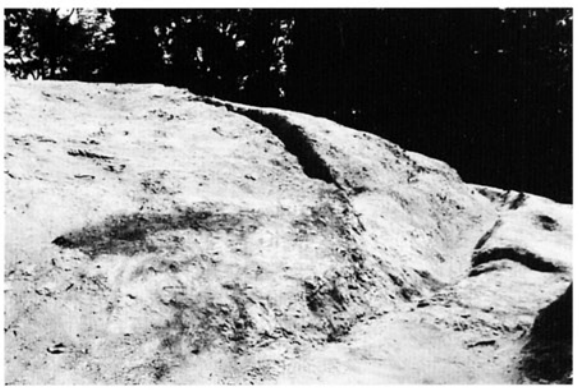


写真６　ＳＤ２全景（西から）

写真７　ＳＤ２遺物出土状況（北東から）

写真８　ＳＤ２遺物出土状況（南から）

写真９　ＳＤ23遺物出土状況（東から）

写真10　ＳＤ23遺物出土状況（東から）

写真11　ＳＤ23東壁土層断面（西から）

写真12　ＳＤ29遺物出土状況（東から）

写真13　ＳＤ29全景（東から）

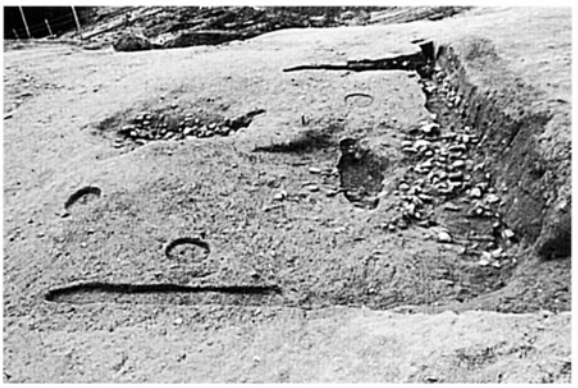


写真14　ＳＨ６全景（東から）

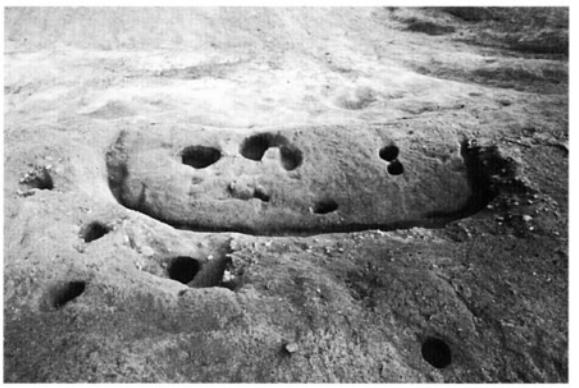


写真16　ＳＨ７全景（北から）

写真15　ＳＨ６炉半裁状況（東から）

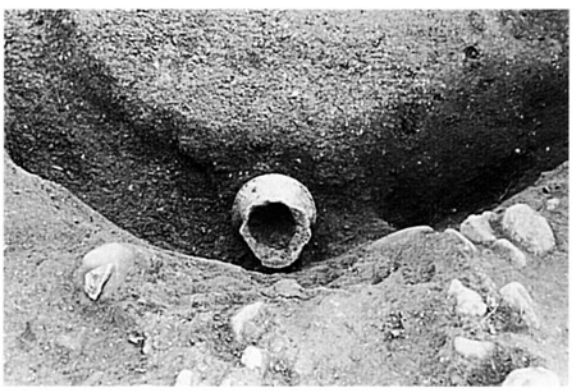


写真17　ＳＨ７遺物出土状況（西から）

写真18　ＳＨ７全景（西から）

写真19　ＳＨ18全景（南から）

写真21　ＳＨ18・19周辺から伊勢湾方面望む（北から）

写真20　ＳＨ18遺物出土状況（南から）

写真22　ＳＨ19全景（南から）

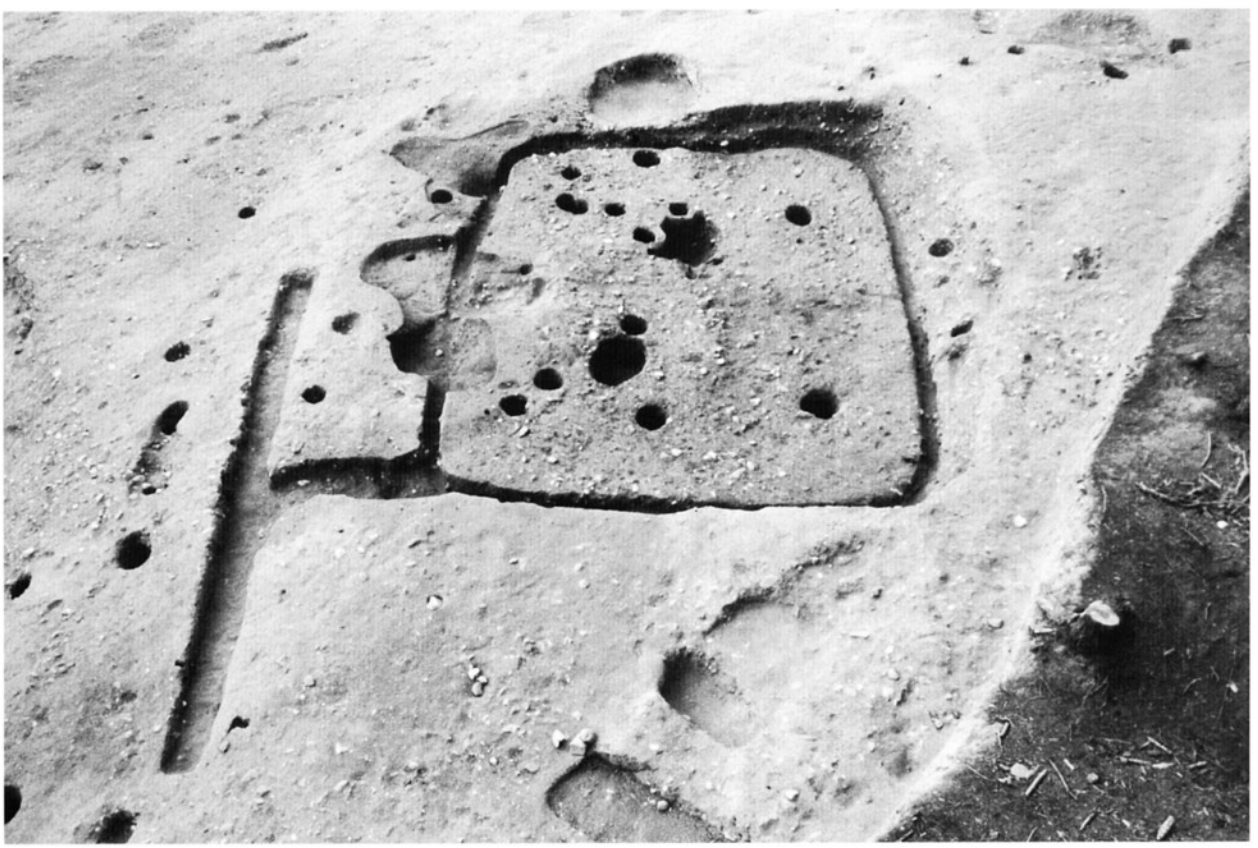


写真23　ＳＨ19全景（東から）

写真24　ＳＨ19遺物出土状況（東から）

写真25　ＳＨ19遺物出土状況（東から）

写真26　ＳＨ19炉検出状況（東から）

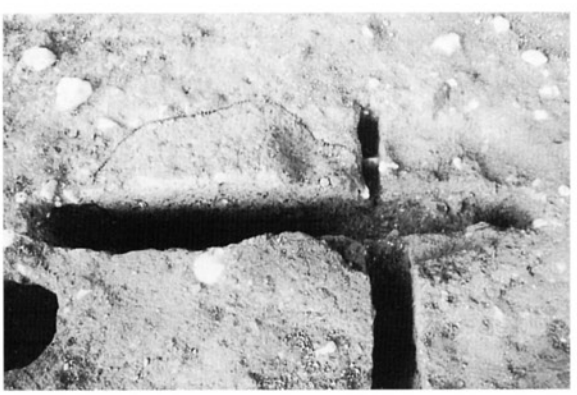


写真27　ＳＨ19炉完掘状況（南から）

写真28　ＳＨ19北西壁炭化物出土状況（南から）

写真29　ＳＨ19銅鐸片出土状況（東から）

写真30　ＳＨ19銅鐸片出土状況（北から）

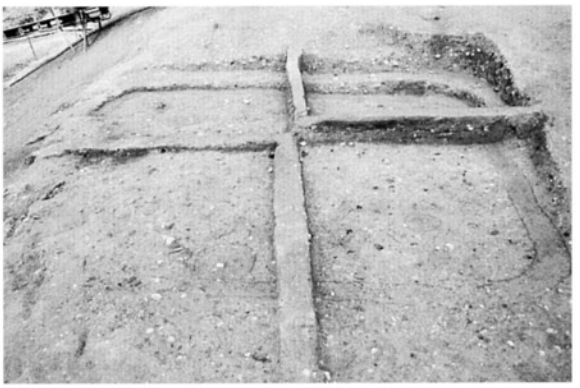


写真31　ＳＨ22・30掘削途中（南から）

写真32　ＳＨ22・30全景（西から）

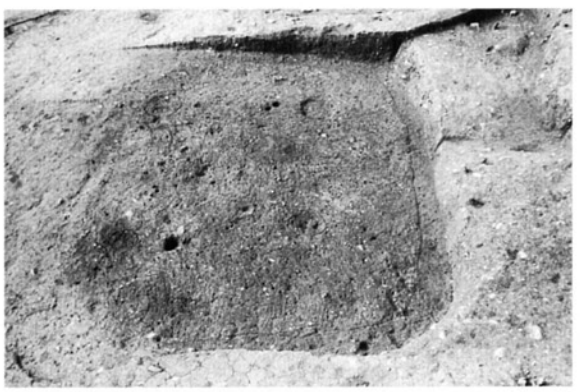


写真33　ＳＨ24掘削途中（東から）

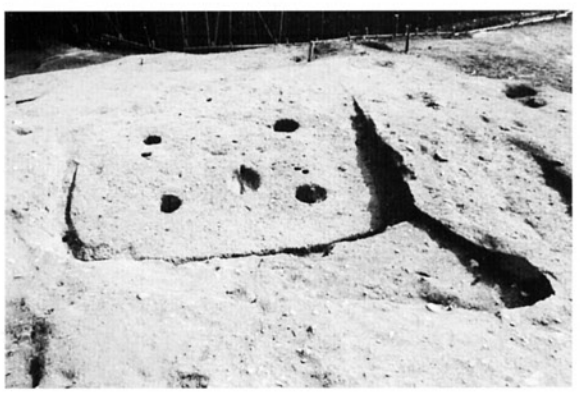


写真34　ＳＨ24全景（北から）

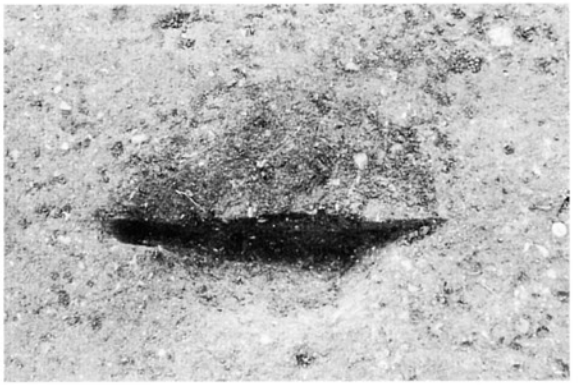


写真35　ＳＨ24炉半裁状況（東から）

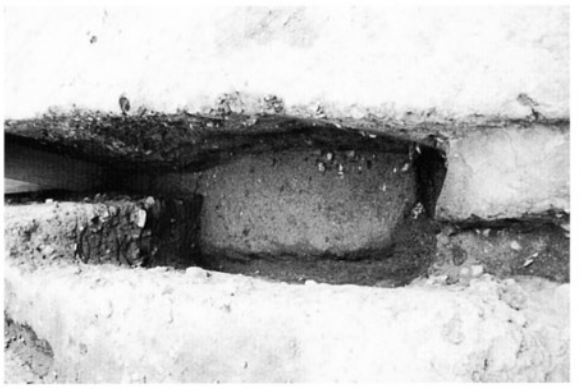


写真36　ＳＨ33全景（北から）

写真37　ＳＨ34全景（東から）

写真38　ＳＨ35全景（西から）

写真39　1・2号墳調査前全景（西から）

写真40　1・2号墳調査後全景（西から）

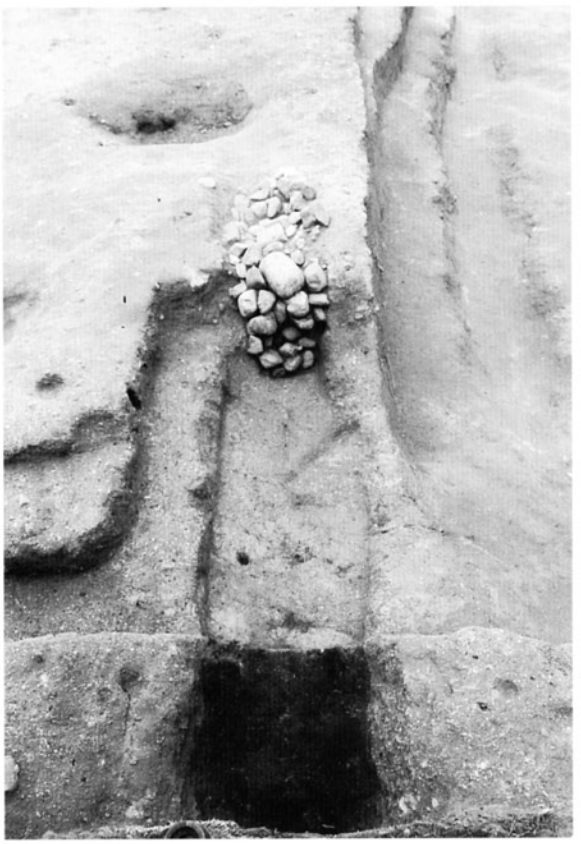


写真41　ＳＫ５全景（北から）

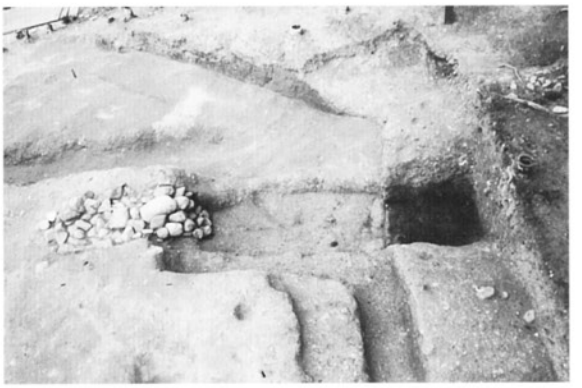


写真42　ＳＫ５全景（東から）

写真43　ＳＫ５北壁（南から）

写真44　２号墳主体部全景（南から）

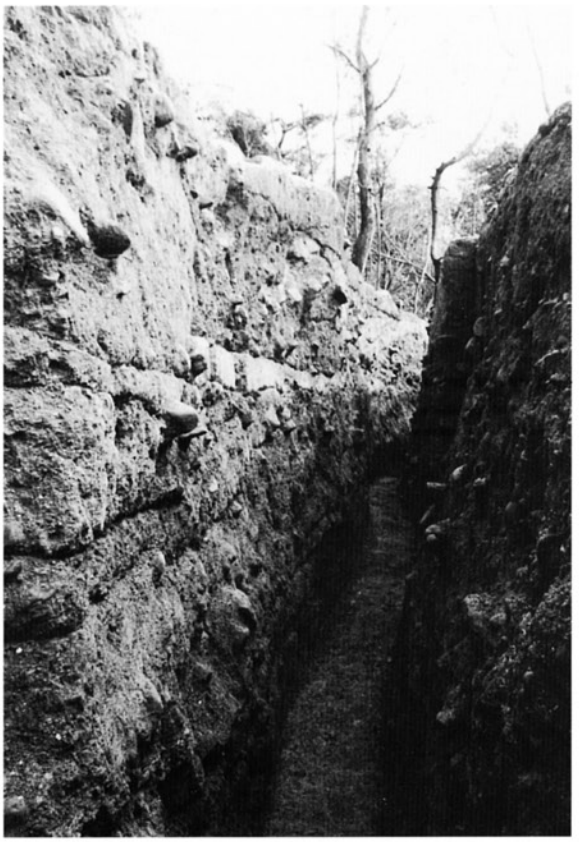


写真45　２号墳盛土状況その１（西から）

写真46　２号墳盛土状況その２（西から）

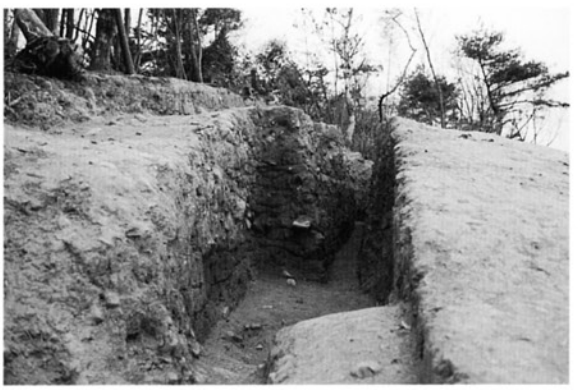


写真47　２号墳盛土状況その３（西から）

写真48　２号墳盛土状況その１（東から）

写真49　２号墳盛土状況その２（東から）

写真50　２号墳盛土状況その３（東から）

写真51　ＳＤ４東壁土層断面（西から）

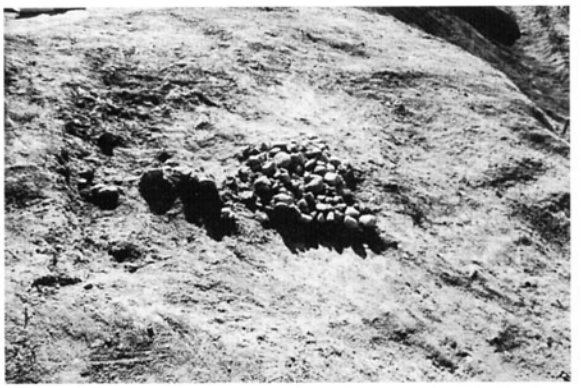


写真53　集石遺構（中央尾根のＰ－35地区・西から）

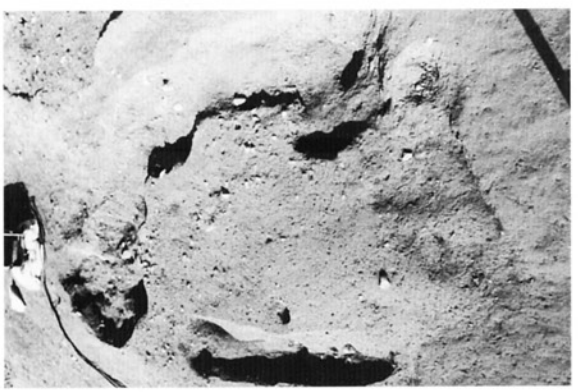


写真52　ＳＤ26・ＳＤ28東全景（南から）

写真54　中央尾根頂部から伊勢平野を望む（北から）

写真55　柱穴群全景（南から）

写真56　西尾根調査前（南西から）

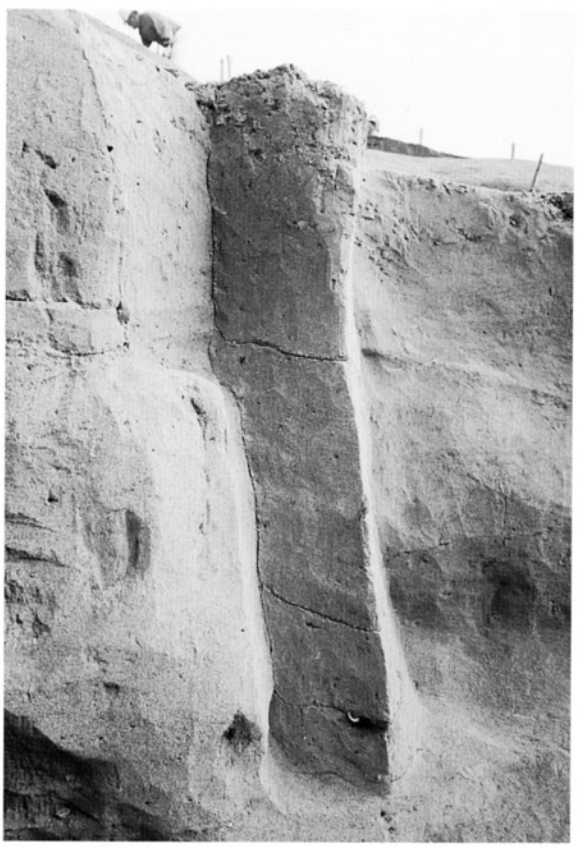


写真58　1号墓土層（西から）

写真57　土取り崖面での1・2号墓検出状況（西から）

写真59　1号墓金環出土状況（西壁）

写真60　２号墓検出状況（西から）

写真61　２号墓土層断面（西から）

写真62　２号墓遺物出土状況（東上から）

写真63　人骨Ａ・Ｂ（南上から）

写真64　人骨Ａと耳環（南上から）

写真65　人骨Ｂと銅製空玉・ガラス玉（南上から）

写真66　人骨Ｃと耳環（南上から）

写真67　人骨Ｃ（下顎骨）と耳環

写真68　3号墓地点土坑（西から）

写真70　西尾根南崖面での4号墓検出状況（南から）

写真69　3号墓地点土坑土層（西から）

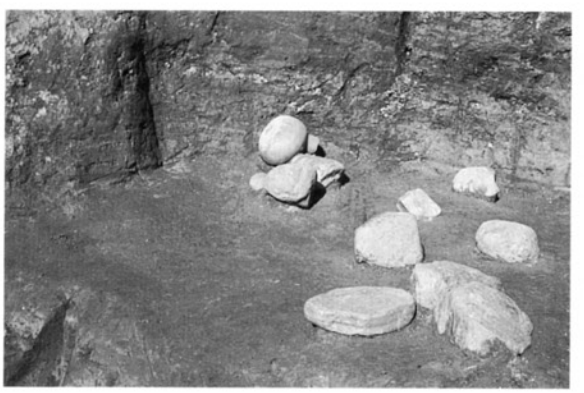


写真71　4号墓平瓶（東から）

写真72　4号墓（南から）

写真73　４号墓土層（南から）

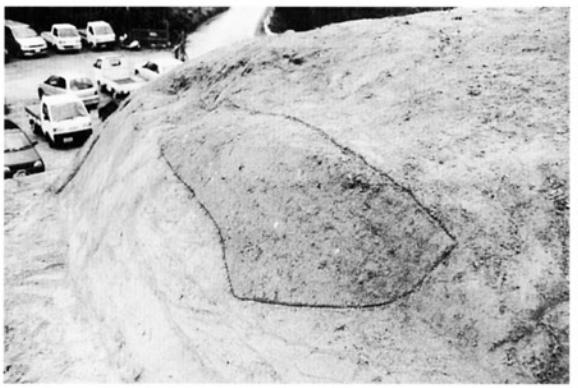


写真75　ＳＫ37検出（北東から）

写真74　４号墓土層（南東から）

写真76　ＳＫ37検出（南から）

写真77　西尾根調査後（南西から）

写真78　ＳＸ１付近調査前（南から）

写真79　ＳＸ１検出（南から）

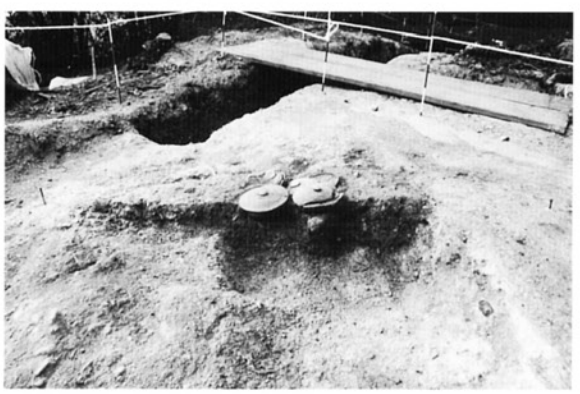


写真80　ＳＸ１土層（東から）

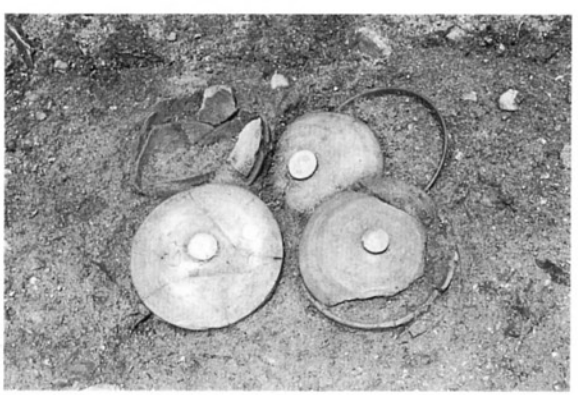


写真81　ＳＸ１須恵器（南上から）

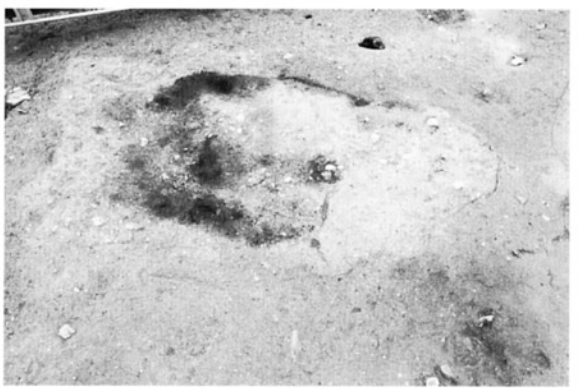
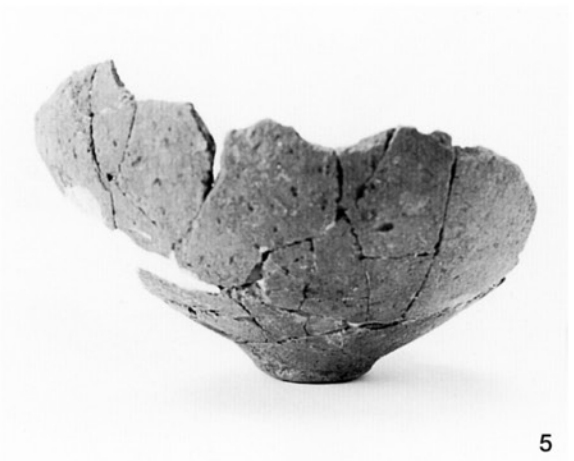


写真82　ＳＫ25検出状況（東から）

写真83　ＳＫ25土層（東から）

写真84　ＳＤ21土層（東から）

写真85　ＳＤ21・ＳＫ25完掘（北から）



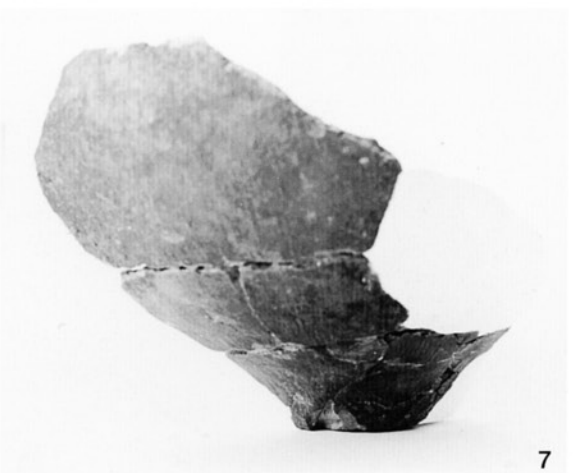
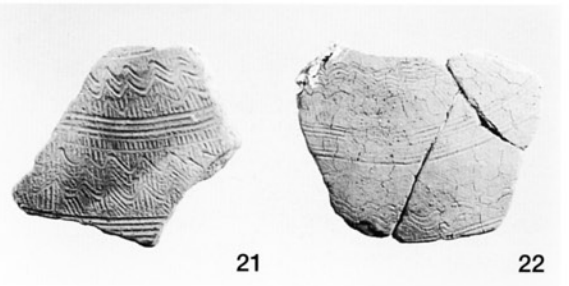


写真86　ＳＤ２出土遺物



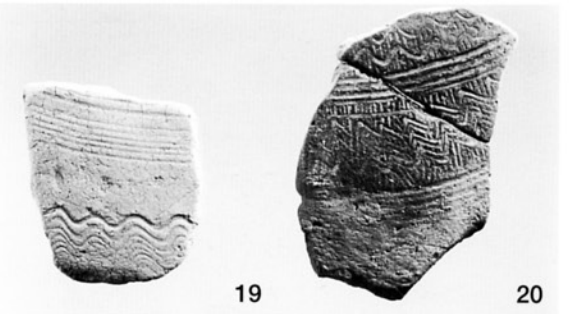
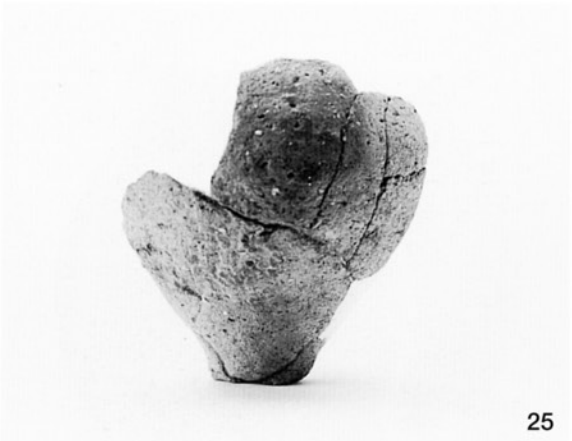


写真87　ＳＤ23出土遺物



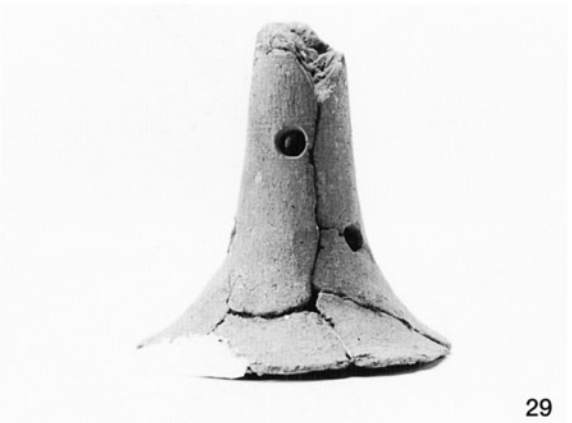


写真88　ＳＤ23出土遺物

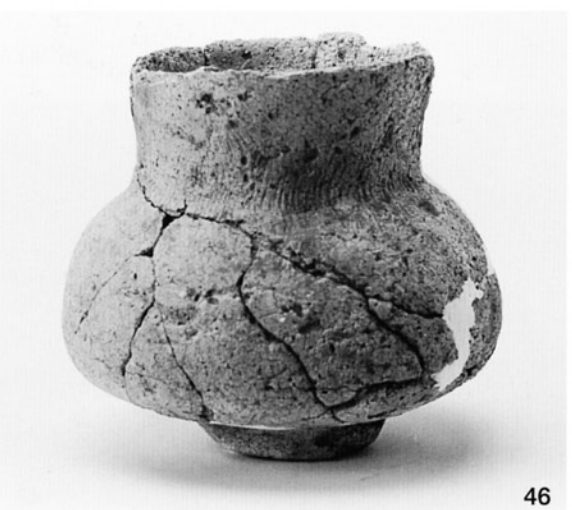


写真89　ＳＤ23・29出土遺物

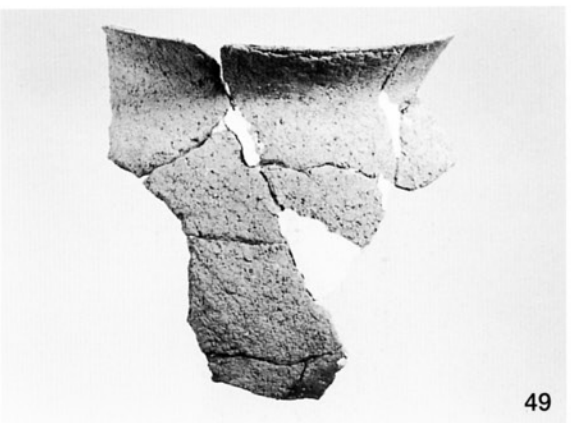


写真90　ＳＤ29出土遺物

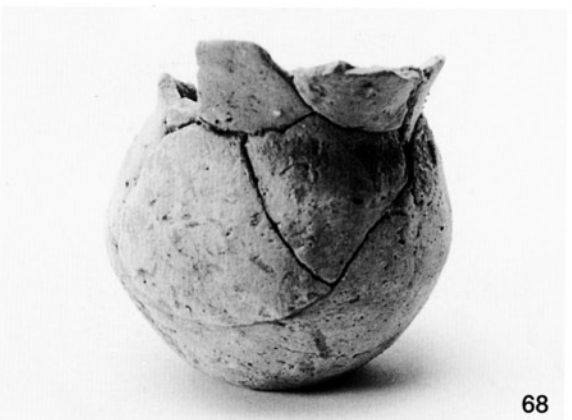
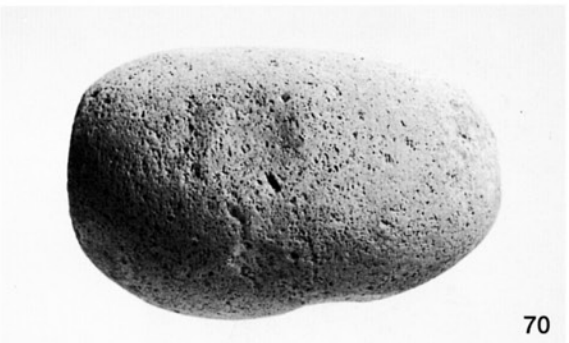


写真91　ＳＤ29出土遺物



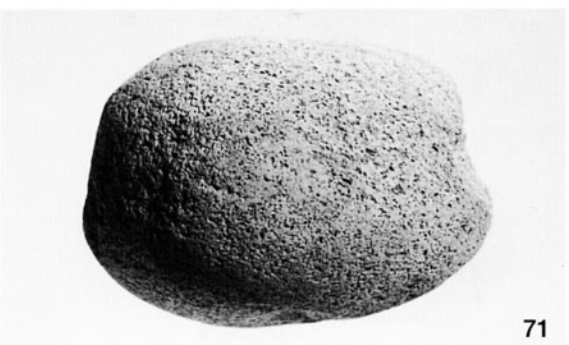
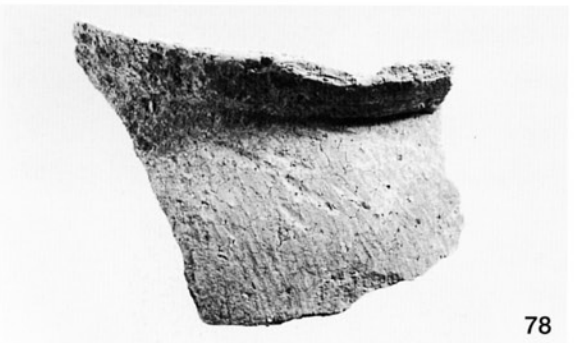
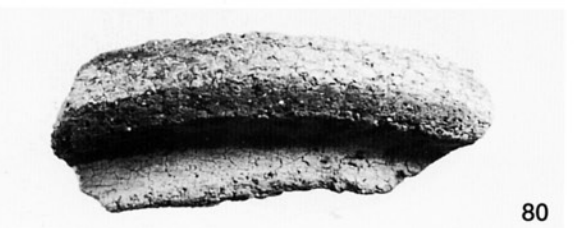


写真92　ＳＤ29・ＳＨ６・ＳＨ７出土遺物





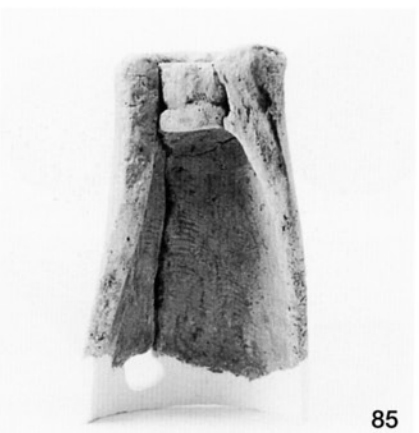
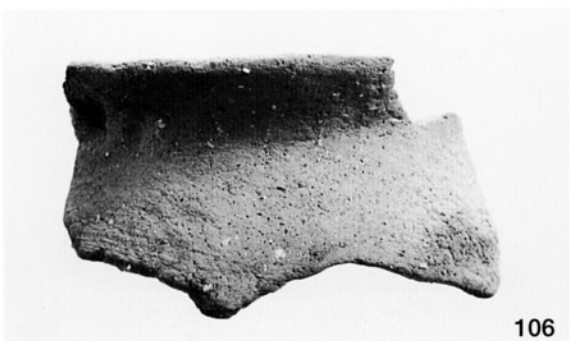


写真93　ＳＨ７出土遺物



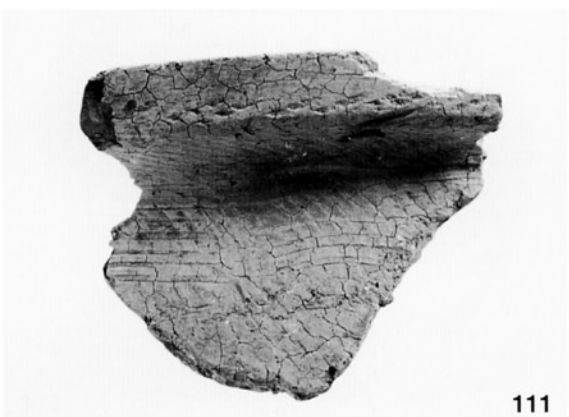


写真94　ＳＨ19出土遺物

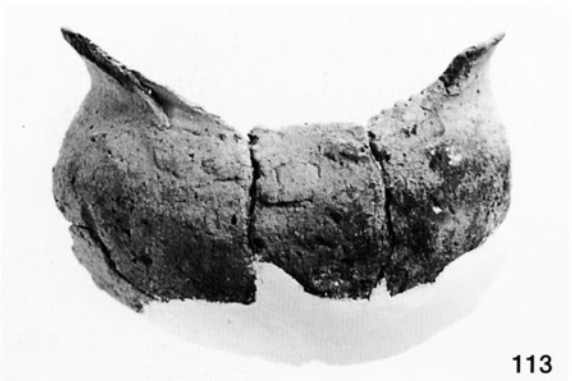
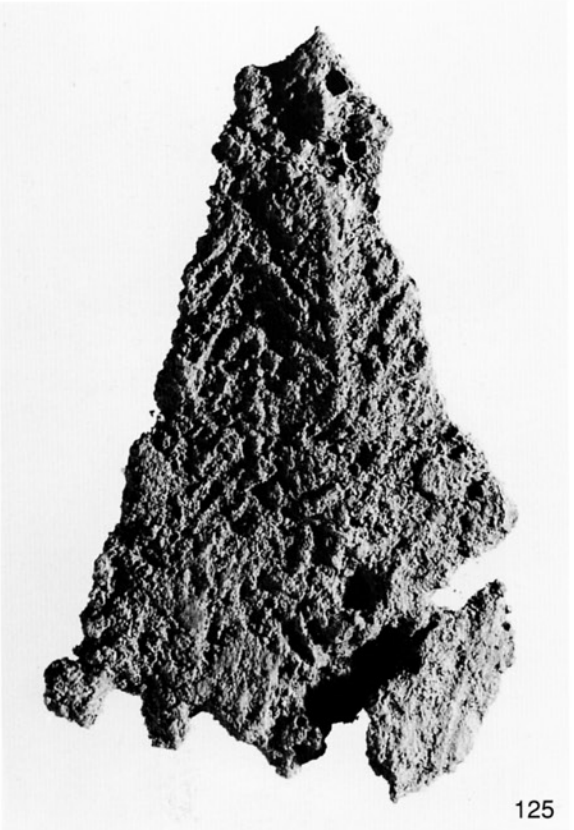
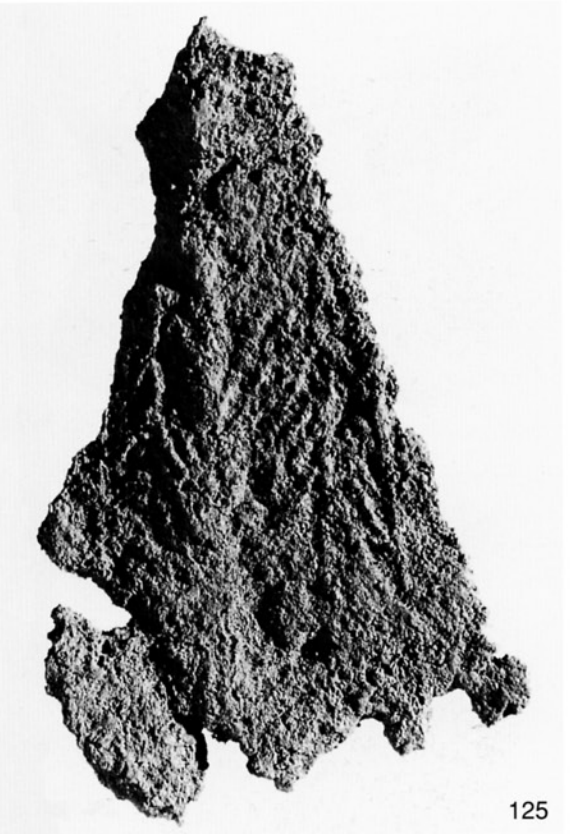
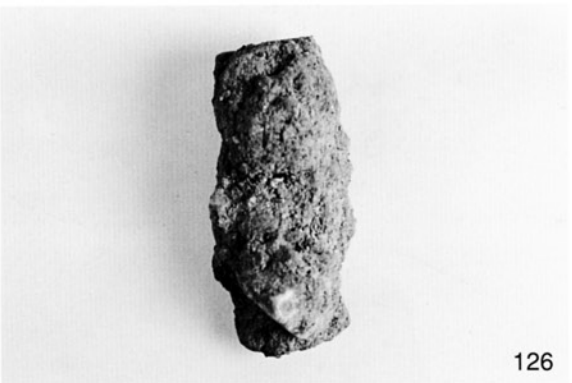
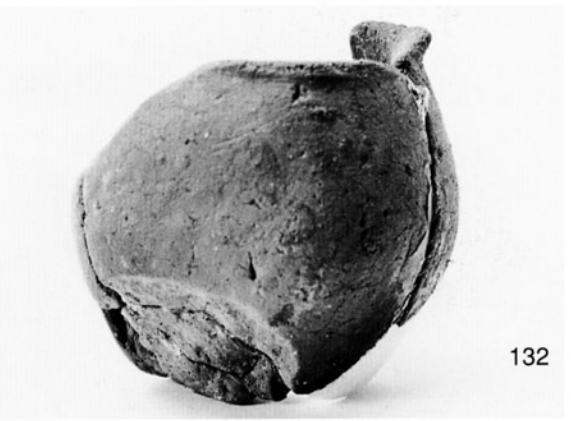


写真95　ＳＨ19出土遺物









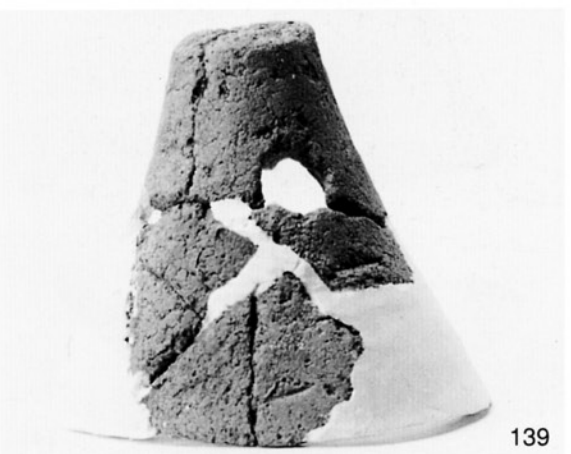


写真96　ＳＨ19・ＳＨ24出土遺物

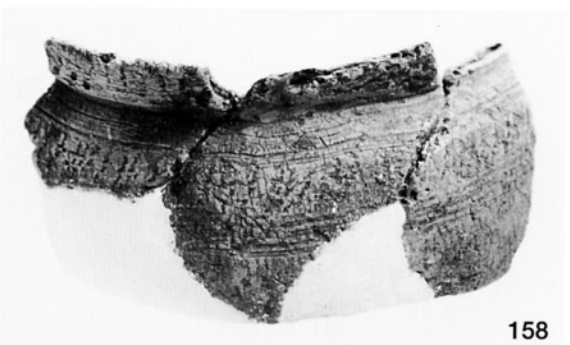
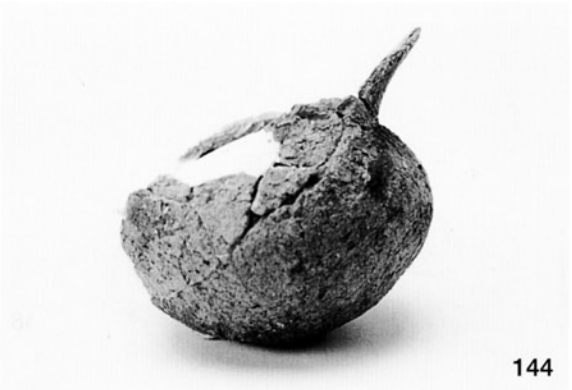


写真95　ＳＨ22・ＳＨ30・ＳＨ４・２号墳主体部・２号墳流出土出土遺物



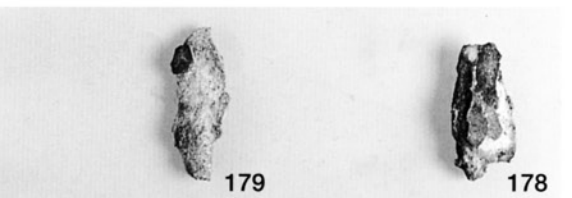
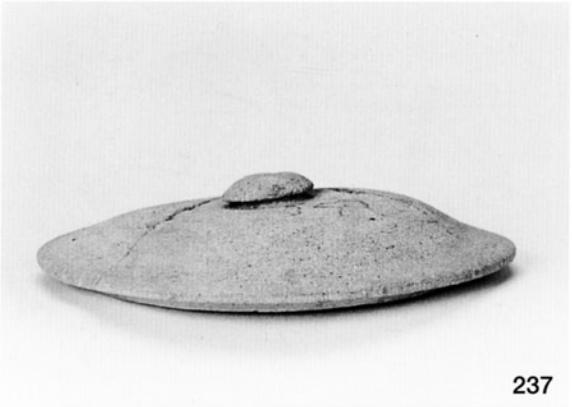
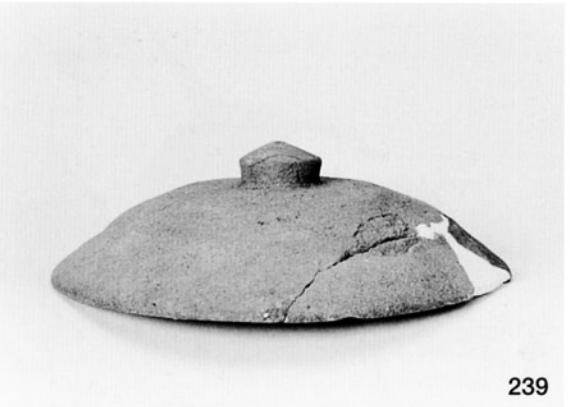
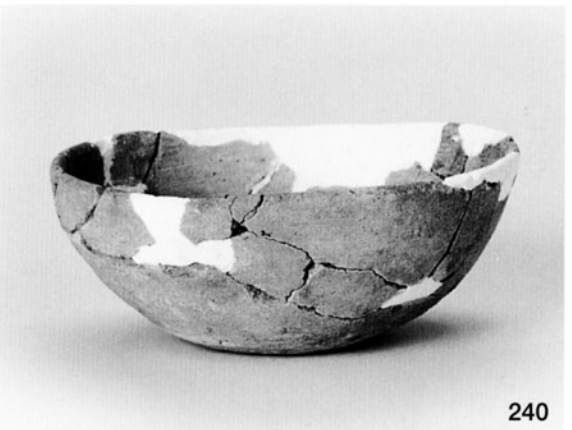
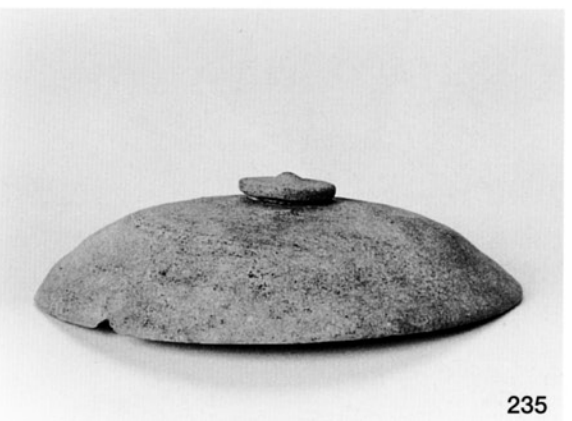


写真98　１号墳流出土・２号墳流出土・ＳＤ17・東尾根検出中出土遺物









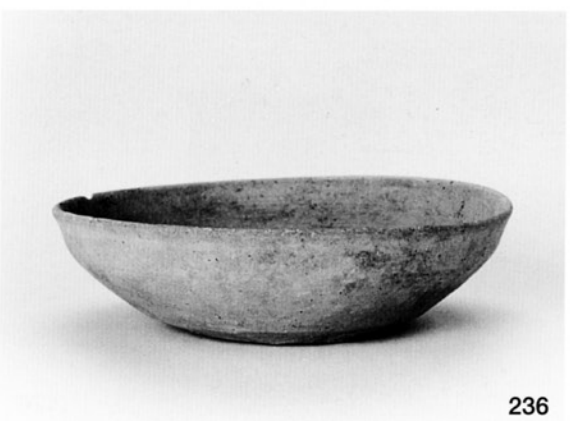


写真99　ＳＸ１出土遺物

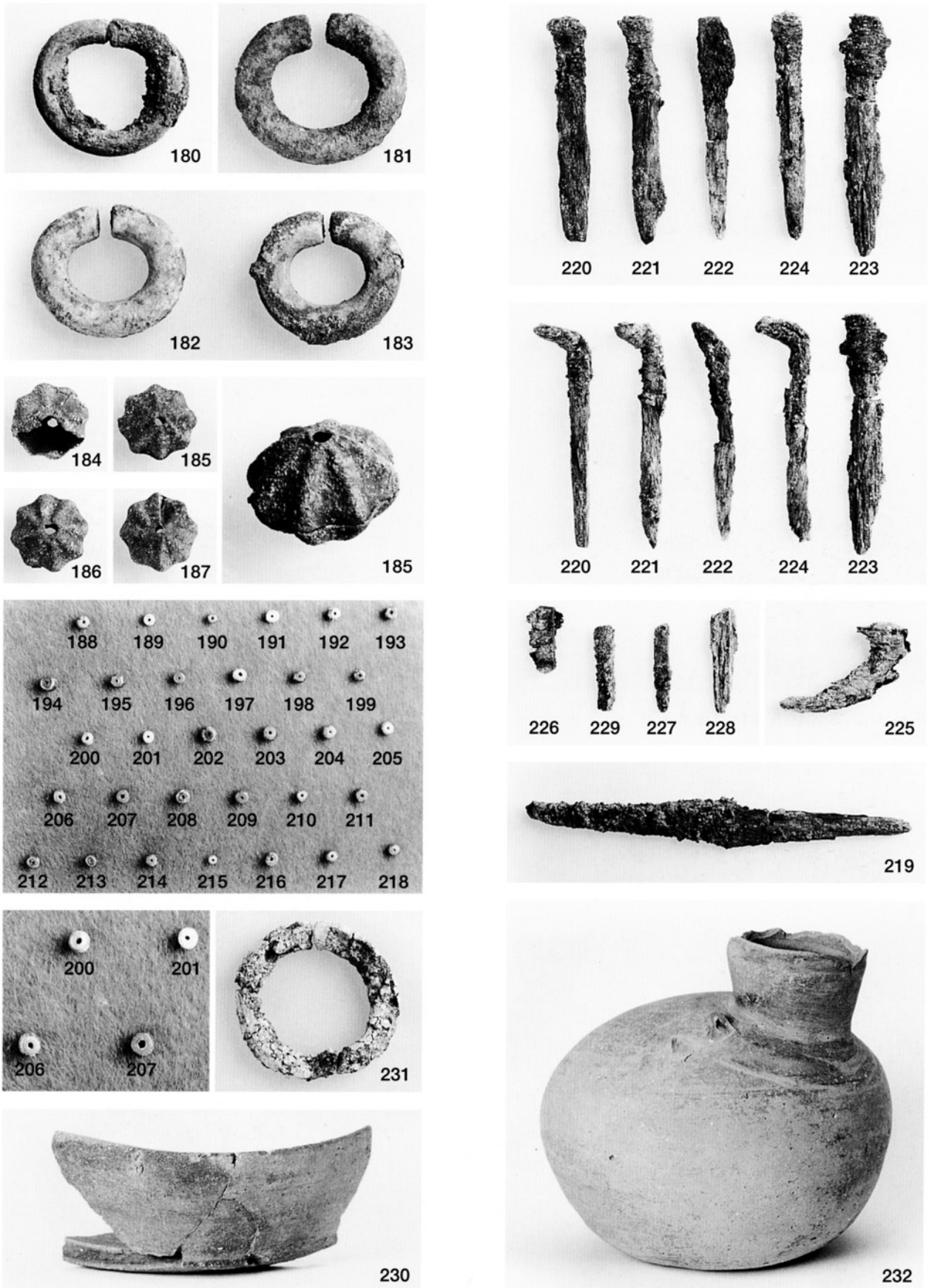


写真100　1号墓・2号墓・3号墓・4号墓出土遺物

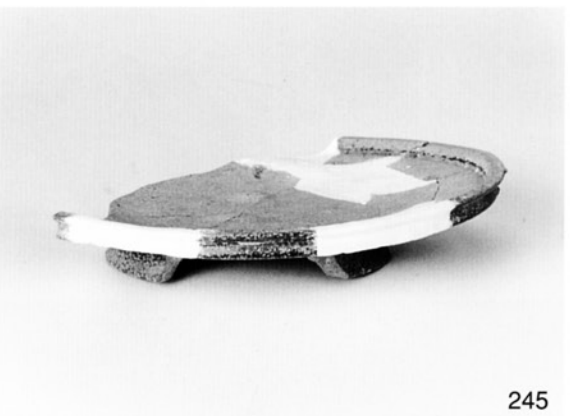


写真101　ＳＸ10・ＳＤ21出土遺物

写真102　稲垣義一氏所蔵遺物・稲垣寿一氏所蔵遺物

Ⅳ　山村遺跡

1　はじめに

（1）　位置と環境

山村遺跡は、四日市市山村町字西・西平古に所在する。遺跡は、朝明川下流の北岸、朝明丘陵の南縁から派生する標高約20～48mの中位から下位段丘面の主に南側傾斜地に立地する。遺跡の南面には水田面が広がる。

地目は畑地、果樹園、山林、休耕による荒地となっており、ところどころにかつて畑であったことを示す方形に区画された溝の痕跡を確認することができる。

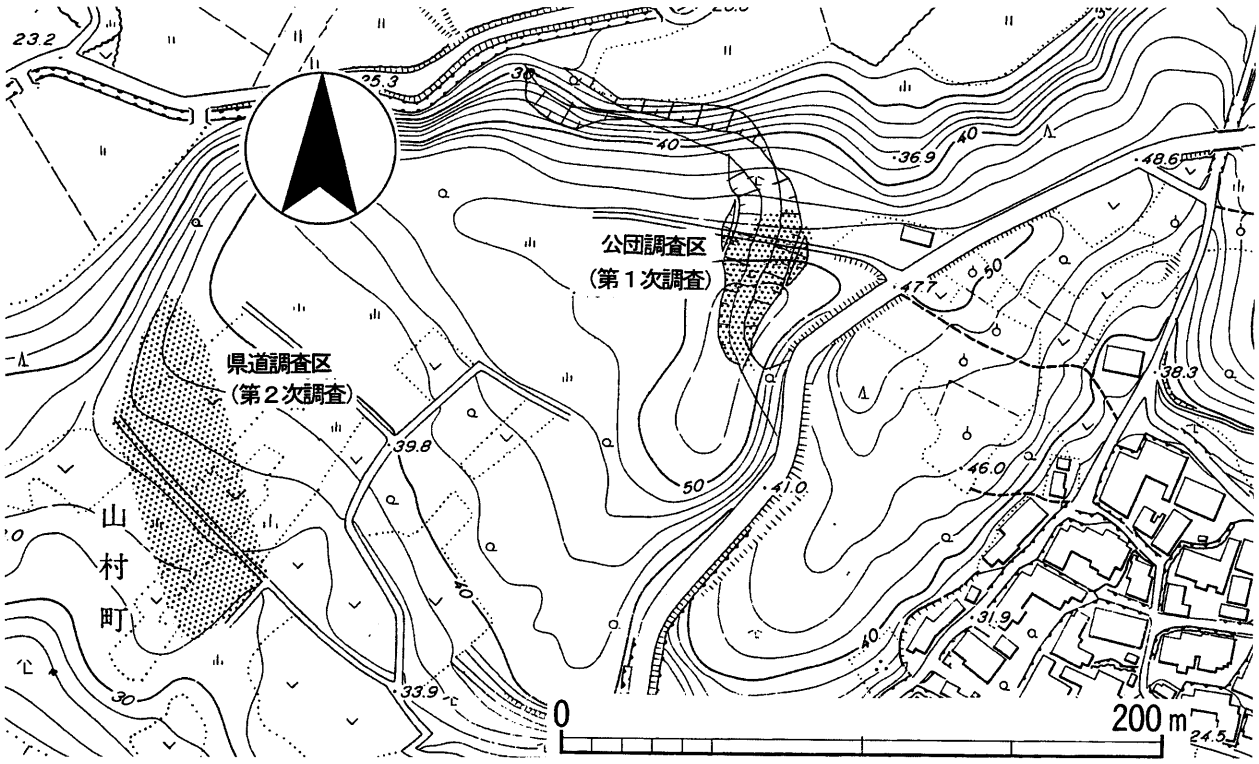
山村遺跡における遺物の散布は、特に低位面で濃密な状況を示しており、これまでに古墳時代後半から室町時代にかけての遺物が採集されている。なかでも奈良・平安時代が中心となる集落遺跡と考えられている。こうした状況から、山村遺跡は『神鳳鈔』に「内宮山村御厨三石薗」と記載される、伊勢神宮内宮領の山村御厨にかかわる遺跡である可能性も指摘されている[1]。

山村遺跡の周辺には多数の遺跡が所在していることが知られている。西側の谷間には六谷遺跡が、さらにその西側の台地上には菟上遺跡が所在する。環壕の確認された金塚遺跡は、同一尾根上の上位に位置している。段丘の下位面の水田には、奈良時代から平安時代前期および室町時代後期の二時期にわたる集落跡と考えられている上高田遺跡が所在する。また、半島状に延びる段丘面上の南端には、岡山古墳が所在する。

なお、山村遺跡では、県道四日市多度線県単道路改良工事に伴う調査が、今回の調査区西側の段丘低位面で実施され、弥生時代中期の方形周溝墓が19基検出されている[2]。

（2）　調査の経過

山村遺跡の発掘調査は、第二名神建設に関わる工事用道路建設に伴い緊急的に行われた。範囲確認調査は、平成11年８月５・６日の２日間にわたって実施した。その結果、時期など詳細についてはこの段階では明確に判断するにはいたらなかったが、南側斜面で複数のピットと小片ながら土師器片が確認さ



第70図　調査区位置図（１：2,500）

れた。一方、北側斜面については遺構・遺物とも確認されなかった。こうした状況から範囲確認対象積1,420㎡のうち、丘陵平坦面および南側斜面の1,050㎡の範囲について本調査が必要であると判断された。

本調査は、平成11年９月２日～同年10月25日にかけて実施した。調査区は、標高約43.3～47.3ｍの中位から下位段丘面の主に南側傾斜地を中心に設定した。調査の結果、弥生時代の環壕、方形周溝墓、古代の掘立柱建物などを検出した。

最終的な調査面積は、遺構確認のため一部分について調査区の拡張を行ったため、1,071㎡となった。山村遺跡の発掘調査作業は、国際航業株式会社による。

（３） 調査の方法

調査区は、国土座標の第Ⅵ座標系に合わせて座標値のＸ＝－107,248.000、Ｙ＝58,120.000を起点に100ｍを１単位とする大地区を設け、さらに大地区を４ｍ×４ｍを１単位として25分割するグリッドを小地区として設定した。各グリッドは北西隅を原点とし、調査区の西から東へは１～25の算用数字で、北から南へはＡ～Ｙのアルファベットで表示した。

調査にあたって、表土除去は重機（バックホー）を用いて行い、包含層および各遺構の掘削は人力で行った。

検出された遺構は、検出状況を記録するためグリッドごとに１／40の縮尺で略測図を作成した。

遺構番号は、ピット以外の遺構は調査区全体で通し番号を与えた。ピットについては各グリッドごとに通し番号を与えた。ただし、今回の本報告にあたって、すでに概報などで報告された遺構番号を全て改称し、改めて付与した遺構番号を正式なものとする。

写真撮影は、遺構写真にはモノクロネガとカラーリバーサルフィルムを用い、35㎜、ブローニー判、４×５判を使用した。また、適宜35㎜カラーネガも併用した。遺物写真にはブローニー判のモノクロネガを用いた。

調査区の全体写真撮影は、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。

遺構実測は、土層図や遺物出土状況図などについては調査の進捗状況に合わせて、適宜１／10ないしは１／20の縮尺で実測図を作成した。また、全体の遺構実測および測量は、１／20の縮尺で人力により実施した。

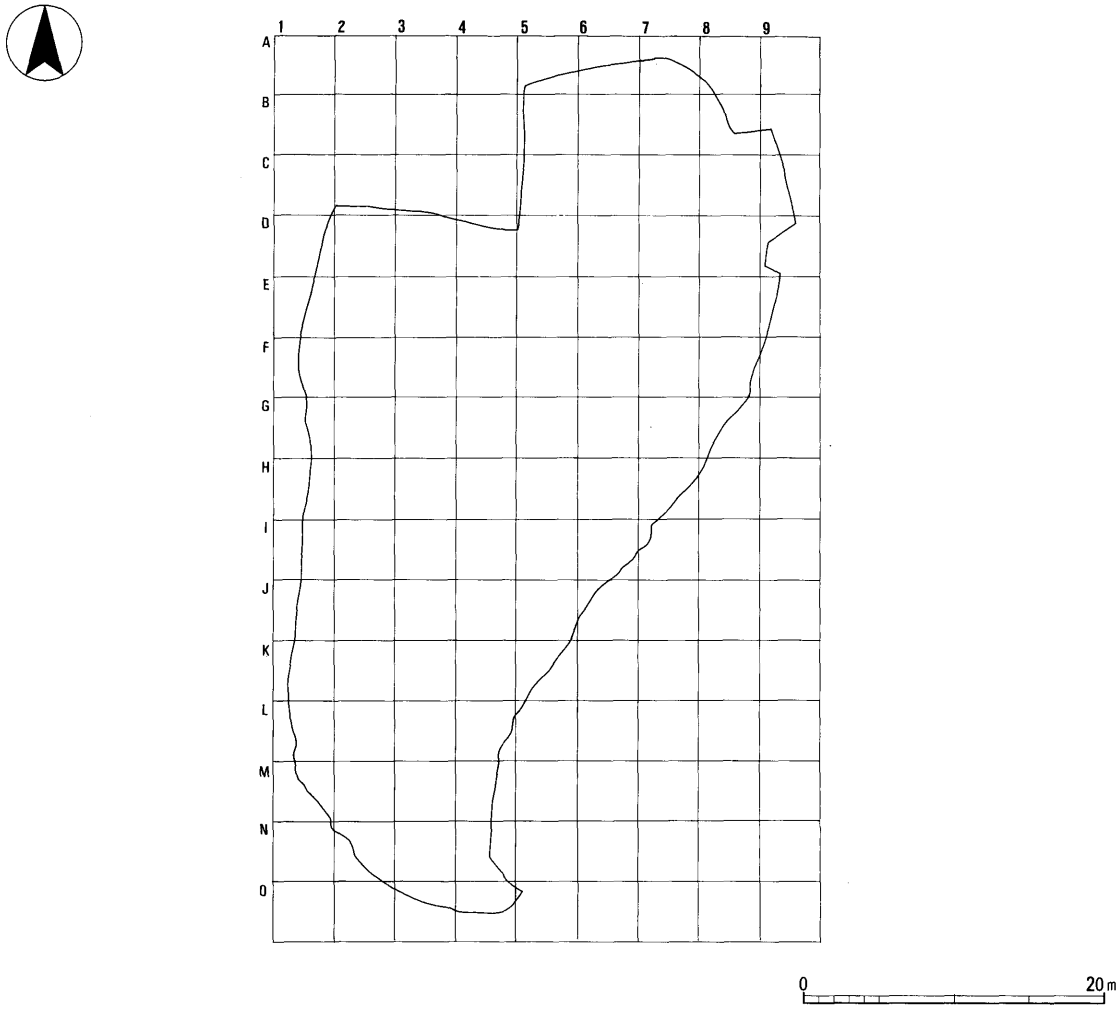
調査区の埋め戻しは実測終了後、重機を用いて行った。

出土遺物は、洗浄、接合、注記などを行った後、実測すべき遺物を選別し、実測を行った。実測された遺物は実測図との照合ができるよう遺物と図面の双方に「Ｒ」を付した登録番号を与え、さらに報告書掲載遺物には報告書と同じ番号を与えた。

調査日誌（抄）

９月２日　現地打合せ・機材準備
９月６日　調査前現況写真撮影
　　重機による表土除去開始
９月７日　雨天の為、現場作業中止
９月８日　遺構検出および遺構掘削開始
９月10日　遺構検出および遺構掘削開始
９月13日　午後、雨天の為現場作業中止
９月14日　午後、雨天の為現場作業中止
９月16日　Ｂ・Ｃ－２～５グリッドの写真撮影
９月17日　Ａ・Ｂ－２～５グリッドの遺構実測
９月19日　ＳＢ１・ＳＸ１検出
９月20日～24日
　　雨天の為、現場作業中止
９月28日　ＳＤ１検出、ＳＸ１写真撮影
　　Ｈ～Ｊグリッド遺構実測

９月30日　ＳＤ１掘削開始
　　ＳＸ１遺物出土状況写真撮影、実測および取り上げ
　　Ｉ～Ｌグリッド遺構実測
10月４日　ＳＤ１土層断面実測
　　Ｇ～Ｉ－３～５グリッド遺構実測
10月５日　ＳＤ１土層断面写真撮影
　　ＳＸ２検出
10月７日　雨天の為、現場作業中止
10月８日　ＳＤ１掘削終了、写真撮影



第71図　調査区地区割り図（1：500）

10月13日　全景および各遺構写真撮影
10月16日　空中写真撮影
10月21日　調査区拡張、ＳＤ２検出、掘削
10月22日　拡張区遺構実測、写真撮影
10月23日　調査終了

［註］

①『四日市市史第三巻史料編考古Ⅱ』四日市市1993

②『山村遺跡（第2次）発掘調査概要』現地説明会資料三重県埋蔵文化財センター2000

2　調査の成果

調査区は、朝明川北岸の中位から下位段丘の平坦面および傾斜面に位置する。調査区内における比高は、約4.6mを測る。標高は、最高地点で約47.4m、最も低い地点で約42.8mである。

層序は、基本的に厚さ約30cmの表土直下に明黄褐色砂質土（10YR6/6）の基盤層があり、明確な遺物包含層は確認されなかった。遺構の検出は、この基盤層である明黄褐色砂質土上面で行った。

調査の結果、弥生時代中期の方形周溝墓、後期の環壕の他、奈良～平安時代に属すると考えられる掘立柱建物等が確認された。出土した遺物の量は少なく、わずかに整理箱５箱分であった。そのほとんどは遺構からの出土である。

以下、時代ごとに各遺構について詳述する。

（１）　弥生時代

中期の方形周溝墓１基、後期の環壕２条、土器埋設遺構１基を検出した。

環壕ＳＤ１・２（第73図）　ＳＤ１は、尾根の北側斜面の調査区東端で検出した。検出された規模は、長さ約3.8m、幅約1.1m、検出面からの深さは最深部で約25cmを測る。断面形は逆台形をなす。埋土はやや粘性のある灰黄褐色を呈し、砂質粘土ブロックが少量含まれる。詳細については、検出された規模がわずかで不明な点が多いため、後述するＳＤ２との関係は明確にし難い。

出土遺物は確認されなかった。

ＳＤ２は、南側斜面で検出した。平坦面では東側に張り出す形で緩やかな弧を描いた後、傾斜面では逆に等高線に沿って、南東方向に向きを変える。尾根を切断する形で掘削された溝は、さらに調査区外へと延びる。調査区外には、現在も小谷状の地形が認められ、この小谷が環壕の名残である可能性も考えられる。

検出された最大幅は約4.6m、深さは最深部で約1.8mを測る。断面は概ねＶ字型をなすが、底部分には平坦をなす箇所も見られる。土層断面の観察と埋土は大きく２層に分けられる。上層は、灰色系の砂質土を中心とし、小礫や土師器や須恵器の小片が包含される。下層は、粘質のある褐色系を呈し、遺物は全く見られない。最下層部分はシルト質で、比較的早い段階から土砂が溜まった状態になっていたことが窺われる。また、わずかな量ながら湧水が確認された。一方、上層部分は、須恵器などの後世の遺物が混入している状況から、完全に埋没するまでに比較的長い期間を有したものと判断される。

また、上層部分は下層からやや角度を変えて広がっており、再掘削された可能性も示している。

ＳＤ１とＳＤ２との位置関係はほぼ直角に近い。両者の間は丘陵の尾根線上にあたり、地形的には平坦面をなしており、この平坦面が環壕掘削時にも存在していたとすれば、自然地形を利用して、ここに土橋状の出入口的な施設があったことも推測される。

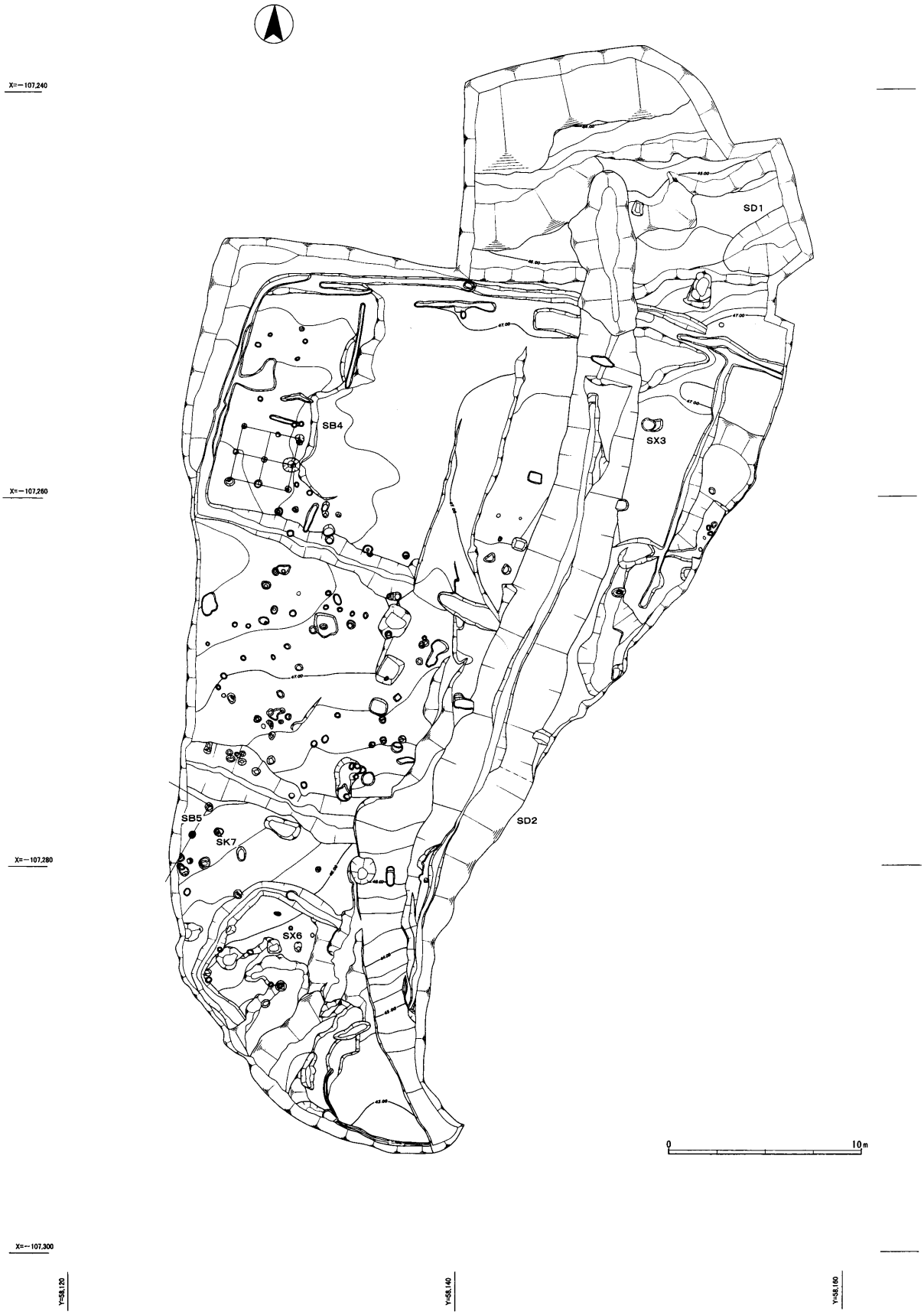
出土遺物　ＳＤ２の上層からは、須恵器杯蓋（１）、壷（２）が出土した。１は、焼成不良の為、橙色を呈する。外下方向に折り曲げられた口縁端部は、強いヨコナデにより外反する。器壁は、全体に薄手につくられる。２は、口縁部の一部のみ残る。口縁部は外方に大きく広がり、端部は上下に拡張され外端に面をなす。この他にも須恵器、土師器片が複数出土したが、いずれも小片の為、器種等を特定するには至らない。

方形周溝墓ＳＸ６（第74図）　調査区の中央部西側の位置で検出した方形周溝墓である。南辺と墳丘部分は削平により破壊されている。規模は、周溝も含めると一辺約7.8m、周溝は幅0.8～1.0m、残存する深さは約0.35mを測る。

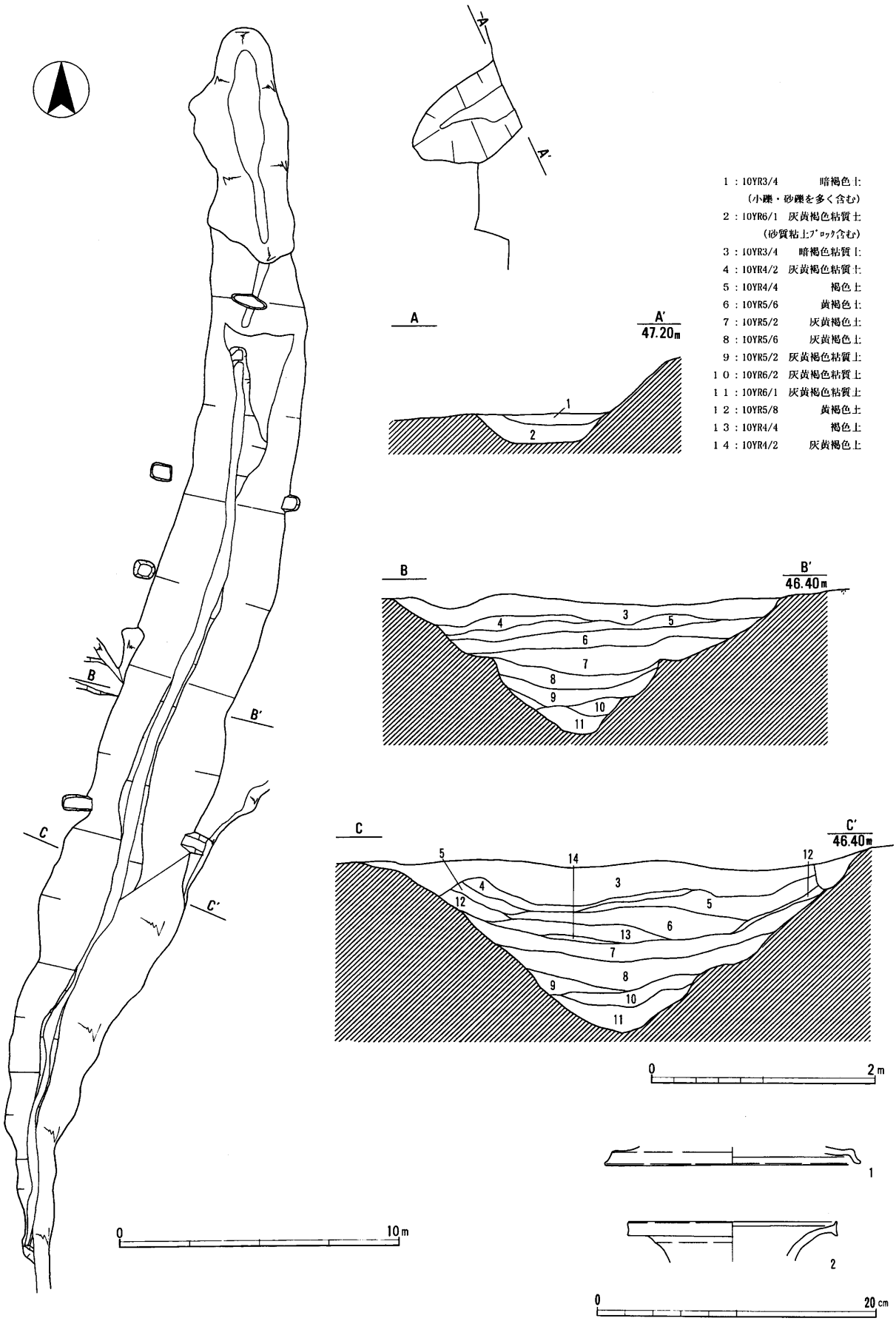
平面プランは墳丘側ラインがより方形に近く、周溝外側はやや丸みを帯びる。周溝の断面を見ると、外側に比べ墳丘の傾斜がわずかに緩やかなことがわかる。

周溝の北東と西南の位置で壷がそれぞれ一個体ずつ出土している。遺損状態がよくないため詳細は判断しがたいが、おそらく墳丘上から転落したものと考えられる。

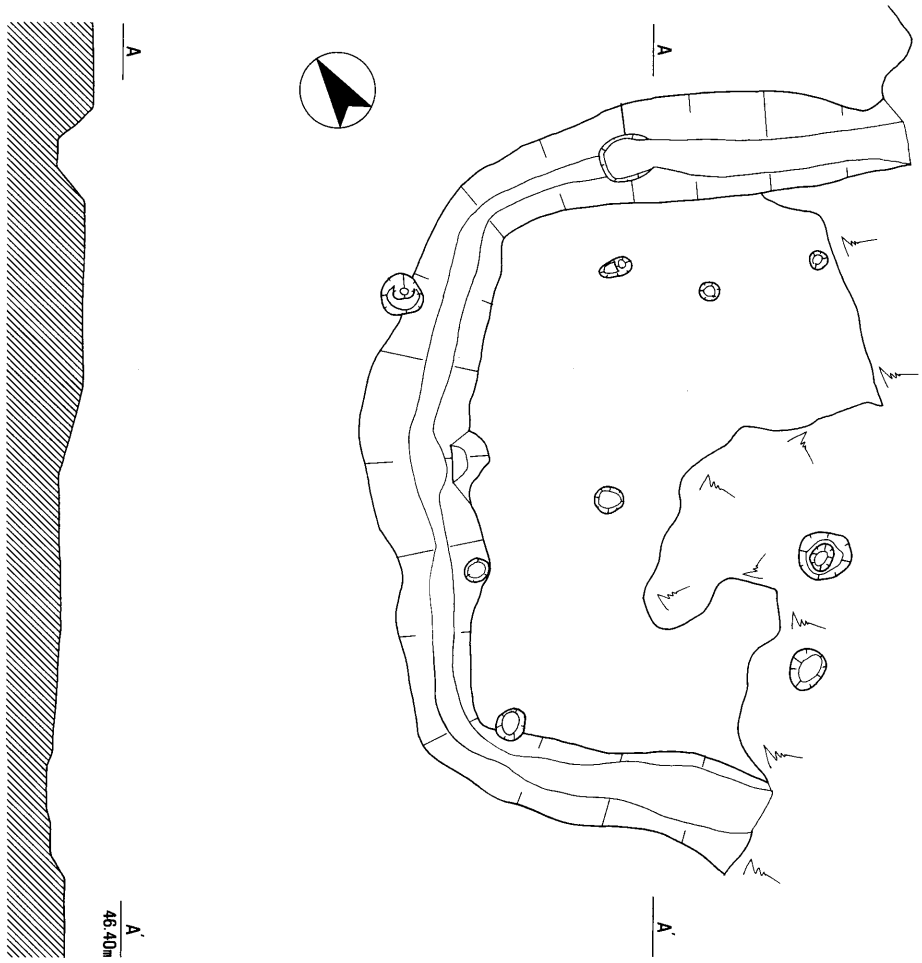
出土遺物　北西側周溝の中央やや東寄りの位置から壷（３）が出土した。受口状をなす口縁部には２条の凹線が巡る。体部の破片も存在するが復元するに至らず形状などは不明である。口縁部の形態から弥生時代中期に属すると考えられる。この他、南東



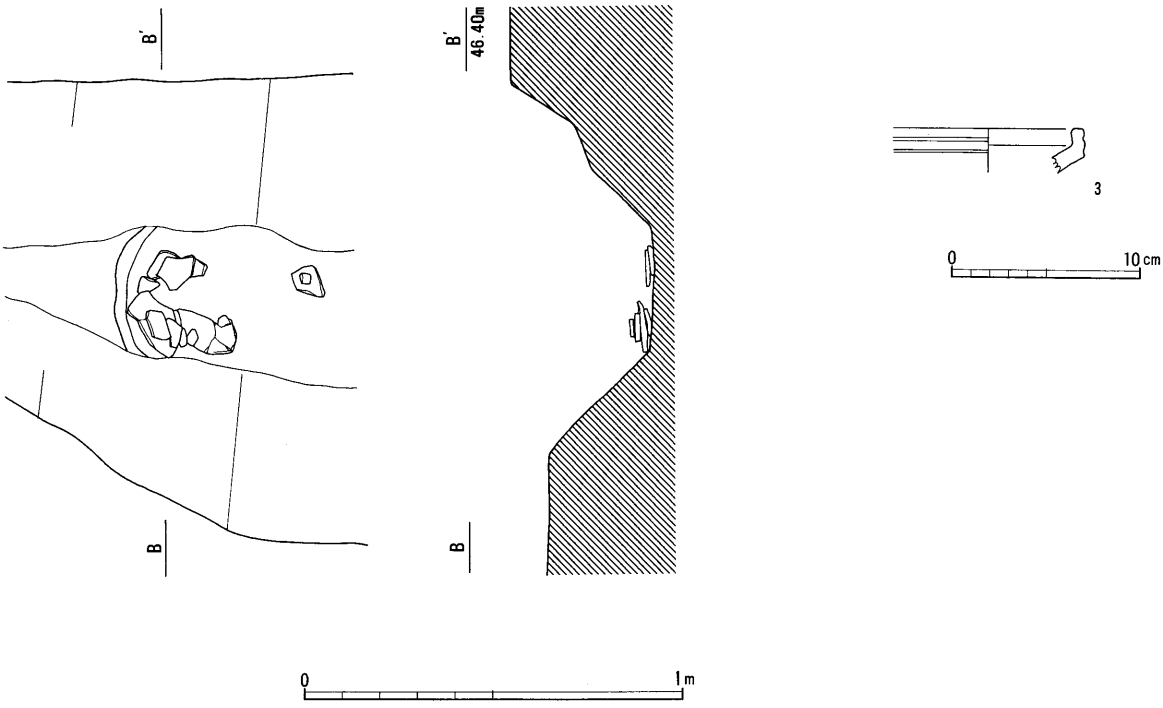
第72図　全体遺構図（1：300）



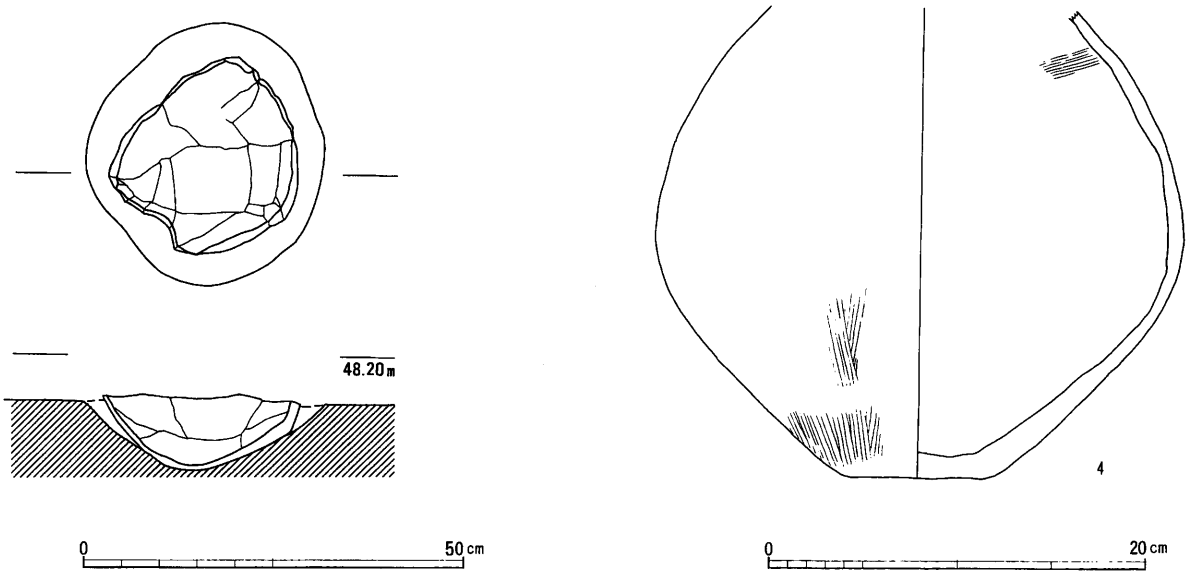
第73図　ＳＤ１・２平面図（１：200）**および土層断面実測図**（１：50）



第74図　ＳＸ６実測図（１：80）



第75図　ＳＸ６遺物出土状況図（１：20）および出土遺物実測図（１：４）



第76図　ＳＸ３遺物出土状況図（１：10）**および出土遺物実測図**（１：４）

側の周溝内からも土器が出土したが、全体を復元するに至らなかった。

土器埋設遺構ＳＸ３（第76図）　ＳＤ２の東側の隣接する位置で検出した土器埋設遺構である。出土された土器は、壷の体部と考えられる。壺（４）は、その形状に合わせて地山を掘り込んだと考えられる深さ約15cm の小土坑に横位に据え置かれるような状態にあった。壷は、口縁部を欠いた１個体分の体部の約１／３が残る。口縁部などを意図的に打ち欠いたものかは判断し難いが、検出状況から判断して、後世の耕作活動などによって破損したものと推測される。残存する体部に穿孔などの痕跡は認められない。

出土遺物　壷（４）は平底で、口縁部を欠く。最大径は中位付近にあたり、約28cm と復元推定される。

調整は、底部付近を除いて磨滅のため不明であるが、外面底部および底部付近には、比較的細かいハケメが施される。体部内面の一部にも横方向のハケメが残る。

（２）　奈良・平安時代

この時期の遺構は、掘立柱建物２棟、土坑１基がある。

掘立柱建物ＳＢ４（第77図）　調査区の北寄りの位置で検出した。ここは尾根の頂部に相当し、地形的に平坦面をなす。桁行２間×梁行２間の総柱建物である。棟方向は、南北方向でＮ15°Ｅをとる。桁行、梁行とも2.8mの建物規模をもつ。柱間寸法は、桁間、梁間ともに1.4m等間である。柱掘形は、平面楕円形をなし、径0.25m～0.8mとばらつきが見られる。検出面からの深さは約10～20cm を測る。柱痕跡は確認されたもので径約15cm を測る。

東側の柱列には根固めの石が認められる柱穴もあることから、当初から掘削は浅かった可能性が考えられる。

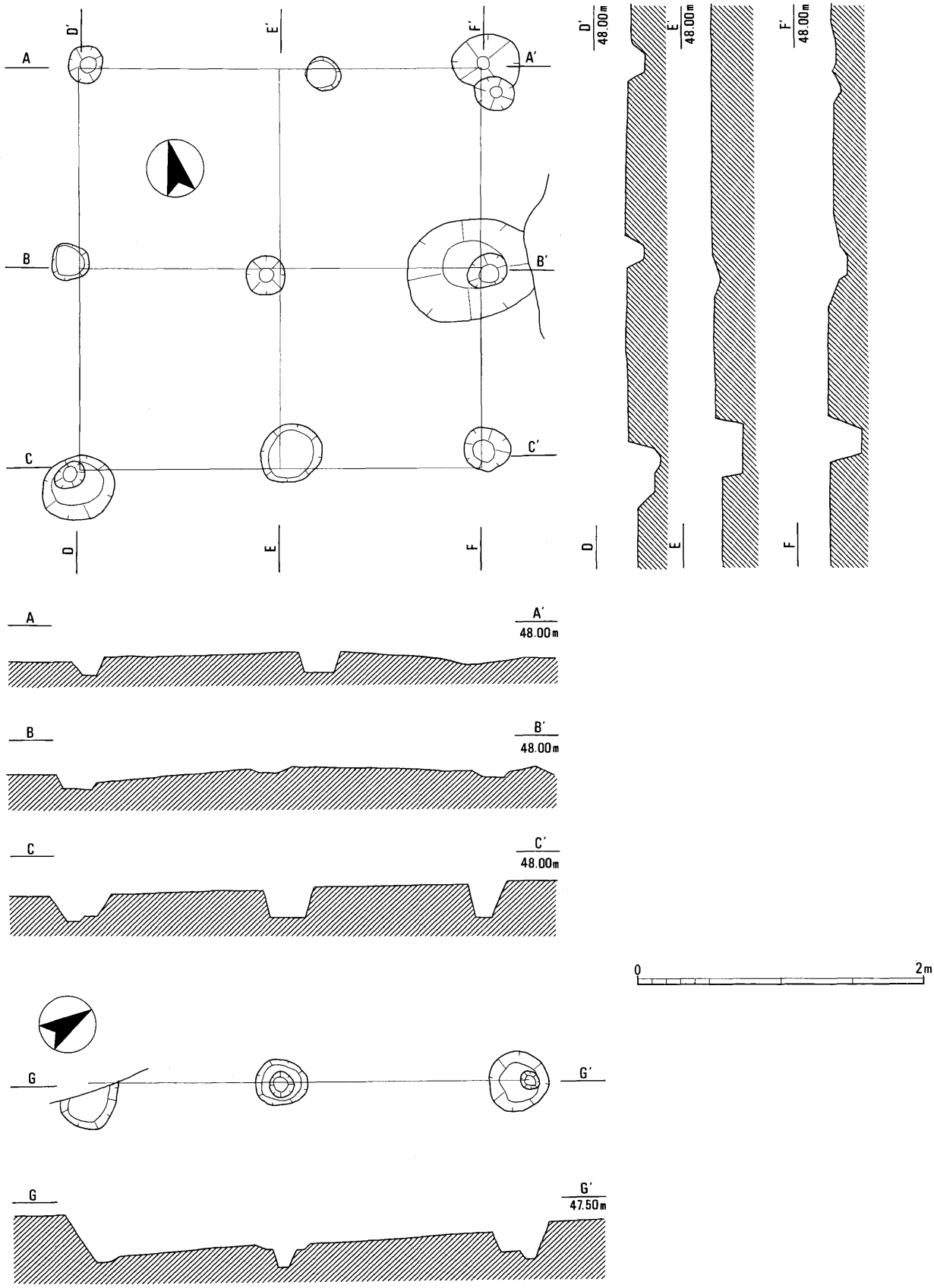
出土遺物には、数点の土師器片があるが、実測できるものではないため図示していない。

掘立柱建物ＳＢ５（第77図）　ＳＸ１の北側の位置で検出した柱列で、掘立柱建物になると考えられる。建物の西側部分は、調査区外へ延びるため全体を確認することはできなかった。確認された規模は２間分で、桁行、梁行のいずれであるかは不明である。方向はＮ30°Ｅをとる。柱間寸法は、北から1.7m＋1.4mを測る。柱掘形は平面円形をなし、径は0.4m前後、柱痕跡は径15cm 前後である。残存する深さは検出面から約15cm と浅い。

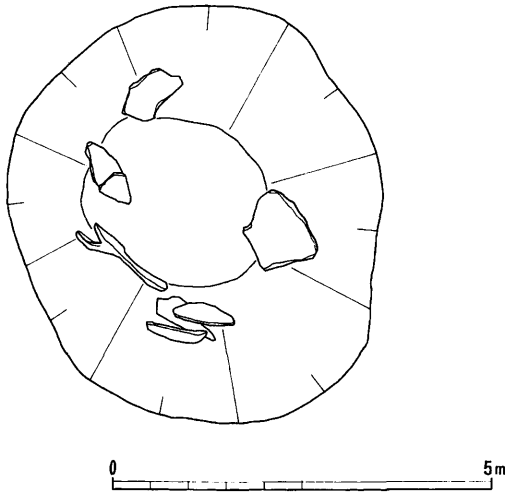
出土遺物は確認されなかった。

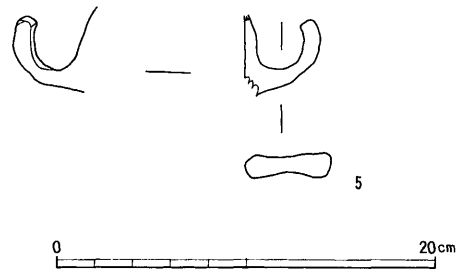
（３）　その他の遺構と遺物

土坑ＳＫ７（第78図）　ＳＢ２の西側の位置で検出した小土坑から土師器の甕あるいは鍋（５）が破片の状態で出土した。検出した土坑は径約55cm、険出面



第77図　ＳＢ４・５実測図（１：40）





第78図　ＳＫ７遺物出土状況図（１：10）**および出土遺物実測図**（１：４）

からの深さは約20cmを測る。

出土遺物　出土した土器は、破片の状態で出土したが接合が困難であるため把手のみ実測し、掲載した。把手の形状は板状で、全体に磨滅が著しいため調整などは不明だが、丁寧に面取りされていた様子がうかがわれる。体部との接合方法は、貼り付けによると考えられる。

3　まとめ

今回の調査では、弥生時代中期の方形周溝墓と後期の環壕を検出した。

方形周溝墓は１基のみ確認された。同一尾根の下位で実施された第２次調査では19基の方形周溝墓が検出され、その配置状況から墓道を推定することも可能であるという[①]。この第２次調査の成果と合わせて考えてみると、両調査区を含む範囲にはひとつの墓域が広がっていたことが推測される。両調査区の周溝墓を比較すると、規模や配置状況等において、第２次調査の方が優勢である。また、立地条件においても、第２次調査区の方が眺望に優れているといえる。しかし、今回の調査区の東から南西側にかけて平坦面が存在しており、現在では竹が繁茂しているために分かりにくいが、当時は最も眺望に優れた場所であったと思われる。ＳＸ６の南半は後世の削平により破壊されているが、本来は平坦面が存在していたものと考えられる。

こうした状況から、第１次調査区から第２次調査区にかけて広がる墓域の中心部はこの平坦面に存在するのではないかと推測される。なお、金塚遺跡の報告のなかでも触れられているが、この山村遺跡の方形周溝墓群は谷を挟んで存在する集落遺跡の菟上遺跡に伴う墓域であることが考えられている。

次いで、環壕についてであるが、環壕（ＳＤ２）は尾根を分断する形で掘削されている。現在、山村遺跡の立地する丘陵裾を通る伊坂町から広永町へ至る市道から分岐し山村ダムへ向かう道の東側に、かつて小谷状に入り込む地形があったことが、旧地形図から読み取ることができる。この小谷状の地形は、現在も確認することができ、溜め池として利用されている。ＳＤ２は南北方向に掘削された後、丘陵下位の調査区外へは、やや東へ方向を変えていくことが検出状況から想定され、ＳＤ２と小谷とがかつては繋がっていた可能性が示唆される。仮に両者が繋がっていたとすると、環壕は丘陵上位を弧を描く形で取り囲み、かつ尾根を分断していたことになる。山村遺跡の立地する尾根は墓域が形成されたことからもわかるように比較的傾斜が緩やかで、金塚遺跡へ至るには容易なルートである。したがって、ここに環壕を掘削することは、尾根を分断し、丘陵上位に存在する集落への進入路をふさぐという、防御的な機能を高めるものであるといえる。北側斜面で続きが検出されなかった理由として、傾斜の緩やかな南側に比べ、傾斜が強く場所によっては崖面を形成しているためと考えられる。

以上のことから、ＳＤ２は高地性集落である金塚遺跡を直接取り囲む３条の環壕と同時期に掘削された外側の環壕であり、金塚遺跡は内外二重の環壕に囲まれていた可能性が高いことが判明した。

なお、ＳＤ２が掘削された段階では、すでに墓域としては機能していなかったものと考えられる。

[註]

① 調査担当者である萩原義彦氏の教示による。

	規模	柱間		棟方向	柱掘形			出土遺物	備考
	桁行×梁行	桁間(m)	梁間(m)		平面形	規模(m)	深さ(cm)		
ＳＢ４	２×２	1.4	1.4	N15° E	円	0.25～0.8	10～20	土師器片	
ＳＢ５	(2)×－	1.7+1.4	—	N30° E	円	0.4	15	—	

表18　掘立柱建物一覧

	規模			断面形	出土遺物	備考
	長(m)	最大幅(m)	深最部(m)			
ＳＤ１	(3.8)	1.1	0.25	逆台形		
ＳＤ２	(45.2)	4.6	1.8	Ｖ字	須恵器 土師器	

表19　環壕一覧

	規模(m)	周溝		平面形	出土遺物	備考
		幅(m)	深さ(cm)			
ＳＸ６	7.8×—	0.8～1.0	35	方形	弥生土器壺	南西部分破壊

表20　方形周溝墓一覧

報告書番号	出土地点	登録番号	器種等	法量(cm)			成形・調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考
				口径	器高	その他						
1	G-5・6 SD2上層	1001-01	須恵器 杯蓋	(18.0)	(1.4)		回転ナデ	内:橙 (5YR6/6) 外:　〃	密	やや不良	口縁部1/7	
2	G-6 SD2 3層	1001-02	須恵器 壺	(14.8)	(2.9)		回転ナデ	内:灰黄 (2.5Y7/2) 外:　〃	～0.2mm大細砂含む	良好	口縁部1/8	
3	K-3 SX6	1001-04	弥生土器 壺		(2.4)		凹線2条	内:褐灰 (5YR5/1) 外:　〃	～1mm大砂粒多量に含む	良好	口縁端部	受口状口縁
4	D-9 SX3	1002-01	弥生土器 壺		(24.7)		ハケメ	内:黄褐 (2.5Y5/4) 外:黄橙 (7.5YR7/8) 底部:黒褐 (2.5Y3/2)	～0.5mm大砂粒多量に含む		体部1/3	口縁部欠損 体部著しく風化
5	H-2 SK7	1001-03	土師器 把手付甕			(4.6)	ナデ ケズリ	内:黄橙(10YR8/6) 外:　〃	～0.4mm大砂粒含む		把手のみ	著しく風化

表21　遺物観察表

写　真　図　版

写真 103　調査区全景（北西から）

写真 104　調査区全景（垂直）

写真 105　ＳＤ２斜面部分（南から）

写真 106　ＳＤ２平坦部分（北西から）

写真 107　ＳＤ２土層断面（南から）

写真 108　ＳＤ２土層断面（南から）

写真 109　ＳＸ６全景（東から）

写真 110　ＳＸ６全景（南から）

写真 111　ＳＸ６遺物出土状況（東から）

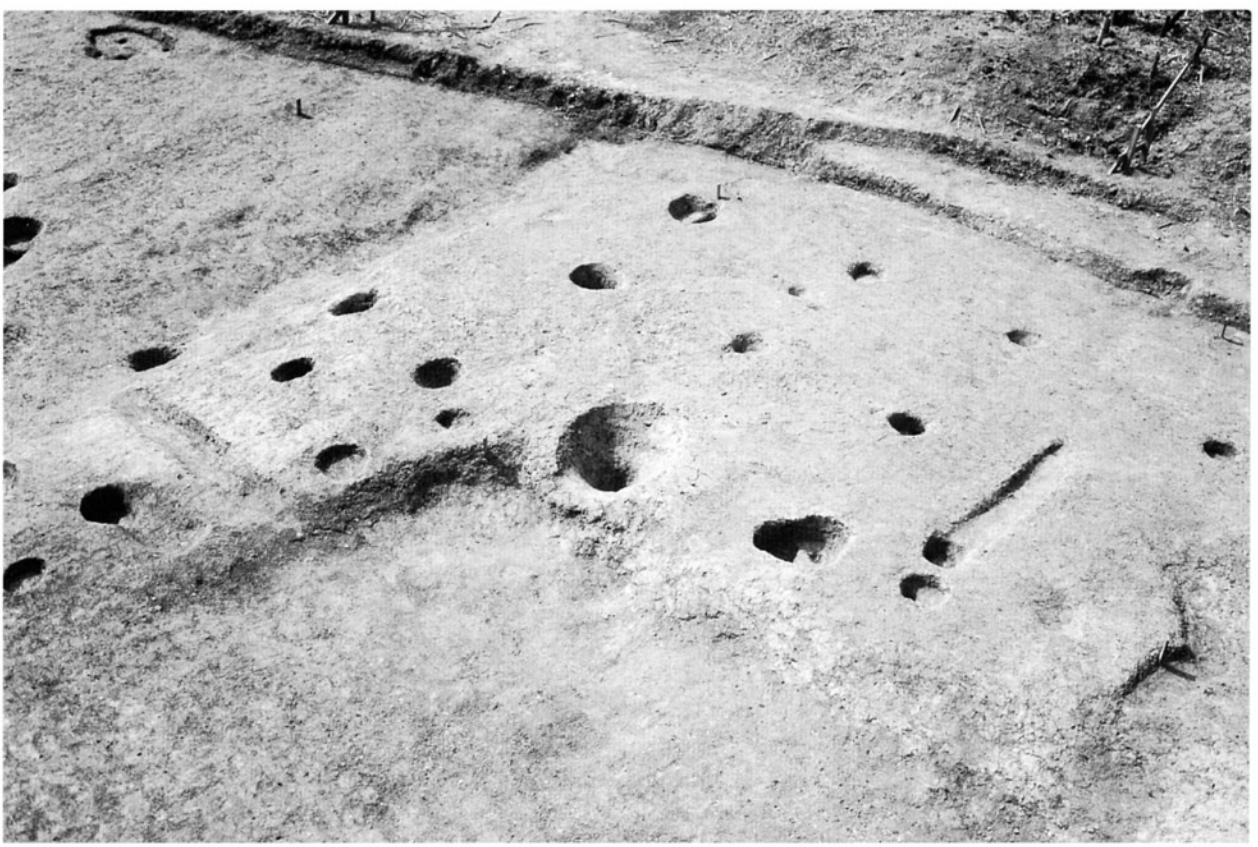


写真 112　ＳＢ４全景（北東から）

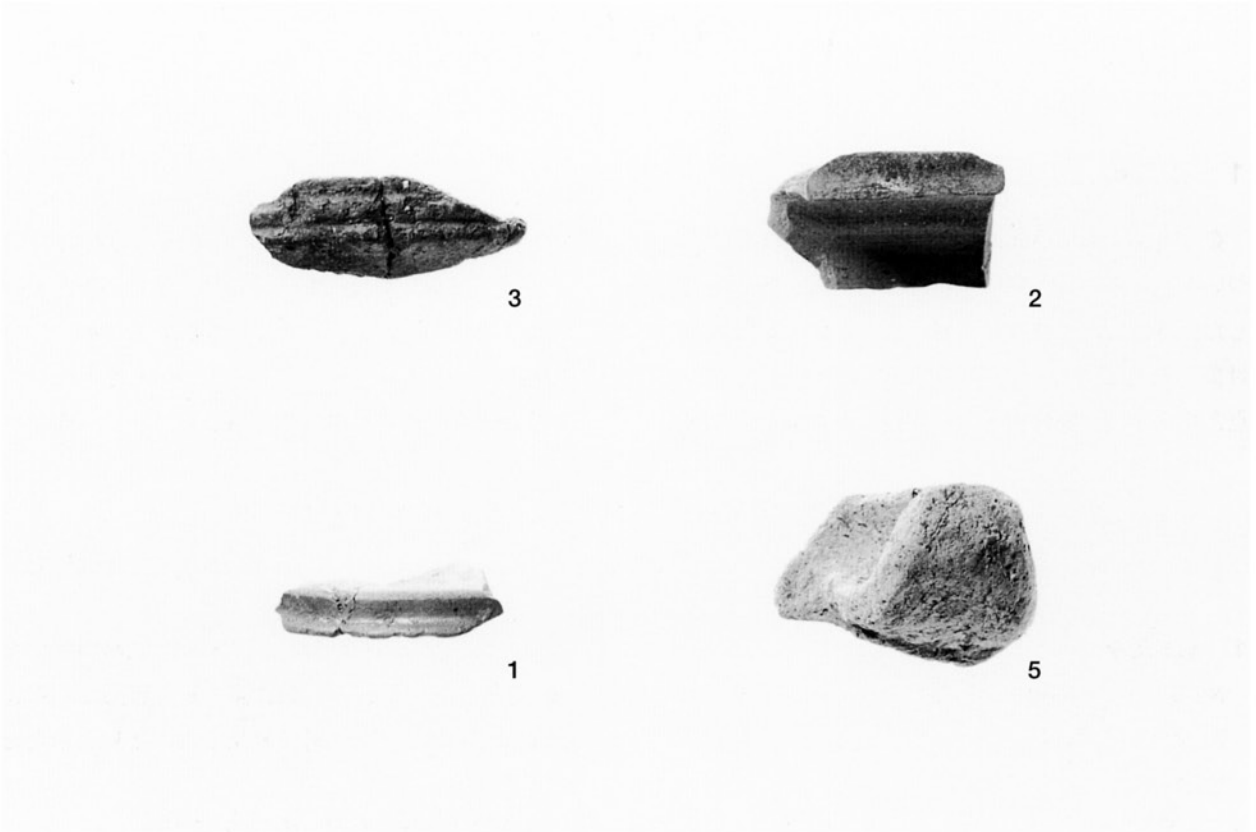


写真113　ＳＤ２・ＳＸ６・ＳＫ７出土遺物

写真114　ＳＸ３出土遺物

V　自然科学分析

1　はじめに

金塚遺跡・金塚横穴墓群から出土した金属製品について、財団法人元興寺文化財研究所に分析を委託した。目的は、各種成分や製作状況の分析である。対象とした資料は、横穴墓群から出土した耳環８点、空玉４点、竪穴住居（ＳＨ19）から出土した銅鐸片１点である。分析の方法として、上記13点については（１）ケイ光X線分析、銅鐸片については（２）鉛同位体比法も行った。なお、上記の分析と同時に、劣化が激しく脆弱な金属製品（横穴墓群出土の鉄釘、刀子など）の保存処理も委託したため、以下に報告する資料番号は、その際に使用したもので、欠番は保存処理の資料番号である。　（服部）

（１）　金塚遺跡・金塚横穴墓群出土遺物のケイ光Ｘ線分析

（財）元興寺文化財研究所

1　調査対象

No. 3　　銅鐸片　１点
No. 4 ～11　耳環　　８点
No.25～28　空玉　　４点

2　内容

各遺物の表面から非破壊でケイ光Ｘ線分析（以下、ＸＲＦ）による元素分析を行った。

3　使用機器及び測定条件

● エネルギー分散型ケイ光Ｘ線分析装置（セイコーインスツルメンツ（株）製　SEA5230）試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光Ｘ線を検出することにより元素を同定する。

モリブデン管弾使用、大気条件下、
　コリメータ0.1mm、管電圧50Kv（微小部）
　コリメータ1.8mm、管電圧45Kv

4　成果と考察

ＸＲＦ分析

No.	遺物名	分析個所	検出元素	図	報告書番号
4	耳環	①表面銀色部分	Ag、Cu、Fe、Au	1	180
		②表面黒色部分	Cu、Ag、Fe	2	
		③芯部分	Cu、Ag、Fe、Br	3	
5	耳環A	①表面銀色部分	Cu、Ag、Fe	4	183
		②表面黒色部分	Ag、Cu、Fe	5	
		③芯部分	Cu、Fe、Ag	6	
6	耳環B	①表面銀色部分	Cu、Ag、Fe	7	182
		②表面黒色部分	Cu、Ag、Au、Br、Fe	8	
		③芯部分	Cu、Ag、Fe、Au、Pb	9	
7	耳環C	①表面銀色部分	Cu、Ag、Fe	10	181
		②表面黒色部分	Cu、Ag、Fe	11	
		③芯部分	Cu、Fe、Ag、Pb	12	
8	耳環a	①黒色部分	Sn、Fe、Cu、Pb	13	
9	耳環b	①黒色部分	Sn、Fe、Cu、Pb	14	
10	耳環c	①茶色部分	Sn、Fe、Cu、Pb	15	231
		②接面白色部分	Sn、Fe、Cu、Pb	16	
		③接面黒色部分	Sn、Fe、Cu、Pb	17	
11	耳環d	①黒色部分	Sn、Fe、Cu、Pb	18	
25	空玉	①表面部分	Ag、Br、Cu、Fe、Au	19	184
		②接合したとみられる部分	Ag、Br、Cu、Fe	20	
26	空玉	①表面部分	Ag、Br、Cu、Fe、Au、(Hg)	21	185
		②接合したとみられる部分	Ag、Br、Cu、Fe、Au、(Hg)	22	
27	空玉	①表面部分	Ag、Br、Cu、Fe、Au	23	186
		②接合したとみられる部分	Ag、Br、Cu、Fe、Au	24	
28	空玉	①表面部分	Ag、Fe、Cu	25	187
		②接合したとみられる部分	Ag、Br、Cu、Fe、Au	26	
3	銅鐸片	破片表面	Cu、Pb、Ag、Sb、As、Fe、Bi	27	125

表１　各遺物のＸＲＦによる検出元素

各遺物の分析個所は写真1～3に、XRFスペクトルは図1～27、検出元素は表1、耳環の法量は表2にまとめた。

No.	重量 (g)	a (mm)	b (mm)	a' (mm)	b' (mm)	c (mm)	d (mm)	c' (mm)	d' (mm)
4	8.8	25.2	28.1	15.3	16.6	4.7	4.8	4.9	4.8
5	30.4	32.2	33.6	14.4	17.7	8.1	9.0	8.8	9.6
6	33.0	31.6	35.9	15.4	19.0	8.1	8.7	8.6	8.6
7	17.1	28.0	31.2	14.7	17.9	6.3	7.0	6.6	6.6

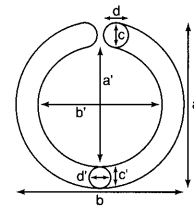


表2　No.4～7　耳環の法量

1）No.4　耳環

芯の上に土壌と一体になった黒色系のものが付着しており、銀色光沢の部分が点在している。表面銀色部分①、黒色部分②は銀（Ag）、銅（Cu）を主に検出しており、①は銀のピークが顕著である。①で検出している金(Au)は非常に微小なピークである。鉄（Fe）は土壌に由来するとみられる。芯の灰緑色部分③は銅製とみられる。おそらく臭素（Br）は銀と結合しているもので、ここで検出された銀は銅にふくまれるものか、そのうえの①や②の部位からくるものか、不明である。また、いずれの個所からも水銀（Hg）は検出されていない。銅芯に銀板を巻いていたとみられるが、劣化が進み表層がほとんど失われているので、本来の状態は不明である。

2）No.5　耳環A

芯の緑色部分③はほとんど銅で、銀をわずかに検出している。芯の周りには板が存在し、部分的に銀色光沢がみられる。板の表面銀色①、黒色部分②からは主に銀と銅を検出した。これらの検出元素と、遺物の状態から判断すると、銅芯に銀板を巻いて仕上げたとみられる。しかし銀板の上に鍍金などが施されていたかどうかについては、現状では不明である。接面は板が欠損しており、仕上げの方法はわからなかった。

3）No.6　耳環B

No.5の耳環Aと同様の作りとみられるが、表層板の欠損がない。表面の銀色光沢部分①と黒色部分②からが主に銅、銀を検出し、わずかに金、臭素、鉄のピークも得られた。芯に由来するとみられる淡緑色の腐食生成物③からは主に銅、銀、他に金、鉛(Pb)、鉄を検出している。

銅製の芯はわずかに鉛を含み、その芯の上に銀板を巻いているとみられる。金がわずかに検出されており、銀板の上に鍍金などを施していた可能性もあるが、現状では判断できない。接面は板を折りたたんで仕上げてある。

4）No.7　耳環C

芯の緑色部分③は主に銅で、わずかに鉛、鉄、銀を検出した。表面の銀色部分①と黒色部分②とは主に銅と銀である。状態から判断して、銅芯に銀板を巻いて仕上げていると思われるが、その上に鍍金などがあったかどうかは不明である。

5）No.8～11　耳環a、b、c、d

いずれも主にスズ（Sn）を検出しており、スズ製の環である。他に銅、鉛を含むとみられ、鉄は土壌由来と考えられる。これらのうちNo.10耳環cは環の末端（接面）が残存していた。接面は中心と縁の色調が異なっていたが、検出元素としては特に大きな差はなかった。

6）No.25～28　空玉

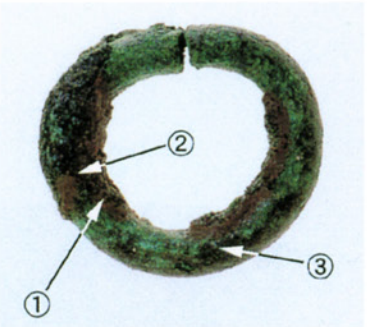
いずれも主に銀を検出し、銀製の空玉である。臭素は銀に接合しているものと考えられる。No.25、27、28は金、銅を含むとみられる。

接合部の外観は、表面が溶けたような痕跡がみられるもの（例:写真2のNo.28）や、部分的に接合が不完全な個所（例：写真2のNo.26）が観察された。接合部の検出元素は、空玉表面と同様であった。No.26ではさらに水銀(Hg)のLa線とみられるピークが観察され、これは表面と接合面どちらにも共通していた。水銀のLβ線が、臭素のKα線と重なってしまうので断定はできないが、水銀が含まれているとみられる。

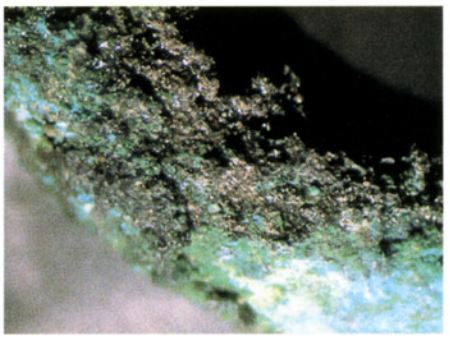
これまでの分析事例では、空玉表面と接合部とでは特に検出元素に差はないことが多かった。今回もその点については同様である。

7）No.3　銅鐸片

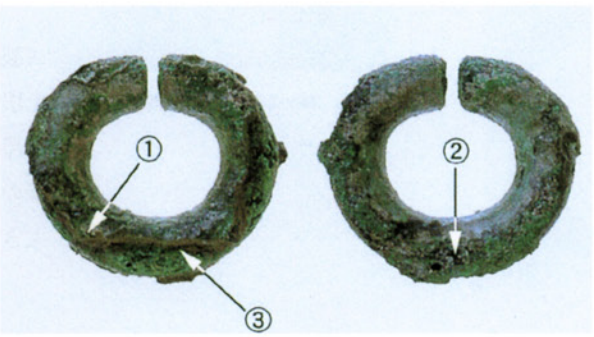
主に銅を検出し、その他に鉛、銀、アンチモン(Sb)、ヒ素（As）、鉄、ビスマス（Bi）を含んでいた。この破片からはスズを検出しなかったが、腐食により溶出したと考えられるので、当初の組成は不明である。



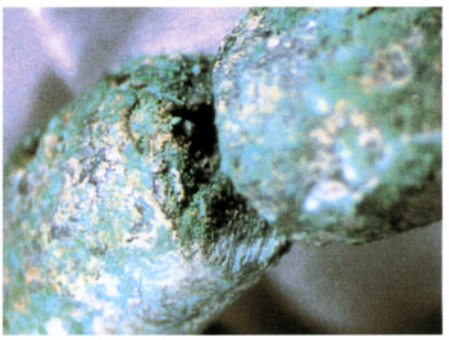
No. 4　耳環



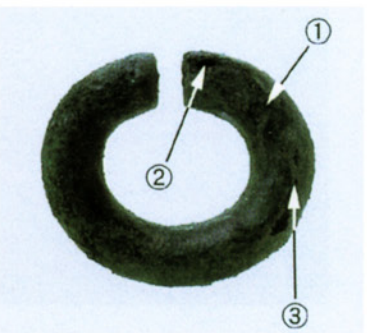
①付近（×6）



No. 5　耳環 A

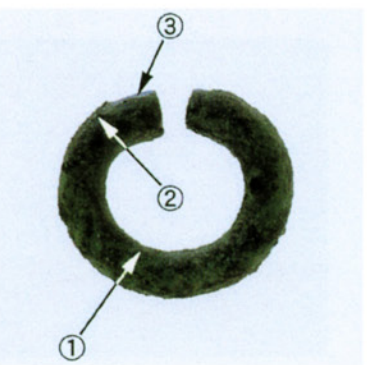


接面（× 4 ）

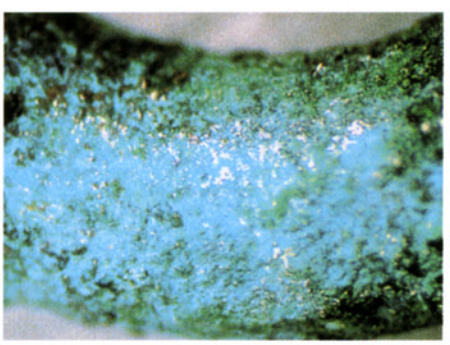


No. 6　耳環 B

接面（× 4 ）

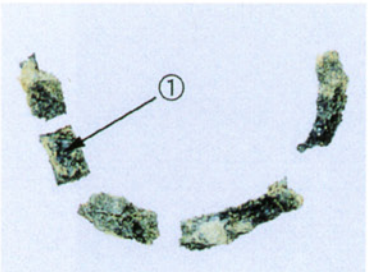


No. 7　耳環 C

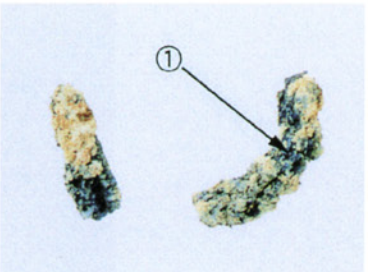


①付近（×6）

写真 1　分析箇所と顕微鏡写真

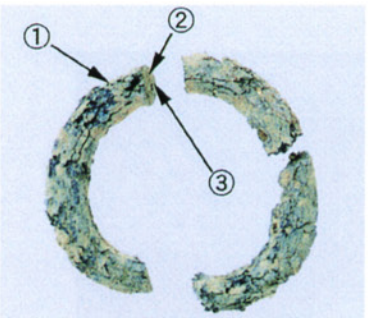


No. 8　耳環 a



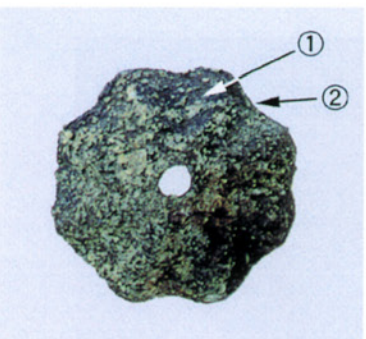
No. 9　耳環 b

No. 10　接面（×6）

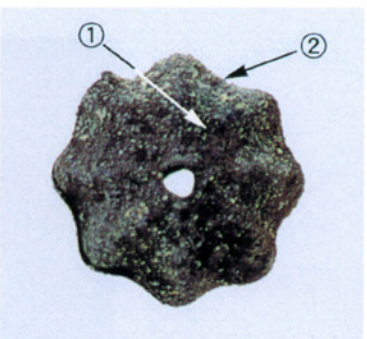


No. 10　耳環 c

No. 10　耳環 d

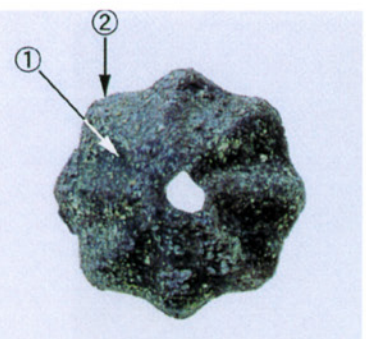


No. 25　空玉

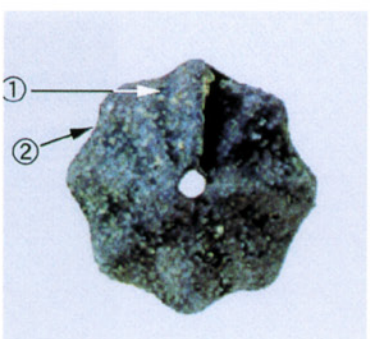


No. 26　空玉

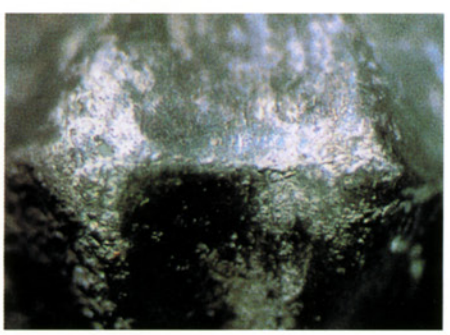
No. 26　接合部（×8）



No. 27　空玉



No. 28　空玉



No. 28　接合部（×8）

写真 2　分析箇所と顕微鏡写真

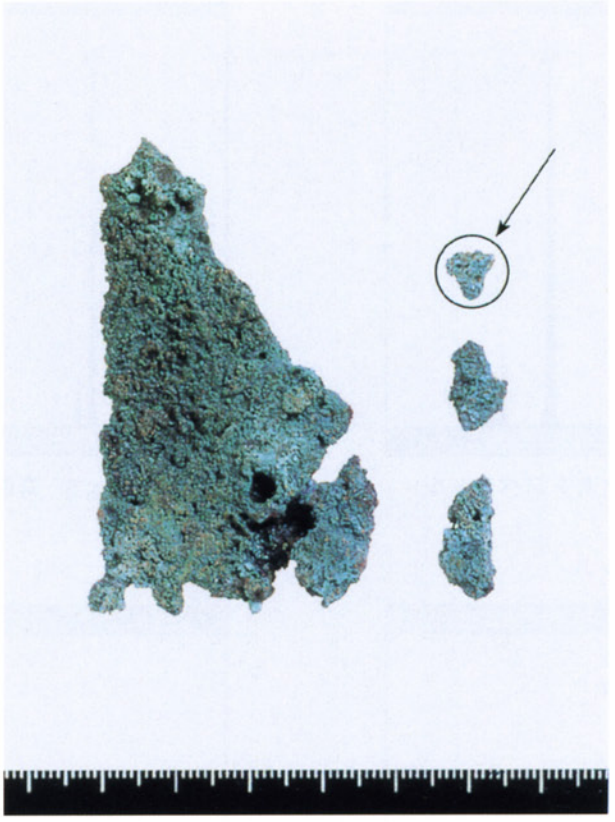


写真３　No. ３　銅鐸片の分析および採取箇所

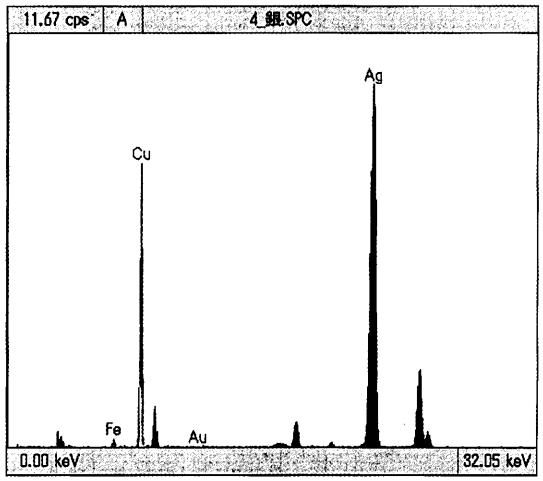


図１　No. 4　耳環　①のＸＲＦスペクトル

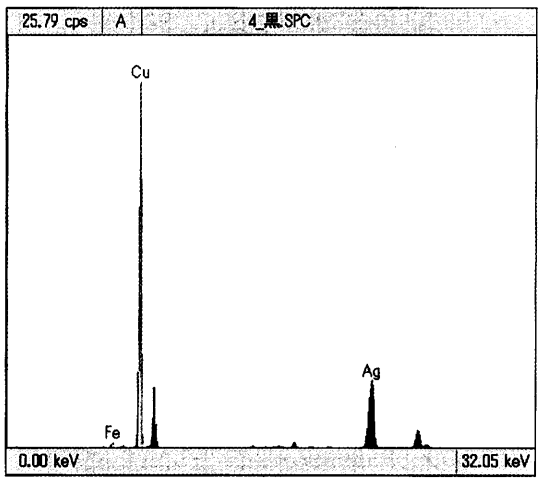


図２　No. 4　耳環　②のＸＲＦスペクトル

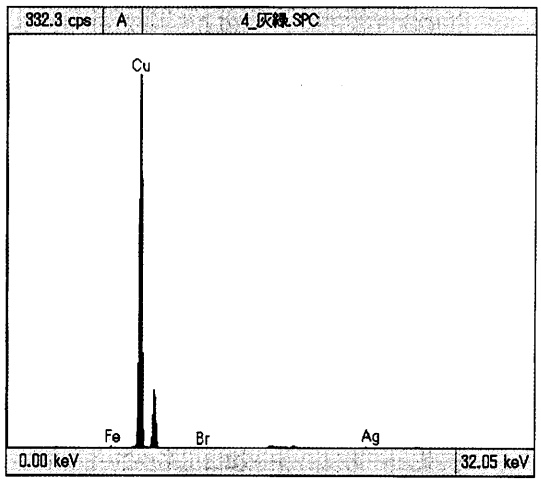


図３　No. 4　耳環　③のＸＲＦスペクトル

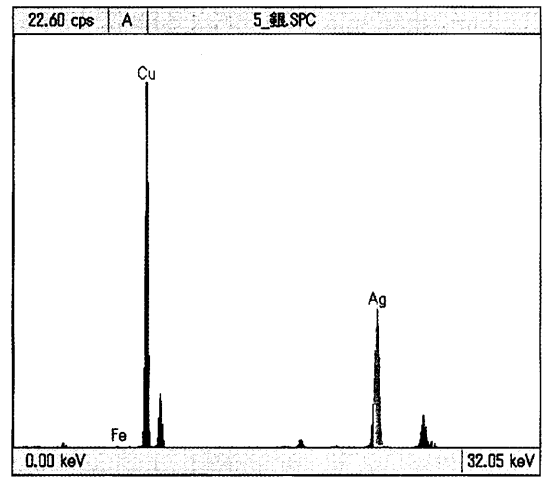


図４　No. 5　耳環　①のＸＲＦスペクトル

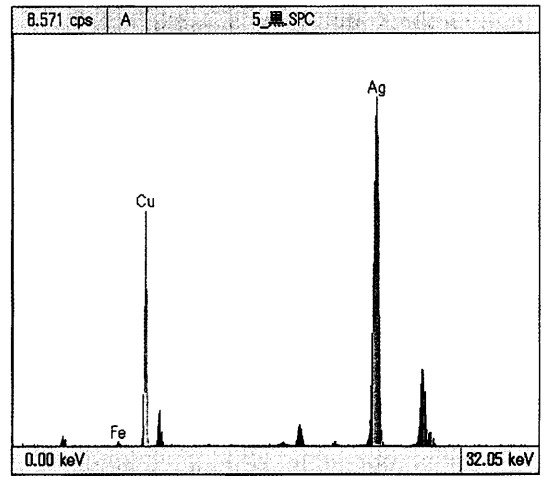


図５　No. 5　耳環　②のＸＲＦスペクトル

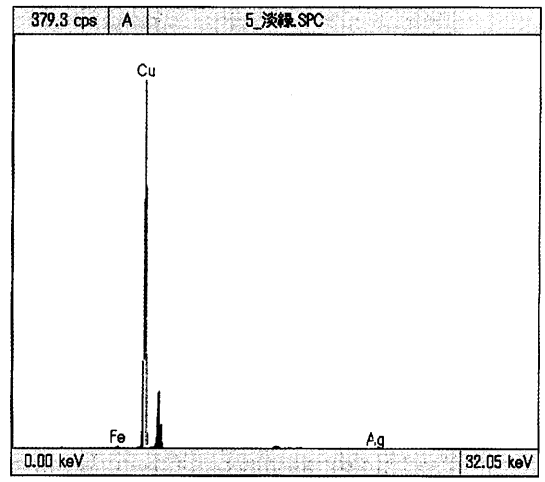


図６　No. 5　耳環　③のＸＲＦスペクトル

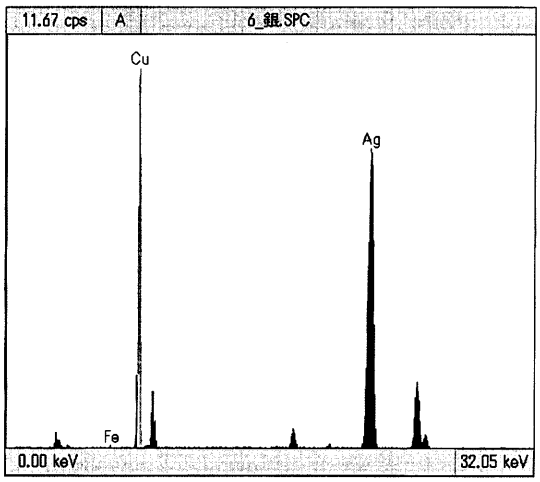


図７　No. 6　耳環　①のＸＲＦスペクトル

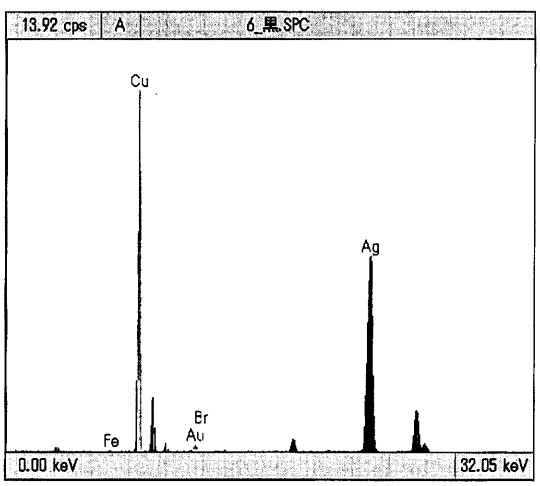


図８　No. 6　耳環　②のＸＲＦスペクトル

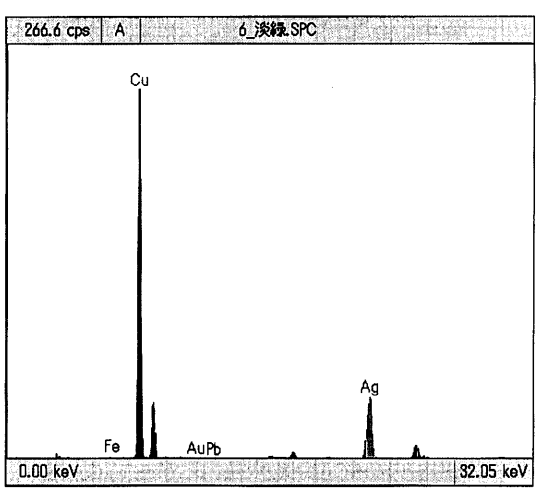


図９　No. 6　耳環　③のＸＲＦスペクトル

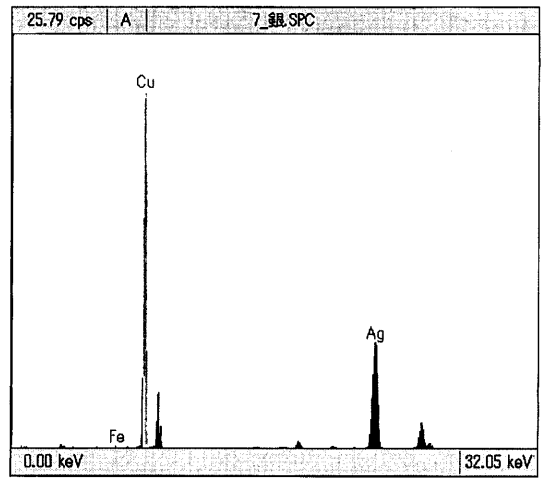


図１０　No. 7　耳環　①のＸＲＦスペクトル

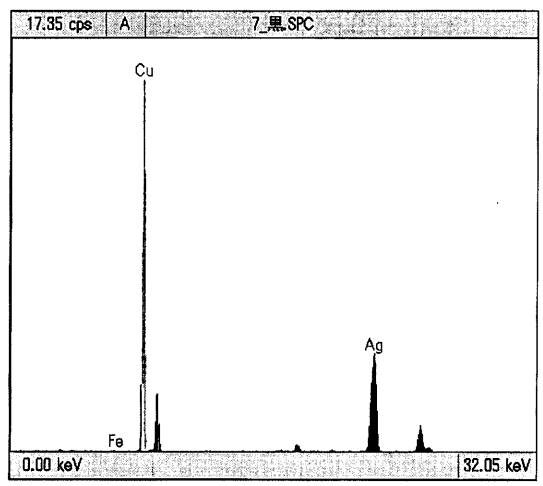


図１１　No. 7　耳環　②のＸＲＦスペクトル

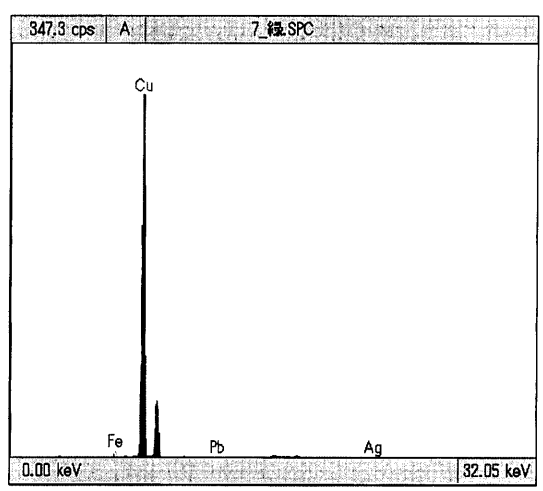


図１２　No. 7　耳環　③のＸＲＦスペクトル

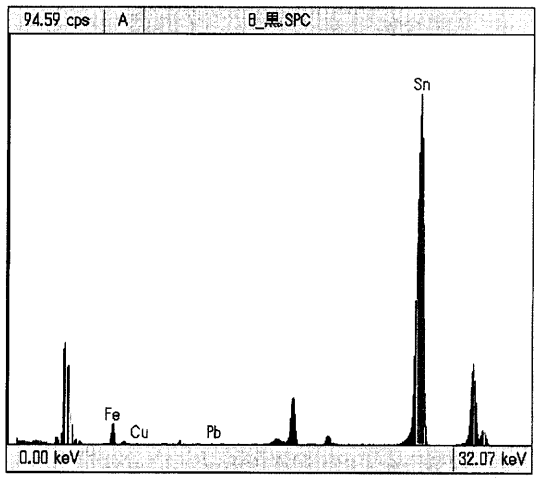


図13　No. 8　耳環　①のＸＲＦスペクトル

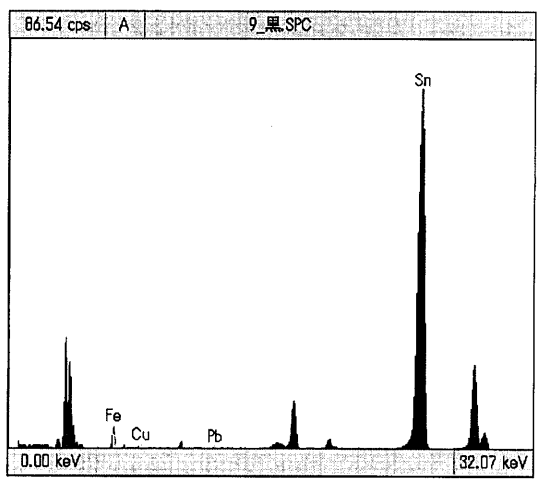


図14　No. 9　耳環　①のＸＲＦスペクトル

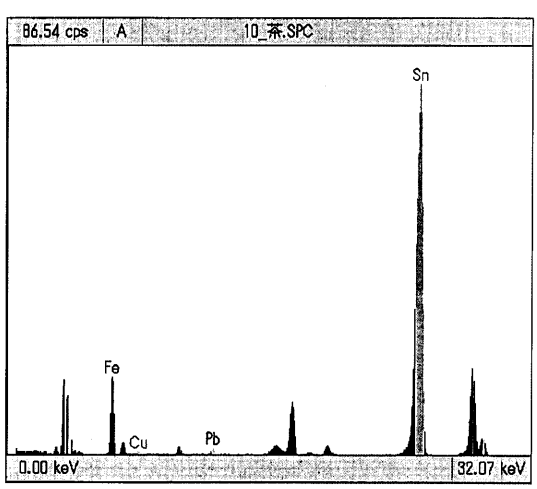


図15　No. 10　耳環　①のＸＲＦスペクトル

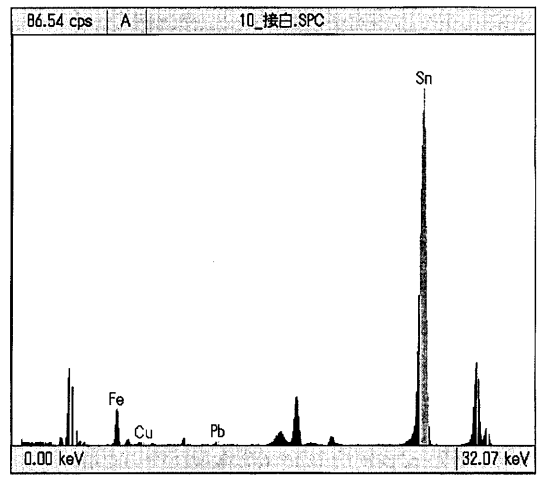


図16　No. 10　耳環　②のＸＲＦスペクトル

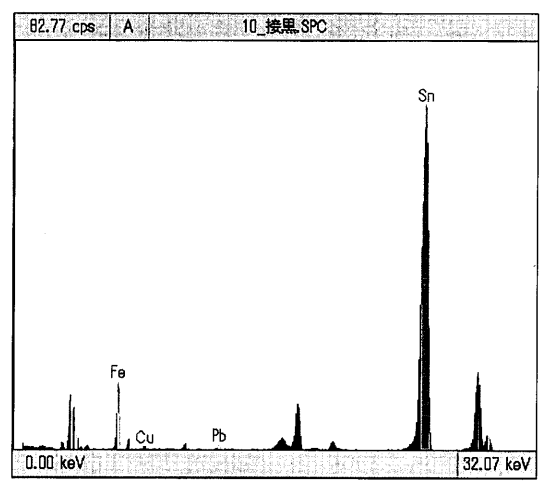


図17　No. 10　耳環　③のＸＲＦスペクトル

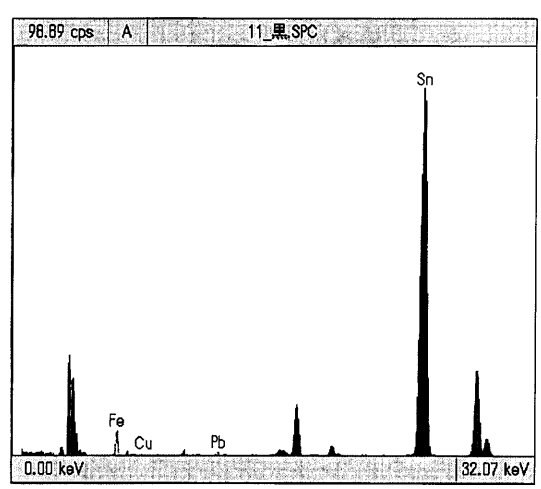


図18　No. 11　耳環　①のＸＲＦスペクトル

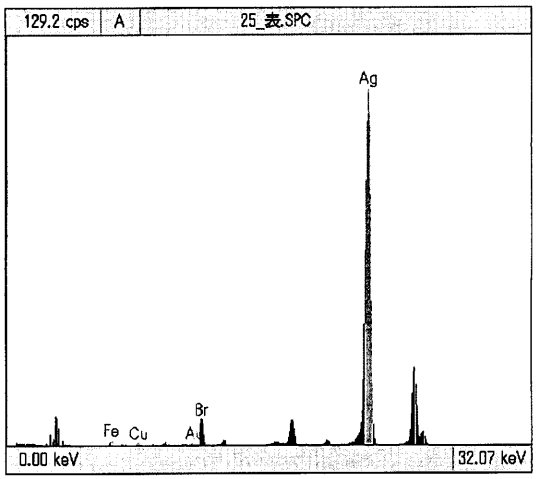


図 19　No. 25　空玉　①のＸＲＦスペクトル

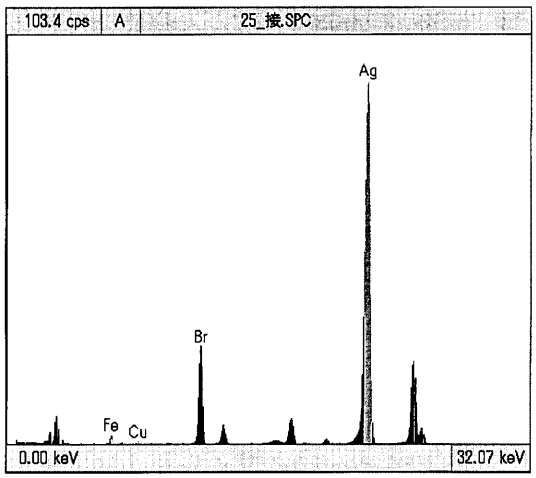


図 20　No. 25　空玉　②のＸＲＦスペクトル

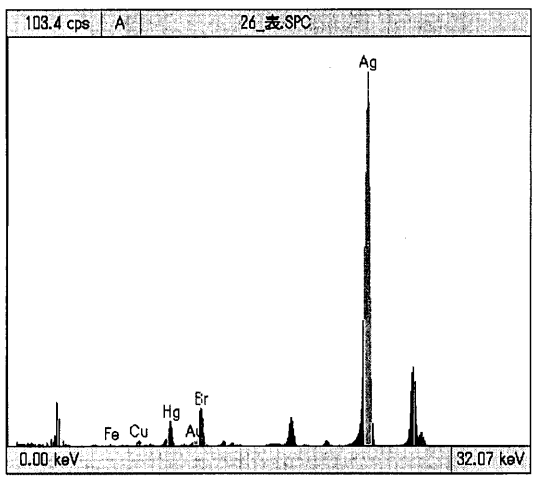


図 21　No. 26　空玉　①のＸＲＦスペクトル

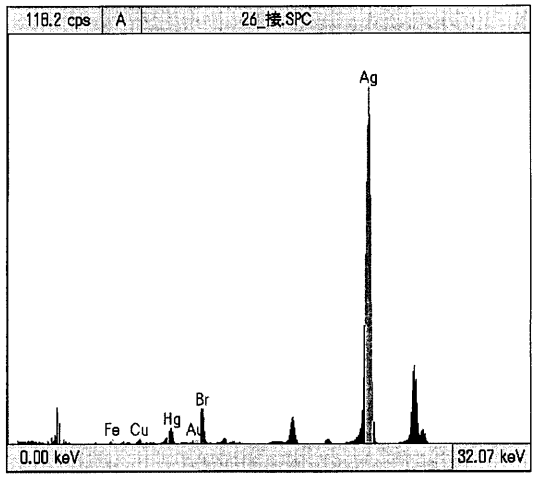


図 22　No. 26　耳環　②のＸＲＦスペクトル

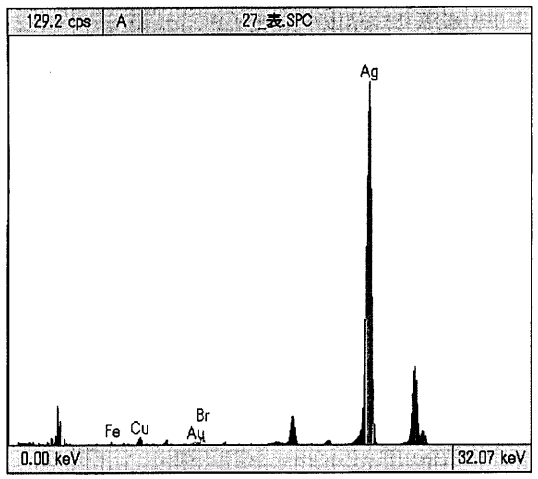


図 23　No. 27　空玉　①のＸＲＦスペクトル

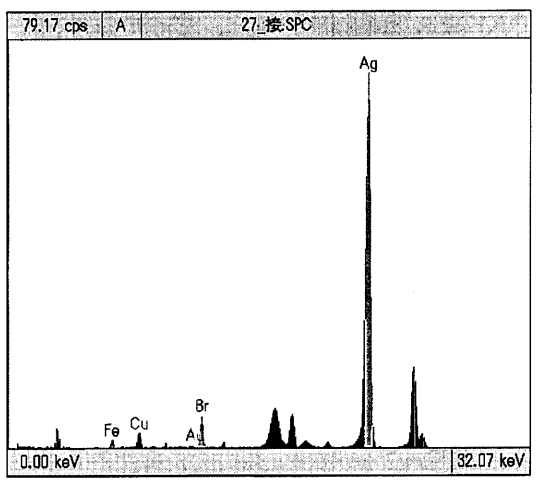


図 24　No. 27　空玉　②のＸＲＦスペクトル

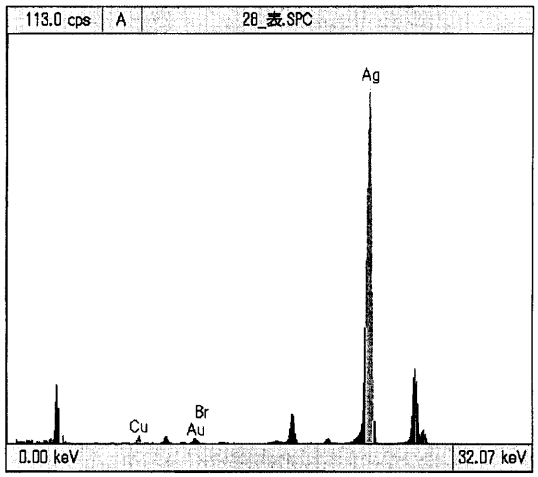


図 25　No. 28　空玉　①のＸＲＦスペクトル

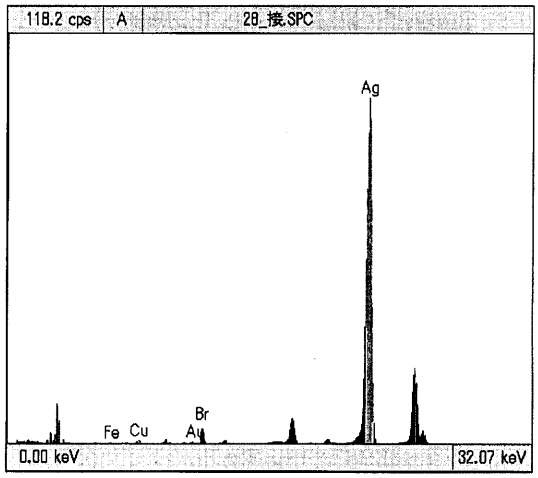


図 26　No. 28　空玉　②のＸＲＦスペクトル

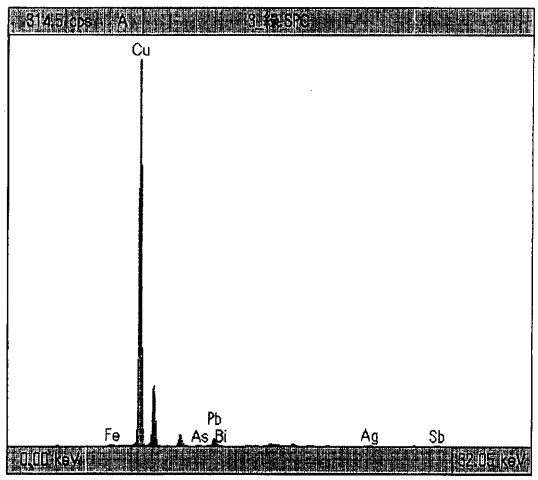


図 27　No. 3　銅鐸片のＸＲＦスペクトル

（2） 金塚遺跡から出土した銅鐸片についての鉛同位体比

東京国立文化財研究所保存科学部
早川泰弘
鈴木浩子
平尾良光

1 資 料

資料は三重県四日市市山村町金塚遺跡から出土した銅鐸片である。焼失した住居跡から出土しており、住居焼失後廃棄された可能性があるのことである[1]。鈕部分の破片と考えられるが、残存状況は悪い。資料の写真を写真1に示した。なお、試料は写真1に示した○印の破片を用いた。

2 分析法

1） 鉛同位体比法による青銅原料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した[2]。一般に、鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が違えばそれぞれの鉱山毎に異なった値となることが知られており、産地によって特徴ある同位体比を示すことが今までの研究でわかっている。そこで、鉛の産地の違いが鉛同位体比に現れるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いは材料の産地を示すと推定される。古代の青銅には鉛が微量成分として0.01%程度、あるいは主成分の一つとして5～20%含まれている。鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器（質量分析計）の感度が非常に良いため、1マイクログラムの鉛があれば十分である。また試料は青銅の金属部分でも錆部分でも、同位体比は変わらないことが示されているので、資料からは錆を微少量採取するだけで十分である。そこでこの方法を本資料の材料産地の推定に利用することを試みた。資料から錆の一部を採取し、鉛を化学的に分離し、表面電離型質量分析計で同位体比を測定した[3]。

2） 鉛同位体比の測定

資料から微少量(1mg以下)の錆を採取して、鉛同位体比測定用の試料とした。錆試料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液を白金電極を用いて直流2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。0.1μgの鉛をリン酸－シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、サーモクエスト社製全自動表面電離型質量分析計MAT262に装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

3 鉛同位体比の結果と考察

1） 鉛同位体比測定値

測定した鉛同位体比を表1で示した。この値を今までに得られている資料と比較するために鉛同位対比の図で示した（図1）。

縦軸が$^{208}Pb/^{206}Pb$の値、横軸が$^{207}Pb/^{206}Pb$の値とした図を仮にA式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表わし、今回の結果をこのなかにプロットした[4～8]。日本の弥生時代に相当する頃の東アジア地域において、Aは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると華北産の鉛である。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛である。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が入る領域、Dは多鈕細文鏡が分布する領域の中央線として示され、朝鮮半島産の鉛と推定される。またaは弥生時代の後期銅鐸が示した特別な鉛を意味する領域である。

縦軸が$^{207}Pb/^{204}Pb$の値、横軸が$^{206}Pb/^{204}Pb$の値とした図をB式図と呼ぶこととする。この図の中でA'、B'、C'、D'は中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わす。

これらの図の中に、測定値を●で示した。

2） 考察

金塚遺跡から出土した銅鐸片は、図１のＡ式図においてＡ領域の中でもａ領域に位置した。Ｂ式図においても同様である。このことから、この銅鐸片は華北産の中でも規格化された鉛を用いていると思われる。

これまでの研究から、銅鐸は菱環鈕式がＤ領域、外縁付鈕１式がＤ領域とＡ領域、外縁付鈕２式がＡ領域、扁平鈕式がＡ領域、突線鈕１式がＡ領域とａ領域、突線鈕２～５式がａ領域に位置することがわかっている。金塚遺跡から出土した銅鐸片はａ領域に位置したので、いわゆる近畿三遠式と呼ばれる後期銅鐸と同じ材料を用いて作られていると推定できる。

測定番号	資料名	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$
HS885	銅鐸片	17.736	15.549	38.407	0.8767	2.1655
誤差範囲		±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006

表１　銅鐸片の鉛同位体比

4　引用文献

（１） 三重県埋蔵文化財センター：近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ（1999）

（２） 平尾良光：鉛同位体比を用いた産地推定；考古学と自然科学４　考古学と年代測定学・地球科学，松浦秀治・上杉陽・藁科哲男編，314-349，同成社（1999）

（３） 平尾良光，馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計 VG-Sector の規格化について；保存科学28，17-24（1989）

（４） 馬淵久夫，平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究；ＭＵＳＥＵＭ　No.370，4-10（1982a）

（５） 馬淵久夫，平尾良光：鉛同位体比から見た銅鐸の原料；考古学雑誌68，42-62（1982b）

（６） 馬淵久夫，平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究（二）；ＭＵＳＥＵＮＭ；No.382，16-26（1983）

（７） 馬淵久夫，平尾良光：東アジア鉛鉱石の鉛同位体比－青銅器との関連を中心に－；考古学雑誌73，199－210（1987）

（８） 平尾良光編：古代青銅の流通と鋳造；鶴山堂（1999）

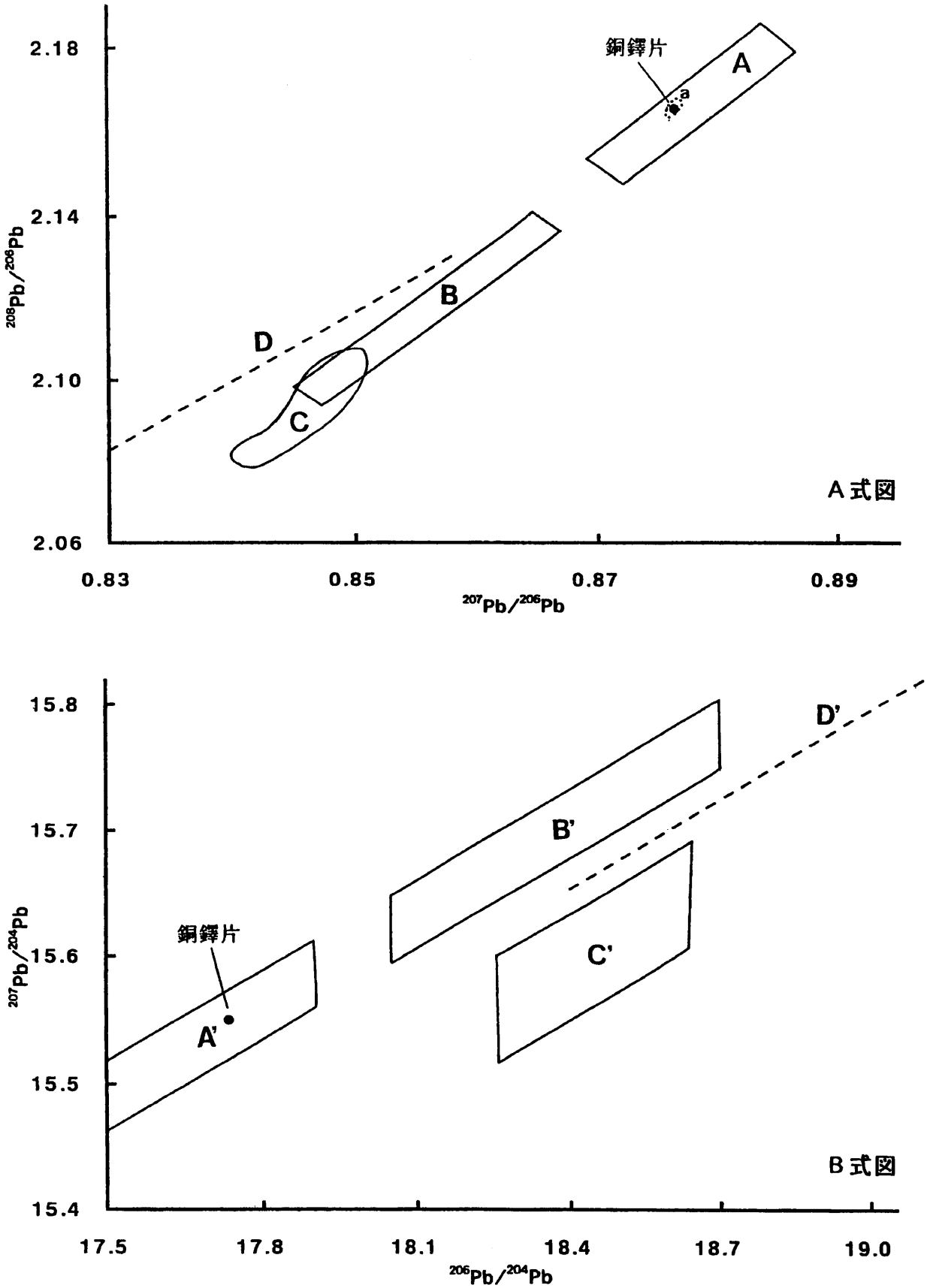


図1　金塚遺跡から出土した銅鐸片の鉛同位体比

（3） 三重県広永横穴墓群、金塚横穴墓群出土の古墳時代人骨

松下孝幸*

【キーワード】：三重県、古墳時代人骨、横穴墓、保存不良

1 はじめに

広永城跡は三重県三重郡朝日町大字埋縄字口山田と四日市市広永町字内ノ坪にまたがる室町期の中世城跡であるが、近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神高速道路）建設のために、遺跡の範囲確認調査が1997年に、翌1998年には発掘調査がおこなわれた。発掘調査の結果、城跡の一部の堀切と土塁が確認され、横穴式石室１基とさらに横穴墓が発見された。横穴墓は３基が確認され、そのうちの２基（SX-7、SX-11）から人骨が検出された。

また、金塚横穴墓群は、四日市市山村町字池ノ谷に所在する。この遺跡も近畿自動車道名古屋神戸線建設のために調査がおこなわれた。調査の結果、弥生時代後期の環濠と竪穴式住居、古墳時代の横穴墓群や土壙墓などが検出された。横穴墓は４基存在しており、そのうちの１基（SX-13）に人骨が残っていた。

三重県内での横穴墓群は、現在のところ４遺跡が知られているにすぎない。四日市市の死人谷（しぶとだに）横穴群（16基）、亀山市陰涼寺（おんりょうじ)横穴群、鈴鹿市山辺（やまべ）横穴群、津市半田（はんだ）横穴群であるが、本格的な調査はおこなわれていないという。

広永・金塚横穴墓群から出土した人骨は保存状態がきわめて悪かったが、人骨出土の少ない地域だけにこの古墳人骨は貴重な資料である。現場での人骨の検出や発掘調査には立ち会えなかったが、人骨のまわりの土壌とともに取り上げられていたので、出土時の様子を知ることができた。保存状態が著しく悪いので、人骨の周りの砂を時間をかけて落としながら、以下の所見を得たので、報告しておきたい。

資 料

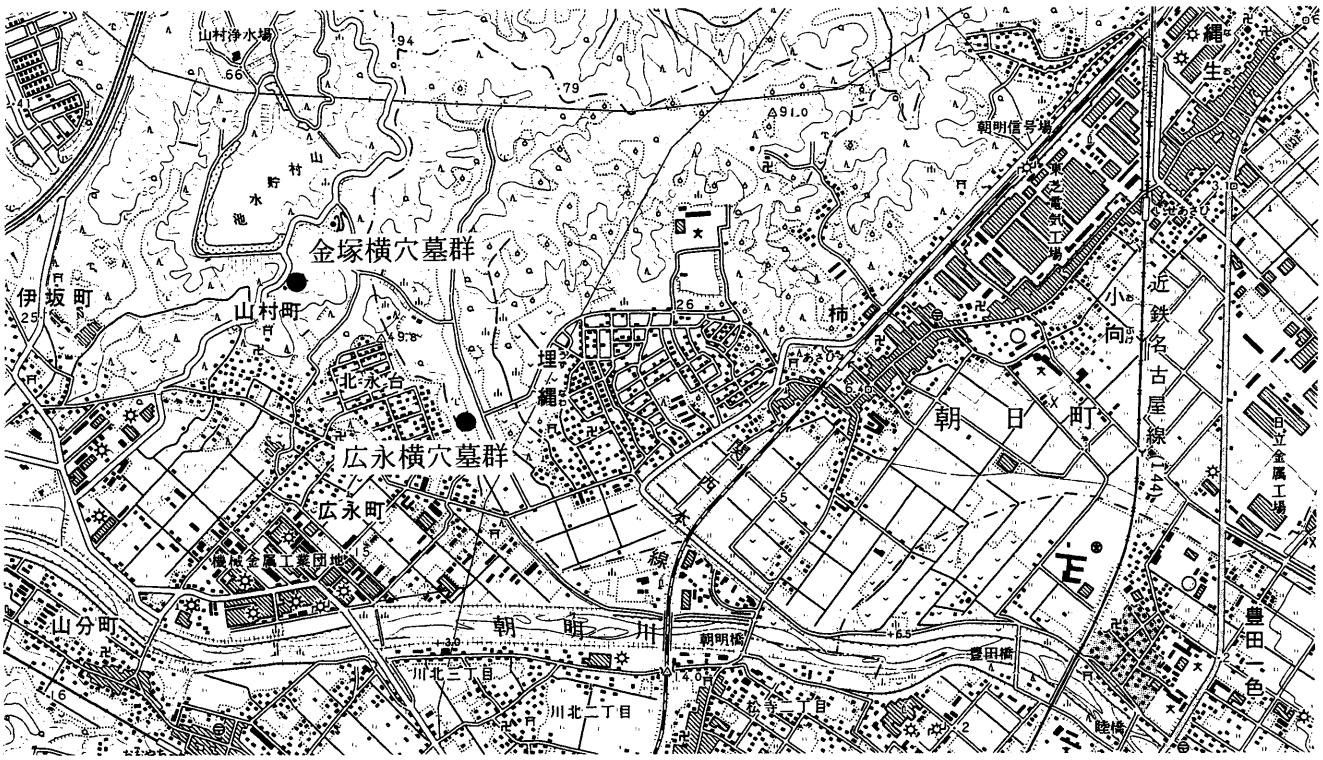
表１ 資料数（Table 1. Number of materials）

	成人			幼少児	不明	合計
	男性	女性	不明			
広永横穴墓群	0		1	1	1	3
金塚横穴墓群	1		2	0	0	3
合計	1		3	1	1	6

広永横穴墓群では２基の横穴墓から合計３体の人骨が、金塚横穴墓群では１基の横穴墓から３体の人骨が検出されたので、今回、合計６体の古墳時代人骨が発掘されたことになる(表１)。各遺跡から出土した人骨の性別、年令は表２のとおりである。

人骨の所属時代は考古学的所見から、いずれも７世紀の古墳時代後期と推定されている。

人骨の保存状態は著しく悪く、出土時点では人骨を確認することができても、時間とともに痕跡がなくなっていったものもあるようで、土と一緒に取り上げられていても骨の同定が不可能なものが多かった。



第1図　遺跡の位置（1：25,000）（Fig.1 Location of the Hironaga and Koganezuka Tunnel-Tombs, Mie Prefecture）

表２　出土人骨一覧（Table 2. List of skeletons）

遺跡名	墓番号	体数	人骨番号	性別、年令など
広永横穴墓群				
	SX-7	２体		
			A-1人骨	小児
			A-2人骨	成人、性別不明
		１体		年令不明、性別不明
金塚横穴墓群				
	SX-13	３体		
			A	男性、成年～壮年
			B	性別不明、成年～壮年
			C	性別不明、壮年

なお、性判別については所見の項でそれぞれの個体ごとにその推定根拠を挙げた。年齢区分に関しては表３の基準のとおりである。

表３　年齢区分（Table 3. Division of age）

年齢区分		年　　齢
未成年	乳児	１歳未満
	幼児	１歳～５歳（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	６歳～15歳（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16歳～20歳（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成　人	壮年	21歳～39歳
	熟年	40歳～59歳
	老年	60歳以上

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

所　見

１　広永横穴墓群[1]

１）SX-7[2]

（１）ａブロック[3]

頭蓋と歯および四肢骨らしい長骨が残存していた。人骨は２ヶ所にみられ、いずれも耳環のそばである。取り上げられていた人骨は風化が進んでいたので、人骨の状況はあまりよくわからないが、現場の写真と実測図を手がかりに人骨をさらに露出してみた。その結果、１個の耳環のそばにあったのは下顎体の左側部と左側の大臼歯冠２個であった。もう１個の耳環のそばに残っていた人骨は細長い形状をしており、下顎骨の一部とは思えない。慎重に土を除き、骨質を確かめたところ、どうも四肢骨の一部らしい。人骨の位置が不自然なので、頭蓋本人の四肢骨ではない可能性がある。

残存していた２本の大臼歯は、下顎の左側の第二大臼歯（A-1）と第三大臼歯の歯冠（A-2）である。第二大臼歯冠には咬耗はみられないが、第三大臼歯の歯冠には咬耗が認められるので、この２本の歯冠は別個体に属する歯冠と思われる。

第二大臼歯（A-1）の歯冠に咬耗が認められないので、まだ未萌出だったと思われ、A-1の年令は12歳未満の小児と推定される。第三大臼歯（A-2）はすでに萌出していたようなので、A-2は成人と思われる。

四肢骨の一部が下顎骨にかなり近いところから検出されており、また２個の歯冠が別個体の可能性が強いことから、人骨は埋葬された当時の状態を保っていなかったようである。

（２）ｂブロック[4]

３cm×４cm大の骨の小片であるが、いくつかに割れており、その間に耳環１個がはさまるようにして残存していた。風化が進行しているので、骨の種類を肉眼では明確にはできなかったので、実体顕微鏡を使って観察した。板状をしており、板間層様の

構造が見られたので、おそらく頭蓋の一部であろう。厚さは薄い。性別、年齢は不明である。

（3） 人骨の体数

耳環が4個検出されている。検出された位置がかなり近いことや、耳環の側から四肢骨片が検出されたことから、人骨や歯は埋葬当時の状態を保っていなかったようであるが、耳環の近くから頭蓋片や歯冠を検出したので、頭蓋は耳環の側にあったものと思われる。保存状態が著しく悪かったので、正確な人骨の体数は明確ではないが、2個の歯冠はそれぞれ別個体に属するようなので、被葬者は少なくとも2体で、そのうちの1体は性別不明の成人、残りの1体は小児と思われる。

2） SX-11[5]

耳環の下から人骨が検出された。残っていたのは黒変し、痕跡的状態のものであるが、形状は細長い。骨の種類を明らかにするために、骨の露出を試みたが、これ以上の所見は得られなかった。性別、年齢は不明である。

2 金塚横穴墓群

SX-13（2号墓）

頭蓋2個（A、B）と四肢骨が残存していた。耳環の存在からこのほかにもう1個の頭蓋の存在が予想されたが、確かに他の2個の頭蓋に伴う下顎骨とは別の下顎骨（頭蓋C）を確認することができたので、本横穴墓から3体の頭蓋が検出されたことになる。

1） 頭蓋

（1） 頭蓋A（男性、成年～壮年）

下顎骨は正面を向いているが、下顎骨以外の頭蓋は左の側頭部を下にして倒れた状態で出土した。頭蓋は輪郭をかろうじて確認できる程度の残りである。外後頭隆起の様態を確認するために後頭部の露出を試みたが、骨は残っていない。年齢を推定するために脳頭蓋の縫合を探してみたが、確認できなかった。下顎骨は下顎体と下顎枝が残っていたが、関節突起や筋突起は残存していない。下顎枝の幅はやや広い。上顎骨と下顎骨の歯槽部には歯が釘植していた。歯は下顎の両側第三大臼歯を除くすべての歯が残存していたようであるが、発掘調査時に露出された切歯群はエナメル質が劣化し、一部破損し、すでに失われていたものがある。上顎の第三大臼歯は左右ともまだ萌出していなかったようである。下顎の第三大臼歯を探してみたが、両側とも歯冠すら存在しなかったので、下顎の第三大臼歯はおそらく先天的欠損であろう。咬耗はいずれの歯もかなり弱く、Brocaの1度（咬耗がエナメル質のみ）である。

性別は、外後頭隆起や眉上弓の隆起の様態が不明なので、明確なことはわからないが、下顎枝が幅広いことから推測すれば、男性の可能性が強い。年令は、縫合が観察できなかったので、縫合の閉鎖状態からは推測できない。上顎の第三大臼歯が未萌出だったことと歯の咬耗が著しく弱いことから考えると、年令は成年から壮年の前半頃と推定しておきたい。

（2） 頭蓋B（性別不明、成年～壮年）

頭蓋は遺体が安置された状態を保っており、顔面は正面を向いていた。骨の保存状態は著しく悪く、頭蓋の輪郭がかろうじてわかる程度で、ほとんど痕跡的である。下顎骨も残っていたが、緻密質の表面が土壌の表面に張り付いている状態で、土を取り除き、人骨を露出することがほとんどできなかった。歯が上下両顎に釘植していたが、切歯群はエナメル質がすでに脆弱化しており、一部は失われていた。第三大臼歯が放出していたかどうかを確かめるために、土を慎重に落としていった。下顎の両側からは第三大臼歯を確認できたが、右側は水平知歯で、左側は歯冠に咬耗の跡が全く認められなかった。また、上顎は右側の第三大臼歯を確認できたが、未萌出だったようである。左側は存在しなかった。残存歯を次に歯式で示した。また、歯の咬耗は頭蓋Aと同じ程度に弱く、Brocaの1度である。

8	7	6	5	4	3	2	／	／	／	3	4	5	6	7	／
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

〔／：不明（破損）〕

性別を推定するために、後頭部を露出し、外後頭隆起の検出を試みたが、後頭部は残存していなかった。前頭骨はすでに失われており、眉上弓などの観察もできなかった。

年令は、縫合の観察ができなかったので、縫合の

閉鎖状態から推測できない。第三大臼歯は前述しているようにまだ萌出していなかったようなので、年令は頭蓋Ａとあまり大差ないようである。従って、本頭蓋も成年から壮年の前半の可能性が強い。性別は残存していた部分からは推測できない。

（３） 頭蓋Ｃ（性別不明、壮年）

本頭蓋は頭蓋Ａと頭蓋Ｂとは反対側にあったものである。残っていたのは下顎骨と遊離歯冠のみで、残存量はかなり少ない。前述したように、この位置で検出された下顎骨は頭蓋Ａと頭蓋Ｂの下顎骨とは異なる下顎骨なので、この下顎骨が検出された場所にもう１個の頭蓋があったことは間違いない。下顎骨は左側の下顎体から下顎枝にかけての部分である。同定可能な遊離歯冠は５本で、上顎の右側第一小臼歯、左側の第三大臼歯、下顎の右側第一、第二、第三大臼歯が残っていた。咬耗度はいずれもBrocaの１度であるが、第一大臼歯の咬耗程度は頭蓋ＡとＢよりも咬耗していた。

また、床の排土のふるいかけによって右側頭骨の錐体が検出された。残りはかなり良好なことから頭蓋Ａ、Ｂのものとは考えがたい。おそらく頭蓋Ｃの一部であろう。

歯のサイズが大きいので、男性の可能性が強いが、確証がないので、一応性別は不明としておきたい。年令も縫合が観察できなかったので、推測ができないが、歯の咬耗が弱く、咬耗がエナメル質にしか及んでいないことから推測すれば、比較的年令が若いと考えられるので、壮年としておきたい。

２） 四肢骨

A-1

検出された位置から推測すれば頭蓋Ａの一部と思われるが、取り上げられたものから骨の種類を同定することはまったくできない状態であった。

A-2

３個の長骨であるが、いずれも髄腔を木の根が貫通しており、かろうじて緻密質が残っている状態で、空気にさらされてほとんど朽ちる寸前状態である。まだ土中に埋もれている部分を丁寧に露出したが、おそらく３本とも大腿骨であろう。一番下になっているのが頭蓋Ａの大腿骨で、A-3（大腿骨）と対になると思われる。上の２本が頭蓋Ｃの両側の大腿骨の可能性が強い。頭蓋Ａは埋葬時の状態をほぼ保っているものと考えられる。大きさは３本とも小さく、骨体は細い。粗線や柱状性などの形態的な特徴は３本ともわからない。

A-3

これも大腿骨の骨体である。状態はきわめて悪い。左側の骨体と思われる。前述しているように、頭蓋Ａの左側大腿骨だろう。

A-4

取り上げられたものからは骨の種類は全くわからない。図面からは脛骨と腓骨のようである。A-5が右側の脛骨と腓骨であったから、A-4は左側の脛骨と腓骨の可能性が強い。

A-5

右側の脛骨と腓骨のようである。そうすれば位置から推測して、頭蓋Ａの右側の脛骨と腓骨である。

B-1

人骨の検出された位置から推測すれば、頭蓋Ｂの四肢骨の一部と思われるが、取り上げられたものは粉状態で、骨の同定はできなかった。

３） 埋葬順序と体数

四肢骨の残りは頭蓋以上に悪いものであった。しかし、骨の一部の特徴から下肢骨についてはある程度同定が可能であった。検出されたり、取り上げられたもののうち同定ができたのは大腿骨、脛骨、腓骨であった。頭蓋Ａと頭蓋Ｃの下肢骨は重なって検出されたが、頭蓋Ａの大腿骨が頭蓋Ｃの下になっていることから、頭蓋Ａが頭蓋Ｃよりも先に埋葬されていたようである。

頭蓋は３個残存していたが、１体分は下顎骨のみであった。四肢骨も頭蓋の数とは矛盾するものではなく、おそらく３体分であろう。従って、本横穴墓には人骨からみて少なくとも３体分が埋葬されていた。

要　約

三重県三重郡朝日町大字埋縄字口山田と四日市市広永町字内ノ坪にまたがる広永横穴墓群と四日市市山村町字池ノ谷にある金塚横穴墓群の発掘調査が

1998年におこなわれ、玄室から人骨が検出された。両横穴群から出土した人骨はいずれも取り上げることも、計測することもできないほど保存状態が悪かったが、埋葬されていた被葬者の体数などを推測することができた。人類学的観察などの結果は次のとおりである。

1．広永横穴群では調査された3基のうち2基から、金塚横穴群では4基のうち1基から人骨が出土した。検出された人骨の保存状態はいずれも悪いものであった。
2．広永横穴群ではSX-7号墓からは2体、SX-11号墓からは1体の人骨が検出された。また、金塚横穴群では、SX-13号墓から3体の人骨が検出された。
3．この6体の人骨は、考古学的所見から7世紀の古墳時代後期に属する人骨である。
4．広永横穴群のSX-7号墓出土人骨は、埋葬時の姿勢を保ってはいなかったが、金塚横穴群のSX-13号墓では埋葬時の姿勢をほぼ保った状態で検出された。
5．今回出土した人骨6体のうち1体は成人か未成人かの区別がつかない。残りの5体のうち1体は小児骨で、あとの4体は成人骨と思われる。年齢を推測できた3体はいずれも成年か壮年と推定され、年齢は若い。
6．性別が推測できたのはわずか1体で、金塚横穴群のSX-13号墓から出土した3体のうち1体は若い男性骨であった。
7．人骨の保存状態が全般的に悪かったので、頭型、顔面の形態などの特徴を知ることはできなかった。また、四肢骨の特徴も不明である。
8．三重県は南北に長く、北は伊勢湾に面し、南は熊野が、中央には伊勢がある。古代から地理的には重要な位置にあったと思われ、人類学的にも興味深い地域である。この地域の古墳人の特徴がわかるかもしれないと期待していたが、残存状態が悪かった。今回は人骨の保存状態がよくなかったが、本例で、三重県でも人骨が残ることがわかったので、今後保存状態の良好な人骨が出土する可能性も出てきた。今後に期待したい。

謝　辞

擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた三重県埋蔵文化財センターの諸先生方に感謝致します。

≪参考文献≫

1．江原昭善、1992：出土人骨について。西殿遺跡発掘調査報告（三重県埋蔵文化財報告107）：21-41.
2．松下孝幸、1982：山口県朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨。朝田墳墓群Ⅴ（山口県埋蔵文化財調査報告64）：179-206.
3．松下孝幸、他、1983：山口県山口市朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨－総括篇－。朝田墳墓群Ⅵ（山口県埋蔵文化財調査報告69）：219-242.
4．松下孝幸、他、1990：広島県西城町八鳥矢内迫横穴墓群出土の古墳時代人骨。西城町教育委員会文化財報告書第2集：33-65.

［註］

① 田中久生「Ⅲ. 広永城跡・広永古墳群・広永横穴墓群」『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT　埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』（1999.3）
② 全長7.5m、玄室部は長3.0m、奥壁幅1.55m、入口幅1.2mを測り、平面長方形でやや銅張りとなる。
③ 玄室入口から奥壁に向かい、1.1m程進み、やや西によった地点。西側棺台の中央やや北寄りに当たる。
④ 玄室入口から奥壁に向かい、0.6m程入った地点。西側棺台入口側、2個の石の中央に当たる。aブロックから0.6m程離れる。
⑤ 全長7.5m、玄室部は長3.1m、奥壁幅1.1m、入口幅1.1mを測り、平面長方形、奥壁付近の横断面がアーチ形を呈している。人骨の出土は、玄室中央やや北東よりの地点。

＊ Takayuki　MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum
〔土井ケ浜遺跡・人類学ミュージアム〕

報告書抄録

ふりがな	きんきじどうしゃどうなごやこうべせんあいちけんきょうよっかいちじゃんくしょんけんせつじぎょうにともなうこがねづかいせき・こがねづかおうけつぼぐん・やまむらいせきまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく
書名	近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市ＪＣＴ建設事業に伴う金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	227－1
編著者名	森川幸雄・服部芳人・水橋公恵・倉田文美・角正芳浩・松下孝幸
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503番地　TEL0596－52－1732
発行年月日	2002年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
こがねづかいせき 金塚遺跡・ こがねづかおうけつぼぐん 金塚横穴墓群	よっかいちしやまむらちょう 四日市市山村町	24202	新発見	35° 01′ 57″	136° 38′ 30″	19980615 ～ 19990224	3,976㎡	近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市ＪＣＴ建設事業
やまむらいせき 山村遺跡	よっかいちしやまむらちょう 四日市市山村町	24202	249	35° 01′ 51″	136° 38′ 07″	19990906 ～ 19991025	1,071㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金塚遺跡・金塚横穴墓群	集落跡 横穴墓	弥生・ 古墳・ 平安	環壕・竪穴住居・柱穴・墳丘墓・横穴墓・土壙墓・古墓	銅鐸片・銅製品・弥生土器(後期)・ガラス玉・耳環・銀製空玉・人骨・須恵器	標高70m（比高60m）の丘陵上に立地する環壕で囲まれた高地性集落、銅鐸片出土。
山村遺跡	墓 集落跡	弥生・ 奈良	環壕・方形周溝墓・掘立柱建物	弥生土器・土師器・須恵器	尾根を切断する環壕を確認

平成14(2002)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年11月にデジタル化しました。

近畿自動車道名古屋神戸線(愛知県境～四日市ＪＣＴ)建設事業に伴う

金塚遺跡・金塚横穴墓群
山村遺跡発掘調査報告

—三重県四日市市山村町—

2002・3

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　水九印刷株式会社